宮本武蔵（五）

吉川英治文庫

吉岡一門との決闘を切り抜けたことは、武蔵に多大の自信とそれ以上の自省を与えた。そしてまた、大勝負の後に訪れたゆくりなき邂逅。――それはお通であり、又八であり、お杉婆(ばば)であり、宿命の人・小次郎であった。その人々が、今後の武蔵の運命を微妙に織りなしてゆく。著者は「風の巻」を終るにあたり、山ならば三合目と言ったが、いま武蔵の行く木曽路、遙かな剣聖を思い、お通を案じ

風を孕(はら)み、四合目の急坂にかかる。

定価480円

SBN4-06-142052-6　C0193　¥480E(1)

吉川英治文庫

52

宮本武蔵（五）

講談社

目次

さしえ

矢野橋村

石井鶴三

宮本武蔵（五）

風の巻（つづき）

菩提一刀

一

大四明峰の南嶺に高く位しているので、東塔西塔はいうまでもなく、横川、飯室の谷々も坐ながらに見える。三界のほこりや芥の大河も遠く霞の下に眺められ、叡山の法燈鳥語もまだ寒い木の芽時を——ここ無動寺の林泉は寂として、雲の去来のうえにあった。

「……与仏有因
……与仏有縁
……仏法僧縁
……常楽我常
……朝念観世音
……暮念観世音

……念々従心起
……念々不離心」

誰か？

無動寺の奥まった一間のうちから、誦すともなく唱うるともない十句観音経の声が――声というよりは自ら出る呟きのように漏れてくる。

その独り語は、いつのまにか、われを忘れたかの如く高くなり、気がつくとまた、低くなった。

墨で洗ったような大床の廻廊を白い衣を着た稚児僧が、粗末な御斎の膳を眼八分にささげ、その経音の聞える奥の杉戸の内へ持って入った。

「お客様」

稚児僧は、膳を隅へおいた。

そしてまた、

「……お客様」

膝をついて呼んだが、呼ばれた者は、後ろ向きになったまま背をかがめており、彼の入って来たのも気づかない様子なのであった。

数日前の朝――見るかげもない血まみれな姿して、剣を杖に、ここへ辿りついて来た一修行者。

といえば、もう想像がつこう。

この南嶺から東に降れば、穴太村白鳥坂に出るし、西に降ればまっすぐに修学院白河村――あ

の雲母坂や下り松の辻につながる。
「……お午餐を持ってまいりました。お客様、ここへお膳をお置きいたします」
やっと、知ったように、
「オウ」
武蔵は、背をのばし、振りかえって膳と稚児僧のすがたを見ると、
「おそれいります」
坐り直して、礼儀をした。
その膝には、白い木屑がちらかっていた。細かい木屑は、畳や縁にもこぼれている。栴檀かなにかの香木とみえ、微かににおう心地がする。
「すぐ召しあがりますか」
「はい、戴きます」
「じゃあ、お給仕申しましょう」
「憚りさまですな」
飯椀をうけて、武蔵は食べにかかる。稚児僧はその間、武蔵のうしろにキラキラ光っている小柄と彼が今、膝のうえから下ろした五寸ほどの木材をじっと見ていたが、
「お客様、なにを彫っておいでになるんですか」
「仏様です」
「阿弥陀様？」
「いいえ、観音さまを彫ろうとしているのです。けれど、鑿の心得がないので、なかなかうまく

彫れない。この通り指ばかり彫ってしまう」

　手をだして、指の傷を見せると、稚児僧はその指よりも、武蔵の袖口から見える肱の白い繃帯に眉をひそめて、

「脚や腕のお怪我は、どんなでございますか」

「……ア。その方も、お蔭でだいぶよくなりました。御住持にも、どうかお礼をいっておいてください」

「観音様をお彫りになるなら、中堂へ参りますと、誰とかいう名人の彫ったという作のよい観音様がありますよ。御飯がすんだら、それを見に行きませんか」

「それはぜひ見ておきたいが、中堂まで、道はどれほどあろうかな」

二

　稚児僧は、答えていう。

「ハイ。ここから中堂までの道は、わずか十町ほどしかございません」

「そんなに近いのか」

　そこで武蔵は、食事が終ると、そのお小僧に伴われて、東塔の根本中堂まで行ってみるつもりで、十幾日目で、久しぶりに大地を踏んだ。

　もうすっかりよくなったつもりでも、土を踏んで歩いてみると、左の脚の刀痕がまだ傷む。腕にうけた傷痕にも、山風が滲み入るここちがする。

　けれど、颯々と、鳴りゆらぐ樹々のあいだに、山桜は散って飛雪を舞わせ、空はやがて近い夏

の色を湛えかけている。武蔵は、萌え出る植物の本能のように、体のうちから外へ向って象われようとして熄まないものに、卒然と、筋肉がうずいてくるのを覚えた。
「お客様」
と、稚児僧は、その顔を見あげ——
「あなた様は、兵法の修行者でいらっしゃいましょう」
「そうだ」
「なんで観音様なんか彫っているんですか」
「…………」
「お仏像を彫ることを習うよりも、その暇に、なぜ、剣の勉強をなさらないのです？」
童心の問いは時によると、肺腑を刺す。
——武蔵は、脚と腕の刀痕よりも、その言葉に、ずきんと胸の傷むような顔をした。まして、そう問うこのお小僧の年頃も十三、四。
下り松の根元で、闘いに入ろうとするや否、真っ先に斬り捨てたあの源次郎少年と——ちょうど年ばえも体の大きさも似て見える。
あの日。
幾人の傷負いと、幾人の死者を作ったろうか。
武蔵は、今も、思い出すことができない。——どう斬ったか、どうあの死地を脱したのか、それもきれぎれにしか、記憶がない。
ただあれから後、眠りについても、ちらついてくるのは——下り松の下で、敵方の名目人であ

る源次郎少年が、

（――怖いっ）

と、一声さけんだのと、松の皮といっしょに斬られて大地へころがった、あのいたいけな可憐な空骸だ。

（仮借はいらぬ、斬れ！）

という信念があったればこそ、武蔵は断じて真っ先に斬ったのであるが――斬ってそしてこうして生きている後の彼自身は、

（なぜ、斬ったか）

と、そぞろに悔い、

（あれまでにしないでも）

と、自分の苛烈な仕方が、自分でさえ憎まれてならない。

われ事において、後悔せず

旅日誌の端に、彼はかつて、自分でこう書いて心の誓いに立てていた。――けれど源次郎少年のことだけは、いくらその時の信念をよび返して心に持ってみても、ほろ苦く、うら悲しく、心が傷んでたまらなかった。剣というものの絶対性が――また修行の道というものの荊棘には、かかることも踏み越えてゆかねばならないのかと思うと、余りにも自分の行く手は蕭条としている。非人道的である。

（いっそ、剣を折ろうか）

とさえ思った。

殊に、この法の山に分け入って幾日、迦陵頻伽の音にも似た中に心耳を澄まし、血しおの酔いから醒め、われとわが身に回ってみると、彼の胸には、菩提を生じないではいられなかった。
手脚の傷の癒える日を待つつれづれに、ふと、観音像を彫りかけてみたのは、源次郎少年の供養のためというよりは、彼自身が自身のたましいに対する慚愧の菩提行であった。

三

「——お小僧」
武蔵はやっと、答える言葉を見つけ出していった。
「じゃあ、源信僧都の作だとか、弘法大師の彫りだとか、この御山にも聖の彫った仏像がたくさんあるが、あれはどういうものだろう」
「そうですね」
稚児僧は首をかしげて、
「そういえば、お坊さんでも、絵をかいたり、彫刻をしたりするんですね」
と、得心したくない顔つきをしながら、頷いてしまう。
「だから、剣者が彫刻をするのは、剣のこころを琢くためだし、仏者が刀を持って彫るのは、やはり無我の境地から、弥陀の心に近づこうとするためにほかならない。——絵を描くのも然り、書を習うんでも然り、各〻、仰ぐ月は一つだが、高嶺にのぼる道をいろいろに踏み迷ったり、他の道から行ってみたり、いずれも皆、具相円満の自分を仕上げようとする手段のひとつにすることだよ」

「…………」
理に落ちかけると、お小僧はおもしろくなくなったとみえ、小走りに先へ駈けて、草むらの中の一基の石を指さし、
「お客様、ここにある碑は、慈鎮和尚というお方が書いたんですって」
と、案内役の方に移る。
近づいて、苔の中の文字を訓んでみると、

法の水　あさくなりゆく
末の世を
おもへばさむし
比叡の山かぜ

武蔵はじっとその前に立ちつくしていた。偉大な予言者のようにその苔石が見える。信長というおそろしく破壊的でまた建設者があらわれて、この比叡山にも大鉄槌を下したため、それ以後の五山は、政治や特権から放逐され、今では寂として、元の法燈一穂の山に回ろうとしているが、今なお、法師のうちには、戒刀横行の遺風が残っているし、座主の位置をめぐって、相剋の権謀や争い事はやまないと聞いている。
俗生を救うためにある霊山が、人を救うどころか、却って俗生の人に飼われて、からくも布施経済の習慣によって生きているという現在の風を思いあわせると——武蔵は無言の碑の前にあって、無言の予言を聞かないではいられなかった。
「サ、参りましょう」

先をうながして、お小僧が歩みかけると後ろから手をあげて、呼ぶ者があった。
無動寺の仲間僧である。
ふり顧る二人の前へ、その仲間僧は駈けて来て、まず、お小僧に向い、
「オイ清然、おまえは一体、お客様をご案内して、どこへ行くつもりじゃ」
「中堂まで行こうと思って」
「なにしに」
「お客様が、毎日観音様を彫っているでしょう。ところが、巧くほれないと仰っしゃるもんだから、それなら中堂に、むかしの名匠が作ったという観音様があるから、それを見にゆきませんかといって――」
「では、きょうでなくても、いいわけだの」
「さ、それは知らないが」
武蔵へ憚って、あいまいにいうと、武蔵はそれを引き取って仲間僧へ詫びた。
「御用もあろうに、無断でお小僧を伴れまいって悪いことを致したな。元より、きょうとは限らぬこと、どうぞお連れかえりください」
「いいえ、呼びにまいりましたのはこの稚児僧ではなく、あなた様におさしつかえなければ、戻っていただきたいと思いまして」
「なに、拙者に？」
「はい、折角、お出ましになった途中を、なんとも恐れ入りますが」
「誰か、拙者を訪ねて来た者でもあるのでござるか」

「――一応は、留守と申しましたが、いや今ついそこで見かけた、どうでも会わねばならぬから、呼び戻して来いというて、頑として動かないのでございます」

――はて誰だろうか、武蔵は小首をかしげながらともかくも歩み出した。

四

山法師の横暴ぶりは、政権や武家社会からは、完全に追われていたが、尾羽打ち枯らしても、まだ山法師そのものの棲息は、この山に残存していることは勿論である。

雀百までの喩えのとおり、未だにすがたも革まらないで、高木履をはき、大太刀を横たえているのがあるし、長柄刀を小脇に持っているのもある。

それが一かたまり、ざっと十名ほど、無動寺の門前で、待ちかまえていた。

「……来た」

「あれか」

耳打ちし合いながら、朽葉色の頭巾や黒衣の影が、もうそこに近く見えて来た――武蔵と稚児僧と、その二人を迎えに行った仲間僧のすがたとへ、じっと、視線をそろえた。

（何用だろうか？）

迎えに来た者が知らないのであるから、武蔵には元よりわかっていない。

ただ東塔山王院の堂衆だということだけは途中で聞いた。しかしその堂衆のうちに、一人として知合などはいそうもないのである。

「大儀じゃった。おぬしらに用はない。門内へ退ッ込んでおれ」

ひとりの大法師が、長柄刀の先で、使いにやった仲間僧と稚児僧とを追い払った。
そして武蔵へ向い、
「そこもとが宮本武蔵か」
と、訊ねた。
先が礼を執らないので、武蔵も直立したまま、
「されば」
と、頷いてみせた。
すると、その後ろから、ずいと一足進み出した老法師が、
「中堂延暦寺の衆判により申しわたす」
と奉書でも読むような口調でいった。
「――叡山は浄地たり、霊域たり、怨恨を負うて逃避するものの潜伏をゆるさず。いわんや、不逞闘争の輩をや――じゃ。ただ今、無動寺へも申しおいたが、即刻、当山より退去あるべし。違背あるにおいては、山門の厳則に照らして断乎処罰申そうぞ、左様心得られい」
「……？」
武蔵は、唖然として、相手の厳めしさをながめていた。
なぜだろう。不審なわけだと思う。初めこの無動寺へたどりついて、身がらを依頼した折に、無動寺では念のため、中堂の役寮へ届けを出して、
（さし閊えない）
という許可をうけ、その上で、自分の滞在を許してくれたのであった。

それを急に、罪人でも追うように追い立てるには、なにか、理由がなくてはならない。
「仰せの趣は承知いたしました。支度もととのわず、今日はもはや明るい間も乏しゅうござれば、明朝、発足つかまつりましょう。それまでの御猶予を」
武蔵は一応、そうおとなしく受けておいて、
「――しかし、これはなにか、司直のお指図でござろうか、それとも当山の役寮の沙汰であろうか。先に、無動寺よりの届けには、滞在のこと苦しからずと、おゆるしあったものを、遽かな御厳命、甚だその意を得ぬが」
突っ込むと、
「おう、そう訊くならばいって遣わそう。役寮においては最初、下り松にて吉岡方の大勢をただ一名で相手にしたさむらいと、おてまえに、満腔の好意をもっていたのであるが、その後、いろいろと悪評が伝わり、御山に匿まい置くべからず――という衆議になったからじゃ」
「……悪評」
武蔵は、さもあろうことのように頷いた。その後の吉岡方が、世間でどう自分をいいふらしているか――想像するに難くないからである。
ここで、そんな噂をまた聞きした人々と、なにをかいい争おう。
武蔵は冷やかにもういちど、
「わかりました。否やもござらぬゆえ、明朝は、必ず立ち退きまする」
答え放して、門内へはいろうとすると、その背へ、唾するようにべつの法師たちが口々に罵った。

「見よ！　外道」
「羅刹め」
「馬鹿ッ」

五

「なんじゃと」
憤っとしたに違いない、武蔵は足を止め、そして自分に嘲罵をあびせた堂衆をねめつけた。
「聞えたか」
こういったのは今、武蔵のうしろから、外道と呶鳴った法師だった。武蔵は心外そうに、
「役寮の命とあるゆえ、神妙に仰せごとを受け申しておるに、口ぎたない罵詈は心得申さぬ。わざとそれがしに喧嘩でも売ろうと召さるか」
「み仏に仕えるわれわれ、喧嘩など売る気はみじんもないが、自ら喉を破って、今のような言葉が出てしもうたのだから仕方がない」
するど、他の法師も、
「天の声だ」
「人をもっていわしめたのだ」
加勢するように、喚きかかった。
蔑みの眼と——嘲罵の唾とが、武蔵の身にあつまった。武蔵は、耐えられない恥辱を感じた。
しかし、いかにも自分に挑むような彼らの態度に、固く自分を、警戒して黙っていた。

この山の法師といえば、舌長いことでは古来から有名である。堂衆というのはいわゆる学寮の生徒である。生意気ざかり、知識自慢、頭でっかちの衒気紛々なのが揃っているのだった。

「なんじゃ、腹でも立てて来ることか、然るべき侍かと思うたが、こう見たところ、つまらぬ奴じゃ、里のうわさが大きいので、碌に物もいえんではないか」

黙っていればいるで、なお、毒舌をふるうので、武蔵もやや色を作した。

「人をしていわしめるといわれたな。天の声といわれたな」

「そうだ」

傲然と、いい押してくる。

「それは、なんの意味か」

「わからんのか。山門の衆判をいい渡されても、まだ気がつかんのか」

「……分らぬ」

「そうか。いや汝の神経ではそうもあろうて。愍れむべき男は汝だ。――だが、輪廻はやがて思い知るであろう」

「…………」

「武蔵。……そこ許の世評はひどく悪いぞ。下山しても気をつけろよ」

「世評など、なにものでもござらぬ――いわしておけばいいのだ」

「ふふん、なにやら、自分が正しそうなことを」

「正しい！　おれは寸毫も、あの試合において、卑劣はしていない。……俯仰して恥じるところはない」

「待て。そうはいわさん」

「どこに武蔵の卑屈があったか。卑怯未練をしたというか。剣に誓う、おれの戦いには、微塵も邪はない！」

「天晴れ顔して、大きくいいおるわ」

「ほかのことなら、聞き流しもするが、拙者の剣にかかわって、あらぬ誹謗をいいたてると、許さぬぞっ」

「然らば、いおうか。この問いに対して明答できるものなら答えてみい。――なる程、吉岡方は日にも余る大勢であった。敢然、一人であたって戦いぬいたそこ許の元気というか、暴勇というか、生命知らずなところだけは大いに買おう。えらいと称えておいてもいい。――しかし、なにがゆえに、まだ十三、四歳の子供まで斬ったか。あの源次郎とよぶ幼少を、無残にも斬り伏せたか――」

「…………」

武蔵の面は、水をあびたように悄然と、血のいろを失った。

「二代目清十郎は、片輪となって遁世し、舎弟伝七郎も、汝の手にかかって果て、後に残る血筋といえば……あの幼少源次郎しかないのだぞ。源次郎を斬ったのは、吉岡家に断絶を与えたも同様なのだ。……いかに武道の上とはいえ、血も涙もない仕方ではあるまいか。外道、羅刹の名をもってして、まだいいたらぬ気がするわ！　それでもおぬしは人間か、いや、この国の山ざくら花と対に称われるさむらいといえるかどうじゃ」

六

じっと、さし俯向いて沈黙しつづけている武蔵に対して、
「山門の憎しみもそのいきさつが知れて来たためじゃ、他のいかなる事情を酌んでも、あんな幼少を、敵の数に入れて斬った武蔵の心はゆるし難い。この国のさむらいとは、そんなものじゃない。もっと、強ければ強いほど、傑出していればいるほど、優しいもの、ゆかしいもの、また、もののあわれを知っているもの……。叡山は、汝を追う！　一刻もはやく、この御山を出て失せいっ」
あらゆる罵詈、あらゆる嘲蔑──武蔵の胸には少なくもそう応えた──を堂衆たちは彼に浴びせかけて、ぞろぞろと帰って行った。
「…………」
甘んじて、武蔵は、その笞をうけ、ついに黙りとおしてしまった。
──が、しかし、それに対して答えがなかったのではない。
（おれは正しい！　おれの信念はちがっていない！　あの場合、ただ、あれ以上に出るしかおれの信念を徹する仕方はなかったのだ）
彼は、心のうちで、いいわけでは決してない──今もこの信条は取ってうごかないのである。
では、なぜ源次郎少年を斬ったのか。
それに対して、彼は自分の胸のうちでは、明らかにいい切れる。
（敵の名目人とあるからには、それは敵の大将である。三軍の旌旗である）

なぜ、それを断って悪いか。また、こういう理由もある。
(敵は、七十人からの人数であった。いかに、自分が舎利となって戦っても、そのうち、十名も斬れば、善戦したものといわなければならない。だがもし、吉岡の遺弟ばかりを、たとえ二十人斬っても、残り五十人は、後で凱歌をあげるだろう。——だから自分が、勝名乗りを揚げるためにも、誰よりも真っ先に敵方の旌旗であるところの大将首をまず先に挙げておく必要があったのだ。——全軍の護っている中心の象徴に、自分の一撃を下しておきさえすれば、たとえ、自分があの際、斬り死にしても、後に、自分の勝利は証拠だてられる)
もっと、もっと、彼をしていわしめるならば、剣の絶対的な法則とその性質からでも、理由はなお幾言もいうことができる。
けれど武蔵は、堂衆たちの面罵に対して、とうとう、それを一言もいわずにしまった。
なぜなら、それほどの理由をかたく信念しても、他人でない彼自身の胸のうちに何ともいえない寝ざめの悪さ——傷ましさやら慚愧やらを——彼ら以上に、生々しく胸にもって傷んでいるからである。
「……ああ、修行なんて、もう止めようか？」
うつろな眼をあげて、武蔵はなお、門前に立ちつくしていた。
暮れかかって来る夕風夕空の中に、白い山ざくらは散りまよっている。きょうまでの一心不乱も、その花びらのように霏々と砕けて宙にさまよう心地がする。
「……そして、お通さんと」
彼はふと、町人の気楽さを思いうかべた。光悦や紹由の住んでいる世間を考えた。

（いや！　……）
大股に、彼は、無動寺の中へ姿をかくした。
部屋にはもう明りがともっていた。ここも今夜かぎりに去らねばならない。
（巧拙は問うところでない、供養の心もちが、菩提へとどけば足りるのだ。――今夜のうちに彫り上げて、この寺に遺してゆこう）
武蔵は、短檠の下に坐った。
そして彫りかけの観音像を膝の上に抑え、彫刀を把って、一念にまた、新しい木の屑を散らしはじめた。
――と、戸締りもない無動寺の大廊下へ、そっと這いあがって、のろまな猫のように、部屋の外にかがみこんだ者があった。

七

短檠の灯が翳くなる……
丁字を剪る。
すぐ、武蔵はまたかがみ込んで、彫刀を把る。
宵のうちすでに、山は、深沈とふかい静寂に囲まれていた。サクリ、サクリと彫刀の鋭利な先で木を削いでゆくのが微かに雪の積むほどにひびく。
武蔵はまったく彫刀の先に没しきっていた。彼の性情はなにへ対しても、一度それに向うと直ちに没頭しきってしまう。今――刀を把って観音像を彫りにかかっているのを見ても、体がへと

へとになりはしないかと思われるような情熱に燃えきっている。

「…………」

口のうちで唱えていた観音経の声が、我を忘れて次第に大きな声になってゆく、気がつくと急に声を落し、また、燭を剪っては、一刀三礼のこころを像に向って凝らした。

「……ウム、どうやら」

背を伸ばした時は、東塔の大梵鐘が、二更を報じていた。

「そうだ、挨拶もせねばならぬし、この像も、今宵のうちに、住持におねがいしておこう」

ざっとした荒彫ではあった。けれど武蔵にとっては、自分のたましいを打ちこめ、慚愧の涙をもって、亡き一少年の冥福を祈りつつ彫りあげたものなのである。それを寺に遺しておいて、永く、自分の憂愁とともに、源次郎の霊を弔ってもらおうと発願したものであった。
で。――彼は彫り上げたそれを持って、やがて部屋を出て行った。

彼が去ると間もなく、入れ違いに稚児僧がはいって来て、部屋の中の塵を箒で掃き出した。そして夜具までのべた後、箒をかついで庫裡へ戻ってゆく。

――すると、誰もいないはずのそこの障子が、その後で、ズズズと静かに、すこし開いて、また閉った。

やがてのこと――

武蔵はなにも知らず帰って来たのである。住持から受けて来たらしい餞別の笠、草鞋など、旅装の具を枕べにおき、短檠の灯を消して、寝床についた。

戸閉りはしないので、風はじかに四方にあたる。外の星明りに障子は蒟蒻色に明るくて、樹々

の影が海原の荒びを思わせる。

……かすかな鼾声になってゆく。武蔵は眠りについたらしい。

眠りのふかくなるほど、寝息も長く数えられた。と――隅の小屏風の端がすこし動き、ず……と猫のように背の尖った人影が膝で這い寄って来る。

ふと、武蔵の寝息が休むと、人影はぺたっと、布団より薄べたくなり、じっと寝息の深度を測りながら、根気よく大事をとって機を待っている。

――突然！　ふわりっと、黒い真綿でもかぶさるように、武蔵の上へその人影がのしかかったのである――と見えたかと思うや否や、

「うっ、うぬっ。思い知れやっ！」

いきなり――脇差の切ッ先であった。寝首の喉へ、力まかせに、キッと走る。

すると、その切ッ先の行方も分らぬほど――　だあんッ　と横手の障子に、その人間は飛んで行った。

重い風呂敷づつみのように投げつけられた人間は、ひッと一声呻いた限り、障子とともにもんどり打って、外の闇へ転がり落ちた。

投げつけたせつな、武蔵はその曲者の体重が軽いのではっと思った。猫ほどしか重量のない曲者なのである。それに布で顔は包んでいたが、髪の毛も麻のように白かったし……。

だが、彼はそれには一顧もしないですぐ枕元の太刀をかかえ、

「待てっ」

と縁を飛び降り、

「折角の訪れ、ご挨拶を申すであろう。お返しなされ」
いいざま、大股に駈けて、闇の跫音を追いかけた。
しかし本気で追う気ではないらしく、乱れあって彼方へ散って行く白い刃影や法師頭巾の影を嗤ってすぐ引っ返して来た。

八

投げつけられた弾みに、ひどく体を打ったのであろう、お杉婆は大地に呻いていた。武蔵が戻って来たとは知ったが、逃げることも起つこともできなかった。
「……アッ。おばばではないか」
武蔵は抱き起こしてみた。
自分の寝首を狙いに来た首謀者が、吉岡の遺弟でも、この山の堂衆でもなく、老いさらぼうた同郷の友の母であったことは、彼にも意外であったとみえる。
「ああ、これで解けた。中堂へ訴え出て、わしの素姓や、わしのことを、悪しざまに告げた者は、おばばであったのだな。健気な老婆のことばと聞き、堂衆たちは一も二もなく信じたに違いない。また、同情もしたであろう……。その結果わしを山から追うことに決め、夜陰に乗じて、おばばを先達にここへ加勢にきたものとみえる……」
「……ウウム、くるしい、武蔵、もうこうなる上は、ぜひもない。本位田家の武運がないのじゃ。ばばの首を討て」
苦悶しながら、お杉はやっとそれだけいった。

しきりと藻がくのであったが、武蔵の力を拒むだけの力すらないのだった。打ちどころも応えたに違いないが、もう三年坂の旅籠をたつ頃から、お杉は風邪をこじらしていて、微熱があったり、足腰が懶かったりして、とかく健康もすぐれなかった揚句である。
その上、下り松へ行く途中、ああして又八から棄てられてしまったことも、さすがに老いの心へ大きな傷手となり、体にも利いていたに相違ない。
「――殺せっ、この上は、ばばの首を斬れ」
と今、彼女がもがいていうのもそういう心理や肉体の衰えを考えてやると、あながち弱者のさけぶ捨てばちな狂言ではなく、真実、事ここにいたったと知って（もうこれまで）という観念の下に、いっそ早く死にたいと願って、正直に喚いたものかも知れなかった。
だが武蔵は、
「おばば、痛いのか。……どこが痛い？　……わしがついているゆえ案じぬがよいぞ」
両の腕に、軽々と、彼女のからだを乗せ、自分の寝床の中へ運んで、その枕元に坐り、夜の明けるまで、看護していた。
夜が白みかけるとすぐ、お小僧が頼んでおいた弁当をつつんで持ってきてくれた。――しかし方丈からは、
「お急き立てするようですが、昨日、中堂からやかましくいい渡されておりますゆえ、今朝はすこしも早く御下山をねがいます」
という催促。
もとより武蔵もそのつもりなのである。すぐ旅装して立ちかけたが、さて困ったのは病人の老

婆だった。

これを寺に計ると、寺でも、そんな者を残されて行っては迷惑といったような顔つきで、

「では、こうなされては如何です」

便宜をとってくれた。

大津の商人が荷をのせて来た牝牛がある。その商人は牝牛を寺にあずけたまま、丹波路へ用達にまわっているから、その牛の背を借りて、病人をのせ、大津へ下山されたがよかろう。そして牛は大津の渡船場なりあの辺の問屋場へなり置いて行ってくれればいい――というのであった。

乳

一

四明ケ岳の天井を峰づたいに歩いて、山中を経て滋賀に下りてゆけば、ちょうど三井寺のうしろへ出ることができる。

「……ウウム……ウウム」

婆は時々、陣痛をこらえるように、牛の背で呻いていた。

その婆を乗せた牝牛の手綱を持って、武蔵は、牛の先に歩いてゆく。

振顧って――

「おばば」
武蔵は、慰めていう。
「苦しければ少し休もうか。――おたがいに急ぐ旅ではないからな」
「…………」
牛の背に俯ッ伏したまま、お杉婆は無言だった。その無言のうちには、仇と思う人間のために、こういう世話になるのを好まない性来の勝気が――むしろ無念そうに顔の底に潜んでいた。
で――武蔵が優しく劬われば劬わるほど、
（なんの、汝れなどに、不愍をかけられて、怨みを忘れるような婆ではないぞ――）
と、強いて憎悪に努め、よけいに反感を昻めるのだった。
けれど、まるで自分を呪うために長生きしているかのようなこの老婆に対して、なぜか武蔵はそれほど強い憎みも敵愾心も持たなかった。
力と力との対立では、余りに弱過ぎる敵であるせいもあろうが、その実、きょうまでの間に、計られたり、陥れられたり、武蔵が一番苦しめられた敵は、この最も腕力のない年寄りの敵対行為であった。――にもかかわらず、どういうものか、武蔵にはこの年寄りを、心から敵だと思うことができないのである。
では、まったく、眼中にないのかといえば、故郷ではひどい目に遭わされているし、清水寺の境内では、群衆の中で、唾せんばかり罵倒されているし――その他、きょうまでというもの、どれほどこの老猾なばばのために、事を邪げられたり、脛を掬われるような思いを嘗めさせられているか知れないので、その折々には、

（おのれ、どうしてやろう）
と、八つ裂きにしてもあき足らないほど、憎くも思い、憤りもするのであったが、さて――
自分の寝首を掻かれ損なってみても、心底から、
（悪婆！）
と、怒りにまかせて、この細ッこい皺首を捻じ切る気にはなれなかった。
それに今度は、お杉婆その者もまた、いつになく元気がない、ゆうべの打身を痛がって呻いてばかりいるし、辛辣な毒舌も振わないので、武蔵は一しお不愍になり、はやく体だけでも丈夫にしてやりたいがと思うのだった。
「おばば――牛の背も辛かろうが、大津まで行けば何とか思案がつこうで、も少しの辛抱。……朝から弁当も食べていないが、腹は空いていないかな。……水でも飲みとうはないか。……なに？　……要らぬ……そうか」
この峰づたいの天井から眸を四顧にやると、北陸の遠い山々から、琵琶の湖はいうまでもなく、伊吹もみえ、近くは瀬田の唐崎の八景まで一つ一つ数えられる。
「休もう。――おばばも牛の背から降りて、すこし、この草の上に体を横にしてはどうか」
武蔵は、牛の手綱を、樹につないで、お杉婆を抱いて下ろした。

二

「ア痛、ア痛」
お杉婆は顔をしかめ、武蔵の手を拒んで、草の上に俯ッ伏した。

皮膚は土色に、髪はそそけ立ち、このまま、ほっておけば絶え入りそうな重態にも見える。
「おばば、水は欲しゅうないか。……なんぞ、食べ物でも少し口へ入れてみる気はないか」
武蔵はしきりと案じて、その背を撫でてやりながら訊ねたが、強情な婆は、頑なに、首を横へ振って、水もいらぬ、食べ物もほしくないという。
「弱ったのう」
武蔵は途方に暮れ――
「ゆうべから、水一滴口に入れず、薬をやりたいとは思うが人家もなし……疲れてしまうばかりじゃないか。……おばば、せめて、わしの弁当を半分ほどでも食べてくれぬか」
「けがらわしい」
「なに。穢らわしいと」
「たとえ、野末に行き倒れて、鳥や獣の餌食になろうとも、仇と狙うおぬし如き者から、飯などもろうて口に入れようか。馬鹿な――うるさいッ」
背を撫でている武蔵の手を、自分の背から振り退けて、婆はまた草の根にしがみついた。
「ウム」
武蔵は、腹が立たなかった。むしろ婆の気持に共感ができるのである。この婆の抱いている根本的な誤解さえ除くならば、自分の気持も婆によく分ってもらえるであろうにと、それだけがただ嘆息されるのであった。
自分の母の病のように、武蔵はなにをいわれても甘んじて受け、そして病人の駄々を宥めるような根気をもって、

「でも、おばば、このまま死んでしまっては、つまらないじゃないか。又八の出世も見なければ……」
「な、なにをいう！」
嚙みつきそうに、婆は歯を剝いていった。
「そ、そのようなこと、おぬしの世話にならいでも、又八は又八でいまに一人前になって行くわ」
「……それは成って行くだろうと俺も思う。だから、おばばも元気を出して、ともどもに、彼の息子を励ましてやらねばなるまい」
「武蔵！　……汝れは、似非善人じゃの。そのような甘い言葉に騙かされて、怨みを解くようなわしではないぞ。……無駄なこと、耳うるさいわい」
とりつく島もない血相なのだ。たとえ好意にせよ、これ以上はかえって逆らうことになってしまおう。武蔵は、黙然と立って、婆と牝牛をそこに残し、婆の眼にふれないところへ去って、弁当を解いた。
柏の葉で巻いてある握り飯であった。飯の中には黒い味噌が入っている。武蔵には美味かった。その美味さにつけても、どうかしてこれを半分でも婆が喰べてくれればよいがと思い――残りの少しをまた、柏の葉でつつんで懐中に残しておいた。
すると、婆のそばで、話し声が聞える。
岩の蔭から振向いてみると、通りかかった里の女房であろう、大原女のような山袴を穿き、髪は無造作に油けもなく束ねて肩へ垂げている。

「なあ、お婆さんよ、わしの家にも、この間から病人が泊っていての、もうだい ぶ癒いが、この牝牛の乳をやったらなおよくなろうと思うのさ。ちょうど壺を持っているし、この牝牛の乳をすこし搾らせてくれまいかのう」

女の話が、高声にひびく。

婆は顔をあげて、

「ほ、牝牛の乳が、病によいとは聞いていたが、その牛から乳がとれるかの」

と、武蔵に向ける時とはちがう眼ざしを耀かして、そう訊ねていた。

山家の女はなお婆となにかいい交わしている間に、牝牛の腹の下にかがみ込んで、抱えていた酒壺の中へ白い液を懸命に搾り取っていた。

三

「有難うよ、おばあさん」

牝牛の腹の下から女は這い出した。搾った乳の瓶を大事に抱えて、礼をいうとすぐ去りかけた。

「ア。——待たしゃれ」

お杉婆は、呼び止めた。ひどく慌てて手をあげたのである。

そして辺りを見廻した。武蔵のすがたが見えないので、婆は安心したもののように、

「女子。……わしにも、その牝牛の乳をくれぬか。ひと口、飲ませてくれまいか」

渇き切ったような声をふるわせていう。

お易いことですと、女が乳の瓶をわたすと、婆は、瓶の口へ脣をつけて、眼をつぶりながらそ

れを飲んだ。唇の端から流れた白い汁が、胸を垂れて、草にもこぼれた。
「…………」
胃に満ちるまで飲んでから、婆は、ぶるっと身をふるわせ、すぐ吐きそうに顔をしかめた。
「……ああ、なにやら不気味な味よの。したが、これでわしも、達者になれるかも知れぬ」
「おばあさんも、どこか体がお悪いのかえ」
「なあに、大したことはない。風邪熱のあったところを少し手ひどく転んでの」
いいながらお杉婆はひとりで起ち上がっていた。牛の背に乗せられて、ウンウン呻いていた病態はその時少しも見えなかった。
「女子……」
声をひそめて、寄り添いながら、もいちど鋭い眼を、武蔵のために配って、
「この山道を、真っすぐに行ったら、どこへ出るのじゃ」
「三井寺の上に出るがな」
「ないこともないが、おばあさんは一体、どこへ行きなさるのじゃ」
「どこへでもかまわぬ。わしはただ、わしを捕まえて離さぬ悪者の手から逃げたいのじゃよ」
「四、五町ほど先へ行ったら、北へ降りる小道があるで、そこをかまわず降りて行けば、大津と坂本の間へ出るがな」
「そうか……」
と、婆はそわそわして、

「では、誰か後から追いかけて来て、お許になにか訊いても、知らんというてくれよ」
いい捨てると、婆は、怪訝な顔しているその女の歩みを追い越して、跛行の蟷螂が急ぐように、先へ駈け去ってしまった。
「…………」
武蔵は見ていた。苦笑しながら岩蔭を起ってしずかに歩き出した。
瓶を抱えてゆく女房のうしろ姿が先へ見えた。武蔵が呼びとめると、女は立ち竦んで、なにも問わないうちから、なにも知りませんと答えそうな顔つきをした。
だが武蔵は、そのことには触れないで、
「おかみさん、おまえの家は、この辺のお百姓か、それとも木樵か」
「わしの家かえ？　わしの家は、この先の峠にある茶店だが」
「峠茶屋か」
「へエ」
「ならば、なおのこと、都合がよい。おまえに駄賃をやるが、洛内まで一走り、使いに行ってくれないか」
「行ってもよいが、家に病人のお客人がいるでの」
「その乳は、わしが届けてやった上、おまえの家で、返事を待っているとしよう。ここからすぐ行ってくれれば、陽のあるうちに帰って来られよう」
「それやあ造作もねえこったが……」
「案じるな。わしは、悪者でもなんでもない、今の婆どのも、あの元気で走れるようなら心配な

いから抛っておくのだ。……今ここで手紙を書く。それを持って、洛内の烏丸家まで行って来てくれ。返事はおまえの茶店で待っている」

四

武蔵は、矢立の筆を抜いて、すぐ手紙を認めた。
お通へ――である。
無動寺にいた幾日かのあいだにも、折あらば――と機を心がけていた彼女への便りを、
「では、頼むぞ」
と今、女に渡し、自分の牛の背にまたがって、そこから半里ほどを悠々と牛の歩みにまかせて歩いた。
ほんの走り書きの一筆であったが、使いに持たせてやった自分の手紙の中の文言を思い泛べ――それを受けとるお通の胸をも想像して、
「二度と、会えようとは思わなかったが」
と、呟いた。
彼の笑顔には、明るい雲が映えて見える。
生々と夏を待つ地上の何物よりも、晩春の碧落を彩る虚空何物よりも、彼の顔一つが、いちばん楽しそうであり、また、潑剌としていた。
「……この間のあの容態では、まだ病床にいるかもしれない。でも、わしのあの手紙が届いたら、すぐ起きて、城太郎とふたりして追いついて来るだろう」

牝牛は時々、草を嗅いで止まった。草の白い花も、武蔵には、星がこぼれているように見えた。

楽しいことだけしか考えられない今の武蔵であったが、ふと、

「おばばは？　……」

と、谷間を見渡し――

「一人でまた、仆れたまま苦しんでいるのじゃないか？」

などと心配してみたりする。――それもこれも、今なればこそある余裕だった。

もし人に見られたら恥かしいと思ったが、お通へやった手紙の中に、彼はこういう意味のことを書いたのである。

花田橋のときは、そなたが待った

こたびは、わたしがそなたを待とう

ひと足先に、大津へ出、瀬田の

唐橋に牛をつないでいる

くさぐさの話、その節

彼は、そう書いた自分の文言を詩のように、口のうちで幾たびも暗誦し、さて――くさぐさの話のたねまで今から胸に描いている。

峠の背に、旗亭が見えた。

「……あれだな」

と思う。

近づいて、彼は牛の背から降りた。手にはここの女房からの届け物である乳の入っている瓶(かめ)を持っていた。
「ゆるせ」
軒先の床几(しょうぎ)を占めると、土泥竈(どべっつい)にせいろうをかけて、木を燃やしていた老婆が、ぬるい茶を汲んでくる。
武蔵は、その老婆に向い、ここの女房に逢って、途中から使いを頼んだ仔細を告げた。そして乳の瓶をも渡そうとすると、
「へえ、へえ」
とばかり聞いていた老婆は、耳が遠いのか、その瓶を持たされると、
「これはなんでござりまするか」
と、不審(いぶか)った。
武蔵が、これは自分の曳いている牝牛の乳で、ここの女房が病人の客とやらへ飲ませたいためにこれへ搾(しぼ)ったものだから、すぐその病人へ与えるがよかろうと、いい聞かせると、老婆は、
「ほう？　……乳でござりまするか……ほう？」
まだ分ったやら分らないような顔つきして、両手に瓶を支えていたが、やがて、処置に窮したように、
「——お客さあっ、奥のお客さあっ、ちょっくら来ておくんなされや。わしにゃあ、どうしてええか分らんがな」
狭い小屋の奥をのぞいて、唐突にどなった。

五

老婆に呼びたてられた奥の客なる者は、奥にはいなかった。
「――おう」
と、返事の聞えたのは裏口のほうで、やがてのそっと、一人の男が、茶店の横から顔を出して、
「なんだい、婆さん」
と、いった。
老婆はすぐ乳の瓶をその男の手へ渡した。けれど男は、その瓶を持ったまま、老婆の話を聞こうともしないし、乳をのぞいて見るでもない。
放心した人間のように、眼を武蔵の頬へ射向けているのだった。武蔵も亦、凝然として、その男を見ている――
「……お、おうっ」
どっちからともなくこう呻いた双方の足が前へ出ていた。
そして顔と顔とを接し合って、
「又八じゃないかっ！」
武蔵がさけんだ。
その男は、本位田又八だったのである。
変らない昔の友の声に耳を打たれると、又八もわれを忘れて、

「――やっ。武やんか！」
と、彼もむかしの呼び慣れた名をもって呶鳴った。武蔵が手を伸ばすと、又八も、うつつに抱えていた乳の瓶を思わず手から落して抱きついた。
瓶は砕けて、白い液が二人の裾へ刎ねかかった。
「ああ！　何年ぶりだろう」
「関ケ原の戦――あれからだ！　あれから会っていないのだ！」
「……すると？」
「五年ぶりだ。――おれは今年二十二になったから」
「わしだって、二十二だ」
「そうだ、同い年だったなあ」
　抱き合っている友と友を、牝牛の甘い乳の香がつつんでいた。幼心を二人ともそれにも思い出されていたかもしれなかった。
「偉くなったなあ、武やん。――いや今では、そう呼ばれても自分みたいな気がすまいな。おれも武蔵と呼ぼう。いつぞやの下り松の働き、その前のことども、噂は始終耳にしていた」
「いや、恥かしい。まだまだおれは未熟者だ。世間の奴が、余りにも不出来すぎるのだ。――だが又八、この茶店に泊っているという客は、おぬしのことか」
「ウム……実は江戸表へ行こうと思って都を立ったが、少し、都合があって十日ばかり」
「じゃあ、病人というのは？　……」
「病人」

又八は口籠って、
「あ——病人というのは、連れの者だ」
「そうか。……なにしろ無事な顔を見てうれしい。いつか、大和路から奈良へゆく途中で、城太郎からおぬしの手紙を受け取ったが」
「…………」
急に、又八は眼を伏せた。
あの時、手紙の中に、傲語して書いた言葉の一つでも、実行されていないことを思うと、彼は、武蔵の前に、面を上げる勇気も出ない。
武蔵は、その肩に手をかけた。
ただわけもなく懐かしいのだ。
五年のあいだに生じた彼と自分との人間的な差などは念頭にもなかった。折もよし、ゆっくりと打ち寛いで、心ゆくまで語りあいたいと思うのだった。
「又八、連れというのは、誰なのだ」
「いや……べつに、誰という程の者でもないが、少しその……」
「じゃあ、ちょっと、外へ出ぬか。ここで余り饒舌るのも悪かろうゆえ」
「ウム、行こう」
又八も、それを望んでいたらしく、すぐ茶店の外へ歩き出した。

蝶と風

一

「又八、おぬしは今、なにをやって衣食しているのか」
「職業か」
「ウム」
「仕官の口には外れるし、まだこれぞといえる仕事もしていないが」
「では今日まで、遊んで暮してきたのか」
「そういわれると思い出す……俺はまったく、あのお甲のやつのために、大事な一歩を過ったものだ」
その伊吹の麓が思い出されるような草原へ出ると、
「坐ろう」
武蔵は、草にあぐらを組んだ。そして自分に対して、何となく、負け目を感じているような友の弱気を、むしろ歯がゆく思った。
「お甲のためだというが――又八、そういう考え方は男の卑劣だぞ。自分の生涯を創ってゆくものは自分以外の誰でもない」

「それやあもとより、俺も悪い。……だがどういうのかなあ。俺は自分へ向って来る運命を、かわせないのだ。つい引き摺られてしまうのだ」

「そんなことで今の時代をどうして乗り切るか。たとえ江戸へ出てみても、江戸は今、諸国から腹の空いている人間が、眼を研いで集まっている新開地だ。とても人並なことでは立身も覚束なかろう」

「俺もはやく剣術でも修行すればよかったが」

「なにをいう。まだ二十二じゃないか。なんだってこれからだ。……だが又八、おぬしには剣の修行は人がらでない。学問をせい、そしてよい主君を求めて奉公の途につけ、それが一ばんいいと思うな」

「やるよ……俺も」

草の穂をむしり取って、又八は歯に咥えた。心から彼も自分を恥じるのだった。

同じ山間に生れ、同じ郷士の子に生れ、年も同じなこの友に対して、たった五年の歩みの違いが、彼と自分と、こんなにも大きな差を作っていたかと思うと、堪らないほど、徒食の日が後悔されてくる。

噂だけを聞いて、武蔵にあわないでいたうちは、なんの彼奴がと、多寡をくくっていられたが、こうして五年ぶりで変った姿に出あってみると、いくら意地を張ってみても、又八はなにか友達らしくない威圧さえ彼から受けて、自分の影に負けめを抱かずにはいられない。そして常に胸に持っていた武蔵に対する反感も、気概も、自尊心までも同時に失って、ただ正直に自分の意気地なさばかり、心の裡で責めるのであった。

「なにを考え込んでいるのだ——。おいっ、慥かりしろよ」
武蔵は、友の肩を打って、叩いてみても手に感じられるような、その軟弱な意思を叱った。
「いいじゃないか、五年道草をくったら、五年遅く生れて来たと思うのだ。だが、考えようによっては、その五年の道草も、実は尊い修行であったかもわかるまいが」
「面目ない」
「……オオ、話に夢中になって忘れていたが、又八、たった今おれは、おぬしの母親とそこで別れたのだぞ」
「えっ、おふくろと、あったのか」
「なぜ、おぬしは、あの母親の強気と我慢を、も少し血の中に貰って生れて来なかったのだ」

二

この不肖な子を見ていると、武蔵は、あの不幸な母親のお杉婆を、哀れと思わずにいられない。
（なんたるやつだ）
と、腑がいない又八の銷沈している姿が、他人事ならずに、眺められる。
（幼少から母にわかれて、母のない俺のみじめな寂しさを見ろ）
と、いってやりたい。
抑々。
お杉婆が、あの老齢をもちながら、求めて旅の空に惨苦を舐めているのも、また、自分を目し

て七生の仇敵とまで思いこんでいるのも、その根本の原因はただ一つ、

「又八が可愛い」

という以外の何ものでもない。その他に原因はないのだ。盲愛から生じた誤解であり、誤解から生じた執念でしかないのである。

淡い幼少の夢の中にしか母を知らない武蔵には、痛切にそれが分る。羨ましくてならないのだ。あの婆に罵られ、迫害され、謀られて、一時の憤怒から醒めた後では、かえって胸を噛まれるほど孤愁の身にそれが羨まれた。

（――だから、婆の呪詛を和らげるには？）

と、武蔵は今、又八の姿を見ているうちに胸の中で、独り問うて独り答えた。

（この息子が、偉大になってくれればいいのだ。武蔵以上の人間になり、俺を見返して、郷人に誇ってくれたら、婆は、おれの首を討った以上、本望と思うだろう）

そう考えると、彼の又八に抱く友情は彼が剣に対するように、彼が観音像を彫る時のように、燃え上がらずにいなかった。

「なあ、又八。おぬしは思わないか」

その真実が、彼のことばを、友情の裡にも荘重にして、

「あんないいおふくろを持って、おぬしはなぜ、あのおふくろに、欣し涙をこぼさせてやろうとはしないのだ。親のないおれから見ると、貴様は、勿体なさすぎるぞ。勿体ないということは、親を尊敬しないということじゃないのだ。人間の子の最大な幸福を持たせられていながら、折角の幸福を、余りにもおぬしは自分で踏みにじっている。――仮にだ、おれに今、あんなおふくろ

があったとしたら、おれの人生は、何倍も暖かに膨らむだろう。身を研くにも、功を立てるにも、どんなに張合いが持てるか知れないと思うのだ。なぜならば、親ほど正直に、子の功を欣んでくれるものはないからだ。自分のしたことを、共々欣んでくれる者があるのは大きな張合いというものじゃないか。――それのある者には、陳腐な道義の受け売りをしているように聞えるだろうが、こういう漂泊の空にある身でも、アアいい景色だなあと感じた時のような場合、側にもどこにもそれを語る者がいないということはその一瞬、実にさびしい心地の身になるものだぞ」

又八が、じっと耳を傾けて聞いていてくれるので、武蔵も一息にそこまでいって、友の手頸を握りしめた。

「又八っ……。そんなことは、おぬしだって、百も承知に違いない。おれは、友達として頼むのだ。同じ郷土で育ったのだ。……なあおいっ、関ケ原の合戦を望んで、槍を担いであの村を出た時の気持を、もいちどお互いに呼び回して、勉強しようじゃないか。合戦は今、どこにもなく見えるが、関ケ原の役は熄んでも、平和の裏の人生の戦はあんなものどころか、いよいよ修羅と術策の巷を作っているのだぞ。その中で、克ちきる道は、自分を研くことしかない。……なあ又八、もいちど槍を担いで出かける気で貴様も、真面目に世の中と取ッ組んでくれよ。勉強してくれよ、偉くなってくれよ。貴様がやる気ならおれもどんな力でも貸す、貴様の奴僕になってもいい、ほんとに貴様がやるという誓いを天地に立ててくれるならば――」

結び合っている二人の手へ、又八はぼろぼろ涙をこぼした。湯のようにそれは熱かった。

三

これが母の意見だと、耳にたこという顔を示して、いつも鼻で嗤い返す又八であるが、五年ぶりで会った友の言葉には、強く本心を衝たれてつい涙すらこぼしてしまった。
「……分った、分った、有難う」
繰返して、手の甲で眼を抑え、
「今日を心の誕生日として、おれも生れ直す。とてもおれは、剣で身を立てる素質はなさそうだから、江戸表へ行くなり、諸国を遍歴するなりして、そのうちに良師に出会ったら、就いて学問を励むことにする」
「おれも、共に心がけて、良い師と良い主人を見つけてやろう。なにも学問は閑でやるのじゃないから、主人に仕えながらでも修められることだし」
「なんだか、広い道へ出た気がする。——だが、困ったことが一つある……」
「なんだ。どんなことでも話してくれ、将来ともに、この武蔵にできることで、そして、おぬしの身のためになることなら、どんなことでもきっとする。——それがせめて、おぬしのおふくろを怒らせた、わしの罪の償いだから」
「いい難いなあ」
「些細な秘しごとが、つい大きな暗い陰を作る。話してしまえ……間のわるいのは一瞬だし、友達の間に、なんの羞恥むことがあるものではない」
「……じゃあいってしまうが」
「ウム」
「茶店の奥に寝ているのは、女の連れなんだ」

「女連れか」
「それも、実は……。アア、やっぱりいい難いなあ」
「男らしくない奴だ」
「武蔵、気を悪くしないでくれ。おめえも知っている女だから」
「はてな？　……誰だ一体」
「朱実だよ」
「…………」
武蔵は、はっと思った。
五条大橋で会った朱実はもう以前の真っ白な野の花ではなかった。媚汁をたたえた毒草のお甲ほどにはまだ荒んでいないまでも、危険な火を咥えて飛んでいる鳥だった。あの時、自分の胸へすがって泣きながらそれを告白もしていたし、折からその朱実と、なにか関係のありそうな若衆扮装の前髪が、キッと、橋の袂から白い眼で睨めつけていたことなども思い出される。
武蔵が今、朱実と道連れと聞いて、友のためにハッと思ったのは、そうした複雑な事情と性格をもっている女性と、この弱気な友との人生の旅が、どんな暗黒の谷間へ入ってゆくことか、余りにも見えすいた不幸な道連れ——と直ぐ思われたからであった。
また、どうしてだろうか。お甲といい、朱実といい、選りに選って、そういう危ない道連ればかりが、この男に付くのは。
「…………」
武蔵の黙っている面を、又八は、又八らしく解釈して、

「怒ったのか。……おれは秘していては悪いから正直にいってしまったが、おめえの身に取れば、いい気持はしないだろうからな」

と、いった。

憐れむように、武蔵は、

「ばかな」

と、顔色を払って、

「余りにも、不運に出来ているのか、不運を自分で作るのか——と、おぬしのために、おれは茫然とするのだ。……お甲に懲りておりながら、なんでまた……」

口惜しくすら武蔵は思って、そのいきさつを糺すと、又八は、三年坂の旅籠で出会ったことから、過ぐる夜、瓜生山で再び会って、ふと出来心のように、江戸へ駆落ちする相談を決め、連れの母親を捨ててしまったことまで、ありのままに話して隠すところもない。

「ところが、おふくろの罰があたったのか、朱実の奴が、瓜生山で辷った時の打傷が痛いといいだし、それからこの茶店でずっと寝込んでしまったというわけ。おれも後悔はしたが、もう追いつかないことだしなあ」

その嘆息を聞けば、無理もない。火を啣えている鳥と、慈母の珠とを、この男は、取り替えてしまったのである。

四

そこへ、のっそり、

「お客さあ、ここにいなさったのけ」
模糊として風貌のどこかに耄碌した茶店の老婆が、両手を腰にまわし、お天気でも見に来たように空を見まわして、
「お連れの病人は、一緒に来ていなさらねえのかよ」
問う如くでもあり、問わざる如くでもある。
又八は直ぐ、
「朱実か。——朱実がどうかしたのか」
色を顔に出していう。
「寝床にいねえがな」
「いない」
「今し方までいただが」
武蔵には、なにか、説明はできないが、直感的に、思い当るものがあった。
「又八、行ってみい」
その又八に続いて、武蔵も茶店へ駈けもどり、彼女の寝床のあったという穢い一間を覗いてみると、老婆のことばに違うところがない。
「あっ、いけねえ」
又八は、きょろついて、叫んだ。
「帯もない、履物もない。——やッおれの路銀も」
「化粧道具は」

「櫛も、釵も。どこへ突っ奔って行きやがったのだろう。おれを置き去りにしやがって」
たった今、将来の発憤を誓って、涙をこぼした顔に、忌々しさを漲らしていう。
老婆は、土間口から覗いて、独り語のように、
「なんたらことじゃや。あの娘ッ子はの、いうたら、お客さんに悪いかしらんが、ほんまの病気じゃのうて、仮病して、不貞寝していよったのだによ。老婆の眼から見たらようわかるがの」
そんな声には耳もかさない。又八は茶店の横へ出て、峰を蜿る白い道をぼんやり眺めていた。
もう花も黒く散りしいている桃の樹の下に、寝そべっている牝牛が、思い出したように、長々と欠伸啼きをする。
「…………」
「又八」
「…………」
「おい」
「ウム？」
「なにをぼんやりしているのだ。去った朱実が行く先、せめて少しでもよい身の落着きを得るように、二人して祈ってやろう」
「ああ」
と、気のない顔の前に、小さな風の渦がながれていた。黄いろい蝶が一つ、見えない渦の中に弄ばれながら、崖の下へ沈んで行った。
「さっき、おれを欣ばしてくれた言葉。あれは、おぬしのほんとの決心だろうな」

「ほんとだ、ほんとでなくて、どうするものか」
嚙んだままの唇から、慄えを洩らすように、又八は呟いた。
茫と遠くを見ている眸を奪い回すように、武蔵はぐっと彼の手を引っ張って、
「おぬしの行く道は、自然に拓けてきた。もう、朱実の落ちて行った方角がおぬしの道じゃないぞ。おぬしはすぐ、これから足に草鞋をつけて、坂本と大津の間へ降りて行ったおふくろを捜し廻れ。――あのおふくろを貴様は見失ってはならないぞ。さ、直ぐに行け」
と、眼につくそこらの草鞋や脚絆など、彼の旅具を取って、軒端の床几まで持ち出してやる。
さらにまた、
「金はあるか、路銀は。……少ないがこれを持って行ったらどうだ。おぬしが江戸表へ出て志を立てる気なら、おれも一先ず江戸まで共に行こう。また、おぬしのおふくろ殿には、改めておれも心から話したいこともある。おれはこの牛を曳いて、瀬田の唐橋に行っておるから、きっと後から連れ立って来いよ。――いいか、おばばの手を曳いて来いよ」

道聴途説

武蔵は後に残って、黄昏れを待っていた、いや使いの戻りを待つのだった。

午過ぎの小半日を、さて退屈に思う。日は長いし、飴のように体は伸びを欲する。緋桃の下に寝ている牝牛にならって、武蔵も、茶店の隅の床几に横になっていた。

今朝は早かった、昨夜もろくに眠っていない。いつのまにか夢は二つの蝶になっている。一羽はお通だと夢の中で思っている。連理の枝を繞っている。

――ふと眼をさますと、いつのまにか、陽は土間の奥まで映し込んでおり、寝ているうちに、居場所でも変ったかと思ったくらい、この峠茶屋に騒々しい声がしていた。

この下の谷間から石を切り出しているので、そこで働いている石切職人たちが、毎日の例によって八刻というと、ここへ甘い物をたべに来て、一頻り番茶を飲みながら饒舌を娯しむ。

「なにしろ、だらしがねえや」

「吉岡方か」

「あたりめえよ」

「ひどく沽券をおとしたものだなあ。あんなに弟子がいて、一人も刃の立つ野郎はいなかったのかしら」

「拳法先生が偉かったので、余り世間が買いかぶっていたのさ。なんでも偉いやつは初代に限るな。二代となるともうそろそろ生温くなり、三代でたいがい没落、四代目になっても、てめえと墓石のつり合っている奴アめったにねえ」

「おれなんざ、こう見えても、つり合ってるぜ」

「親代々、石切だからよ。おれがいってるのは、吉岡家の話だ。嘘だと思うなら、太閤様の後をみねえ」

それからまた、話はもどり、下り松で果し合いのあった朝、おれはあの近所だから見ていたという石切が現れる。

その石切はまた、自分の目撃談を、もう何十遍も何百回も人中で聞かせているとみえて、おそろしく語ることがうまい。

百何十名の相手を敵にまわし、宮本武蔵という男が、こうやって、こう斬りこんでと、まるで自分が武蔵になった気かなにかで、おそろしく誇張して話している。

隅の床几の上に寝ていた本人は、まだその話の酣な頃には、深く睡っていたので倖せだった。もし眼がさめていたら、噴飯に堪えないどころか、面映くてそこにいられなかったかも知れない。

ところが、それを聞いて甚だ面白くない顔をしている一組が、その前から軒先のべつな床几を占めて聞いていた。

中堂の寺侍三名と、その寺侍たちに、この峠茶屋まで見送られて来て、

（では、ここで――）

と別辞を交わしていた好青年である。若衆小袖を旅扮装に凜々しく括り、前髪の元結も匂やかに、大太刀を背に負い、身の拵え、眼ざしや構え、なにしろ花やかに見うけられる。

石切たちは、その風采に恐れをなして、床几を去り、莚の方に番茶を運んで、無礼のないようにしていたが、下り松の後日譚は、そこへ移ってから、いよいよ調子づいて時々どっと笑ったり、また屢〻武蔵の名が謳われた。

そのうちに、黙って聞いているに堪えない虫気が起ったのであろう、佐々木小次郎は、石切た

ちの方へ向って、
「これ、職人ども」
と、呼びかけた。

二

石切の職人たちは、小次郎のほうを振向いて、何事かと皆、居住いを直した。
風采花やかな若衆武士が、先刻（さっき）から側には中堂の寺侍を二、三名も据え、威風は辺りを払うが如く見うけられていたので、彼らは、
「へい」
と一様に頭を下げた。
「これ、これ。唯今、知ったか振りして、喋舌（しゃべ）っていた男、前へ出い」
小次郎は、鉄扇をもって、彼らの頭（かしら）を麾（さしまね）き、
「その他の者も、ずっとこっちへ寄れ。……なにも恐（こわ）がらんでもよい」
「へ、へい」
「今、聞いておると、其方どもは、口を極めて、宮本武蔵を讃（たた）えておるが、左様な出たらめを申し触らすと、以後承知せぬぞ」
「……は。……へい？」
「なんで武蔵が偉いか。其方どものうちにも、過日の件を目撃した者があるとのことだが、この佐々木小次郎もまた、当日の立会人として、親しくあの試合には双方の実情を審（つぶさ）に検分いたして

大東山人畫

おる。――実はその後、叡山に上り、根本中堂の講堂にては、一山の学生を集めて、その見聞と感想を演舌し、また、諸院の碩学たちの招請に応じても、自分の意見を忌憚なく述べてまいったのだ」

「…………」

「然るに――其方たちが、剣の何物なるかも知らず、ただ形だけの勝敗を見、衆愚のうわさに惑わされて、武蔵如き者を稀世の人物だの、無双の達人だのと申すが、それでは、この小次郎が、叡山の大講堂で演舌した意見が、皆、嘘のように相成ってしまう。――無智な凡下どもの沙汰すること、取るにも足らんが、ここに居合わす中堂の方々にも一応聞いていただく必要があるし、また、汝らのいう誤った見方は、世上を害するものだ。――事の真相と、武蔵の人物をよう聞かせてやるから、耳の穴を掘って聞け」

「……へ。……はい」

「抑々――武蔵とはどんな肚の男か。あの試合を仕かけた彼の目的からそれを洞察すると、あれは武蔵の売名にやった仕事だ。自分の名を売るために洛内第一の吉岡家へ向って、うまく喧嘩を売ったもので、吉岡はその図に乗せられて彼の踏み台になったものとわしは観る」

「……？」

「なぜならば、初代拳法時代のおもかげもなく、京流吉岡が衰えていることは、誰にだってもう分っていたことなのだ。樹なら朽木、人間なら瀕死の病人にひとしい。抛っておいても自滅するものを、押し倒したのが武蔵なのだ。――そんな者を倒す力は誰にでもあるが、それを敢てやらないのは、もう今日の兵法者の仲間では、吉岡の力など眼中にもない情勢にあったからと、もう

一つは拳法先生の遺徳を思い、さむらいの情けで、あの門戸ぐらいは見遁しておいてやろうという気持もあったに相違ない。それを武蔵は、わざと声を大にし、事件を拡大し、都の大路に高札を立て、巷の噂を高め、思うつぼに芝居を打って当てたのだ」

「……？」

「その心情のいやしいこと、駆引の卑屈なこと、挙げていえば限りもないが、清十郎と立会う時でも、伝七郎の時でも、一度として彼奴は約束の時刻を守った例がない。また、下り松の折なども、正面から堂々と闘わずに、奇道奇策を弄している」

「………」

「成程、数の上で見れば、一方は大勢、彼は一人に違いなかった。しかし、そこに彼の狡智と、売名上手が潜んでおる。世の同情は彼の期したとおり、彼の一身に集まった。——けれどあの勝負などは、わしの眼から観ればまるで児戯にひとしい。武蔵は飽くまで小賢しく狡く行動して、いい汐時にさっと逃げてしまった。——しかし、或る程度までは、かなり野蛮で強いことは強い。だが、達人だなどという評判は中らぬも甚だしい。——強いて達人というならば、武蔵は『逃げの達人』だ。逃げ足の迅いことだけは、確かに名人といってもよい」

三

立て板に水を流すような小次郎の弁舌だった。叡山の講堂でも、この弁をふるって演舌したことであろうと思われる。

「——素人考えだと何十人と一人の闘いは、容易ならぬものと思うだろうが、何十人の力は、一

人一人の実力が何十倍となったものでは決してない」
という論法から、小次郎は当日の勝負を、専門的知識にかけて、舌にまかせて論破する。
岡目八目という立場からいえば――武蔵のあれ程な善戦も、いくらでも非難することができた。
次にまたこの小次郎も、武蔵が名目人の一少年までを討ったということを、口を極めて、悪罵した。単なる罵倒にとどまらず、これを人道的に観て――また武士道の上から観て――剣の精神のうえからもゆるし難い人間であると断じつける。
さらに、彼の生い立ちや、郷里でやって来た行状だの――現に今も、彼を仇とねらっている本位田なにがしという老母があるはずだということにまで及んで、
「偽りと思うならば、その本位田の老母に聞いてみるがよい。わしは中堂に泊っている間に、親しくその老母とも会って聞き取ったことなのだ。もう六十にもなろうという純朴な老婆から、讐と狙われているような人物がどうして偉いか。うしろ暗い仇持ちの人間を賞め称え、それが世道人心によい風を及ぼすであろうかどうか。そぞろ寒心に堪えないものがあるのでわしはいうまでだ。――断っておくが、わしは吉岡方の縁者でもなければ、武蔵に意趣のあるわけでもない。ただ自分も剣を愛し、この道に身を研くものであるゆえ、正しい批判をするまでの者じゃ。――わかったか、職人ども」
いい終って、さすがに喉が渇いたか、小次郎は茶碗を取って、がぶりと一口に飲み、
「アア、だいぶ陽が傾いて来ましたなあ」
と、連れのものを顧みる。

中堂の寺侍たちは、
「そろそろ、お立ちにならぬと、三井寺までゆかぬうち、山道で暗くなりましょう」
と注意しながら、自分たちも、痺れのきれかけた床几を離れた。
石切の職人たちは、どうなることかと一言もなく硬ばっていたが、その機を見ると、白洲から解かれたように、われがちに起って谷間へ仕事に降りてゆく——
その谷間はもう紫ばんだ陽かげになり、ひよどりの声がけたたましく谺を呼ぶ。
「では、御機嫌よう」
「また、御上洛の折には」
と寺侍たちも、ここに小次郎の旅先を餞別して、中堂の方へ帰って行った。
小次郎は一人残って、
「ばあさん」
と、奥へ呼び、
「茶代をここへおくぞ。——それから、途中で暗くなった時の用意に、火縄を二、三本貰って行くからの」
老婆は、夕餉の物をかけた土泥竈の前にしゃがみ込んで、焚きつけにかかったまま、
「火縄けい。火縄ならそこの隅っこの壁にいくらでもかけてあるで、要るだけ持って行かっしゃい」
と、いう。
小次郎はずかずか茶店の奥に入って、隅の壁にみえる火縄の束から二、三本引き抜いた。

――と、釘を外れた火縄の束が、ばさっと下の床几に落ちた。何気なく手を伸ばした時、彼は初めて気がついた。その床几の上に横たわっている人間の二本の脚元から――顔の方をずっと見上げて、どきっと、鳩尾に当身を食ったような衝動をうけた。

――武蔵は、手枕の上から、眼を開けて、彼の顔を、まじまじと見ていたのである。

四

弾かれたように小次郎は跳び退いていた。ぱっと、無意識の敏捷さだった。

「……おう？」

と、いったのは武蔵。

白い歯を見せて、にやっと笑いながら、今眼が醒めたように、やおらその後から身を起したのである。

やっと、床几を立ち上がった。そして軒先にいる小次郎の側へ歩いて来た。

「…………」

にこやかな唇元と、心の奥を見透すような眼とを持って、武蔵は立った。小次郎もまた、笑みを持ってそれに応えようとしたが、意思と反対に、顔の筋は妙に硬ばってしまって、笑えなかった。

無意識に跳び退いた自分の敏捷を――必要のないあわて振りと――武蔵の眼が嗤っているように取れたからである。また、自分が、先刻から石切たちに向って演舌していた事々を、武蔵も聞いていたに違いない――と思い、咄嗟にその狼狽も胸を塞いだからであろう。

で――兎に角、小次郎の顔いろと態度は、すぐいつもの傲岸な風の裡へかえしてしまったが、一瞬は、しどろもどろだった。

「……や。武蔵どの。……これにいたのか」

「いつぞやは」

武蔵がいうと、

「おう、いつぞやは、眼ざましいお働き、人間業とも思われなかった。しかも、さしたるお怪我もなかったそうな。……祝着の至りです」

負け惜しみの底に、苦い矛盾を肯定しながら、つい、こう小次郎はいってしまった。そして自分で吐いた言葉を自分で忌々しく思った。

武蔵は、皮肉であった。なぜなのか、この小次郎の風采や態度に面と対うと、彼は皮肉を弄したくなった。わざとのように慇懃に、

「その節は、立会人として、なにかと御配慮を。かつまた、ただ今は、いろいろ拙者に対して苦言を聞かしていただき、あれにて他ながら、有難いと思って聞いていました。――自分から考える世間と、世間が観ている自分の真価とは大きな違いがあるが、滅多にほんとの世間の声は聞かれない。それを其許が、昼寝の夢に聞かせてくれたと思うと、忝い心地がする。――忘れずに憶えておりますぞ」

「………」

忘れずに憶えている――彼の一句に、小次郎は全身が鳥肌になった。これは穏やかな挨拶に似ているが、小次郎の胸に受けて聴けば遠い将来をかけて番えて来た挑戦として当然に響く。

また。
（ここではいわぬが）
という含みも言葉の裡にある。
おたがいが、さむらいだ。虚偽をゆるさないさむらいであり、曇りを捨ておけない剣の修行者である。是非を舌の先で争ってみたところで、水掛論に終るしかあるまいし、それで済むほど小さい問題でもない。尠なくとも、武蔵にとって下り松のあの事は、畢生の大事業であり、道に参進する者の浄行とも堅く信じているのである。そこに一点の不徳、一毫の疚しさも抱いていない。
だが小次郎の眼からそれを観れば、あのような観察が起るし、小次郎の口からいわしめると、今いったような結論になる――とすると、この解決は、どうしても、武蔵が言外に含めたように、
（今はいわぬが、忘れぬぞ）
という、言葉の味をもって、未来を番えておく他にあるまい。
複雑な感情は働いていたにしても、佐々木小次郎もまた、まったく根底のない出たらめを放言したつもりではない。彼は自分の観たところから公正な判断を下したまでだと思っているし、いかに武蔵の実力をあの程度に見ても、その武蔵が自分以上の人間だとは今もなお決して思っていない彼であった。
「……ウム、よろしい。憶えているといった其許の一言、小次郎も慥に覚えておこう。きっと忘れるなよ、武蔵」

「…………」
武蔵は黙ったまま、また微笑してうなずいた。

連理（れんり）の枝（えだ）

一

柴折戸（しおりど）の入口から、城太郎は声張りあげて、
「お通さん、ただ今」
奥へ呶鳴っておいてから、彼は、そこの家を繞（めぐ）っているきれいな流れの側に坐りこみ、ざぶざぶと脛（すね）の泥を洗っていた。
山月庵（さんげつあん）。
茅葺（かやぶ）きの合掌に、木額（もくがく）の白い文字が仰がれる。燕（つばめ）の子が、そこらに白い糞（ふん）をちらし、ピチピチと囀（さえず）りながら、足を洗っている城太郎を見おろしていた。
「オオ、冷てえ。オオ冷てえ」
眉をしかめていながら、彼はいつまでも足を拭こうともせず、足で水を弄（なぶ）っていた。
この水はすぐそこの銀閣寺の苑内から流れてくる清冽（せいれつ）なので、洞庭（どうてい）のそれよりも清く、赤壁（せきへき）の月のそれよりも冷たい。

だが、土は暖かく、彼の腰の下には、花すみれが拉がれていた。城太郎は眼を細めて、こういう日月の下に生を享けている身のほどを、自で楽しんでいるらしく見える。

やがて彼は、濡れた足を草で拭いて、そっと縁側の方へ廻って行った。ここの家は、銀閣寺の別当某の閑宅であったが、ちょうど空いているというので、過ぐる夜の——武蔵と瓜生山で別れたあの翌日から、烏丸家の口添えで、お通のためにしばらく借りうけたものだった。

で——お通は、あれ以来、ずっとここに病を養っていた。

勿論のこと、下り松における決戦の結果は逐一、ここにも伝わっている。

黄母衣組のお使番のように、あの日、城太郎は下り松の戦場と、ここの間を、何十遍となく往復して、手にとる如く、お通の枕元へそれを報告していたからである。

城太郎はまた、彼女の今の体にとっては、薬餌よりもなによりも、武蔵の無事なことを伝えてやるのが、最善な良法であると信じていた。

その証拠には、お通は日増に血色を革め、今では机に倚って坐っていられるくらいにまでなっている。——一度はどうなるかと、城太郎すら心配したほどであった。おそらく、武蔵が下り松で死んでいれば気持だけでも、彼女もあのまま逝ってしまったに違いなかった。

「ああ、お腹が減った。——お通さん、なにしていたんだい」

お通は、彼の元気な顔を、眼に迎えて、

「わたしは朝からただ、こうして坐っていた限り」

「よく飽きないなあ」

「体は動かさないでも、心はさまざまに、遊ばせていますから。——それより城太さんこそ、朝

早くから、どこへ行ったんですか。そこのお重筥の中に、きのう戴いたちまきが入っているからお食べなさい」
「ちまきは後にしよう。お通さんに先に欣ばしてやることがあるから」
「なあに？」
「武蔵様ネ」
「ええ」
「叡山にいるとさ」
「ア……叡山へ」
「きのうも、おとといも、その前も、毎日のように、おいら方々聞いて歩いていたんだよ。――するとね、きょう聞いたのさ。武蔵様は、東塔の無動寺に泊っているって」
「……そう。……ではほんとに御無事でいらっしゃるのだわ」
「そう分ったら、一刻も早くがいい、またどこかへ行っちまうといけないからね。おいらも今、ちまきを食べたら支度するから、お通さんもすぐ支度をおしよ。――直ぐ行こう、これから訪ねて行こう。無動寺へ」

二

じっと、お通のひとみは、あらぬ方へ向いている。庵の廂ごしに見える空へ心を遠くしているのである。
城太郎は、ちまきを食べ、持つ物を身に持つと、再び、

「さ。行こうよ」
と、促(うなが)した。
だが、お通が起つ気色もなく、いつまでも、坐っているので、
「どうしたんだい？」
やや不満と不平をあらわして問い詰めた。
「城太さん、無動寺へ行くのは、止しましょう」
「ヘエ？」
少し、おひゃらかすように、城太郎は不審(いぶかり)を口に尖らして、
「なぜさ」
「なぜでも」
「ちぇッ、女って、これだから嫌になっちまう。飛んでも行きたいくせして、さあ、その人のいる所が分ったとなると、今度はヘンてこに澄まして、止そうのなんのとしぶくるんだもの」
「城太さんのいう通り、飛んでも行きたいほどですけれど」
「だから、飛んで行こうというのに」
「けれど。……けれどね、城太さん。わたしはいつぞや瓜生山で、武蔵様とお目にかかった時、これが今生(こんじょう)の最後だと思って、ありッたけな心の裡(うち)を話してしまいました。武蔵様も、生きては再び会わないと仰っしゃいました」
「だけど、生きているんだから、会いに行ってもいいじゃないか」
「いいえ」

「いけないの？」
「下り松の勝負はついても、まだ武蔵様の心としては、ほんとに勝ったと思っているか、どんな用心をして叡山に身を退いていらっしゃるのかそのお気持は分りません。――それに、私へ仰っしゃったお言葉もあるし、私も、必死で摑んでいたあのお方の袂を離して、もう、今生の恩愛を断ったと覚悟したのですから、たとえ、武蔵様の居所が分っていても、武蔵様のおゆるしがなければ……」
「じゃあ、このまま十年も二十年もお師匠様からなにもいって来なかったらどうする？」
「こうしています」
「坐ったきり、空を眺めて暮しているの」
「ええ」
「変な人だなあ、お通さんという人も」
「わからないでしょ。……だけどわたしには分っているの」
「なにが」
「武蔵様のお心がです。――瓜生山で最後のお別れをする前よりも、あの後になってからの方が、わたしには武蔵様のお心が、ずっと深く分って来たからです。それは、信じるということなのです。以前は、武蔵様を慕ってはいました。生命がけで思っていました。城太さんの前だけれど、ほんとに苦しい恋をつづけて来ました。けれど、武蔵様をほんとに信じていたかといえば、どうだか分りませんでした。……今はもうそうではない。たとえ生きても死んでも、離れていても、お互いの心は、比翼の鳥のように、連理の枝のように、固くむすばれているものと信じてい

ますから、ちっとも淋しくなんかない。……ただ武蔵様が、武蔵様のお心のままに、修行の道へすすんでお出で遊ばすように、祈っているばかりなんです」

黙って、おとなしく聞いていたと思うと、城太郎はいきなり呶鳴るようにいった。

「嘘いってらあ。――女って、嘘ばかりいってるんだ。――いいよ、じゃあもうきっとお師匠様に会いたいといわないね！　これから先はいくらベソを掻いたって、おいらは知らないぜ」

この数日の努力を、無にされたように、城太郎は腹を立てた。そして晩まで口をきかなかった。

宵に入ると間もなくであった。庵の外に松明の赤い光が映し、そこをほとほとと打叩くものがあった。

三

烏丸家の侍は、一通の手紙を城太郎の手に授けて、

「これは、お通どのが、まだお館にいられるものと考えて、武蔵どのが、使いに持たせてよこされたもの。――一応大納言様のお耳に入れると、すぐお通の許に届けてつかわせとのことに、急いで持ってまいったのでおざる。――併せて大納言様よりも体を愛しめとの御意、お伝え申しあげまする」

すぐ、使いは帰って行く。

城太郎はそれを手に、

「アア、お師匠様の字だ。もし、下り松で死んでいたらお師匠様ももうこの手紙は書けなかった

んだなあ。……お通どのへ、と書いてあらあ。……だが、城太郎どのへとは書いてない」
お通は、奥から立って来て、
「城太郎さん。今、お館の人が持って来たのは、武蔵様からの手紙ではありませんか」
「そうだよ」
城太郎は意地を歪げて、手紙を後ろにかくしながら、
「でも、お通さんには、用はないだろ」
「おみせ」
「いやだい」
「意地のわるい――そんなことをいわないで」
焦れて、泣きそうになると、城太郎は手紙を彼女へ突きつけながら、
「それ御覧な。そんなに、見たがるくせにして。それを、おいらが会いに行こうといえば、痩せ我慢して、嫌に気取ってみたりして」
お通にはもう、そんな言葉を聞いている耳はない。
短檠の下に繰りひろげている手紙と白い指先は、燈芯の火とともにおののいている。
心なしか、こよいは、灯も鮮やかに、翳りなく点って、なんとなく胸も花やぐようなと、灯占をたてていたが――

花田橋では
お許に待たせたが、
こたびは

わしが待つであろう
瀬田の湖畔に
牛をつないで

と、武蔵からの便り。まざまざと、その人の筆、墨のにおい。墨の光りまでが、虹いろに見え、彼女のまつ毛には、きらきらと、珠の涙が咲いていた。

――夢かと思う。

あまりの欣しさに、頭も茫として。――お通は、なんだか、この世のことでないような心地がしてならなかった。

安禄山の叛乱に、兵車の軌の下に楊貴妃を失った漢皇が、のち貴妃を恋うのあまり、道士に命じて、魂魄をたずねさせ、道士はそれを、上は碧落の極み、下は黄泉にいたるまでさがしもとめ、遂に、海上の蓬莱宮中にその花貌雪膚の仙子を見出して、帝の意をつたえたというあの長恨歌の中にある、貴妃の驚愕と喜びの章が――そのまま自分のことでもあるように、お通は茫然として、短い手紙を、見も飽かず、繰りかえしていた。

「……待つ身となると、待つ間の時の長さ。そうだ、少しでも早くお目にかかって」

こう、城太郎へ向って、語りかけているつもりではあったのだが、もう彼女の歓びは彼女を顚倒させている。――相手へいったつもりでも、それは独り語の独り合点をしていたのである。

手早く身支度をし、庵の持主や、銀閣寺の僧や、世話になった人々へは、一筆ずつ礼の辞を置手紙にのこし、もう、足拵えまでして、先に戸外へ出た。

そして、家の中にぶっ坐って、膨れ顔している城太郎に向い、

「城太さん、おまえはもう、先刻お支度をしていたからそれでいいんでしょ。……さ、早く出ておいで。後を閉めて行かなければならないから」

「知らない、おいらは。——どこへ行くのさ」

てこでも動く顔つきではない。城太郎は、すっかりお臍を歪げてしまった。

四

「城太さん、怒ったの」

「怒ったさ！　当り前だい」

「どうして」

「勝手だから、お通さんは。——おいらが折角捜し当てて来て、行こうという時には、行かないといっておきながら」

「でも、その理由は、よく話したでしょう。ところが今、武蔵様の方からお便りがあったんですもの」

「その手紙だって、自分だけで見て、おいらには、読ませてくれないじゃないか」

「アアほんとに、それは悪かった。御免よ、城太さん」

「もういいよ、もう見たくなんかない」

「そう、ぷんぷん怒らないで、この手紙を見ておくれ。ね、なんという珍しいことでしょう。あの武蔵様が、わたしに手紙を下すったことなんか、これが初めてです。また待っているから来いなんて、優しいことを仰っしゃってくれたのも、これが初めてです。——それからこんな歓ばし

いことは、私にとっても、生れて初めてではありませんか。……だから城太さん、機嫌を直して、私を瀬田まで連れて行ってください。……ね、後生だから、そんなに膨れていないで」
「…………」
「それとも、城太さんは、武蔵様にもうお目にかかりたくないの」
「…………」
城太郎は黙って例の木刀を横に差し、先刻作っておいた風呂敷づつみを斜めに背負い、ぽんと、庵の外へ飛び出して、まごまごしているお通へ剣突くを食わせた。
「行くなら行くで、早くお出でよっ！　愚図愚図してると、戸外から閉めてしまうぜ」
「まあ、怖い人」
それから二人は、志賀山越えの道を、夜にかけ歩き出したが、先に怒った手前がある、道は寂しいが、城太郎は口をきかない。
すたすたと、先を歩いて行きながら、そこらの木の葉を拗って、木の葉笛を吹いてみたり、俗歌を唄ってみたり、石を蹴ってみたり、なにか遣場のない気持を抱いているらしいので、お通がまた、
「城太さん、わたし、いい物持っていたのに、忘れていたのよ。あげましょうか」
「……なにさ」
「笹飴」
「……ふん」
「おととい、烏丸様から、いろいろお菓子を持たせてよこして下すったでしょう。それがまだ残

っているのだけれど」
「………」
くれとも、要らないともいわずに、城太郎が黙々と歩いて行くので、お通は、苦しい喘ぎを我慢して、側へ追いつき、
「城太さん、食べない？　わたしも食べよう」
それからやっと、城太郎の機嫌がすこし直った。
志賀山越えを登りつめた時は、もう北斗は白く薄れて、雲は夜明けのたたずまいであった。
「草臥れたろ、お通さん」
「ええ、登りばかりだったから」
「もうこれからは、下り道だから、楽なものだよ。……ああ、湖水が見える」
「あれが鳰の湖ね。……瀬田はどの辺？」
「あっち」
と指さして、
「待っているといっても、お師匠様は、こんなに早く行っているかしら」
「でも、まだ瀬田まで行くには、半日以上もかかるでしょう」
「そうだ、ここから見ると、すぐそこのようだけれど」
「少し休まない？」
「休もうか」
すっかり気持も解けたとみえ、城太郎はいそいそ休み場所をさがし歩いていたが、

「お通さん、お通さん、この樹の下だと朝露がなくっていいよ。ここへお出でよ、ここへ腰かけよう」

　と、手招きした。

　二本の巨きな合歓の樹の下だった。

五

　倚り合っている二本の喬木の下に腰をおろして、

「なんの樹だろ？」

　城太郎がいう。

　お通も、眸を上げながら、

「合歓の樹です」

　と教える。そして、

「わたしや武蔵様が、まだ幼い時分によく遊んだことのある、七宝寺というお寺の庭にも、この樹がありましたっけ。六月ごろになると、糸のような淡紅色の花が咲いてね、夕月が出るころになると、あの葉がみんな重なり合って眠ってしまう」

「だから、ねむの木というのかしら」

「でも、文字で書くと、眠という字は書きません、合い歓ぶと書いて、合歓と訓むんですの」

「どうしてだろ？」

「どうしてでしょうね。きっと誰かが拵えた当字でしょう。……だけど、この二本の樹の姿を見

ると、そんな名がなくても、いかにも歓び合っているといったような姿じゃありませんか」
「樹なんか、歓ぶも悲しむも、あるもんか」
「いいえ城太さん、樹にも心があるんです。よく御覧、この山の樹々のうちにも、よく見ると、独り楽しんでいる樹もあるし、独り傷ましそうに嘆いている樹もある。また城太さんのように、歌を謡っているのもあれば、大勢して、世を怒っている樹の群れもあるでしょう。石でさえ、聞く人が聞けば物をいっているという位ですもの、なんで樹にもこの世の生活がないといえましょう」
「そういわれてみると、そんな風にも見えてくるなあ。――するとこの合歓の木なんか、どう思っているんだろう」
「わたしから見ると羨ましい樹に見えます」
「どうして」
「長恨歌を知ってるでしょう。白楽天という人の作った詩」
「ああ」
「あの長恨歌の終りのほうに――天に在っては願わくは比翼の鳥と作らん、地に在っては願わくは連理の枝と為らん――という何があるでしょ。あの連理の枝というのは、こんな樹のことをいうのじゃないかしらと、さっきから思っているんですの」
「連理って？　……何」
「枝と枝、幹と幹、根と根、二つの物でありながら、一つの樹のように仲よく立って、天地の中に、春や秋を楽しんでいる樹のこと」
「なんだあ……自分と武蔵様のことをいってるんじゃないか」

「いけない、城太さん」
「勝手におしよ」
「——夜が明けてきた。なんという美しい今朝（けさ）の雲だろう」
「鳥がお喋舌（しゃべり）をし始めたね。ここを下りたら、おいら達も、朝飯を食べようぜ」
「城太さんも歌わない」
「なんの歌」
「白楽天といったので思い出したんです。いつか、城太さんが、烏丸様の御家来に教わっていた詩があったわね。覚えている？　……」
「長干行（ちょうかんこう）か」
「ええ、あれ。あの詩を、聞かせて下さいな。書（ほん）を読むような節で結構ですから」
「……妾（ショウ）ガ髪始メテ額（ヒタイ）ヲ覆（タワム）ウ
　花ヲ折ッテ門前ニ戯レ
　郎（ロウ）ハ竹馬ニ騎シテ来リ
　牀（ショウ）ヲ遶（メグ）ッテ青梅（セイバイ）ヲ弄（ロウ）ス……」
　城太郎はすぐ口誦（くちず）さんで、
「この詩かい」
「そう。もっと続けて」
「……同（トモ）ニ長干（チョウカン）ノ里ニ居リ
　両小嫌猜（ケンサイ）ナシ

羞顔未ダ嘗テ開カズ
頭ヲ低レテ暗壁ニ向イ
千喚一トシテ廻ラズ
十五、始メテ眉ヲ展ベ
願ワクハ塵ト灰ヲ同ニセン
常ニ存ス抱柱ノ信
豈上ランヤ望夫台
十六、君遠クヘ行ク……」

城太郎はふいに起って、じっと聞き入っていたお通を促した。
「詩よりも、おいらは、お腹が減っちゃったい。早く、大津へいって朝飯を食べようよ」

送春譜

一

まだ天地は濡れている。
家ごとの炊煙は、曙けたばかりの町の上へ、戦のように立ちのぼっていた。大津の宿駅は、湖

北から石山までぼかしている朝がすみと、その熾んな煙の下に見えてきた。
夜来、飽々するほど山道を歩いて来て——いや牛の歩みにまかせて来て、黎明と共に、人間のいる里に接した武蔵は、牛の背から思わず、
「オオ」
と、眼を、拭って眺めた。
——同じ時刻に、お通と城太郎のふたりも、志賀山越えの道から、この大津の屋根を眺め、湖畔へ向って、希望の足を躍らせているはず——
峠の茶屋から峰を繞って降りてきた武蔵は、今、三井寺の裏山から八詠楼のある尾蔵寺坂にかかって来たが、お通はどこの道から降りて来るのやら。
湖畔の瀬田で落ち合うまでもなく、ひょいと、そこらで打つかっても、そう偶然でないほど、時刻も道も、ほとんど同じように辿って来たのであったが、武蔵の視野の前には未だ彼女の姿は見えなかった。
——といって、武蔵は決して、失望もしないし、会いそうなものだとも思っていなかった。
烏丸家へやった茶店の女房の返事によれば、お通は烏丸家にいないということであり、手紙は、烏丸家からお通の養生している先へこよいのうちに届けておくという消息であった。
その返事から考えると、自分の手紙が、お通の手にとどいたのは昨夜のうちとしても、あの体であるし、女の事ゆえ、身支度もあろう。——まず早くても、そこを立つのは今朝あたり、約束の場所へ姿を見せるのが、今日の夕刻頃になるにちがいない。
そう武蔵は、胸づもりに、想像していた。

それに今はまた、これぞといって、先を急ぐ何事も心にはないし——牛の歩みも遅いと思わなかった。

牝牛の巨きな体は、山の夜露に濡れていた。朝の草の色を見ると、牛は頻りに草を食った。けれど武蔵は、それも牛の意のままにまかせていた。

——すると、民家と向い合っている伽藍の辻に、なんとか桜と、名所名にでもありそうな桜の老木があって、その下の塚に、歌を刻んだ碑が見える。

誰の和歌か。——思い出そうともせず、武蔵は、そこを二、三町行き過ぎてからふと思い出して、

「そうだ……太平記の中で」

と、つぶやいた。

太平記は、彼の少年の頃の愛読書の一つだったので、或る箇所は、暗誦しているくらいだった。

で——今見かけたその和歌から、少年の頃の記憶が甦って来たのであろう。緩々たる牛の背で武蔵はなにげなく、その和歌の載っていた太平記の一章を、口のうちでそら読みした。

——志賀寺の上人は、手に一尋の杖をたずさえ、眉に八字の霜を垂れ、湖水の波に水想観を念じたもうに、折りふし、京極の御息女所、志賀の花園の帰るさを、上人ちらと見そめ給い、妄想起りて、多年の行徳も潰え、火宅の執念に一切を喪い給う……

「少し忘れたな」

武蔵はそう思いながらまた、うろ覚えのまま、

——柴の庵に立ちかえり、本尊仏にむかい奉るといえども、観念の床には妄想の化の立そい、称名のおん声だに、煩悩の息とのみ聞えたもう。暮山の雲をながむれば、君が花釵かと心も憂く、閑窓の月にうそぶけば、玉顔われに笑み給うかと迷うも浅まし。——今生の妄念ついに離れずば、往生の障りともなりぬべければ、御息女所に会い奉り、わが思いのふかき一端を申して、心やすく臨終もせばやと、上人杖をつき、御所へ参りて、鞠の坪の下に、一日一夜ぞ立ちたりける……

「おオいっ、旅の衆、牛に乗ってゆくおさむれえ」

誰か、その時、後ろから呼ぶ者があった。

いつか、牛は町の中にはいっていたのである。

二

問屋場の人足だった。

駈けて来て、牝牛の鼻づらを撫で、牛の頭越しに、武蔵を見あげて、

「おさむれえさん、無動寺から来なすったな」

といい中てる。

「ほ、よう知っているなあ」

「この斑牛は、いつぞや荷を乗せて、山の無動寺へ行った商人に、牛方なしで貸した牛だ。おさむれえさん、いくらか牛賃をおくんなせえ」

「成程、おまえが飼主か」

「おれの持牛じゃねえが、問屋場の牛小屋にいる牛だあな。無賃じゃいかねえぜ」
「よしよし、飼料をつかわそう。――だが、その賃さえ払えば、この牝牛は、どこまで曳いて参ってもよろしいのか」
「金さえ払えば、どこまで乗って行こうと、かまわねえさ。三百里先へ行こうと、道中の宿場問屋に渡しておいてさえくれれば、下りのお客が荷物を積んで、いつか大津の問屋小屋へ帰えって来ることになっているんだから」
「では、江戸表まで、いかほど払ったらよいのか」
「じゃあ、通り道だ、問屋場へ寄って、お名前を書いて行っておくんなさい」
なにかの支度にも好都合、武蔵はいわるるままにそこへ立ち寄る。
問屋場は打出ケ浜の渡口場に近かった。船着きから上がる者、乗る者、ここは旅人の屯なので、草鞋をひさぐ店もあるし、旅の垢を落したり髪を整える備えもある。武蔵はゆっくり朝飯をすまし、まだ、早過ぎるとは思ったが、間もなく、牛の背の人となって、その問屋場から再び先へ立って行く。
瀬田はもう程近い。
湖畔のうららかな風光を、牛の足にまかせて行っても、大丈夫、午までにはそこへ着く。
(まだ、来ていまい)
武蔵はそう思い、そして、今度お通に会うことには、なにかしら心に安んじるものを抱いていた。
それは、彼女に対する彼の、安心であった。下り松の死地を乗り越える前までは、武蔵は、女

性というものに、堅い構えを持っていた。お通に対しても同様な危惧を抱いていた。
けれど、あの時の、お通の澄みきった態度、聡明な意思の処理を見てから、武蔵の彼女に対する気持は、ただの愛以上、深いものに改まっていた。
一般の女性を危惧するような眼で、お通をも危惧して来た自分の小心さが、彼女に対して済まなかったように今では思う。
そういう男の気持――安んじて女性にゆるしている気持――それは同じように、お通も、男性に対する信頼として、あれから後、胸のふかくに抱いていた。
武蔵はもう、何もかも、彼女にゆるしきっていた。今日会ったら、どんな事でも、彼女の願いなら容れてやろう。
剣を、歪めない限りの事は。修行の道から堕落しない限りの事は。
今までは、それが恐かった。女の黒髪には、剣も鈍り、道も喪ってしまうものと、それを惧れていたのである。しかし、お通のような覚悟のいい、聞きわけのよい、理性と情熱の処理を誤らない女性ならば、決して、男性の道に情痴な茨を横たえはしない。なんの足手纒いになるわけはない。――ただ溺ることを誡めて、自分さえ、乱れなければ。
（そうだ、江戸表まで一緒に行って、お通には、もっと女性として学ぶべき修養の道に就かせ、自分は城太郎を連れて、さらに高い修行の道にのぼろう。そして、或る時節が来たら――）
そんな空想に耽ってゆく武蔵の顔に、湖水の波紋の光が、幸福の笑みを投げかけるように、揺揺と映えていた。

三

二十三間の小橋と、九十六間の大橋をつないでいる中之島には、古い柳の木があった。瀬田の唐橋を、青柳橋とも呼ぶのは、その柳がよく旅人の目印にされるからであろう。
「あっ、来たよ」
と、その中之島の茶店から駈け出して、小橋の欄干につかまりながら城太郎は、一方には指をさし、一方の手では茶店の床几をさしまねいて、
「お師匠様だっ。……お通さんお通さん、お師匠様が牛に乗って来たよ」
往来の旅人も、この少年が、なにをそんなに狂喜するのかと、眼をそばだてて不審るほど、彼の足は雀躍りしていた。
「おお、ほんに！」
転ぶように駈けて来て、お通もそこに顔を並べる――
二人して、
「お師匠さまあっ」
「武蔵さま」
打ち振る笠、打ち振る手。
にこりとした武蔵の顔もはや間近であった。
牛はやがて、柳の木に繋がれる。――川を隔てて遠く見た姿には、狂喜の手を振ったり名を叫んだりしていたのに、その人の側に立つと、お通はもうなにもいい得ないのである。にこと眼で

笑ったほかは、すべて城太郎が一人で引きうけて喋舌っていた。

「お師匠さま、もう傷は癒ったの。おいら、お師匠様が牛に乗って来たから、あの時の傷がまだ痛んで歩けないので乗って来たのかと思ったよ。……え？　どうしてこんなに早く来ていたかって。……そりゃあ、お通さんに聞いたほうが早いや。お通さんと来たらお師匠様、ほんとに勝手なんだからね。お師匠さまから手紙が来たら、この通り一遍に元気になってしまうんだもの」

「ふム、そうか、ふム……」

と武蔵も一々にこやかに頷いていたが、他に客もある茶店先、お通のことをいわれると、見合いに来た聟殿のように甚だてれる。

裏に、藤棚で掩われた小座敷がある。そこへ三名は寛いだ。といっても相変らず、お通はもじもじしてばかりいるし、武蔵も無口に固くなってしまう。ありのままに歓び、歓びのままに喋舌り、この景地と生命を楽しんでいるものは独り城太郎と、そして、藤の花に噪いでいる虻と蜂ばかりだった。

「オヤいけない、石山寺の上があんなに暗くなりました。一雨来ますよ。もっと奥へおはいりなすって下さい」

茶店の亭主が、あわてて葭簀を巻き、雨戸を横に囲い始める。なる程、江の水はいつのまにか鉛色に見え、そよ風は雨気を囁きはじめて、藤の花の紫は、将に死なんとする楊貴妃の袂のように、遽に咽ぶような薫いを散らして顫いている。

——サアッと、その弱々しい花から真ッ先に日がけられたように石山颪が小雨をぶっつけてくる。

「アッ、雷さまだぞ。ことしの初雷だ。お通さん。濡れちまうよ。お師匠さまも奥へおはいりなさいよっ、座敷のほうへさ。アアいい気持だ。この雨は、ちょうどいいや！　ちょうどいいや」
なにが丁度いいのやら、深い意味でいうわけでは勿論ないが、そう彼にいい囃されては、武蔵もよけいにはいり難い。お通も顔を紅らめて、雨に砕ける藤の花と共に、縁の端に立って濡れていた。

「オオ、ひでえ！」
菰を被って、白い雨の中を、傘みたいに飛んで来た男がある。
四宮明神の楼門の下へ馳け込むなり、ほっと、髪のしずくを撫でて、
「まるで、夕立だ」
と、迅い雲あしへ呟いた。
見るまに四明ケ岳も湖水も伊吹も乳色になって、ただ滌々と雨の音しか耳になかった。——と思ううちに眸を断たれたように雷光を感じると、どこか近くに雷が落ちたらしかった。
「……あっ」
雷ぎらいの又八は、耳の穴をふさいで、楼門の雷神の下に縮こまっていた。
雲が断れると、嘘のように、陽が射してきた。雨がやみ、往来も元に還って、どこかで三味線の音さえ聞えだした。すると、婀娜なすがたの女が、向う側から往来を越えて来て、用ありげに、又八へ笑いかけた。

四

見かけない女である。
「あなた、又八様と仰っしゃるのでしょう」
そういうのだ。
又八が不審って用事を問うと、今、家へ上がっていらっしゃるお客様が、あなたのお友達だそうで、二階からお姿を見かけ、ぜひ引っ張って来いというお吩付けです、という。
いわれて見ると、成程、この神社の界隈には、娼家らしい構えが幾軒も見える。
「……御用がおありならば、直ぐお帰りになってもよござんすから」
と、使いに来た女は、又八のためらいなどは無視して導いて行く。そして近くの娼家へ引っ張って来ると、他の女たちも出て、足を洗ってくれるやら、濡れた着物を脱がすやら下へも措かない。
いったい、おれの友達というお客は誰かと訊いてみても、二階へ行ってみれば分ると、座興にするつもりで明かさない。
何分、雨に逢って、着物もずぶ濡れだから、一時娼家の物を借り着するが、実は今日瀬田の唐橋で約束の者が待っているはず。——で直ぐ帰るのだから、その間に衣類を乾かし、引き留めないでもらいたい。
「頼むぞ、いいか」
何度も念を押すと、

「はい、はい、よい機に、きっとお帰し申しますよ」
女たちは、安請合いにいって、又八を梯子段の下から押し上げる。
（二階の客とは一体誰だろうか）
又八は頻りと考えてみたが思い当る者がない。けれどこういうところに場馴れない又八ではないし、またこういう雰囲気の中に入ると、彼の頭のつかい方や身ごなしは、ふしぎに冴えて精彩を発揮してくる。
「やあ、犬神先生」
いきなり先方の者からいった。人違いだったかと又八は閾ぎわで足を止めたが、座敷の中に坐っているその客を見ると、満更知らない人間ではなかった。
「や？……おぬしは」
「お忘れか、佐々木小次郎を」
「犬神先生といわれたのは？」
「貴公のことさ」
「おれは本位田又八だが」
「そんなことは心得ているが、かつて六条松原の闇で、群犬に取り巻かれ、野良犬どもの中に坐って、百面相をしてござったのを思い出したから、お犬の神様と尊称申し上げ、犬神先生と呼んだのでござる」
「よしてくれ、冗談じゃあねえ。あの時は、ひどい目に遭わせやがったぜ」
「その代りに、きょうはよい目に遭わせてやろうと思い、迎えにやったわけだが、よく来てくれ

た。まあ、坐るがいい。――おい女輩、この人に杯を酌せ、杯を」
「瀬田で、待っている者があるから、すぐお暇する。……おっと、おい、そう酌してもだめだぜ、きょうは飲めない」
「瀬田で、誰が待っているのか」
「宮本という、おれの幼少からの友達で――」
と、いいかけるのを引っ奪くって、小次郎は早口に、
「なに、武蔵が。……ウウムそうか。峠の茶屋で約束したのか」
「よく知っているな」
「貴公の生い立ち、武蔵の経歴、みな詳細に聞いている。其許の母親――お杉どのといわれたな――。叡山の中堂でお目にかかったぞ。そしてつぶさにあの老母から、今日までの苦心を聞かされた」
「え。おふくろと会ったって？　……実あ、きのうから俺も捜し歩いているのだが」
「えらい老母だ、見上げたもの。中堂の僧も皆、同情していた。わしも屹度、助太刀しようと、力づけて別れた」
杯を洗って、
「さ、又八。旧怨を雪いで酌み交わそう。武蔵ぐらいな相手、恐れるな。広言ではないが、佐々木小次郎がついている」
頬を紅にして杯を出した。
だが又八は、手を出さない。

五

見栄っ張りな小次郎も、酔うと自でに、常の容態や端麗も構えから忘れてしまう。
「又八、なぜ飲まぬ」
「もうお暇だ」
「いかん！」
左の手が走ると、ぐっと又八の腕くびを摑み、
「でも、武蔵と」
「ばかをいえ。貴様一人で、武蔵と名乗り合ったら、立ちどころに返り討ちだぞ」
「そんな争いはもうお互いに捨てたんだ。俺は、あの親友に縋って、これから江戸へ行って真面目に身を立てるつもりだ」
「なに、武蔵に縋ってだと？　――」
「世間は武蔵を悪くいうが、それは俺のおふくろが悪くいい触らすからだ。おふくろは武蔵を思い違いしている。つくづく今度はそれが分った。同時に俺自身も悟った。おれはあの善友に習んで、遅れ走せだがこれから志を立てる所存だ」
「アハッハハハ。わははは」
小次郎は手を打って笑い、
「お人好し！　おいっ、おふくろ殿もいっていたが、なるほど、貴様は世にも稀なお人好しだ。武蔵に悉く騙されたな」

「まあ、黙れ、いうな。第一おふくろを裏切って仇に加担する不孝者がどこにあろう。他人の佐々木小次郎でさえ、あの老母の言葉には義憤を感じ、将来助太刀をしようとまで誓っているのに」

「なんといわれても、おれは瀬田へ行く。放してくれ。——おい女ッ、着物が乾いたろう、おれの着物を出してくれ」

「出すなっ」

小次郎は、酔った眼を吊り上げて、

「出すときかないぞ。——これ又八、貴様武蔵とそうなるならば、一応、おふくろに会って、よく得心させてゆけ。おそらくあの老母は、そんな屈辱に、合点はすまい」

「そのおふくろを捜しても見当らないので、一先ず俺は武蔵と一緒に、江戸表へ下ろうと思う。おれが一かどの人間になりさえすれば、すべての宿怨は自でに解けてしまう」

「その口吻は、武蔵のいった口吻に違いない。あしたになったら、わしも共に捜して遣わすから、とに角、おふくろの意見を訊いた上でゆくがよい。そうして今夜は飲もう、嫌でもあろうが、小次郎に交際え」

もちろん、ここは娼家、女達も皆、そういう小次郎に加勢して、又八の着物など返してくれるはずもない。

日が暮れる、遂に、夜も更ける。

しらふでは小次郎に頭も上がらないが、酔えば俄然又八は、とらになり得るのだ。見ていやが

れという気で彼は宵から飲み始めた。酒の勢いを駆って、小次郎を手古摺らし、さんざん鬱憤をはらして潰れてしまった。
寝たのが夜明け、眼をさましたのは既に午過ぎ。
小次郎はまだべつの部屋で熟睡しているという。昨日の初雷できょうの陽ざしは一倍澄んでいる。又八は、まだ耳に新しい武蔵の言葉を思い泛かべ、ゆうべの酒を吐き出したくなった。そして瀬田の橋まで来て見た。
赤く濁った瀬田川の水に、石山寺の残んの花もこれ限りのように流され、藤茶屋の藤のふさも砕け、山吹も散っていた。
「牛を繋いで――といったが」
その牛は、小橋の袂にも、中之島にも見えなかった。
諸所を捜したあげく、中之島の茶店で聞くと、その牛に乗ったおさむらい様ならば、きのう店の閉まる頃までここに待ってござったが、夜に入ったので旅籠へ移り、今朝またここへ来て、しばらく人待顔に佇んでおられたが、やがて手紙を認めて、後からわしを尋ねて来た者があったら渡してくれいと軒先の青柳の枝に、書いた物を結びつけて先にお立ちになりました、という。
見ると、なるほど、白い蛾の止まっているように、柳の枝の結び文。
「済まなかった。――では一足先に立って行ったか」
又八は、蛾の翼を解いた。

女滝男滝

一

初夏に向ってゆく旅だ。木曾路の新緑を浴びて、中山道を牛の足にまかせて行く。
(待っているぞ、後から追いついて来るがいい)
柳の枝に結び文を残して行った武蔵を慕って、又八は道を急いだが、草津まで行っても行き会わない、彦根、鳥居本まで来ても見当らない。
「ハテ、先に来過ぎてしまったのかな?」
摺鉢峠では、峠の上で、半日往来を眺めていたが、その日も無駄。
牛に乗った武士と訊いても、牛馬に騎って行く旅人は多い。それに又八は、武蔵一人と思っていたが、武蔵には、お通、城太郎の道連れがあった。
美濃路へ来ても知れないので、彼は、小次郎の言を思い出して、
「やっぱり俺は、お人好しかな?」
迷い出すと限りがない。
彼自身の惑いが、道を戻ったり、曲ってみたりするために、当然会えるはずの者に、よけいに行き会えないことになってしまう。

だが遂に、中津川の宿場端れで、彼は、先へ行く武蔵の姿を見つけた。

幾日目だろう。それは実に又八としては珍しいほどな熱意で追いついて来た目標だった。しかし彼は、武蔵の後ろ姿を見るとともに顔色を変えて武蔵を疑った。

牛の背に乗って行くのは、武蔵ではなくて、七宝寺のお通ではないか。――そのお通を乗せて牛の手綱を持って行くのが武蔵ではないか。

側にくッついてゆく城太郎の如きは、又八の眼中にはない、問題でもない。又八をして猜疑に顫かしめたものは、お通と武蔵との、睦じそうな姿だった。

今日までのどんな場合の憎悪の嫉視よりも、このせつなほど又八は、友の姿を悪魔に見たことはない。

「……アアやっぱり、思えばおれは、お人好しだったに違えねえ。あいつに唆されて関ケ原へ出かけた時から今日に至るまで。――だが俺も、こう踏みつけられちゃあ、何日までお人好しじゃいねえぞ。野郎、今にどうするか、覚えていろよ」

「暑い暑い。こんなに汗をしぼる山道って初めてだ。ここはどこ？　お師匠様」

「木曾で一番の難所、馬籠峠へかかり出したのだ」

「きのうも二つ峠を越したっけねえ」

「御坂と十曲と」

「おらあ、峠に飽々しちゃった。はやく江戸の賑やかな所へ出たいなあ。ねえお通さん」

お通は、牛の背から、

「いいえ城太さん、わたしは何日までも、こんな人のいない所を歩くのが好き」
「ちぇっ、自分は、歩かないもんだからね。――お師匠様、あそこに滝が見えるよ、滝が」
「オオ、少し休もうか。城太郎、そこらへ牛を繋いで置け」
滝の音を心あてに、細道を分け入ってゆくと、滝つぼの崖の上には、人もいない滝見小屋があり、辺りには、霧に濡れた草の花が一面に咲きみだれていた。
「……武蔵様」
お通は、立札の文字を見て、その眼を武蔵に移してほほ笑んだ。女男の滝とそれは読まれた。
大小二すじの滝が、一つ渓流へ落ちている。やさしいほうが女滝とすぐわかる。歩けば休もう休もうというくせに、城太郎は少しも落着いてはいない。滝つぼの狂瀾や、岩間にぶつかってゆく奔流の相を見ると、その水と自分のけじめが分らなくなったように、躍り跳ねて、崖の下へ駈け下りて行った。
「お通さあん、魚がいるよ」
答えないでいると、
「石で捕れるよ。石をぶつけると、腹を出して浮くぜ」
やがてまた、しばらく経つと、
「わアあい」
と、飛んでもない方角に谺が聞え、なかなか戻って来そうもない。

二

山の端から陽が映(さ)した。霧に濡れている草の花の上に、無数の小さい虹が描き出された。
滝見小屋の陰に寄り添いながら二人は滝の音につつまれていた。
「どこまで行ってしまったんでしょう」
「城太郎か」
「ええ。ほんとに、しようのない子」
「そうでもないぞ、おれの子供時分にくらべると、まだまだ」
「あなたは、べつ者でしたもの」
「反対に又八はおとなしかったなあ。……又八といえば、とうとう彼奴(あいつ)、来なかったが、あいつこそ、どうしたのか」
「でも、わたしは、ほっとしました。もし又八さんが来たら、隠れてしまおうと思っていました」
「隠れる必要はない。話してわからない人間はないはずだ」
「本位田家の母子(おやこ)は、すこし御気性がちがいます」
「お通さん……。おまえ、もいちど考えなおさないか」
「どういうふうに」
「思い直して、本位田家の人になる気はないかと訊くのさ」
お通はびくっと色を顔にうごかして、きっぱりいった。
「ありません！」
そして、蘭の花のように紅(あか)らんだ瞼(まぶた)から、みるまに涙がこぼれそうになった。

武蔵は、よしないことをいったと心のうちで悔いた。今更、分りきったことなのだ。時が経って冷めたり迷ったりする女性と同視されたように思って、お通は心外なのであろう。指で顔をおおって、微かに肩を顫わせた。

（……貴方のものです！）

白い襟あしは、武蔵の目に、そう訴えているようだった。辺りの若楓の樹は、浅いみどりでこの場所を人目から隠している。

とうとうと地軸を震わせている滝の音は、そのまま自分の血の音のように武蔵は思われた。滝つぼの狂瀾と奔流を見て、遽に駈け出して行った城太郎の本能と似たようなものが武蔵の体にも、もっと烈しい性能を帯びて潜んでいる。

それにここ幾日の間、宿屋の燈火の下に、らんらんたる太陽の下に、お通の肉体を種々な光で彼は見ていた。或る時は、芙蓉の花のように汗ばんだ皮膚を、或る夜は屏風をへだてていても漂ってくる黒髪のにおいを。――年久しく、磐石の下に虐がれていた愛慾の芽はそうして、遽に彼の胸に育てられていた。草いきれのように鬱陶しいものが、むらむらと、眸を曇らして来るのであった。

「…………」

ふいと、武蔵はそこを離れた。いや逃げるようにであった。

お通を置き放して、彼方の道もない草むらへはいって行った。なにか、突然くるしくなったのである。口から炎でも吐くように、膨ちきれそうな血を、体から少し捨ててでもしまいたいような心地だった。城太郎のように、暴れ出したかった。そして、まだ冬草の枯れたのが、背高く生

い茂っている静かな陽溜りを見出すと、
「ああ」
と、そこへ身を投げて坐った。
お通は、どうしたのかと疑って、すぐ追いかけて来るなり、彼の膝に縋りついた。堅くなって、沈黙していた武蔵の顔が恐く見えた。なにか怖ろしく不機嫌に見えておろおろした。
「どうしたんですか。武蔵様……武蔵様っ……。なにか、お気に障ったのなら、堪忍してください、堪忍して」
「…………」
「武蔵様っ、もしッ……」
彼が堅くなっていればいるほど――また、恐い顔をしていればいるほど、お通はその胸へ、必死にしがみついて、揺れ騒ぐ花のように、花の気づかない香に彼を咽せ返らせた。
「――おいっ！」
武蔵はいきなりそういった。猛然と、彼の巨きな腕はお通を抱きしめて枯草の中へ仆れた。お通は白い喉首を伸ばして、声もあげ得ずに、彼の胸の中でもがいた。

三

槇の樹に、尾の長い縞鳥が、まだ少し雪のある、伊那山脈の空をながめていた。
山つつじが真っ紅に燃えている。――からんとして空は青い。枯草の下には、深山すみれが匂っていた。

猿が啼く、栗鼠がちらと跳ぶ、原始の地上だった。そこの一叢の枯草は深く折れていた。悲鳴をあげたのではないが、悲鳴に近い驚きをあげて、お通は、
「いけないッ、いけませんッ、武蔵様ッ」
栗の棘みたいに自衛して、堅く身を縮めた。
「そ、そんなことっ……。貴方ともあろうお人が」
と、悲しげに、彼女が、嗚咽したので——武蔵はハッとした。焔の身に、ぞッと総毛立つような理智の冷たい声を浴びて、
「ななななぜだっ？　何故だっ？」
呻きに似た彼の声こそ今にも泣き出しそうだった。誰も知らない秘密にせよ、これは男性には耐え難い侮辱と感じるのだ。遣り場のないその憤りと恥かしさを、彼は自分へ怒るように喚いたのだった。
——だが、手を放した途端に、お通はもうそこにいなかった。小さい匂い袋が一つ、紐が切れて落ちている。彼の眼は茫然と、それを見て泣きかけていた。浅ましい自己のすがたを冷たく客観することができた。ただ分らないのはお通の心なのだ。お通の眸、お通の唇、お通のことば、お通の全姿——あの髪の毛までが、絶えず自分の情熱を誘いかけて、きょうに至ったのではないか。
自分で、男性の胸に火を放けておきながら、火がつくと、びっくりして逃げてしまうのと同じである。故意ではないにしても、結果においては、愛する者を欺き、陥れ、苦しめ、恥かしめたことになるではないか。
「……ア、ア」

武蔵は、顔を俯つ伏せて、草へ泣き伏した。

きょうまでの切瑳琢磨も、一敗地にまみれて、すべての精進苦行も、ここに空しく崩れてしまったかと思うと彼は悲しい。童が掌の中の木の実を失ったように悲しいのだ。

自分に唾したいような忌々しさから、さも忌々しげな忍び泣きを洩らして大地へ伏していた。日輪へ対して顔を上げ得ないようにいつまでもそうしていた。

（おれは悪くない！）

自分の行為に対して、彼が心の中で頻りにそう呶鳴ってみるもののそれで心は澄んで来なかった。

（分らないっ、分らない）

彼には、処女心の清純というものを、この時、可憐いと思うような余裕はなかった。たとえ白珠のように顫きやすく、感じやすく、無碍なる人の手を恐れるものにしろ、それを女性の一生を通じて、ある期間だけにある、最高な心情の美であるとか、尊いものであるとかで、そんな愛しみを持って、今、この時、思い遣ることはできなかった。

しばらくの間――そうして俯ッ伏したまま、土のにおいを嗅いでいるうちに、彼はやや落着いた。むくりと起ち上がった。もう先刻の充血した眼ではない。その顔はむしろ蒼白かった。

――落ちているお通の匂い袋を、足の下に踏みにじって、じっと、山の声を聞くかのように俯向いていたかと思うと、

「そうだ」

真っ直ぐに、滝のほうへ向って歩いて行った。あの下り松の剣の中へ、身を投げこんで行く時

のように、濃い眉毛をがっきりと寄せて。
……鋭い小鳥の声が、劈くように翔け去ってゆく。風のせいか滝の轟きが急に耳へついて、一朶の雲の裡に、陽の光も淡れて来たかのように思える。
――お通は、武蔵のいたその場所から、わずか二十歩ほどしか逃げていなかった。白樺の幹にひたと身をつけて、彼女は先刻からじいっとこっちを見ていたのである。自分が武蔵をそんなに苦しめたことが明らかに分ると、いまいちど、武蔵が自分の側に来てほしいと思った。さもなければ、自分から走り寄って詫びようかとも思って迷う様子であったが、しかし、脅えた小鳥の心臓のように、まだ強い戦慄が止まないで、体は他人のもののようだった。

四

泣いていないお通の眼には、泣いている以上の、恐怖だの、迷いだの、悲しみだのが、掻き曇っていた。
この人こそと、信頼していた武蔵は、彼女が、自分の胸の中で、自分勝手に描いていた、幻想の男性ではなかった。
幻想の心臓の中に、忽然、赤裸の男性を見出した彼女は、死ぬかと思うほどな愕きに打たれた。悲しくて悲しくてならなかった。
けれど、その恐怖と慟哭の中に、彼女はまだ、ふしぎな矛盾が残っていることを気づかない。
もし先刻の烈しい圧迫が、武蔵でなくて、他の男性であったとしたら、彼女の逃げ走った足は、決して、二十歩や三十歩ではなかったろう。

なぜ、二十歩ほどで足を止めて、後に心を惹かれているのか。——それのみでなく、やや動悸が落着いてくるに従って、彼女の心の中には醜い人間の本能の相を、他の男性のそれと、武蔵のそれとは、べつな物として、考えようとさえしていた。

(……怒ったんですか。……怒らないでくださいね。あなたが嫌だったわけではありません。……怒らないで)

暴風に吹き飛ばされたような独りぼっちを感じながら、彼女の胸の中の言葉は、ひたすら詫びているのだった。——武蔵自身が、自責したり苦悶したりしているほどに、お通は、彼のなした烈しい行動を、醜く思ってはいなかった。他の男性のように浅ましくは思えないのである。

むしろ、ふと、

(なぜ、わたしは？　……)

自分の盲目的な恐怖が、淋しくすら考えられ、その刹那の火花のような血の狂いが、後になるほどなにか慕わしくさえ思い出された。

(……おや？　どこへ？　……。武蔵様は)

いつのまにか、そこに見えない武蔵の影に、お通はすぐ、自分が捨てられたのではないかと思った。

(きっと、怒って。……そうだ、怒って。……あ、どうしよう？)

悄々と、彼女は歩いて、元の滝見小屋の所まで戻って来た。

そこにも、武蔵の姿は、見当らなかった。ただ真っ白なしぶきが、滝壺から霧となって山風に吹きあげられ、満山の樹々を揺すぶって、絶え間のない滝のとどろきが、ぐわうと、耳を塞ぐば

かり冷ややかに血を打って来るだけであった。

するとどこか高い所から、

「あっ、たいへんだ。お師匠様が滝へ身を投げたぞっ。――お通さアん！」

城太郎の声だった。

渓流を渡って、向う側の山の鼻に城太郎は立っていた。そこから男滝の滝つぼをのぞいていたものらしく、突然、こう時ならぬ大声を発して、お通へ急変を告げたのだった。

滝の響きで、よく聞き取れないらしかったが、城太郎の方から見ていると、お通も何を見たか、ハッと急に血相を変え、深い滝道の――霧と山苔で滑りそうな断崖を――岩にしがみつきながら下へ降りてゆく様子である。

城太郎は猿みたいに、向う山の崖先から、スルスルと藤蔓につかまって、ぶら下がっていた。

五

お通も見た。

城太郎も見つけた。

――滝つぼの中にである。

吼え哮ぶ飛沫や、真っ白な霧のために、初めは、石か人間かと怪しまれたが、二つの手の指を、胸の前にがっきと組み合せ、五丈余りの滝の下に、じっと、頸を垂れている裸形の者は、石ではない、武蔵であった。

お通は、此方の絶壁の道の中途から――城太郎は、向う側の淵の岸から、それと見ると、われ

を忘れて、

「あッ、お師匠様っ、お師匠様アっ」

「武蔵さまっ――」

声かぎりに、呼び交わしたが、その二人の叫びに挟まれても、武蔵の耳には、もう、とうとうと吼える滝の音のほかは、なにものの声も入るはずはなかった。

蒼ぐろい滝つぼの水は、武蔵の乳のあたりまであった。百千の銀龍と化って、水は彼の顔や肩に咬みついてくる。千万の水魔の眼と化って、狂う渦は彼の脚を死の淵へ引きずり込もうとした。

「…………」

ハッと、ただ一つでも、弱い呼吸をつくか、心に弛みが起れば、途端にその踵は水苔の底を滑って永久に帰れない冥途の激流へ送り込まれてしまうかも知れないのである。

しかも、頭上から落ちて来る滝の圧力は、何千貫という重さを負わされているような感じだった。肺も心臓も、大馬籠の山々の下敷きになったように苦しかった。

――それでもまだ武蔵は、たった今、そこに振り捨てて来たお通の面影を、熱い血の中から忘れ去ることができなかった。

志賀寺の上人でさえ、同じ血を持っていた。法然の弟子親鸞も、同じ煩みを持っていた。古来、事を成す人間ほど、生きる力の強い人間ほど、同時に、この生れながら負って来る苦しみも強くそして大きい。

弱冠十七歳の村童に、槍一本かつがせて、関ケ原の風雲へ駆け向かわせたのも、この血の熱で

ある。沢庵の鉄槌に感じ、法情の慈悲に泣いて、翻然と人生に薄眼を開いて志を起したのも、この血の力である。孤剣、柳生城の伝統を攀じのぼって、石舟斎に迫ろうとしたあの気概もこの血――また、下り松に行って眼にあまる敵の白刃林を駈けちらしたのもこの血があればこそであった。

だが、その烈しいものが、お通という許された対象を通して、人間の本能に燃えつくと、彼が本来の野性は、ここ数年の間に、やっと少しばかり養い得たところの、修行や理性の力では、到底、制しきれないほど強いものとなって、狂い出し、乱れ出したのである。

この敵に向っては、さしもの剣も、何の用もなさないのだ。およそ、対象は、外にあって、形もあるが、この敵は、自己の中にあって、形がない。

武蔵は、狼狽したのだ。明らかに彼は、自分の心にあった大きな陥没を知って、うろたえたのである。

そして、なくても困る、あっても苦しむ、すべての人間が等しく持っている血を――殊に異常な情熱にそれを昂め得る血を――どう処理したらいいのか。まったく、武蔵自身でも、分らなくなって、物狂わしく、滝つぼの中に、身を投じたのに相違ない。――城太郎が刹那に見た眼も、お通へ向って、お師匠様が身を投げたと呶鳴った言葉も、そう誤りではなかったに違いない。

「――お師匠様アっ……お師匠様アっ」

と、その城太郎は、泣き声を出して、なおまだ叫びつづけていた。

彼の眼には、武蔵の生きんとする姿が、どうしても死なんとする姿にしか映らないのであろう。

「――死ンじゃ嫌だっ、お師匠様っ、死なないで下さいっ」
自分もともに滝の痛みを怺えているように、両手の指を固く組み合せ、滝の轟きと泣き声とを争っていたが、ふと向う側の絶壁を眺めると、その途中につかまってともに悲しんでいたお通が、いつの間にかどこにもその姿が見えなくなっていた。

六

「あらっ、変だっ。……お通さんも？」
咄嗟、城太郎は、真っ白な泡つぶの流れてゆく水を見て、悲しげにうろうろした。
彼の解釈では――武蔵がなんのゆえか、滝つぼに入って、死ぬまでは上がって来そうもない体なので、お通さんも、同じ流れの末に、身を投げたのではないかと疑ったのである。
――だがその悲しみの逸まったことは彼も直ぐ気づいた。なぜならば、滝つぼの中の武蔵は、依然と五丈余の瀑布の下に打ちたたかれていたが、その肩から満身へ漲って来た力――粗鉱のような若い生命の力は――決して、鞠の坪に佇んだ志賀寺の上人のように、死を願って立っている姿ではない。かえって、大自然の苔の下から、心の垢を洗って、もっと堅実に生き直ろう、刎ね起きようとしている姿であることが、城太郎にも、なんとなく解って来たのだった。
その証拠には、いつもの武蔵の声が、やがて滝つぼの中から聞えてきた。固より何を叫んでいるのかは分らなかった。経文のようでもあるし、自分を罵り怒っているようにも見えた。
峰の端から映して来る夕陽が、滝つぼの一端にこぼれると、武蔵のもり上がっている肩の肉から、無数の小さい虹が、八方へ昇った。中でも大きい一条の虹は、滝よりも高く噴いて、空を貫

いた。
「お通さアん！」
城太郎は鮎のように飛んだ。岩から岩を伝わって、激流を渡り越え、此方の絶壁へ移って来た。
（そうだ、なにも、お通さんが安心してる位なら、おいらの心配することはない。お師匠様の気持なら、心の奥まで、お通さんが知ってる筈だもの）
絶壁を攀じて、彼は、先刻の滝見小屋から少し離れた所へのぼって来た。牛の手綱が解けたとみえ、それをズルズル引摺りながら、牛はそこらの草を食べていた。
ふと滝見小屋の方を眺めると、そこの廂の下に、お通の後帯だけがちらと見えた。――なにをしているのだろう？　と疑いながら、跫音を忍ばせて城太郎が近づいて行ってみると、お通は、誰見る者もないと思ってか、小屋の端に脱ぎ捨ててあった、武蔵の着物と大小を両手で胸に抱きしめ、よよと、声を洩らして泣いていた。
「……？」
ここにもまた、心の解らない人間がいるぞといわないばかりに、城太郎は佇んだまま、唇を指へ当ててぼんやりしていた。お通が、胸へひしと抱えている物が物であるから、城太郎も変な顔をしてしまった。それに、独り泣いている様子も常とはちがい、凡ならぬことが童心にも感じられたのであろう。声をかけずに、そっとまた、牛の遊んでいる方へ、抜き足して戻って行った。
牛は、白い草の花の中に寝そべって、夕陽に眼やにを泛かべていた。
「……いったい、こんなことしていて、何日になったら、江戸へ行けるんだろうなあ？」
城太郎も仕方なしに、牛のそばへ寝ころんだ。

空の巻

普賢

一

木曾路へ這入ると、随所にまだ雪が見られる。

峠の凹みから、薙刀なりに走っている白い閃きは、駒ケ岳の雪のヒダであり、仄紅い木々の芽を透かして彼方に見える白い斑のものは、御岳の肌だった。

だがもう畑や往来には、浅い緑がこぼれている。季節は今、なんでも育つ盛りなのだ。踏んづけても踏んづけても、若い草は伸びずにいない。

まして城太郎の胃ぶくろと来ては、いよいよ、育つ権利を主張する。この頃殊に、髪の毛が伸びるように、背の寸法までが伸びそうに見えて、将来の大人ぶりも思いやられる風がある。

もの心つくと、世間の波へ抛り出されて、拾われた手は又、流転の人であった。勢い、旅から旅の苦労を舐め、どうしてもおませになるべく環境が迎えてくるので仕方がないが、近頃、時々

あらわす生意気さ加減には、お通もよく泣かされて、
（なんだってこんな子に、こう馴つかれてしまったのかしら）
と、ため息ついて、睨んでやることもある。
しかし効き目のあろうわけはない。城太郎は知り抜いているのだ。そんな怖い顔したって、心のなかでは、おいらが可愛くてならないくせに――と。
そういう横着と、今の季節と、飽く事を知らない胃ぶくろが、行く先々、食べ物とさえ見れば、
「よう、よう、お通さんてば。あれ買っておくれよ」
と、彼の足を、往来へ釘づけにしてしまう。
先程、通りこえた須原の宿には、木曾将軍の四天王、今井兼平の砦の址があるところから「兼平せんべい」を軒並み売っていたため、とうとうそこでは、お通が根負けして、
「これだけですよ」
念を押して、買って与えたが、半里と歩かない間に、それもぼりぼり喰べ終ってしまい、ややともすると、なにか物欲しそうな顔をする。
寝覚では、宿場茶屋の端をかりて、早目な昼めしを喰べたので、事なく済んだが、やがて一峠越えて、上松のあたりへかかると、
「お通さん、お通さん。干柿が下がっているぜ、干柿喰べたくないかい？」
そろそろ謎をかけ始める。
牛の背に乗って、牛の顔のように、お通が聞えない振りをしているので、空しく、干柿は見過

ごしてしまったが、程なく木曽第一の殷賑な地、信濃福島の町中へさしかかると、折から陽も八刻頃だし、腹も減り頃なので、

「休もうよ、そこらで——」

と、また始め出した。

「ね、ね」

こう鼻で捏ね出すと、駄々に粘りが出るばかりで、歩けばこそ、テコでも動く顔つきではない。

「よう、ようっ。黄粉餅たべようよう。……嫌かい？」

こうなっては一体、ねだっているのか、お通を脅迫しているのか、分らない。彼女の乗っている牛の手綱は、城太郎の手に曳かれているため、彼の歩き出さぬうちは、どう焦々思っても、黄粉餅屋の軒先を、通り越える事ができないからである。

「いい加減におしなさい」

遂に、お通も意地になってしまう。城太郎と共謀して、往来の地面を嘗めまわしている牝牛の背から、眼にかどを立てて、

「ようござんす。そんなに私を困らすなら、先へ歩いていらっしゃる武蔵様へ、いいつけて上げるから——」

そして彼女は、牛の背から降りそうな真似をしたが、城太郎は笑って見ている。止める真似もしないのである。

二

城太郎は、意地わるく、
「どうするの……？」
彼女が、先へ行く武蔵へ、いいつけに行かない事は、百も承知の顔つきでいう。
牛の背から降りてしまったので、お通は、仕方なしに、
「さ、はやくお喰べなさい」
と、黄粉餅屋の陰へ這入って行く。
城太郎は威勢よく、
「餅屋のおばさん、二盆おくれ――」
呶鳴っておいてから、軒先の馬繋ぎに牛をつなぐ。
「わたしは喰べませんよ」
「どうしてさ」
「そんなに喰べてばかりいると、人間が莫迦になりますから」
「じゃあ、お通さんのと、二盆喰べてしまうぜ」
「――まあ、呆れた子」
なんといわれようが、喰べているうちは、耳のないような城太郎の姿である。
がらにもない大きな木剣が、屈みこむと肋骨に触って、欣ぼうとする官能の邪魔になる気がするのであろう、中途から、その木剣をぐるりと背中へ廻して、一度、むしゃむしゃやりながら往

来へ眼を遊ばせた。
「はやく喰べてしまいませんか。よそ見などしていないで」
「……おや？」
城太郎は、盆に残っている一つを、あわてて口へ抛りこむと、なにを見たか、往来へ駈け出して、小手をかざした。
「もういいんですか」
鳥目をおいて、お通も後から出て来ようとすると、城太郎は彼女を床几へ押しもどして、
「待ちなよ」
「まだなにかねだるつもり？」
「今、彼方へ、又八が行ったからさ」
「嘘」
お通は信じない。
「――こんな所を、あの人が通るわけがないではありませんか」
「ないかあるか知らないけれども、たった今、彼方へ行ったもの。編笠を被っていたぜ。そして、お通さんは気がつかなかったかい。おいらとお通さんをじっと見てたよ」
「……ほんとに」
「嘘なら呼んで来ようか」
――飛んでもない事である。又八という名を聞いただけでも、彼女は又、元の病人へ帰ったように、顔の血がさっと退いている程ではないか。

「いいよ、いいよ、心配しないでも、もし何かして来たら、先へ歩いている武蔵様のとこへ駈けて行って、呼んで来るから」

その又八を怖れて、いつまでもここにいれば、自分たちより何町か先へ歩いている武蔵とも、自然かけ離れてしまう事になろう。

お通は、再び牛の背に腰かけた。まだ、病後の体は決してほんとではない。ふと、今のような事を聞いても、動悸がなかなかしずまらない。

「ね？　お通さん。おいらには、ふしぎでならないよ」

ふいに城太郎はこういって、彼女の褪せた唇を、思い遣りなく、牛の前から振り仰いだ。

「――何がふしぎかっていえばさ、馬籠峠の滝つぼの上までは、お師匠さんも口をきき、お通さんも口をきき、仲よく三人づれで来たのに、あれからこっち、ちっとも口をきかないじゃないか」

お通が答えないので、彼は又、

「どうしてなのさ、え？　お通さん。――道も離れて歩くし、晩もちがった部屋に寝るし……喧嘩でもしたのかい？」

三

――又よけいな事を訊く。

喰べ物のことをいわなくなったと思うと、今度はませた口で休みなくお喋舌りなのだ。それもよいが、お通と武蔵との仲を、とやかくと穿ってみたり、探ってみたり、からかってみたりす

る。

(子供のくせに)

と、お通は、胸に傷い所であるだけに、真面目に答える気にはなれない。

こうして牛の背をかりて旅の出来るほどには、体のぐあいも癒くなっては来たが、彼女の病以上の問題は、決してまだ解決はしていない。

あの馬籠峠の——女滝と男滝の滝津瀬には、まだあの時の、自分の泣き声と、武蔵の怒った声が、どうどうと、淙々と咽び合って、そのまま二人の喰い違った気持を百年も千年も、この心が解けあわぬうちは、怨みに残していることであろう。

思うたびに、今でもそれが彼女の耳へ甦ってくる。

(なぜ私は?)

と彼女はあの折に、武蔵が自分へ迫って求めた烈しいそして率直な欲望を、自分も又、満身の力で拒んでしまった事を、幾たびも、

(なぜか?　なぜか?)

と心の底で悔いてみたり、分ろうとする努力をしてみたり、頭から離れぬものとなっているが、果ては、

(男というものは、誰でもあんな事を、女に強いるものなのかしら?)

と、悲しくなり、浅ましくなり、年久しく独り抱き秘めていた恋の聖泉は、この旅先の女滝男滝の山を越えてから、その滝水のように狂おしく烈しく胸を揺りつづけるものと変っていた。

そして、もっと彼女自身、分らなくなっている事は、武蔵の強い抱擁を交わして逃げたくせ

に、その後の旅でも、こうして武蔵の姿を絶えず見失うまいとしながら、後に尾いて行く矛盾であった。

勿論、あれからというものは、変に気まずくなって、お互いに口も滅多にきかないし、道中も並んでは歩かない。

しかし先へ行く武蔵の足も、後から来る牛の歩みに合せて、初めの約束の如く、江戸表まで共に出ようといった言葉を破棄してしまう考えはないらしく、城太郎のため時々道草をして遅くなっても、何処かで必ず待っていてくれた。

五町七辻の福島を出端れると、興禅寺の曲り角から登りになって、彼方に関所の柵が見える。関ケ原の戦から後は、牢人調べや女の通行がやかましいと聞いていたが、烏丸家からもらって来た手形がものをいって、ここも難なく通り、両側の関所茶屋から眺められながら牛に揺られて来ると、

「ふげんて、なんだろう。――お通さん、ふげんて何のこったい？」

と、城太郎がいきなり訊ねだした。

「今ネ。あそこの茶屋に休んでいた坊さんだの旅の者が、お通さんを指して、そういったんだよ。――牛に乗ったふげんみたいじゃのう……ってね」

「普賢菩薩のことでしょう」

「普賢菩薩のことか。じゃあおいらは、文珠様だ。普賢菩薩と文珠菩薩は、どこでも並んでいるからね」

「食いしん坊の文珠様ですか」

「泣き虫の普賢様となら、ちょうど似合うだろう」
「又！」
とお通が、嫌がって顔を紅らめると、
「文珠と普賢菩薩は、どうしてあんなに並んでるんだろう。男と女でもないくせに」
と、奇問を発する。
お寺で育ったお通であるから、それに就いてなら、説明はできるが、城太郎の執拗な反復を惧れて、ただ手短に、
「文珠は智慧を現し、普賢は行願を現している仏様です」
といった時、いつのまにか何処からか、蠅のように牛の尻尾へついて来た一人の男が、
「おいっ」
と、尖った声で呼び止めた。
さっき福島で、城太郎がちらと見かけたという、本位田又八であった。

四

そこらで待ちうけていたものに違いない。
――卑劣な男。
お通は彼の顔を見るや、すぐこみあげてくる侮蔑の念を、どうしようもない。
「……………」
又八は又八で、彼女のすがたを見ると、愛憎交〻、血を駆け巡って、自ら眉間に感情の錐が

立ち、まったく常識というものを欠いてしまう。
　まして彼は、武蔵とお通が、京都を出てから連れ立っていた姿を見ている。その後、口もきかずよそよそしく歩いているのも、畢竟、昼間だけ人目を憚っているに過ぎないものと見ていた。それだけに人目のない二人だけの時にはどんなに——と瞋恚の炎に燃えて邪推もされる。
「降りろ」
　命じるように、彼は、牛の背に俯向いているお通へやがていった。
「…………」
　お通には答える言葉もない。疾うに心からない人なのだ。いやもう数年も前に、先の方から許嫁という未来の日を破棄したあげく、先頃、京都の清水寺の谷間では、刃を持って自分を追い、危うく殺されかけた程、怖ろしい目に会わせられた人間。
　答えるならば、
(今になって何の用が——)
　という以外、挨拶がないではないかと、黙っている眼のうちに、いよいよ、彼に対する憎悪と蔑みが漲ってくる。
「おいっ、降りないか!」
　又八は、二度さけんだ。
　この息子も、あのお杉婆という母親も、村にいた頃からの口ぐせを未だに持って、もう許嫁でもなんでもない彼女へ、権ぺいに吩咐けがましくいうことが、今のお通には、謂なく思われて、憤っと反感をあおられてならない。

「なんでございますか。わたくしには降りる用はございませんが」
「なに」
又八は、側へ来て、その袂をつかみ、
「なんでもいいから降りろっ。お前にはなくても、俺には用があるのだ」
声で脅すように、往来の見得もなく、そう呶鳴った。
――と、それまでは、黙って見ていた城太郎が、牛の手綱を捨てて不意に、
「嫌だっていうもの、無理じゃないか！」
又八に負けない声を出していっただけならよいが、手を出して、相手の胸いたを突いたから納まらない。
「おやっ――此奴」
又八は、踏み踏いた足を、草履の緒へかけ直すと、尻込みする城太郎へ、物々しい肩を昂げて、
「なんだか、見たような鼻くそだと思ったら、てめえは北野の酒屋にいた小僧ッ子だな」
「大きなお世話だ。自分こそあの頃は、よもぎの寮のお甲っていうおかみさんに、いつも叱られて、小っちゃくなっていたくせに」
これは又八に取って何をいわれるより痛かったに違いない。ましてお通をそこにおいてはである。
「このチビ」
摑みかかると、城太郎はすばやく、牛の鼻先から向う側へ逃げ廻って、

「おいらが鼻くそなら、自分なんか何だい。鼻の下の長い洟たれだろう」

もう勘弁ならぬという顔を示して、又八が近づくと、城太郎は牛を楯にして、二、三度、お通の下をぐるぐると逃げ廻ったが、とうとう襟がみをつかまれてしまい、

「さあ、もう一遍いってみろ」

「いうともッ」

長い木剣を半分まで引き抜いた時、彼の体は、並木の外の藪へ、猫みたいに抛り飛ばされていた。

五

藪の下は、畦の小川であった。城太郎は泥鰌のようになって、元の並木へ這いあがった。

「……おやッ？」

往来を見廻すと、牛は、お通を背に乗せたまま、重い体を揺さ振って、彼方へ駈出しているではないか。

その手綱を引っ張りながら、手綱の一端をムチに打ち振り、共に砂を上げて、駈けてゆく影は、又八に相違ない。

「ちっ、畜生」

彼の血は、それを見るや、一時に頭へのぼって、自分の責任感と小さい力のみを奮い起し、急を他へ告げて、はやく策をとる事を忘れてしまった。

動いているのであろうが、白い雲の帯は、動いているとも目には見えない。
雲表にある駒ケ岳は、その広い裾の一つの波ともいえる丘に足を休めている一人の旅人へ、何か無言のことばをかけているように、鮮やかに仰がれた。
（はて。おれは何を考えていたろう？）
武蔵はふと、われに返って、わが身を見直した。
眼は山を見ながら、心はそこになく、お通の事ばかりがつき纏う。
彼には解けないのだ。
いくら考えてみても、処女ごころの真の相がわからない。
やがては、腹が立ってしまうのだった。なぜ彼女へ率直に迫ったことがいけないか。その火を自分の胸から呼び出したのは彼女ではないか。自分は、自分の情熱の相をそのまま彼女に見せた。すると彼女の手は、案に相違して自分を刎ね退け、自分を見下げ果てたもののように、身を躱してしまった。
あの後の慚愧、恥ずかしさ、遣り場もない苦い男の気持。それを滝つぼに投げこんで、心の垢を洗い上げたつもりであったが、日が経つに従い、又どうにもならない迷妄がわいてくる。幾度か、自分の愚を嘲って、
（女など、振り切って、なぜ先へ行ってしまわぬか！）
武蔵は、自己に命じてみたが、それはただ、おろかな自分に、言い訳の虚飾をつけてみるに過ぎない。
江戸表に出て、貴女は好きな道を習え、自分も志す所へ邁進して——と、暗に未来の誓いを与

えて、こうして京都から立って来たについては、十分自分にも、責任がある。途中で振り捨てては行かれるものではないと思う。

(――どうなるのだ、こうして二人は。おれの剣は!)

山を仰いで、彼は唇を噛んでいた。余りにも小さい自分が恥じられてくる。そうして、駒ヶ岳と対い合っていることさえ苦しくなってくる。

「まだ来ない」

耐りかねて、ぬっと立った。

それは、もう疾うに、後から見えて来なければならない筈の、お通と城太郎へいった呟きである。

今夜は藪原で泊るといってあるのに、宮腰の宿場もまだ遙かてまえなのに、すでに陽は暮れかけているではないか。

ここの丘から見ていると、十町も先の森まで、一眸に街道は見渡されるが、それらしい人影はいつまでも見出せない。

「はてな? ……。関所でなにか暇どっているのだろうか」

捨てて行こうかとすら惑いながら、その影が、うしろに見えなくなれば、武蔵はすぐ心配になって、一歩も先へは出られなかった。

そこの低い丘から彼は駈け降りた。この地方に多い放し飼いの野馬が、彼の影に愕いたもののように、薄陽の原を八方へ逃げて飛ぶ。

「もしもし、お侍さま。あなたは牛へ乗った女子衆の、お連れ様じゃございませんか」

彼が、街道へ出るとすぐ、往来の一人が、そういいながら側へ寄って来た。
「えっ、その者に、なにか間違いでもござったか」
先のことばを聞かないうちに、虫の知らせか、武蔵は早口に問い返した。

木曾冠者

一

さっき関所茶屋から程遠からぬ場所で、本位田又八が、お通の牛に鞭打って、彼女ぐるみ、何処かへ攫って行ったという事は、目撃していた旅人の口から伝わって、もうこの街道筋では、隠れもない噂ばなしにのぼっている。
丘にいたため、それを知らずにいたのはかえって武蔵一人であった。
その武蔵は今、倉皇と、元来た道の方へ駈け戻って行ったが、すでに事件が伝わってから半刻ほども経た後の事である。——もし彼女の身に何等かの危急が襲ったとすれば、間に合うかどうか。
「亭主、亭主」
関所の柵は、六刻で閉まる。それと一緒に、床几をたたんでいた茶店のおやじは、後ろに立って、こう喘ぎ声でよぶ人影に、

「なにかお忘れ物でも？」
と、ふりかえった。
「いや、半刻ほど前に、ここを通った女子と少年を探しておるのだが」
「ああ、牛に乗った普賢様のようなお女中でございましたな」
「それだ。その二人を、牢人体の男が、無体に連れ去ったというが、その行先を知るまいか」
「見ていたわけでは御座いませぬが、往来の噂では、この店の首塚のある所から横道へ曲って、野婦之池の方へ、どんどん駈けて行ったと申しますが」
その指さす薄暮の中へ、武蔵の影はもう宙を飛んで淡れて行く。
途々、聞きあつめた噂を綜合してみても、なんのために、何者が、彼女を拉して行ったのか、見当がつかない。
その下手人が又八であるなどとは、彼には想像もできなかった。いずれこの道中で後から追いついて来るか、江戸表で落合うかする事にはなっているが、いつぞや叡山の無動寺から峰越えして大津へかかる途中の峠茶屋で五年越しの誤解を解き、お互いが幼友達の昔に返って、
（きょうまでの事は水に流して）
と手を握り、
（貴様も真面目になって、希望を持て）
と武蔵が励ませば、又八も目に涙すらたたえて、
（勉強する。きっと真人間になって遣り直すから、おれを弟とも思って、これからは導いてくれ）

と、あれほど欣んでいった又八。

その又八が？　――などとどうして疑われようか。

疑えば、戦後の各地に、職を求めながら職にも就けず、結局、浮浪の徒とよばれている牢人の中のよからぬ者か、或は、世の中の推移に関わらず世間の抜け目ばかり窺っているゴマの灰とか、人買とかいう、道中荒らしの鼠賊か。さもなければ、剽悍なるこの地方の野武士か。

武蔵としては、そんなふうにしか下手人を考えられなかったが、それとて闇をつかむようなもので、野婦之池の方角というだけを目あてに急いでみたが、陽が暮れると、冴え切った星空に反して、地上の暗さは、一尺先の足元も覚つかない。

第一、野婦之池とか聞いたが、その池らしい所へもなかなか出て来なかった。そして田も畑も森も、ゆるい傾斜に乗って、道も少しずつ登り気味なのを考えると、すでに駒ケ岳の裾野を踏んでいるらしいが――と武蔵は立ち迷い、

「道を間違えたな？」

と、思った。

行く手を見失ったように――そうして広い闇を見まわしていると、駒ケ岳の巨大な壁を負って、一叢の防風林に囲まれた農家から、なにか外で焚いている明りか、竈の火か、ぼうと赤い光が木立ちの垣に映して見えた。

近づいて、そこの地内を覗いて見ると、武蔵にも見覚えのある斑の牝牛が――ただしお通のすがたはどこにも見えないが――その牛だけは健在に、明りの映している百姓家の厨の外に繋がれて、無事に啼いているではないか。

二

「……お？　あの斑牛だが」
ほっとして武蔵は胸をなで下ろした。
此家に、お通の乗っていた牛が繋がれているからには、お通の身も、共にここへ連れ込まれている事はもう疑う余地もあるまい。
だが。
この防風林の中の百姓家はいったい何者の住居か。——不覚に踏み込んで、再度、お通を隠されるような事になってはならないと、同時に、武蔵は戒心する。
で、しばらくの間、影を密めて、中の様子を窺っていると、
「阿っ母、いいかげんにもう止めんかい。眼がわるい眼が悪いといいながら、そんな暗れえとこでいつまで、仕事してるだ」
薪や籾殻の散らかっている隅の暗がりから、途方もない大声でいう者がある。
次の気配に耳を澄ましていると赤々と火の影の揺れているのは、厨の次の炉部屋で、その部屋か、次の破れ障子の閉まっている辺りで、微かに、糸をつむぐ糸車の音がする。
しかし、すぐその音が止んだのは、阿っ母と今呼んだ怖ろしく威張った息子のいうことを聞いて、すぐ仕事を片づけているものと思われた。
隅の小屋で、なにか働いていた息子は、やがてそこを閉めながら又、
「今、足を洗うからすぐ飯が喰えるようにしといてくれえ、いいかあ阿っ母」

草履を持って、厨のそばを流れている溝際の石に腰かけ、二、三度足をざぶざぶやっていると、その肩へ、斑の牝牛がのっそりした顔をつき出した。

息子は牝牛の鼻づらを撫でながら、いっこう返辞もない母屋の人へ向って又大きな声でいう。

「阿っ母、後で手があいたら、ちょっとここへ来て見さっしゃい。おらあ今日、飛んでもねえ拾い物をして来たぜよ。――何だと思う？　分るめえが、牛だよ、しかもすばらしい牝牛だ。畑にも使えるし、乳も搾れる」

その言葉も、外に佇んでいた武蔵が、よく耳に入れて、その人間の何者かをもっと見届けていたら、後の間違いもなかったであろうに――生憎と彼はもうあらかたの空気を察して、この木立ち囲いの一軒の入口を求め、家の横へ迫っていた。

農家としては、かなり広そうだし、壁造りを見ても、旧家に間違いないが、小作もいない女気もない、藁屋根も苔に朽ちながら、その屋根葺の手も乏しい無人の家らしく思われた。

「……？」

明いている横の小窓。その小窓の下の石を踏み台にして、武蔵は、母屋の内をまずそっと覗いてみた。

なにより先に、彼の眼を射たのは、黒い長押に掛かっている一筋の薙刀だった。めったに民間にあっていい品物ではない。拗なくも、一かどの武将が手艶にかけた業物で、鞘の揉皮には金紋の箔すら朧ろに残って見える。

――さては。

と、武蔵は思い合わせて、よけいに疑いを深くした。

さっき、隅の小屋から足を洗いに飛び出した若い男の面がまえは、ちらと火影に見ただけであるが、到底、凡者の眼ざしではなかった。
腰きりの野良着に、泥まみれな脚絆を穿き、一本の野差刀を腰にぶちこんでいたが、丸っこい顔に、そそけ立つ髪の毛を、眼尻あがりに藁でつかね、背は五尺五寸に足るまいが、胸の肉づきといい、足腰のよく地にすわっている動きといい、一見、
(こいつ曲者)
と感じないでいられないものを武蔵は先に見ていたのである。
案のじょう、母屋には、百姓の持つべきでない薙刀などがある。そして、藺を敷いた床に人も見えず、ただ大きな炉の中に、ばちばちと松薪が燃え、その煙は、一つの窓からむうっと外へ吐き出されてくる。
「……あっ」
武蔵は、袂で口を蔽ったが、忽ち咽んで、怺えようとする程――咳をしてしまった。
「誰じゃ？」
厨の中で、老婆の声がした。武蔵が窓の下にかがみ込んでいると、炉部屋に這入って来たらしく、再びそこで、
「権之助っ。――小屋は閉めたか。又、粟泥棒がそこらへ来て、くさめをして居るぞよ」

三

――来たら幸い。

まずあの猪男を手捕りにして、お通をどこに隠したか詮議はそれからの事にしよう。
老婆の息子らしい勇猛そうなその男のほかに、いざとなれば、まだ二、三名の敵は飛び出すかも知れないが、彼さえ取ッ締めれば、物の数ではない。
武蔵は母屋の中の老婆が、権之助権之助と呼び立てると共に、小窓の下を離れて、この家を囲む立木の一部に身を隠していた。
するとやがて、
「どこにっ？」
と、権之助とよばれた息子は、裏から大股に素ッ飛んで来て、もいちど其処で、
「阿っ母、なにがいたんだ？」
と呶鳴って訊く。
小窓に、老婆の影が立って、
「その辺で、今咳声が聞えたがの」
「耳のせいじゃないか。阿っ母はこの頃、眼も悪くなったし、耳もとんと遠くなったからなあ」
「そうでない。誰か、窓から家の内を覗き見していたに違いない。煙に咽せた声じゃった」
「ふうん……？」
権之助は、十歩二十歩、その辺を、あたかも城郭でも見廻るように歩いて、
「そういえば、何だか、人間臭いぞ」
と、呟いた。
武蔵が迂濶に出なかった理は、闇に光る権之助の眼の実にらんらんと害意に燃えているためで

あった。
　それと、足のつま先から胸いたにかけて、ちょっと当り難い構えを備えているので、それも不審に思い、何を持っているのか得物を確かめるつもりで、彼の歩み廻る影を凝視していると、右の手裡から小脇を後ろに抜け、約四尺ばかりの丸棒をしのばせていることが分った。
　その棒も、そこらの麺棒やしんばり張棒を、有り合うまま、引っ抱えて来たものとは違い、一種の武器としての光を持っている。――のみならず、棒と、棒を持つ人間とが、武蔵から見ると、まったく二つにして一つのものとなっている。いかにこの男が、常にその棒と共に暮しているかが分るほどなのだ。
「やっ、誰奴だッ？」
　ふいに棒は風を呼んで、権之助の背から前へ伸びた。武蔵はその唸りに吹かれたように、棒の先から、やや斜めに、身を移して立った。
「連れ人を引取りに来た」
　――相手が、自分を睨めすえたまま黙っているので、
「街道からこれへ誘拐して来た女子と童を返せ。――もし無事に戻して詫びるならば免じておくが、怪我などさせてあったら承知せぬぞ」
　と、重ねていった。
　この辺りの塀といってもよい駒ケ岳の雪渓から、里とはひどく温度の差のある冷たい風が、星の下を、時折そよそよ忍んでくる。
「――渡せッ。連れて来いっ」

三度めである。

武蔵がその雪風よりも鋭い声で斬るようにいうと、逆手に棒を握って、喰い付くような眼をすえていた権之助の髪の毛が、針ねずみのように、颯っと立った。

「この馬糞め！　おれを誘拐しだと？」

「おう、連れもない、女童と見くびって、これへ誘拐して来たに違いあるまい。――出せっ、隠した者を」

「な、なんだとッ」

権之助の体から突然、四尺余の棒が噴いて出た。――棒が手か、手が棒か、その迅いことは眼にもとまらない。

四

武蔵は避けるより仕方がなかった。驚くべきこの男の練磨と技の体力を前にしては。

で、一応、

「おのれ、後に悔ゆるな」

警告を与えておいて、自分は数歩跳び退いたが、不可思議な棒の使い手は、

「なにを、洒落くせえ」

と喚きながら、決して一瞬の仮借もするのではなかった。十歩退けば十歩迫り、五歩躱せば五歩寄ってくる。

武蔵は相手から跳び開く間髪ごとに、二度ほど、刀の柄へ手をやりかけたが、その二度とも、

非常な危険を感じて、遂に、抜き放つ遑すらもない。
なぜならば、手を柄にかける一瞬でも、敵の前に肘を曝す隙となるからである。敵によって、そんな危険は感じない場合と、戒心する場合があるが、当面の相手が振りこんで来る棒の唸りは、武蔵が心で用意する行動の神経よりは遙かに迅速で、それへ無謀な勇をむりに奮って、
（この土民めが何者ぞ）
と、敢て誇れば、当然、棒の一撃にのめるであろうし、焦心りを持つだけでも、呼吸にうける圧迫から、身体のみだれをどうしようもなくなってしまう。
それに又、もう一つ武蔵を自重させた理由は、相手の権之助なる人間が、一体何者か、咄嗟に、見当がつかなくなった事である。
彼の振る棒には、一定の法則があるし、彼の踏む足といい、五体のどことといい、武蔵から見て、これは立派な金剛不壊の体を為している。かつて出会った幾多の達人中にも考え出されないほど、この泥くさい田夫の体の爪の先までが、武術の「道」にかない、そして武蔵も求めてやまない、その道の精神力に光っているのだった。
――こう説明してくると武蔵にも権之助にも、お互いが敵を観る間を持って悠々構えているように思われるであろうが、事実は寸秒に次ぐ寸秒で、わけても権之助の棒は、眼ばたきする間も停止していない。
――おおうっ。
と、満身から息をしたり、
――えおおうッ！

と、踵を蹴って来たり、又、りゅうりゅうと棒の攻撃を改めてかかり直して来るたびに、
「この、どたぐそ」
とか、
「かったい坊め」
とか、口汚ない方言で悪たれつきながら、打ちこんで来るのであった。
いや、棒に限っては、打ち込むという言葉は当らない。――それは打ち込みもするし、薙ぎもするし、突きもするるし、旋しもするし、片手でも使うし、両手でも使う。
又、太刀は切先と、柄の部分とが、はっきり分れていて、その一方しか活用できないが、棒は両端が切先ともなり、穂先ともなって、それを自由自在に使いわける権之助の練磨は、飴屋が飴をのばすように、長くもし、短くもするのではないかと眼に怪しまれる程だった。
「権っ。気をつけいよ、その相手は、凡者でないぞ！」
不意に、その時、母屋の窓から、彼の老母がこう叫んだ。――武蔵が敵に感じていることを、老母も息子の身になって、同じように感じているのであった。
「でえじょぶだよっ、阿っ母！」
権は、すぐ横の小窓から、母が案じながら見ていることを知って、その勇猛に拍車をかけたが、一颯のうなりを肩越しに躱して這入って来た武蔵の体が、権の小手をつかんだと思うと、巨きな石でも降したように、ずしんと地ひびきして権は背中で大地を打ち、足は高く星の空を蹴っていた。
「待たッしゃい！　牢人」

わが子の一命が今や危うしと思ったか、小窓に縋っていた老母は、そこの竹格子を突き破って、凄まじい一声を武蔵に浴びせ、その血相は、武蔵の次の行動に思わずためらいを与えた。

五

その時、老母の髪の毛が逆立って見えたのは、肉親として、さもある筈のところであろう。息子の権が投げられたことは、この老母には、非常な意外であったらしい。——投げつけた武蔵の手は当然、次の咄嗟には、刎ね起きる権之助の真っ向へ、抜打ちに一太刀行くべきであった。

だが、そうではなくて、

「おう、待ってやる」

武蔵は、権之助の胸へ馬のりになり、なお、棒を離さない右の手頸を足で踏みつけたまま老母の顔の見えた小窓を振り仰いだ。

「……？」

はッと、武蔵はしかしすぐ眼を反らした。

なぜならば、老母の顔は、もうその窓に見えなかったからである。——組み伏せられながらも権之助は、絶えず武蔵の手を外そうともがいているし、武蔵の制圧も届かない彼の二本の脚は、空を蹴ったり、地へ突っ張ったり、その腰車の脚技のあらゆる努力をあげて、敗地を挽回しようとしているのだった。

それも決して、油断はできない上に、窓から消えた老婆の影は、すぐ厨の横からさっと走り出

て来て、敵に組みしかれている息子を罵っていうことには、
「何のざまじゃ、この不覚者が。母が助太刀して取らす、負くるな」
——窓口から待てという言葉だったので、武蔵は必ずや老母がこれへ来て、額を地にすりつけて、わが子の助命を乞うのかと思っていたところ、案に相違して、九死一生の淵にある息子を励まし、なお戦おうというつもりらしい。
見れば、老母の小脇には、皮鞘を払った薙刀が星明りを吸って、後ろ隠しに持たれている。そして武蔵の背を窺いながら、
「ここな痩せ牢人めが、土民とあなどって、小賢しい腕立てしやったの。ここをただの百姓家と思うてか」
と、いう。
背中へ迫られることは武蔵にとって苦手であった。組み敷いているものが生き物なので、自由に向き直るわけにゆかないのだ。権之助は又、背中の着物も皮膚も破れるであろう程、地上を摺りうごいて、母に有利な位置を作ろうと、敵の下から計っている。
「なアに、こんなもの。——阿っ母、心配しねえでもいい。あんまり近寄ってくれんな。今、刎ね返えしてみせる」
呻きながら、権がいうと、
「焦心るでない！」
と、老母はたしなめて、
「元よりこのような野宿者に負けてよいものか。御先祖の血をふるい起せ。木曾殿の御内にも人

ありと知られた太夫房覚明(かくみょう)の血はどこへやったぞ」
　すると、権之助は、
「ここに持っている！」
　いいながら、首を擡(もた)げて、武蔵の膝行袴(たっつけ)の上から、股の肉へ喰いついた。
すでに棒を離して、両手も下から働きかけ、武蔵をして何の技をする余地も与えないのだ。加うるに老母の影は、薙刀の光を曳いて、背中へ背中へと狙(つ)け廻って来る。
「待てっ、老母」
　遂にこんどは武蔵からそういった。争う愚が分ったからである。これ以上のことは、斬られるか、どっちかが死を受けなければ解決しない。
　それまで行っても、お通が救われるとか、城太郎が助かるとかいうならよいが、その点はまだ疑いに過ぎないのである。――ともあれ一応穏やかに事情を打明けてみるのがいいのではあるまいか。
　そう考えたので、武蔵はまず老母に向って、刃(やいば)を退(ひ)けというと、老母はすぐおうとはいわないで、
「権。どうしやるか」
　と、組み伏せられている息子へ、和協の申し出(い)でを、容(い)れるか容れないか、相談するのであった。

六

炉の松薪はちょうど燃え旺っていた。この家の母子が、そこへ武蔵を伴って来たことは、やがてあれから、話し合った末、双方の誤解が溶けたものであろう。
「やれやれ、危い事ではあった。とんだ行き違いからあのような――」
さも、ほっとしたように、老母はそこへ膝を折ったが、共に坐りかけた息子を抑えて、
「これ権之助」
「おい」
「坐らぬうち、そのお侍を御案内して、念のために、この家の内を隈なくお見せ申したがよい。――今外で、お訊ねをうけた女子や童が隠してないことを、よう見届けて戴くために」
「そうだ、おれが街道から、女など誘拐して来たかと、疑われているのも残念。――お武家、おれに尾いて、この家のどこでも改めてもらおう」
上がれ――と招ぜられたまま、武蔵はわらじを解いて、もう炉の前に席を占めていたが、母子の者の共々なことばに、
「いやもう、御潔白は分りました。お疑い申した罪は、御勘弁ねがいたい」
詫び入るので、権之助も間が悪くなって、
「おれも良くなかった。もっとそっちの用向きを糺した上で怒ればよかったのだが」
と、炉べりへ寄って、あぐらを組む。
だが武蔵としては、こう打解けたところで訊ねたい疑問がまだある。それは先刻、外から見届けておいた斑の牝牛で、あれは自分が叡山から曳いて来て、途中から病弱なお通のため道中の乗物に与えて、城太郎に、確とその手綱を預けておいたものである。

その牝牛が、どうして、この家の裏に繋がれているのか？

「いや、そんな理なら、おれを疑ぐったのもむりはねえ」

権之助はそれに答えていう。――実は自分はこの辺に田を少しばかり持って百姓をしている者だが、夕方、野婦之池から鮒を網に打って帰って来ると、池尻の川に一頭の牝牛が足を突っこんで踠がいている。

沼がふかいので、もがく程、牛は沼に辷り込み、その図ウ体を持てあまして、哀れな啼き声をあげている様子。引き上げてやって見ると、まだ乳ぶさも若い牝牛であるし、辺りをたずねても飼主の姿はみえぬし、てっきりこれは何処からか盗み出して来た野盗が持ち扱って、捨てて行ったものに違いあるまいと――独りぎめに極めてしまった。

「牛一匹あれば、ヘタな人間の半人前は野良仕事をするので、これはおれが貧乏で、阿っ母にろくな孝養もできねえから、天が授けてくれたものと――あははは良い気になって曳っぱって来ただけのものさ。飼主が分っちゃ仕方がねえ、牛はいつでも返すよ。だが、お通とか城太郎とか、そんな人間の事、おらあ一切知らねえぞ」

話が分ってみると、権之助なるこの若者は、いかにも粗朴な田舎漢で、最初の間違いは、その率直な美点からむしろ起ったものといえる。

「じゃが旅のお侍、さだめしそれは心配なことで御座ろう」

と老母は又老母らしく側から案じて、息子にいう。

「権之助、はよう晩飯を掻っこんで、その気の毒なお連れを一緒に探してあげい、野婦之池あたりにうろついていてくれればよいが、駒ケ岳のふところへでも這入りこんだら、もう他国者の衆

に知れることじゃない。——あの山には、馬や野菜物さえのべつ攫ってゆく野伏りが、たんと巣を喰うているそうな。おおかたそんな無頼者の仕業であろうが」

七

ぶすぶすと、松明の先っぽに風が燃える。

巨きな山岳の裾は、風が来たと思うと、ぐわうと草木もふき捲いて、凄い一瞬の鳴りを起すが、止んだとなると、ハタと息をひそめて、不気味なほど静かな星のまたたきばかりとなる。

「旅の者」

権之助は、手に持つ松明を挙げて後から来る武蔵を待ちながら——

「気の毒だが、どうしても知れねえのう。これから野婦之池までゆく途中、もう一軒、あの丘の雑木林のうしろに、猟をしたり、百姓したりしている家があるが、そこで訊いても知れなければ、もう探しようがねえというもんだが」

「ご親切に、辱い。これまで十数軒を訊き歩いても、なんの手懸りもなければ、これは拙者が方角ちがいへ来ているのであろう」

「そうかも知れねえ。女を誘拐す悪党などというものは、悪智恵に長けているから、滅多に追いつかれるような方角へ逃げる筈はねえ」

もう夜半を過ぎていた。

駒ケ岳の裾野——野婦村、樋口村、その附近の丘や林など、宵からおよそ歩き尽くしたといってもいい。

せめて、城太郎の消息でも知れそうなものだが、誰一人、そんな者を見かけたという者もない。
わけてお通の姿には特徴があるから、見た者があればすぐ知れるわけだが、どこで訊いても、
「はてねえ？」
と、気永に首をかしげる土民ばかりであった。
武蔵は、その二人の安否に胸を傷めると共に、縁もゆかりもないのに、この労苦を倶にしてくれる権之助にすまない気がしてくる。明日も野良へ出て働かなければならない体だろうにと思う。
「とんだ迷惑をおかけ申したのう。そのもう一軒を尋ねてみて、それでも知れぬとあれば、ぜひがない、諦めて戻るといたそう」
「歩くぐれいな事、夜どおし歩いた所で、何の事もねえが、いったいその女子と童というのは、お武家の召使いか、それとも姉弟たちかね」
「されば――」
まさか、その女性の方は恋人で、子供は弟子とも、答えられないので、
「身寄りの者です」
と、いうと、そういう肉親の少ない身を淋しく考え出してでもいるのか、権之助は無口になって、ひたすら野婦之池へ出るという雑木の丘の細道を先に歩いて行く。
武蔵は今、お通と城太郎を案じる気持で、胸もいっぱいになっていたが、その中にも心のうちでは、この機縁を作ってくれた運命の悪戯に――たとえ悪戯であろうと感謝せずにはいられなか

った。

もしお通にその災難がかかって来なかったら、自分は、この権之助に会う機会はなかったろう。そしてあの棒の秘術も見る折がなかったに相違ない。

流転の中で、お通と行きはぐれてしまった事は、彼女の生命につつがない限り、やむを得ない災難と思うしかないが、もしこの世に於て、権之助の棒術に出会わずにしまったら、武芸の道に生涯する自分として、大なる不幸であったろうと思う。

――で、折もあらば、彼の素姓を問い、その棒術に就いても深く糺してみたいと先刻から考えていたが、武道のことと思うと、不しつけに訊きかねて、つい折もなく歩きつづけていると、

「旅の者、そこに待っていろ。――あの家だが、もう寝ているに極っているから、おれが起して訊いて来てやる」

木々の中に沈んで見える一軒の藁屋根を指さすと、権之助はひとりで、そこらの崖藪を掻きわけ、がさがさと駈け降りて、そこの戸を叩いていた。

八

程なく戻って来た権之助が、武蔵へ向って告げる事には。

どうも雲をつかむような返辞ばかり、ここに住む猟師の夫婦も、こちらの尋ね事に就いては、さっぱり要領を得ないが、ただ内儀さんが夕方、買物に出た帰り途、街道で見かけたという話は、ことによると一縷の手懸りといえるやも知れない。

その内儀さんの話によると、もう星の白い宵の時刻、旅人の影も途絶え、並木の風ばかりが淋

しい道を、おいおいと泣き声あげながら、向う見ずに素ッ飛んでゆく小僧がある。
手も顔も泥まみれのままで、腰には木刀を差し、藪原の宿場の方へ駈けて行くので、内儀さんがどうしたのかと訊いてやると、
(代官所はどこにあるか教えておくれ)
となお泣いていう。
代官所へ何しに行くかと、根を掘って訊くと、
(連れの者が、悪者に攫われて行ったから、奪り返してもらうんだ)
との答え。
それならば代官所へ行ってもむだな事だ、お役所という所は、誰か偉い人が旅で通るとか、上からのお吩咐けとでもあれば、てんてこ舞して、道の馬糞を取って砂まで撒くが、弱い者の訴えなどに、どうして本気に耳をかして捜してなどくれるものか。
殊に、女が誘拐されたとか、追剝にあって裸にされたとかいう小事件は、街道筋には朝に夕にある事で、めずらしくもなんともない。
それよりは藪原の宿一つ先へ越して、奈良井まで行くとよい。町の四ツ辻だからすぐ知れる所に奈良井の大蔵さんというて、お百草を薬にして卸している問屋がある。その大蔵さんにわけをいうて頼めば、この人はお役所と反対に、弱い者のいう事ほど、親切に聞いてもくれるし、正しい事なら、人のために身銭を切ってなんでもひき受けてくれるから——
内儀さんの言葉をそのまま、権之助は口うつしに其処まで語って、
「こういってやると、その木刀を差した小僧は、泣きやんで又、後も見ずに駈けて行ったという

事なんだが――もしや連れの城太郎とかいう子供が、それじゃあるめえか」
「オオ、それです」
武蔵は、城太郎の姿を、見るが如く想像しながら、
「――すると、拙者が探しに来たこの方角と、まるで違った方へ行ったわけですな」
「それやあ、此処は駒の麓だし、奈良井へ行く道からは、ずっと横へ入っている」
「何かと、お世話でござった。それでは早速、拙者もその奈良井の大蔵とかを、尋ねて参ろう。――お蔭で微かながら、緒口の解れて来た心地がする」
「どうせ途中になるから、おれの家へ寄って、一寝みした上で、朝飯でも喰って立つといい」
「そう願おうか」
「そこの野婦之池を渡って、池尻へ出ると、半分道で帰れる。今、断っておいたから、舟を借りてゆくとしよう」
そこから少し降りてゆくと、楊柳に囲まれた太古のような水がある。周囲ざっと六、七町もあろうか。駒ケ岳の影も、いちめんの星も、ありのままに、池の面に泛んでいた。
なぜなのか、この地方にそう見えない楊柳が、この池の周りだけには生い茂っている。権之助は棹を持ち、その代りに、彼の手にあった松明は武蔵が持ち、辷るように池の中央を横切って行った。
水の上を行く松明の火は、暗い水に映って、一倍赤々と見えた。――その流るる焔を、お通はその時、眼に見ていたのである。人の世の皮肉といおうか、飽くまで薄縁な二人の仲といおうか、場所も、そう遠くない所から。

毒歯

一

水に映る火影と、小舟の中に人のかざしている火と、深夜の池心を行く松明は、一つの光でありながら、ちょうど二羽の火の鴛鴦が泳いでゆくように遠くからは見える。

「……オオ？」

お通がそれを知った時、

「やっ、誰か来る」

と、狼狽ぎみに、声を出して、お通の縄尻を引っ張ったのは又八で、大それた事をやるくせに、何か事にぶつかると、臆病な持ち前はすぐ体に出してしまう。

「どうしよう？　……そうだ、こっちへ来い。やいっ、こっちへ来やがれ」

そこは楊柳につつまれている池畔の雨乞堂であった。なにを祠ってあるか郷土の人もよく知らないが、ここで夏の旱に雨を祈ると、うしろの駒ケ岳からこの野婦之池へ沛然と天恵が降るという事が信じられている。

「いやです」

お通は動くまいとする。

堂の裏手にひきすえられて、先刻から又八に、責め苛まれていた彼女だった。縛められている両手がきくものならば、及ばぬまでも、突きとばしてやりたいと思うがそれも出来なかった。隙があったら眼の前の池に飛びこんで、堂の棟に上がっている絵馬のように、楊柳の幹を巻いて、呪う男を呑まんとしている蛇身になっても——と思うが、それも出来なかった。

「立たねえか」

又八は、手に持っている篠を鞭にして、お通の背を、いやという程打った。

打たれる程、お通は意志が強くなる。もっと打ってみろと望みたくなる。……黙って又八の顔を睨めつけていた。すると又八は、気が挫けて、

「歩けよ、おい」

と、いい直す。

それでもお通が起たないので、今度は猛然と、片手で襟がみをつかみ、

「来いっ」

ずるずると、地を引き摺られながらお通が、池心の火へ向って、悲鳴をあげようとすると、又八はその口を手拭で縛って、引っ担ぐように、堂の中へ抛りこんだ。

そして、木連格子を抑えながら、彼方の火影がどう来るか窺っていると、その小舟はやがて雨乞堂から二町ほど先の池尻の入江へ辷り込んで、松明の火もやがてどこかへ立ち去ったらしい。

「……あ。いい按配」

ほっとして、それには胸を撫でたが、又八の気持はまだ落着きを得なかった。

お通の体は今、自分の手の中にあるが、お通の心はまだ自分の物となりきれない。心のない肉体だけを持ち歩いていることの実に大変な辛労であるということを、彼はつぶさに宵から経験した。

無理に――暴力をもっても、彼女のすべてを、自分のものにしてしまおうとすると、お通は死の血相を見せるのであった。舌をかみ切って死のうとするのである。それくらいな事はきっとやるお通である事は幼少から知っている又八なので、

（殺しては）

と、つい盲目な力も情慾も挫けてしまう。

（どうして俺をこんなに嫌い、武蔵を飽くまで慕うのだろうか。――以前は、彼女の心のなかに、俺と武蔵はちょうどあべこべであったものを）

又八は、分らなかった。武蔵より自分の方が、女に好かれる素質を持っているのに――という自信がどこかにある。事実彼は、お甲を始め、幾多の女に、そうした経験がある。

これはやはり武蔵が、最初にお通の心を誘惑し、手なずけてからは、折あるごとに、自分を悪くいって、お通につよい嫌悪を抱かせるようにしたためにちがいない。

そして自分に出会えば、自分にはいかにも友情の深いような事をいって――

（俺は、お人好しだ。武蔵に騙られたのだ。その偽ものの友情に涙をこぼしたりなどして……）

と、彼は木連格子に倚りかかりながら、膳所の色街でさんざいわれた――佐々木小次郎の忠言を今、心のうちで呼び返していた。

二

今になって思いあたる——

あの佐々木小次郎が、自分のお人好しを嗤い、武蔵の肚ぐろい事をさんざん罵って、

(尻の毛まで抜かれるぞ)

といった言葉。

それが今、彼の心にぴったりする忠言として、甦って聞えて来る。

同時に、武蔵に対しての、又八の考えは一変した。これまでも、何度となく豹変しては又持ち直して来た友情ではあるが、今度は今までの憎悪に輪をかけて、

「よくも俺を……」

と、心の底からわき上がる呪いとなって、唇を深く噛んだ。

人を憎んだり嫉んだりする事は、日常、人一倍烈しい質の又八であるが、呪咀するほどの強い意力は、人を恨むことにすら出来ない質の又八であった。

けれど今度という今度こそは、武蔵に対して、七生までの仇のような怨念が醸されてしまった。彼と自分とは、同郷の友として育ちながら、どうしても、生涯の仇に生みづけられて来た悪縁かのように思われて来るのだった。

似非君子め。——と思う。

抑ゝ、あいつが自分を見るたびに、いかにも真しやかに、やれ真人間になれの、発奮しろの、手を取り合って世の中へ出ようのと、いう口吻からして、思えば面憎い限りである。

その泣き落しにのせられて、涙をこぼしたかと考えると、又八は、業腹でたまらない。自分のお人好しを、武蔵に見すかされて翻弄されたかのように、体じゅうの血が、呪いと口惜しさに沸り立ってくる。

(世の中の善人なんていう者は、みんな武蔵のような君子面した奴ばかりだ。ようし、おれはその向うに廻ってやろう。くそ勉強して、窮屈をしのんで、そんな似非者のお仲間入りは真っ平だ。悪人というならいえ、おれはその悪方へ廻って、一生涯、野郎の出世を邪げてくれよう)

何事につけ、いつもよく出す又八の根性ではあったが、今度の場合に限っては、彼が生れて以来胸に抱いた精神力のうちの最大のものであった。

——どんと、自でのように、彼の足は、後ろの木連格子を蹴とばしていた。たった今、そこへお通を押籠めた前の彼と、外に立って腕拱みして入り直して来た彼とは、わずかな間に、へビが蛇になった程、変っていた。

「——ふん、泣いてやがら」

雨乞堂の中の暗い床を眺めやって、又八は、こう吐き出すように冷たくいった。

「お通」

「…………」

「やいっ。……さっきの返辞をしろ、返辞を」

「…………」

「泣いていちゃ分らねえ」

足をあげて、蹴ろうとすると、お通は早くもそれを感じて、肩を躱しながら、

「あなたへする返辞などはありません。男らしく、殺すならお殺しなさい」
「ばかをいえ」鼻で嗤って――
「おらあ今、肚を決めた。てめえと武蔵とが、俺の生涯を誤らせたのだから、おれも生涯、てめえと武蔵とに、復讐してやるのだ」
「うそをおいいなさい。あなたの生涯を間違えたのは、あなた自身です。それから、お甲という女のひとではありませんか」
「何をいやがる」
「あなたといい、お杉ばば様といい、どうして、あなたの家のお血すじは、そう他人を逆恨みするのでしょう」
「よけいな口をたたくな。返辞をしろといったのは、おれの家内になるか嫌か、それを一言聞けばよいのだ」
「その返辞ならば、何度でもいたしまする」
「おう吐かせ」
「生きているあいだはおろかな事、未来まで、わたくしの心に結んだお人の名は宮本武蔵様。そのほかに、心を寄せるお人があってよいものでしょうか。……まして貴方のような女々しい男、お通は、嫌いも嫌い、身慄いの出るほど嫌いでございます」

三

これ程にいえば、どんな男でも、殺すか、諦めるか、どっちかにするであろう。

お通はそういってから、なんだか胸がすいた。そして又八に、どうされてもやむを得ないと観念していた。
「……ウウム、いったな」
又八は、体のふるえを怺えながら、努めて冷笑して見せようとした。
「それ程、おれが嫌いか。――判っきりしていていいや。――だがお通、おれも判っきりいっておくぜ。それは、てめえが嫌おうが好こうが、俺はてめえの体を、今夜から先は、自分のものにしてしまうということだ」
「……？」
「なにを顫えるんだ？　……ええおい、てめえも今の言葉は、相当な覚悟をもっていったのだろうが」
「そうです、私はお寺で育ちました。生みの親の顔すら知らない孤児です、死ぬことなど、いつでも、そう怖いとは思っておりません」
「冗談いうな」
又八は、傍へしゃがみ込んで、反向ける顔へ、意地悪く顔を持って行きながら、
「誰が殺す？　――殺してたまるものか。こうしておくのだ！」
いきなり彼は、お通の肩と左の手頸をかたく掴まえた。そして着物の上から――彼女の二の腕のあたりを、がぶっと、深く噛みついた。
――ひいイっ、お通は思わず悲鳴をあげた。
身を床にもがいて暴れた。そして、彼の歯を捥ぎ離そうとするほど、彼の歯の尖を肉へ深く入

れてしまった。
淋漓たる血しおが、小袖の下を這って、縛られている手の指先までぼとぼと垂れてきた。
又八は、それでもなお、鰐のような唇を離さなかった。
「…………」
お通の顔は、月明りでも受けているように、見るまに白くなってしまった。又八はぎょッとして、唇を離し、そして彼女の顔の猿ぐつわを脱って、彼女の唇を調べてみた。――もしや舌でも噛み切ったのではなかろうかと。
余りの痛さに、喪心したのであろう、鏡の曇りのような薄い汗が顔に浮いていたが、唇の中にはなんの異常もなかった。
「……おいっ、堪忍しろ。……お通、お通」
身を揺すぶると、お通は、われに回ったが、途端に、ふたたび体を床に転ばせて、
「痛い。……痛い。城太さアん、城太さあん！　……」
と、うつつに叫び出した。
「痛てえか」
又八は、自分も蒼白になって肩で息をつきながらいった。
「血は止まっても、歯型の痣は何年も消えることじゃねえ。おれの、その歯の痕を、人が見たら何と思う？　……。武蔵が知ったら何と考えるか。……まあ当分の間、いずれ俺の物となるてめえの体に、それを手付の証印として預けておくぜ。逃げるなら逃げてもいい。おれは天下に、おれの歯型のある女に触れた奴は、おれの女讐だといって歩くから」

「…………」

梁の塵を微かにこぼして、真っ暗な堂内の床には、よよと泣きむせぶ声ばかりだった。

「……止せっ、いつまで、泣いてやがって。気が滅入ってしまわあ。もう苛めねえから黙れ。……うむ、水をいっぺい持って来てやろうか」

祭壇から土器を取って、外へ出て行こうとすると、そこの木連格子の外に立って、誰か、覗き見していた者がある。

四

誰か？　――と愕っとしたが、堂の外に見えた人影は、途端にあわてて逃げ転んで行く様子なので、又八は猛然と、木連格子を排して、

「野郎っ」

と、追い駈けて出た。

捕まえてみると、この附近の土民らしく、馬の背に、穀物の俵を積み、夜を通して、塩尻の問屋まで行く途中だという。そしてなお、諄々と、

「べつに、どういう心算でもなく、お堂の中に、女子の泣き声が聞えたので、不審に思って、覗いてみただけでございます」

と、言い訳して、平蜘蛛のように、詫び入るだけだった。

弱い者にはどこまでも強くなれる又八であるから、忽ち、反身になって、

「それだけか。――それだけの考えに相違ないか」

と、まるで代官のように威張っていう。
「へい、まったく、それだけの事で……」
と、一方が愈〻ふるえ顫くと、
「うむ、それなら勘弁してつかわそう。だが、その代りに、馬の背の俵をみんな降ろせ。そして、俵のあとへ、あのお堂の中にいる女を括しつけて、俺がもうよいという所まで乗せて行くのだ」
勿論、こんな無理を押しつける場合は、又八でない人間でも、必ず刀をひねくり返して見せることは忘れない。
嫌応なしの脅しである。お通は馬の背中へ括しつけられた。
又八は、竹を拾って、馬を曳く人間を撲る鞭としながら、
「こら土民」
「へい」
「街道すじへ出てはならねえぞ」
「では、どこへお越しなさるのでございますか」
「なるべく、人の通らない所を通って、江戸まで行くのだ」
「そんな事を仰っしゃっても無理でございまする」
「何が無理だ。裏街道を行けばいいのだ。さしずめ、中山道を避けて、伊那から甲州へ出るように歩け」
「それやあ、えらい山路で、姥神から権兵衛峠を越えねばなりませぬで」

「越えればいいじゃねえか。骨惜しみすると、これだぞ」
と、馬を曳く人間へ、絶えず鞭を鳴らして、
「飯だけはきっと喰わせてやるから、心配せずに歩け」
百姓は、泣き声になって、
「じゃあ旦那、伊那までお供いたしますが、伊那へ出たら放しておくんなさいますか」
又八は、かぶりを振った。
「やかましい。俺がいいという所までだ。その間に、変な素振りをしやがると、ぶった斬るぞ。俺の要り用なのは、馬だけで、人間なぞは、かえって邪魔くせえ位なものだ」
道は暗い、山にかかるほど、嶮しくなってゆく。そして馬も人も疲れた頃、やっと姥神の中腹までかかり、足もとに、海のような雲の波と、朝の光を微かに見た。
馬の背にしがみついたまま、一言も物をいわずにきたお通も、朝の光を見ると、それまでの間に、もう心をすえてしまったかのように、
「又八さん。後生ですから、もうそのお百姓さんを放してやってください。この馬を返してあげて下さい。——いいえ、私は逃げはしませぬ。ただ、そのお百姓さんが可哀そうですから」
又八はなお、疑ぐっていたが、再三再四、お通が訴えるので、遂に、彼女を馬の背から解いて降ろした後、
「じゃあきっと、素直に俺について歩くな」
と、念を押した。
「ええ、逃げはしませぬ。逃げても、蛇歯型が消えないうちはむだですから——」

二の腕の傷みを抑えながら、お通はそういって、唇を噛んだ。

星の中

一

いかなる場所でも場合でも、武蔵は、寝ようと思う時にすぐ眠り得る修養と健康を持っていた。しかしその時間は、至って短かった。

ゆうべも――

権之助の家へ戻って来てから、着のみ着のまま、一間を借りて横になったが、小鳥の声が し始める頃は、もう眼をさましていた。

けれど昨夜、野婦之池から池尻へ出て、ここへ戻って来たのがもう夜半過ぎであった。あの息子も疲れているだろうし、老母もまだ眠っているに違いない。――そう察しられるので、武蔵は小鳥の声を耳にしながら、寝床の中で、やがて雨戸の音のするのをうつらうつらと待っていた。

――すると。

隣の部屋ではない。もう一間ほど先の襖らしかった。そこで誰やら、しゅくしゅくと啜り泣いている者がある。

「……おや？」

耳を澄ましていると、泣いているのは、どうやらあの精悍な息子らしく、時々、子どものように慟哭して、
「阿っ母、それやああんまりだ。おらだって、口惜しくねえ事があるものか。……おらのほうが、阿っ母よりも、どんなに、口惜しいか知れねえけれど」
と、言葉も、とぎれとぎれにしか聞き取れない。
「大きななりをして、何を泣く――」
こう三ツ児でもたしなめるように、慥乎りした声で――しかし静かに叱っているのは、かの老母に間違いなく、
「それ程、無念と思うなら、この後は心を戒めて、一心に道を究めて行くことじゃ。……涙などこぼして、見苦しい。その顔を拭きなされ」
「はい。……もう泣きませぬ。昨日のような不覚なざまをお目にかけました罪は、どうかお宥し下さいまし」
「――とは叱りましたが、深く思うてみれば、下手と上手の差。又、無事が続くほど、人間は鈍るという。そなたが負けたのは、当り前なことかも知れぬ」
「そう阿っ母にいわれるのが、なによりおらあ辛い。平常も朝夕に、お叱りをうけながら、昨夜のような未熟な負け方。あんなざまでは、武道で立つなどという大それた志も、吾れながら恥ずかしい。この上は、生涯、百姓で終るつもりで、武技を磨くよりは鍬を持ち、阿っ母にも、もっと楽をさせまする」
何事を歎いているのかと、初めは武蔵も他事に聞いていたが、どうやら、母子の対象としてい

る者は、自分以外の他人ではないらしい。

武蔵は、憮然として、寝床のうえに坐り直した。——なんというつよい勝敗への執着だろうか。

昨夕の間違いは、もうお互の間違い事と、心に済ましているのかと思えば、それはそれとして、武蔵に負けたという点を、ここの母子は、今もって、飽くまで不覚な恥辱として、涙にくれるほど無念がっているのである。

「……怖ろしい負けず嫌い」

武蔵は呟いて、そっと次の部屋へかくれた。そして夜明けの薄い光の洩れているその又次の一室の内を、隙間からそっと覗いてみた。

見ると、そこは、この家の仏間であった。老母は仏壇を背にして坐り、息子はその前に泣き伏している。——あの逞ましい大男の権之助が、母の前には他愛もなく顔をよごして泣いている。

武蔵が、ふすまの陰から見ているとも知らず、老母はその時又、何が気に障ったのか、

「なんじゃと、……これ権之助、今、なんといやったか」

ふいに、声を励まして、息子の襟がみをつかんでいた。

二

年来の志望であった武道を捨てて、明日からは、生涯百姓で終るつもりで孝養するといった息子のことばが——気に添わないのみか、かえって、老母の心を怒らせたものの如く、

「なに。百姓で終るとか」

息子の襟がみを膝へ引き寄せると、三ツ児の尻でもたたくように、彼女は、歯がゆそうに、権之助を叱るのだった。

「どうぞして、そなたを世に出し、まいちど家名を興させたいものと願えばこそ、母もこの年まで、世に望みを繋いでいたものを、このまま、草屋に朽ち終るほどなら、なんで幼少からそなたに書を読ませ、武道を励まし、稗粟に細々生きてまで、露命の糸をつむいで来ようぞ」

老母は、ここまでいうと、子の襟がみを抑えたまま、声も嗚咽になってしまって――

「不覚を取ったら、なぜその恥をそそごうとは思わぬか。幸いな事には、あの牢人はまだこの家に泊っておる。眼をさましたら改めて手合せを望み、その挫けた気持に信念を取り戻したがよい」

権之助は、やっと顔を上げたが、間が悪そうに、

「阿っ母、それが出来るほどならば、おらが何で弱音を吐くものか」

「常の其方にも似あわぬ事。どうしてそのように意気地のうなりやったか」

「ゆうべも、半夜のあいだ、あの牢人を連れ歩くうち、絶えず、一撃ちくれてやろうと、狙い続けていたが、どうしても、打ち撲る事ができなかった」

「そなたが、怯みを抱いているからじゃ」

「いいや、そうでねえ。おらの体にも木曾侍の血は流れている。御岳の神前に二十一日の祈願をかけ、夢想の中に、杖の使い方を悟ったこの権之助だ、なんで名もない牢人ずれに――と、幾度も自分では思ってみるが、あの牢人の姿を見ると、どうしても、手が出ねえだ。手を出す先に、駄目だと思ってしまうのだ」

「杖をもって、必ず一流を立てますると、御岳の神に誓ったそなたが——」
「でも、よくよく考えてみると、今日までの事は皆、おらの独りよがりだった。あんな未熟で、どうして、一流を興す事などできるものか。そのために貧乏して、阿っ母に飢じい思いをかけるより、きょう限り、杖を折って、一枚の田でもよけいに耕したほうがいいとおらあ考えただが」
「今まで、多くの人々と手合せしても、一度として、負けたという事のないそなたが、きのうに限って敗れたのも、思いように依っては、そなたの慢心を、御岳の神がお叱りなされて下されたのかも知れぬが、そなたが杖を折って、わしに不自由なくしてくれても、わしが心は、美衣美食で楽しみはせぬ」
そう諭してから、老母はなおもいうのだった。奥のお客が眼醒めたら、改めてもう一度、技を競ってみるがよい。それでも敗れたら、お前の気の済むように、杖を折って、志を断つもよかろうが——と。
ふすまの陰で始終の事を聞いてしまった武蔵は、
（さて、困ったことが……）
と、当惑しながら、そっと去って、ふたたび自分の寝床のうえに坐りこんだ。

三

どうしたものだろう？
やがて、自分が顔を見せれば、必ず母子の者から、試合を求められるに違いない。
試合えば、自分は、きっと勝つ。

武蔵はそう信じる。

けれども、今度も亦、自分に敗れたなら、あの権之助は、今日まで誇っていた杖の自信を失って、ほんとに志を断つであろう。

又、わが子の達成を、唯一の生きがいとして、貧困の中にも子の教育を忘れずに今日まで来た――あの母親の身になったら、どんなに落胆するだろうか。

「……そうだ、この試合は、外すに限る。だまって、裏口から逃げ出そう」

縁の戸をそっと開けて、武蔵は外へ出た。

もう朝の陽が木々の梢から薄白くこぼれている。ふと納屋のある片隅を見ると、きのうお通にはぐれて此家へ拾われて来た牝牛が、今日は今日の陽を豊かに浴びて、そこらの草を喰べていた。

(おい、達者で暮せよ)

そんな気持がふと牛に向ってもわくのであった。武蔵は防風林の垣を出て、駒の裾野の畑道を、もう大股に歩いていた。

片方の耳はひどく冷たいが、今朝は鮮らかに全姿を見せている駒の頂から落ちてくる風に、足元から払われて行くと、ゆうべからの疲れも焦躁も颯っと遠方のものになってしまう。

仰ぐと、雲が遊んでいる。

ちぎれちぎれな無数の白い綿雲。各〻が、各〻の相を持ち、気儘に自由に屈託なく、碧空をわがもの顔に戯れてゆく。

「――焦心るまい、余りこだわるまい。会うも別れるも、天地の何ものかがさせている力だ。幼い城太郎にも、弱いお通にも、幼ければ幼いなりに、弱ければ弱いなりに、世間の中の――それ

が神だともいえる――善性の人の加護があるであろう」
昨日から迷れかけた――いや、馬籠の女滝男滝からずっと外れがちに彷徨ってばかりいた武蔵の心が――ふしぎにも今朝は、自分の歩むべき大道へ、確乎と返っている心地だった。お通は？――城太郎は？――とか、そんな眼の傍の事のみでなく、死後の先までかけている生涯の道の行く手がこの朝――、彼には見えていた。
午刻過ぎごろ。
彼の姿は奈良井の宿場の中に見かけられる。軒先の檻に生きた熊を飼っている熊の胆屋だの、獣皮を懸け並べた百獣屋だの、木曾櫛の店だの、ここの宿場もなかなかの雑鬧。
その熊の胆屋の一軒。なんの意味か「大熊」と看板に書いてある角店の前に立って、
「ものを訊ねたいが」
と武蔵がのぞく。
後ろ向きに釜の湯を、自分で汲んで呑んでいた熊の胆屋のおやじが、
「はあ、何でございますか」
「奈良井の大蔵殿というお人の店はどこであろうか」
「ああ、大蔵殿のお店ならば、これからもう一つ先の辻で――」
と、湯呑み茶碗を持ったまま、おやじは、店頭まで出て来て道を指さしたが、折ふし、外から帰って来たとんぼ頭の丁稚の顔を見かけると、
「これこれ。こちら様はの、大蔵様のお店を尋ねて行かっしゃるという。あのお店構えは、ちょっと分らんによって、前まで、お連れ申して来う」

と、いいつけた。
丁稚は、頷いて、先にてくてく歩いてゆく。武蔵は心のうちで、その親切にも感じたが、かねて権之助から聞いていた言葉も思い合せて、奈良井の大蔵という者の徳望のほどが偲ばれた。

四

お百草の卸問屋といえば、軒並みにある旅人相手の店の一つのようなものかと思って来たところ、見れば、まるで想像は外れている。
「お侍さん、ここが奈良井の大蔵様のお宅でございますよ」
案内してくれた熊の胆屋の丁稚は、なる程、側まで連れて来て貰わなければそれとも分るまいと思われる――目の前の大家を指さして、すぐ走り戻って行った。
店と聞いていたが、暖簾も看板も懸けてはない。渋で塗った三間の出格子に、二た戸前の土蔵がつづき、その他は高塀で取り繞らしてある。入口には、蔀障子が下りていて、訪れるにも、ちょっと億劫なほど、大きな老舗の奥ふかさを持っている。
「御免」
武蔵はそこを開けていう。
中は暗い。そして、醤油屋の土間のように広くて、冷たい日陰の空気が顔に触れた。
「どなた様で――」
と、帳場簞笥の隅から程なく立って来る者がある。武蔵は、後を閉めて、
「それがしは宮本と申す牢人者ですが、連れの城太郎――漸く十四歳ほどの童が、昨日か――こ

とによると今朝あたり——御当家を頼って来たように途中で聞いて参りました。もしや御当家のお世話になってはおりますまいか」

武蔵のことばが終らないうちに、番頭の顔には、ああその子供か——という頷きが漂い、

「それはそれは」

と、丁寧に敷物をすすめたが、辞儀をした後の返辞は、武蔵を失望させるものだった。

「それは、残念な事をいたしましたわい。その子供なら、ゆうべ夜半に、ここの表戸をどんどん叩きましてな——ちょうど手前どもの主人大蔵様には旅立ちの立ち振舞いで、まだ賑やかに大勢して起きておりました折なので——何事かと開けてみますと、ただ今、あなたのお訊ね遊ばしたその城太郎という子供が、門に立っておりましたようなわけで」

老舗の奉公人の常として、実直すぎて前措きも諄々しいが、つづまる所、要旨は、次のような事だった。

(この街道の事なら何でも奈良井の大蔵さんの所へ頼みに行け)

と、武蔵も誰かに教えられた通り、城太郎も亦、お通を攫われたわけを告げて、此処へ泣きこんで来たところ、主人の大蔵がいうには、

(そいつは容易くないぞ、念のため、手配はしてやるが、この近くの野武士や荷持人足の仕業ならすぐ分るが、旅の者が旅の者を誘拐した事だ。いずれ往来の街道を避けて、間道へ出てしまったにちがいない)

そう見込みはつけたが、つい今朝方まで、八方へ人を派して、捜索したけれど、大蔵の予言のとおり、なんの手懸りも得られなかった。

の日なので、

愈々、知れないとなると、城太郎は又、ベソを掻き出したが、ちょうど今朝は、大蔵が旅立ち

(どうだ、おれと一緒に歩かないか。そうしたら、途々も、そのお通さんとやらを探せるし、また、ひょいと、武蔵とかいうお前のお師匠さんに会えない限りもないからなあ)

慰め半分に、大蔵がいったところ、城太郎は地獄で仏に会ったように、ぜひ一緒に行くといい――一方もそれではと、急に連れて行く気になって、旅の空へ立ったばかり――という番頭の話なのである。

それも、時間にすれば、わずか二刻ばかりの違いなのに――

と、いかにも気の毒そうに、繰返していった。

五

二刻の差があっては、いくら急いで来たところで、間に合わなかったことは確実だが、それにしても――と武蔵は残念な気がする。

「して、大蔵殿のお旅先は、いずれで御座ろうか」

訊ねると、番頭の答えは又、甚だ漠としたもので、

「御覧の通り、手前どもの店は、表を張っておりませぬし、薬草は山で製り、売子は春秋の二回に、仕入れた荷を背負って、諸国へ行商に出てしまいまする。それゆえ、主人は閑の多い体で、間があれば神社仏閣に詣でたり、湯治に日を暮したり、名所を見たりするのが道楽なのでござりましてな――今度も、多分、善光寺から、越後路を見物して、江戸へ這入るのではないかとは思

いますが」
「では、お分りにならぬのか」
「とんともう、判っきりと、行く先をいって出た例のないお方で」
それから、番頭は、
「まア、お茶をひとつ」
と、一転して、店からそこまで、歩くにもかなりかかるような奥へ茶を取りに這入って行ったが、武蔵は、ここに落着いている気にもなれない。
やがて、茶を運んで来た番頭に向い、主人の大蔵の容貌や年配を訊いてみると、
「はいはい、道中でお会いなされましても、てまえどもの御主人なら、一目でお分りになるに違いございません。お年は五十二におなりでございますが、どうして、まだ屈強な骨ぐみで、お顔は、どちらかといえば角で赭ら顔のほうで、それに疱瘡の痕がいっぱいございましてな、右の小鬢に、少々ばかり薄禿が見えまするで」
「背丈は」
「並の方とでも申しましょうか」
「衣服は、どんな物を」
「これは、今度のお旅には、堺でお求めなされたとかいう唐木綿の縞を着て行かれました。これは珍しいもので、まだ世間一般には着ているお方も稀でございますから、主人を追っておいで遊ばすには、何よりもよい目印になろうかと存じまする」
彼の人柄はそれであらまし分った。なおこの番頭を相手にして話をしていたら限りもあるま

い。折角なので、茶を一喫するとすぐ武蔵はそこを出て、先へと急いだ。
明るいうちにはもう難かしいかも知れないが、夜を通して、洗馬から塩尻の宿場を過ぎ、今夜のうちに、峠まで登って待ちかまえていれば、その間に、二刻の道程は追い越し、やがて夜明けと共に、後から奈良井の大蔵と城太郎が通りかかるに極っている。
「そうだ。先へ越えて、彼処で待てば――」
贄川、洗馬も過ぎて、麓の宿場までかかると、すでに陽はかげって、夕煙の這う往来に、軒ごとの燈火が、春の晩ながら、なんともいえない山国の侘しさを瞬いている。
そこから塩尻峠の頂までは、なお二里以上はある。武蔵は、息もつかず登りつめた。そしてまだそう更けぬうちに、いの字ケ原の高原に立ち、ほっと息をつきながら、身を星の中に置いて、しばらく恍惚となっていた。

導母の杖

一

武蔵はふかく眠った。
今、彼の眠っている小さい祠の廂には、浅間神社という額が見える。
そこは高原の一部から、瘤のように盛り上がっている岩山の上で、この塩尻峠では、さし当っ

て、ここより高い所は見当らない。
「おおうい。登って来いよ。富士山が見えるで」
ふいに耳元で人声がしたので、祠(ほこら)の縁に手枕で寝ていた武蔵は、むっくりと起きあがって、いきなり眩(まばゆ)い暁雲に眼を射られたが、人影は見えないで、はるか彼方の雲の海に、真っ赤な富士のすがたを見出した。
「ああ、富士山か」
武蔵は少年のように驚異の声を放った。絵に見ていた富士、胸に描いていた富士を、眼(ま)のあたりに見たのは、今が生れて初めてなのだった。
しかも寝起きの唐突に、それを自分と同じ高さに見出して、対(む)かい合ったのであるから、彼はしばらく吾れを忘れ、ただ、
「——ああ」
というため息を胸の中に曳いて、瞬(まじろ)ぎもせず眺め入っていた。
何を感じたのであろうか、そのうちに武蔵の面(おもて)には涙の玉が転(まろ)びはしっている。拭こうともしないで、その顔は朝の陽に灼(や)かれて涙のすじまで紅く光って見えた。
——人間の小ささ！
武蔵は衝(う)たれたのである。宏大な宇宙の下にある小なる自己が悲しくなったのであった。
明らかに彼の胸を割れば、一乗寺下り松で、吉岡の遺弟何十名という数を、まったく自己の一剣の下に征服してからは、いつのまにか彼の胸にも、
(世の中は甘いぞ)

と、ひそかに自負の芽が萌していた。天下の剣人と名乗る者は数あっても、およそ何程のものでもあるまいという慢心が首を擡げかけていた。
だが。
たとい剣に於いて、望むがごとき大豪となったところで、それがどれほど偉大か、どれほどこの地上で持ち得る生命か。
武蔵は、悲しくなる。いや富士の悠久と優美を見ていると、それが口惜しくなってくる。畢竟、人間は人間の限度にしか生きられない。自然の悠久は真似ようとて真似られない。自己より偉大なるものが厳然と自己の上にある。それ以下の者が人間なのだ。武蔵は、富士と対等に立っていることが恐くなった。彼はいつのまにか地上にひざまずいていた。
「…………」
そして合掌していた。
合わされたふたつの掌を通して、彼は母の冥福を祈った。国土の恩を感謝した。お通や城太郎の無事を祈った。また神の天地のごとく、偉大なるわけにはゆかないが、人間として、小ならば小なりに偉くなりたい——と自己の希望をも心のそこで祈った。
「…………」
なお、彼は掌をあわせていた。
すると、
——ばか、なぜ人間が小さい。
と、いう声がした。

――人間の眼に映って初めて自然は偉大なのである。人間の心に通じ得て初めて神の存在はあるのだ。だから、人間こそは、最も巨きな顕現と行動をする――しかも生きたる霊物ではないか。

――おまえという人間と、神、また宇宙というものとは、決して遠くない。おまえのさしている三尺の刀を通してすら届きうるほど近くにあるのだ。いや、そんな差別のあるうちはまだだめで、達人、名人の域にも遠い者といわなければなるまい。

合掌のうちに、武蔵がそんな閃きを胸に享けていると、

「なアる程！　よく見えらあ」

「お富士様が、このように拝める日は、すくのうござりますよ」

下から這い上がって来た四、五名の旅人たちが、手をかざして、ここの景観を称え合っていた。

その町人たちの中にも、山を単なる山としている者と、神として仰ぐ者と、自らふたつあった。

二

瘤山の下の高原の道には、もう西と東から行き交う旅人の影が、蟻のように見下ろされる。

祠の裏へ廻って、武蔵は、その道を見張っていた。――やがて奈良井の大蔵と城太郎が、麓から登って来るにちがいない。

そしてもし此方で見つけ損ねても、先方があれを見落す気づかいはあるまい――と安心していた。

なぜならば、彼は入念に、この岩山の下の道ばたに、板切れを拾って、それへこう書いて目に

つく崖に立てかけて置いてあるからである。

奈良井の大蔵どの
御通過のみぎりは
お会い申したく、
上の小祠にて、お
待ち申しおり候

城太郎の師　武蔵

ところが、往来の多い朝の一刻を過ぎ、高原のうえに陽の高くなる頃まで待っても、似た人も通らないし、彼の立ててきた札を見て、下から声をかける者もない。

「おかしいなあ?」

と、怪訝らざるを得ない気持に囚われてしまう。

「来ないわけはないが?」

と、どうしても思う。

この高原の嶺を境にして、道は甲州、中山道、北国街道の三方にわかれているし、水はみな北へ駛って、越後の海へ落ちてゆく。

奈良井の大蔵が、たとい善光寺平へ出るにしても、中山道へ向うにしても、ここを通らないという理窟は考えられない。

だが、世間のうごきを、理窟で推してゆくと、とんだ間違いが往々に起る。何か急に、方角を変えたか、まだ手前の麓に泊まっているかもしれない。腰に一日の用意は提げているが、朝飯と

午飯をかねて、麓の宿場まで戻ってみようか？
「……そうだ」
武蔵は、岩山を降りかけた。
その時である。
岩山の下から、
「あッ、いたっ」
と、ぶしつけな呶鳴り方をした者がある。
その声には、殺気があった。おとといの晩、いきなり身をかすめた棒の唸りに似ていた。はっと思いながら武蔵が岩につかまりながら下を覗くと、果たせるかな、声を投げて仰向いている眼はあの時の眼であった。
「——客人、追って来たぞ」
こう呼ばわる者は、駒ケ岳のふもとの土民権之助で、見ると、あの百姓家にいた母親までを連れている。
その老母を牛の背にのせ、権之助は、例の四尺ほどの棒と手綱を持って、武蔵の姿を睨めあげていうのだった。
「客人！　いい所で会った。だまって俺の宿から逃げ出したのは、こっちの肚を察して、躱したつもりだろうが、それでは俺の立つ瀬がねえ。もういっぺん試合をしろ。おれの杖をうけてみろ」

三

——降りかけた足を止めて、武蔵は岩と岩の間の急な細道の途中で、しばらく、岩に縋ったまま、下を見ていた。

降りて来ない、と見たか、下なる権之助は、

「阿っ母、ここで見ていさっしゃい。なにも、試合するには、平地と限ったこたあねえ。登って行って、あの相手を、眼の下へたたき落してみせる」

母の乗っている牛の手綱を放し——小脇の杖を持ち直して——やにわに岩山の根へ取りつこうとすると、

「これ！」

彼の母はたしなめた。

「いつぞやも、そのような粗忽が不覚の因ではないか。いきり立つ前に、なぜよう敵の心を読んでおかぬのじゃ。もし上から石でも落されたらどうしやる」

なお何か、母子のあいだで、交わしている声は聞える。しかし意味は武蔵の所までは聞きとれない。

その間に、武蔵は肚を決めていた。——やはりこの挑戦は避けるに如くはないという考えである。

すでに自分は、勝っているのだ。彼の杖の技倆もわかっている。改めてなお勝つ要はさらにない。

のみならず、あの一敗を口惜しがって、母子してここまで自分の後を慕って来たところを見ると、愈〻、負けずぎらいな母子の恨みの程が怖ろしい。吉岡一門を敵とした例を見ても、怨みののこるような試合はすべきでない。益は少なくて、まちがえば、天命を縮めてしまう。
それに又、武蔵は、子を盲愛するの余り人を呪う無知な老母の恐ろしさは、身にも骨にも沁みて、一日一度は必ず思い出すほどだった。
あの又八の母親――お杉ばばの影を。
何を好んで、また人の子の母から、呪いを買おう。どう考えても、これは逃げるの一手、ほかに当り障りなく通る道はなさそうに思われる。
で、彼は無言のまま、半ばまで降りて来た岩山を、又ふたたび上へ向って、のそのそと登りかけた。
「――あっ、お武家」
その背へ、下からこう呼んだのは、気の荒い息子の方ではなく、今、牛の背を降りて地上に立った老母の方であった。
「……………」
声の力にひかれて、武蔵は足もとを振りかえってみた。
見ると、老母は、岩山の根の辺りに坐って、じっと自分を見上げている。武蔵の眸が下へ振向いたと知ると、老母は両手をついているのである。
武蔵はあわてて、向き直らずにいられなかった。一夜の恩にこそ預かっているが、そして、なんの礼ものべずに裏口から逃げ出してしまってこそいるが、この長上から、地へ両手をつい

て、辞儀される事は何もしていない。
（お老母、勿体ない、お手を上げてください）
そういいたそうに、武蔵は思わず、伸ばしていた膝を屈めてしまった。
「――お武家、さだめし、我のつよい者、他愛ない奴と、お蔑みでございましょうの。恥かしゅうござりまする。しかし……遺恨の、自惚れのと、思い募るのではございませぬ。年頃、杖をつかい馴れて、師もなく、友もなく、又よい相手に巡り会わぬこの倅を、不愍と思し召して、もう一手のお教えをうけたいのでござりまする」
武蔵はなお、無言であった。けれど老母が、届きかねる声を一心に張って、こう下からいう言葉には、耳を洗って聞かなければならない真がこもっていた。
「このままお別れ申しては、どうにも残念でござります。ふたたび貴方のようなお相手に会えるやらどうやら。――なおなお、あの見苦しい敗れ方のままでは、この子も、この母も、以前は名だたる武門であった御先祖に、どう顔向けがなりましょう。意趣ではございませぬぞ。敗けるにしても、あれではただの土民がねじ伏せられただけのものでござります。折角、巡り会うた貴方のようなお方から、なにも得ずに過ぎては、それこそ口惜しい限りでございます。わしは、それを倅に叱って連れて参りました。――どうぞわしの願いをかなえて試合ってやって下されい。お願い申しまする」
いい終ると、老母は、武蔵の踵を拝むように、又、大地へ両手をつかえていた。

四

武蔵は黙って降りて来た。そして道傍の老母の手を取って、牛の背へ押しもどし、
「権どの、手綱を持て、歩きながら話そう。――試合うか、試合わぬかは、わしも歩きながら考えるとして」
と、いった。
次に彼は、黙々と、その背を母子の者に向けて歩いて行く。話しながら歩こうといったのに、その沈黙は変らない。
武蔵が何を迷っているか、権之助にはその肚が酌めないのである。疑いの眼を彼の背へ光らしている。そして一歩でも距つまいとするもののように、遅い牛の脚を叱咤しながら尾いて行った。
嫌というか。
応か。
牛の背の老母もまだ不安そうな顔に見えた。そして、十町か二十町も高原の道を歩いたかと思う頃、先に歩いていた武蔵が、
「ウム！」
と独り返辞をしながら、くるりと、踵をめぐらし、
「――立合おう」
と、いきなりいった。
権之助は手綱を捨て、
「承知か」

即座にもと思ったらしく、もう足場を見まわすと、武蔵は、意気ごむ相手を眼の外に措いて、
「じゃが――母御」
牛の背へいうのである。
「万が一のことがあってもよろしいか。試合と斬合とは持ち物がちがうだけで、紙一重ほどの相違もないが」
念を押すと、老母は初めてにこと笑って、
「御修行者、お断りまでもないことを仰せられる。杖を習び出してからもう十年。それでもなお、年下のあなたに負けるような伜であったら、武道に思いを断つがよい。――その武道に望みを断っては、生きるかいもないといいやる。さすれば、打たれて死んだとて当人も本望である。この母も、恨みにはぞんじませぬ」
「それまでにいうならば」
と、武蔵は、眸を一転して、権之助の捨てた手綱をひろい、
「ここは往来がうるさい。どこぞへ牛を繋いで、心ゆくまで、お相手いたそう」
いの字ケ原のまっただ中に、枯れかけている一本の巨きな落葉松が見える。あれへと指して、武蔵はそこへ牛を導き、
「権どの。支度」
と、促した。
待ちかねていた権之助は、おうと武蔵の前に棒をひっ提げて立った。武蔵は直立したまま、相手を静かに見た。

武蔵には木剣の用意がない。そこらの得物を拾って持つ様子もなかった。肩も張らず、二本の手は柔かに下げたままである。
「支度をしないのか」
今度は権之助からいった。
武蔵は、
「なぜ？」
と、反問した。
権之助は、憤っと、眼から出すような声で、
「得物を把れ、何でも好む物を」
「持っておる」
「無手か」
「いいや……」
首を振って、武蔵は、左の手をそっと忍ばすように、刀の鍔の下へ移して、
「此処に」
といった。
「なに！　真剣で」
「………」
答えは、唇の端に歪めた微笑を以てした。低い一声、静かな呼吸の一つも、もう徒らに費やす

ことはできないものになっている。
落葉松の根元へ、濡れ仏のように、べたっと坐り込んでいた老母の顔は、途端にさっと蒼ざめた。

五

——真剣で。
武蔵がいったために、老母は急に動顛したのであろうか。
「ア。待って賜も」
ふいに横からいった。
だが、武蔵の眼、権之助の眼、そう双つのものは、もうそれ位な制止では、針程も動かなかった。
権之助の棒は、この高原の気をみんな吸って、一撃の唸りにそれを噴き出そうとするもののように、じっと小脇に含んで構え、武蔵の片手は、鍔の下に膠着したまま、相手の眼の中へ、自分の眼光を突っこむような眼をしているのである。
もう二人は、内面に於て、斬り結んでいるのである。眼と眼とは、この場合、太刀以上、棒以上に相手を斬る。まず眼を以て斬り伏せてから、棒か刃か、どっちかの得物がはいって行こうとするのである。
「待たッしゃれ！」
老母は、また叫んだ。

「――何か？」
と、答えるためには、武蔵は四、五尺も後へ身を退いていた。
「真剣じゃそうな」
「いかにも。――木剣でいたしても、真剣でいたしても、拙者の試合は同じことですから」
「それを止めるのではないぞえ」
「お分りならばよいが、剣は絶対だ……手にかける以上、五分までの、七分までの、そんな仮借があるものではない。――さもなくば、逃げるかがあるばかり」
「元よりの事。――わしが止めたは、それではない。これほどな試合に、後で名乗り合わなんだ事を悔やんではと――ふと思い寄ったからじゃ」
「うむ、いかにも」
「怨みではなし、しかし、どちらから見ても、会い難きよい相手、この世の縁。――権よ、そなたから名乗ったがよい」
「はい」
権之助は、素直に一礼して、
「遠くは、木曾殿の幕下、太夫房覚明と申し、その人を家祖といい伝えております。なれども、覚明は木曾殿の滅亡後、出家して、法然上人の室に参じておりますゆえ、その一族やも知れませぬ。年久しく、土民として今、私の代に至りましたが、父の世の頃、或る恥辱をうけ、それを無念におもいまして、母と共に誓いをたて、御岳神社に参籠して、必ず、武道をもって世に立つことを神文に誓ったのです。――そして神前に於て、会得したこの杖術を、自ら夢想流と称し、人

はてまえを呼んで、夢想権之助といっております」
彼が口を結ぶと、武蔵も礼儀を返して、
「拙者の家は、播州赤松の支流、平田将監の末で、美作宮本村に住し、宮本無二斎とよぶものの一子、同苗武蔵であります。さして、有縁の者もおりませず、又、元より武辺に身をゆだねて世にさすらう以上は、たとえこれに於て、其許の杖の下に、敢なく一命を終ろうとも、毛骨のお手数などは御無用な業です」
と、いった。そして、
「では」
と、立ち直ると、権之助も杖を把り直して、
「では」
と、応じた。

六

松の根もとに坐りこんだ老母はその時、息もしていないように見えた。
降りかかった災難とでもいうならば兎も角、われから求めて、追いかけて来てまで、わが子を今、白刃の前に立たせている。――常人には到底考えられない心理の中に、しかし、この老母は自若としているのだ。万人が何といおうが、自分だけは深く信じるところがあるもののような姿をして――。
「…………」

べたんと、坐ったまま、肩をすこし前へ落し、行儀よく両手を膝にかさねている。幾人の子を生み、幾人の子を亡くして、貧苦の中に耐えてきた肉体か、その姿はいかにも小さい。そして萎みきっている。

——だが今、武蔵と権之助とが、何尺かの土の間に対峙して、

「では」

と、戦端を切ったせつなに、老母の眸は、天地の仏神が皆集まってそこから覗いているような、巨大な光を発した。

彼女の子は、すでに武蔵の剣の前に、その運命を曝していた。武蔵が鞘を払った瞬間に、権之助はもう自分の運命がわかったような気がして、体がさっと冷たくなった。

（はて、この人間は？）

と今、観えて来たのである。

いつぞや、わが家の裏で、不用意に闘って感得した敵とはまるでその体が違う。文字でいうならば、彼は、草書の武蔵を見て、武蔵の人間を律していたが、きょうの厳粛で、一点一画もゆるがせにしない、武蔵の楷書の体を見て、自分が敵を量るに、意外なまちがいを抱いていたことを覚ったのである。

又、それが覚れる権之助であるから、いつぞやは自信にまかせて、滅多打ちに振りこんだ杖も、きょうは、頭上へたかく振りかぶったまま——まだ一打の唸りすら呼び起すことができない。

「…………」

「…………」

いの字ケ原の草靄は、かかるあいだに薄ッすらと霽れかけていた。遠くかすんでいる山の前を、一羽の鳥影が悠々と横ぎってゆく。

――パッと、二人のあいだの空気が鳴った。飛ぶ鳥も落ちるような見えない震動である。それはまた、杖が空気を搏ったのか、剣が大気に鳴ったのか、いずれともいえないことは、禅でいう、隻手の声は如何というのと同じことである。

――のみならず双方の五体と得物の一如なうごき方は、とても肉眼に依って見て取ることは難かしい。はっと、視覚から脳へそれが直感する一秒間の何分の一かわからない一瞬に、すでに眼に映る二人の位置と姿勢はまるで変っている。

権之助が振り落した一撃は、武蔵の体の外を搏ち、武蔵が小手を翻して、中位から上位へ向けて薙ぎ上げた刃は、権之助の体の外とはいいながら、殆ど右の肩から小鬢の毛をかすめるくらいに閃いていた。

同時に、この場合も、武蔵の刀は、彼のみの持っている特質として、相手の身を外れて行く所まで行くと、ヒラと、すぐ松葉形に切先を返して来た。この返す切先の下こそ、いつも彼の相手の地獄となるところであった。

ために、第二撃を、敵に与える遑もなく、権之助は杖の両端を持って、武蔵の刀を、頭上で受け止めた。

かんと、彼の額の上で、杖は鳴った。白刃と杖とのこんな場合、杖は当然両断になってしまいそうなものだが、刃が斜めに来ない限り、決して切れるものでない。従って、受ける方にも、そ

の手心があって、権之助が頭上へ横に翳した杖は、敵の手元へ深く左の肱を突ッこみ、右の肱をやや高く折り曲げて、咄嗟、武蔵のみずおちを、杖の突端で突かんとしながら受けたものであった。しかし武蔵の刃はたしかに止まったが、その捨て身な迅業は、成功しなかった。――なぜならば、杖と刀とが、彼の頭上で、がっきと十字に嚙み合ったせつな、杖の先と武蔵の胸のあいだには、惜しくも、ほんの一寸ほどな空間を残していたからである。

七

これが、刀と刀との場合ならば、つば競りというのであろうが、一方は刀でも、一方は杖である。

無碍にそれをやろうとすれば、忽ち、焦心だつほうが敗れるに極まっている。

押してもゆけない。

引きもならない。

杖には鍔がない、刃がない、又、切先も柄もない。

けれど、丸い四尺の杖は、その全部が刃であり、切先であり、又、柄であるともいい得る。従って、これを上手に使われると、杖の千変万化なことは、到底、剣の比ではない。

剣の六感で、

（こう来るな）

というような測定をもったらとんだ目にあう。杖は、時によって、刀のような性格を持って、短槍と同じ働きもするからである。

十文字になった杖と刀の上から、武蔵が刀を引けない理由は、その予測がゆるされないからであった。

権之助の方はなおさらである。彼の杖は、武蔵の刀を、頭上に支えているのであるから、受身の体であった。——引くはおろか、もし、満身の気魄を、びくとでも弛めたらば、

(得たり)

と、武蔵の刀は、そのまま一押しで、彼の頭を砕いてしまうであろう。

御岳の夢想をうけて、杖の自由を体得したという権之助も、今はどうすることも出来なかった。

見ているまに、彼の顔は蒼白になって行った。下唇へ前歯がめりこんでいる。吊るしあがった眼じりから脂汗がねっとりと流れ出す。

「………」

頭上に受けとめている杖と刀の十字が波を打ってくる。その下に、権之助の息が刻々に荒くなっていた。

——すると。

その権之助以上、蒼ざめた形相となって、松の根がたから凝視していた老母が、

「権ッ」

と、さけんだのである。

権——と絶叫した瞬間に老母はわれを忘れていたに違いない。坐っていた腰を伸び上げて、その腰を自分で強かに打ちながら、

「腰じゃわえ！」
と罵って、そのまま血でも吐いたのか、前へのめってしまった。
武蔵も権之助も、ふたりとも石に化るまで離れそうにも見えなかった杖と刀が、とたんに、噛み合ったせつなよりも凄まじい力を持って、ぱッと離れた。
武蔵の方からである。
退いたのも、二尺や三尺ではない。右か左か、どッちかの踵が、土を掘ったような勢いであった。その反動、彼の体は七尺も後ろへ移っていた。
しかし、その距離は、権之助の飛躍と、四尺の杖に、すぐ迫られて、
「――あッ」
と、武蔵は辛くも横へ払い退けた。
死地から攻勢に立ったとたんに払い捨てられたので、権之助は、頭を大地へ突っこむような勢いで、だッと、前へのめった。そして、強敵に会った隼が、死にもの狂いとなったように、髪逆立てた武蔵の眼の前に、明らかに、空いている背中を曝してしまった。
一本の雨のような細い閃光が、その背を切った。――ううっと、仔牛のように唸きながら、権之助はなお、とととと、三足ほど歩いてそのまま仆れ、武蔵も片手でみずおちを抑えながら、草の中へ、どたっと、腰をついて坐ってしまった。
そして、
「――負けた！」
と叫んだ。

武蔵がである。
権之助は声もない。

八

前のめりに仆れたまま、権之助はいつまでも動かなかった。——それを見入っているうちに、老母も喪心してしまった。
「みね打ちです」
武蔵は、老母へ向って、こう注意を与えた。それでもまだ、老母が起って来ないので、
「はやく、水をおやりなさい。御子息には、何処も怪我はない筈だ」
「……えっ？」
老母は、初めて顔を上げ、やや疑うように権之助の姿を見ていたが、武蔵のいうとおり、血にまみれてはいなかったので、
「オオ」
次には、踉めいて、いきなりわが子の体へ、縋りついた。水を与え、名を呼んで、老母がその体を揺り動かすと、権之助は息をふき返した。——そして茫然と坐っている武蔵を見ると、
「怖れ入りました」
いきなりその前へ行って土に額ずいた。武蔵はわれに還ると共に、慌ててその手を握り取って、
「いや、敗れたのは、其許ではない、拙者の方です」

彼は、襟元を披いて、自分のみずおちを、二人へ見せた。

「杖の先が、赤い痕になっているでしょう。もう少し入ったら、恐らく拙者の生命はなかったに違いない」

いいながらも、武蔵はまだ、茫然としているのである。どうして敗れたかを理解し切るまでは。

同じように、権之助も老母も、彼の皮膚にある一点の紅い斑点をながめて、口もきけなかった。

武蔵は襟を合わせて、老母に訊ねた。――今、二人が試合のうちに、腰！と叫んだのは何のためか。あの場合、権之助殿の腰構えに、抑、どういう虚を見出されて、あんな声を発しられたのか。

すると、老母は、

「お恥かしい事じゃが、せがれはただ、あなたの刀を杖で支えるに必死となって、両足を踏まえておりました。退いても危ない、突いても危ない、絶体絶命の縛りに会っての。――それを横から見ておるうち、はっと、武術も何も判らぬわしにすら見えた虚がある。それは――あなたの刀に心のすべてを奪われていたから縛りに会ったのじゃ。手を引こうか、手をもって突こうかと、逆上っているので更に気がつかぬようじゃったが、あの体のまま、手もそのまま、ただ腰を落しさえすれば、自然に杖の先が、相手の胸元へどんと伸びる……そこじゃと、思うたので、何を叫んだのやら思わず口走ったのでござりました」

と、いう。

武蔵はうなずいた。よい教えを受けたと、この機縁に感謝した。

黙然と、権之助も聞いていた。彼にも何か会得するところがあったに違いない。これは、御岳の神の夢想ではない、眼の前に、子が斬られるか生きるかの境を見て、現実の母が、愛の中から摑み出した「窮極の活理」であった。

木曾の一農夫権之助、後に、夢想権之助と称して、夢想流杖術の始祖となった彼は、その伝書の奥書に、

〝導母の一手〟

なる秘術を誌して、母の大愛と、武蔵との試合を審らかにしているが「武蔵に勝つ」とは書いていない。彼は生涯、武蔵に負けたと人にも語り、その負けたことを尊い記録としていた。

それはそうと、この母子の多幸を祈って別れ、いの字ケ原を去って、武蔵が上諏訪の辺りまで行き着いたかと思わるる頃、

「この道筋を、武蔵という者が通らなかったであろうか。慥に、この道へ来たわけだが——」

と、馬子の立場だの行き交う旅人に、途々訊合わせながら、後を慕ってゆく一名の武家があった。

一夕の恋

一

どうも痛む……。

みずおちの中心を外れて少し肋骨にかかっている。夢想権之助からうけた杖の痛みである。

麓か、上諏訪のあたりに足をとめて、城太郎の姿を探し、お通の消息を知らねばならぬと思うのであったが、なんとなく気が冴えない。

彼は、下諏訪まで足を伸ばした。下諏訪まで行けば温泉がある。そう思ってから急に真っ直に歩いたのである。

湖畔の町は、町屋千軒といわれていた。本陣の前の屋根のある風呂小屋が一ヵ所見えたが、後は往来傍にあって、誰が入浴ろうと怪しむ者はない。

武蔵は、着物を立木の枝に懸け、大小を括り付けた。そして、野天風呂の一つに体を浸けて、

「ああ」

と、石を枕に、眼をふさいだ。

今朝から革ぶくろのように硬ばっていたみずおちを、そうして湯の中で揉んでいると、眠くなるような快さが血管を繞ってくる。

陽が傾きかけている。
漁師の家でもあろうか。湖畔の家と家の間から見える水面には、茜色の淡靄が立って、それも皆湯のように感じられる。二、三枚の畑を隔てたすぐそこの往来には、馬や人間や車の行き交う物音が頻繁であった。
と――その辺の油や荒物を売っている小やかな店先で、
「草鞋を一足くれぬか」
と床几を借りうけて、足拵えを直している侍がいっているのである。
「うわさはこの辺へも聞えておろう。京都一乗寺の下り松で、吉岡方の大勢を一身にうけ、近頃ではめずらしい、よい試合ぶりをした男だ。確かに通ったに違いないが、気づかなかったかの」
塩尻峠を越えると間もなくから、往来を訊いて歩いている例の武家であった。そのくせ、そうよくは知らないと見えて、問われた者から、服装や年頃などを反問されると、
「さあ、その程は」
と、あいまいなのである。
しかし、何の用があるのか、熱心は熱心で、そこでも見かけないという返辞を聞くと、ひどく落胆して、
「何とか、会いたいものだが……」
と、草鞋の緒をくくり終えても、まだ愚痴のように繰返している。
自分の事ではないか。
武蔵は、畑越しに、湯の中からその武家を篤と見ていた。

旅焦けのしている皮膚――四十ぐらいな年配――牢人ではない主持である。

笠の紐癖でそそけているのかも知れないが、小鬢の毛が荒く立って、これが戦場に立ったら、武者面のほども偲ばれる骨柄である。裸にしたら鎧ずれや具足だこで鍛え抜かれている体だろうとも思われる。

「はて……覚えがないが」

考えている間に、武家は立ち去ってしまった。吉岡の名を口にしたところから見て、事によったら、吉岡の遺弟ではあるまいかなどとも思ってみる。

あれだけの門下のうちだ。気骨のある人間もいよう。奸計をめぐらして、復讐しようとつけ狙っている者がないとはいえない。

体を拭き、衣服を着けて、武蔵がやがて往来へ姿を現すと、何処からか出て来た最前の武家が、

「お訊ね申すが」

と、ふいに彼の前に会釈して、しげしげと顔を見ながらいった。

「もしや尊公は、宮本殿ではござるまいか」

二

不審顔に、武蔵がただ頷くと、彼を糺したその武家は、

「やあ、さてこそ」

と、自分の六感に凱歌をあげて、又、さもさも懐かしげに、

「とうとうお目にかかることが出来、大慶至極。……いや何かしら、今度の旅では、何処かでお目にかかれるような気持が、初めからいたしておった」
と、独りで欣んでいる。
そして武蔵が、何を問う遑もなく、とにかく今夜はご迷惑でも同宿ねがいたいといい、
「さりとて、決して不審な者ではござらぬ。こう申しては、烏滸のようなれど、いつも道中には、供の者十四、五名は連れ、乗り換え馬の一頭も曳かせて歩く身分の者でござる。念のため名乗り申すが、奥州青葉城の主、伊達政宗公の臣下で、石母田外記という者でござる」
とつけ足した。
意にまかせて伴われてゆくと、外記は湖畔の本陣に泊りを定め、通るとまず、
「風呂は」
と、自分で訊ねながら、すぐ自分で打ち消して、
「いや、尊公はもう、野天風呂でおすみじゃな。では失礼して」
と、旅装を解き、気軽に手拭を持って、出て行ってしまう。
おもしろそうな男ではある。しかし武蔵にはまだ分っていない。一体、何であんなに自分の後を尋ね、自分に親しみを持っているのか？
「おつれ様も、お召替えなさいませぬか」
と、宿の女が、どてらを出して彼へすすめる。
「わしは要らぬ。都合によっては、ここへ泊るか泊らぬか、まだ分らぬのだから——」
「おや、左様でございますか」

開け放してある縁へ出て、武蔵はようやく暮れてきた湖水へ眸をやり、その眸に、又ふと、
「どうしたか？」
と、物思わしく、彼女の悲しむ時の睫毛などを、描いていた。
うしろで女中が膳をすえている物音が静かにする。やがて燈火が背から映す。そして欄の前のさざ波は、見ているうちに濃藍から真っ暗になってゆく。
「……はてな、この道へ来たのは、方角を取り違えたのではないか。お通は誘拐されたという。女を誘拐す程な悪い奴が、こんな繁華な町へさしかかるわけはない」
そんな事を考えたりしていると、耳に彼女の救いをよぶ声が聞えるような気がする。何事も天意だと達観していながら、すぐ居ても立ってもいられない心地がしてくる。
「いや、どうも、大きに失礼を仕った」
石母田外記が戻って来た。
「さ、さ」
と早速、膳の前へ、着座をすすめたが、自分だけのどてら姿に気づいて、
「尊公も、どうぞ、お着替えくだされい」
と、強っていう。
それを武蔵も、強って固辞して、常に樹下石上のおきふしに馴れている身、寝るにもこのままの姿、歩くにもこのままの姿、それでなかなか寛げもすれば窮屈でございませぬと答えると、
「いや、それよ」
と、外記は膝を叩いて、

「政宗公のお心がけは、行住坐臥、やはりそこに御座る。かくもあろう人とは思っていたが、ウウムさすがは」
と、燈火を横にうけている武蔵の顔を、穴のあく程、見惚れているのだった。
そして我に返ると、
「いざ。おちかづきに」
と、杯を洗って、これからの夜を心ゆくまで楽しもうとするもののように、慇懃に一献向ける。
辞儀だけして、手は膝においたまま、武蔵は初めて訊ねた。
「外記殿。これは一体どうしたご好意でござりますか。路傍の拙者を追って、このお親しみは？」

三

改まって、何のために？　と武蔵から訊かれると、外記は初めて、自分の独りのみ込みに気づいたらしく、
「いや成程、ご不審はごもっともじゃ。――しかしべつだん意味はないので、強いて、何のために、路傍のそれがしが路傍の尊公に、かくまでも親しみを持つかと問わるるならば――一言で申さば――惚れたのでござるよ」
と、いって又、
「あははは。男が男に、惚れたのでござるよ」

と、いい重ねる。
石母田外記は、これで十分、自分の気持を説明したつもりらしいが、武蔵にとっては、少しも説明された事にはならない。
男が男に惚れるということはあり得よう。けれど武蔵はまだ、惚れる程な男に会った経験がない。
惚れるという対象に持つには、沢庵は少し恐すぎるし、光悦とは住む世の中が隔たりすぎ、柳生石舟斎となるともう余りに先が高すぎて、好きな人とも呼びかねる。
かくて過去の知己を振向いてみても、男が惚れる男などが、そうある筈のものではない。――それをこの石母田外記は無造作に、
(あなたに惚れた)
と、自分へいう。
お追従であろうか。そんな事を軽々しくいう男はよほど軽薄と思ってもよい。
けれど外記の剛毅な風貌から見ても、そんな軽薄な徒ではないことは、武蔵にも何だか分る気がするのである。
そこで彼は、
「惚れたと仰っしゃるのは、いかなる意味でございましょうか」
愈〻、真面目に、こう問い直すと、外記はもう次にいうことばを待っていたように、
「――実は、一乗寺下り松のお働きを伝え聞いて、失礼ながら、今日まで、見ぬ恋にあこがれておったのじゃ」

「ではその頃、京都に御逗留でございましたか」
「一月より上洛して、三条の伊達屋敷におりましたのじゃ。あの一乗寺の斬合いがあった翌日、何気なくいつも参る烏丸光広卿をお館にたずねてゆくと、そこで種々な尊公の噂。お館は一度、尊公とも会ったことがあると仰せられ、お年ばえや、閲歴なども承って、愈〻思慕のおもいに駆られ、どうかして一度、会いたいものと念じていた願いかなって——今度の下向に、計らずも尊公が、この道を下っているということを——あの塩尻峠に書いておかれた立札で承知したのでござる」
「立札で？」
「——されば、奈良井の大蔵とかをお待ちになる由を、札に書いて、道ばたの崖へ立てて置かれたであろう」
「ああ、あれを御覧になられたのですか」
武蔵はふと世の中の皮肉をおぼえた。——此方で探し求める者とは巡り会わずに、かえって、思いがけない無縁の人にこうして探し当てられているとは——
だが、外記の心を聞いてみれば、この人の表情は身に過ぎて勿体ない。三十三間堂の果し合いといい一乗寺の血戦といい、武蔵にとっては、むしろ慚愧な傷心が多く、誇る気もちなどは毛頭ないが、あの事件は、相当世間の耳目を聳動して、うわさの波を天下に拡げているらしい。
「いや、それは面目ないことです」
武蔵は、心からいった。そして心から恥ずかしかった。こんな人に惚れられる資格など自分にないと思うのであった。

ところが外記は、
「百万石の伊達武士のうちにも、よい侍はずいぶんいる。又、こう世間を歩いてみるに、剣の達人上手も少なくない。したが、尊公のようなのは稀でござろう。末たのもしいというのは尊公のような若者じゃ。まったくそれがしは惚れました」
と、称揚して熄まない。――そして又、
「で、今夜は、それがしが一夕の恋を遂げた訳。ご迷惑でも、どうか一献お過ごしあって、存分、我儘をいってもらいたいのじゃ」
と、手の杯を洗い直した。

四

武蔵は心を開いて杯をうけた。そして例のごとくすぐ赤くなってしまう。
「雪国の侍は、みな酒が強うござるよ。――政宗公がおつよいので、勇将の下、弱卒なしで」
と、石母田外記は、まだなかなか酔うほどに行っていない。
酒を運ぶ女に、幾度か、灯を剪らせて、
「ひとつ今夜は、飲み明かし、語り明かそうではないか」
武蔵も腰をすえて、
「やりましょう」
と、笑みを含み、
「――外記殿は最前、烏丸のお館へはよく参ると仰せられたが、光広卿とご懇意でございます

か」
「ご懇意という程でもないが——主人の使いなどで、しげしげ参るうちに、あのように御気さくなので、いつのまにか、馴々しゅう伺っておるので」
「本阿弥光悦どののお紹介わせで、私もいちど、柳町の扇屋でお目にかかりましたが、公卿にも似あわぬ、快活な御気性と見うけました」
「快活？　……それだけで御座ったかの……」
と外記はすこしその評に不満らしく、
「もっと長く話してみたら、必ずあの卿が抱いている情熱と智性でもお感じになったであろうに」
「何分、場所が、遊里でござりましたゆえ」
「なる程、それではあの卿が、世間を化かしている姿しかお見せなさるまい」
「では、あの方の、ほんとの相はどこにあるのですか」
何気なく、武蔵が問うと、外記は坐り直して、ことばまで改め、
「憂いの中にあるのでござる」
と、いった。
そして、なお、
「——その憂いは又、幕府の横暴にあるのでござりまする」
と、いい足した。
湖水のゆるい波音のあいだに、白々と燈は揺れていた。

「武蔵どの。――尊公はいったい、誰のために、剣を磨こうとなされるか」
こんな質問は、受けたことがない。武蔵は率直に、
「自分のために」
と、答えた。
外記は大きく、
「ム。それでいい」
と頷いたが、又すぐ、
「その自分は、誰のために」
と、たたみかける。
「…………」
「それも自分のためか。まさか尊公ほどな精進を持つ者が、小さな自己の栄達だけでは、ご満足がなるまいが……」
話は、こんな緒口から始まったのである。いやむしろ外記がこんな緒口を自分でつくって、自分の話したい本心を抜き出したといったほうが適切かも知れない。
彼の話によると、今、天下は家康の手に帰して、一応、四海万民みな泰平をたたえているやに見えるが、いったい、ほんとに民のために幸福な世の中が出来たろうか。
北条、足利、織田、豊臣――と長いあいだに亙って、いつも虐げられてきたものは、民と皇室である。皇室は利用され、民は値なき労力のみにこき使われ――両者のあいだにただ武家の繁栄だけを考えて来たのが、頼朝以後の武家政道――それを倣った、今日の幕府制度ではあるまい

か。

信長は、ややその弊に気づき、大内裡を造営して見せたり、秀吉も後陽成天皇の行幸を仰いだり、一般を賑わし楽しませる庶民の福祉政策を取ったりもしたが、家康の政策が本意とする所は、飽くまで徳川家中心で、ふたたび庶民の幸福も皇室も犠牲にして、幕府ばかり肥え太ってゆく専横時代がやって来るのではなかろうかと、世の趨く先が案じられる――。

「それを案じている者は、天下の諸侯中でも、わが主君伊達政宗公より他にはござらぬ。――そして公卿では烏丸光広卿などで」

と、石母田外記は、いうのであった。

五

自慢というものは元より聞きづらいものだが、主人の自慢だけは聞いていても悪い気はしない。

わけてこの石母田外記は、主人自慢であるらしかった。今の諸侯の中で、心から国を憂い、また皇室へも、心から直な心をよせている者は、政宗を措いて誰もいない――というのである。

「……ははあ」

武蔵はただそう頷く。

彼には、正直なところ、そう頷くだけの知識しかなかった。関ケ原の以後、天下の分布図は一変したが、

(世の中がだいぶ変ったな)

と思うだけで、秀頼方の大坂系大名がどう動こうとしているか、徳川系の諸侯が何を目企みつつあるか、島津や伊達などの惑星が、その中にどう厳存しているか――などという大きな時勢への眼は、改めて向けてみた事もないし、それらの常識は、至って浅かった。
それも加藤とか、池田とか、浅野、福島などといえば、武蔵にも、二十二歳の青年並の観察は持っているが、伊達などというと、もう漠として、
（表高は、六十余万石だが、内容は百万石以上もある陸奥の大藩）
という以外、これぞという知識も持ち合せていない。
だから、ははあと、頷くばかりで、時には疑い、時には、
（政宗とは、そんな人物か）
と、聞き入るのであった。
外記は、数々な例証をあげて、
「わが主人政宗は、一年二回は必ず国内の産物を挙げて、近衛家の手より禁中へ献上なされる。――どんな戦乱の年でも、この伝献を怠られたことはござらぬ。――今度、自分が都へ上ったのも、その伝献の荷駄について上洛いたしたので、無事お役を果したので、帰り途だけ閑暇を賜わって、ひとり見物がてら仙台までもどる途中でござる」
といい、又――
「諸侯のうちで、城内に、帝座の間を設らえてあるのは、わが青葉城があるばかりでござろう。御所の改築の折、古材木をいただいて、遠く船で運んで来たものとか申しまする。とはいえ、いとも質素なもので、主人は朝夕、遠く仰拝する室としているばかりでござるが、武家政道の歴史

に鑑みて、一朝、見るに見かねる基状でも世に行われれば、いつ何時でも、朝廷方の御名をかりて、武家をあいてに戦うお心を抱いておられるのじゃ」
外記は、そういってなお、
「そうじゃ、こういうお話もある。それは、朝鮮御渡海の時――」
と、話しつづける。
「あの役の折には、小西、加藤など、各〻が功名争いして、いかがわしい聞えもござったが、政宗公のお態度はどうであったか。朝鮮陣中で、背に日の丸の旗差物をさして戦われたのは、政宗公おひとりで御座ったぞよ。お家の御紋もあるに、何故に左様な旗差物をお用いあるかと人が問われた時、公はこう仰せられた。――いやしくも海外に兵をひっさげて参った政宗は、一伊達家の功名などで戦い申そうか。又、一太閤のために働き申すのでもない。この日の丸の旗を故郷のしるしと見て身を捨て申す覚悟――とお答えになったとか」
武蔵は、何しろ興味ふかく聞いていた。外記は杯を忘れている。

六

「酒が冷えた」
外記は手をたたいて女を呼んだ。そしてなお、酒をいいつけそうなので、武蔵はあわてて、
「もう十分です。私は湯漬を頂戴いたしたい」
固辞すると、
「……何の、まだ」

と外記は、残り惜し気に呟いたが、相手の迷惑を思ったか、急に、
「では、飯を貰おうか」
と、女へいい直した。
湯漬を喰べながらも、外記はまだ頻りと主人自慢を話しつづけている。中で武蔵が心を傾けさせられたものは、政宗公という一箇の武辺を中心として、伊達藩の者がこぞって、
（如何に武士たるべきか）
と――武士の本分を、「士道」というものを、磨き合っている風の旺んなことだった。
今の社会に、「士道」はあるかないか、といえば、武士の興った遠い時代から、漠とした士道はあった。けれど漠としたままそれは古い道徳となり、乱世のつづくうちに、その道義も乱れ果てて、今では太刀を持つ人間の間に、かつての古い士道さえ見失われてしまっている。
そしてただ、
（武士だ）
（弓取りだ）
という観念だけが、戦国のあらしと共に強まっているのみである。新しい時代は来つつあるが、新しい士道は立っていない。従ってその武士だ、弓取りだと自負する者のうちには、屡〻、田夫や町人にも劣る下劣なのが見かけられる。勿論、そういう下劣なる武将は、自ら滅亡を招いてはゆくが、そうかといって、真に「士道」を研いて、自国の富強の根本としてゆこうと自覚している程な将は――まだ豊臣系や徳川系の諸侯を見わたしても極めて少ないのではあるまいか。
かつて。

それは姫路城の天主の一室へ、武蔵が、沢庵のために、三年のあいだ幽閉されて、陽の目もみずに書物ばかり見ていたあの頃である。

あの沢山な池田家の蔵書の中に、一冊の写本があったことを覚えている。それには、

不識庵様日用修身巻

という題簽がついていた。不識庵とは、いうまでもなく、上杉謙信のことである。書物の内容は、謙信が自身の日用の修身を書きならべて、家臣へ示したものであった。

それを読んで武蔵は、謙信の日常生活を知ると共に、あの時代、越後の富国強兵な謂われを知った。――けれど「士道」というものにまではまだ思い至らなかった。

所がこよい、石母田外記の話をいろいろ聞いていると、政宗はその謙信にも劣らない人物と思われて来るのみでなく、伊達一藩には、この乱麻の世の中にあって、いつのまにか、幕府権力にも屈しない「士道」を生み、それを磨き合っている風が勃々として、ここに在る、石母田外記一人を見ても、分る気もちがするのであった。

「いや、思わず、それがしばかり勝手なことを喋舌ったが……どうじゃな武蔵殿。いちど仙台へもお越しなさらぬか。主人は至って無造作なお方でござる。士道のある侍なら、牢人であろうと、誰であろうと、お気易くお会いなされる質じゃ。それがしから御推挙もいたそう。ぜひおいでなされ。――ちょうどこうした御縁の折、何ならば、御同道申してもよいが」

膳を下げてから、外記は、熱心にこうすすめたが、武蔵は一応、「考えた上で」と答えて、臥床にわかれた。

べつな部屋へわかれて、枕についてからも、武蔵は眼が冴えていた。

——士道。

じっと、そこに、思索をあつめているうちに、彼は、忽然と、それを自己の剣に省みて悟った。

——剣術。

それではいけないのだ。

——剣道。

飽くまで剣は、道でなければならない。謙信や政宗が唱えた士道には、多分に、軍律的なものがある。自分は、それを、人間的な内容に、深く、高く、突き極めてゆこう。小なる一個の人間というものがどうすれば、その生命を托す自然と融合調和して、天地の宇宙大と共に呼吸し、安心と立命の境地へ達し得るか、得ないか。行ける所まで行ってみよう。その完成を志して行こう。剣を「道」とよぶところまで、この一身に、徹してみることだ。

——そう心に決定をつかんでから、武蔵はふかく眠りに落ちた。

銭

一

眼をさますと、武蔵はすぐ思い出す。——お通はどうしたろう。又、城太郎はどこを歩いてい

るだろう。
「やあ昨夜は」
と、朝の膳で、石母田外記と顔をあわせる。忘れるともなく話に紛れて、やがて旅籠を立ち出ると、この二人も、中山道を往還する旅人の流れの中に交じって行く。
武蔵は、その行き来の流れに、絶えず無意識のうちにも眼をくばっていた。
似た人の後ろ姿にも、はっとして、
(もしや?)
と、すぐそれかと思う。
外記も気がついたのか、
「誰方か、お連れでも、お探しかの」
と、訊く。
「さればです」
と、武蔵は掻いつまんで事情を話し、江戸へ参るにしても、途々、その二人の安否を心がけて行きたいから、ここでべつな道を取りたいと、それを機に、夜来の礼をのべて別れかけた。
外記は、残念そうに、
「折角よい道連れと存じたが、それではぜひもござらぬ。――したが、昨夜も諄々お話しした が、ぜひ一度、仙台の方へお越しください」
「忝う存じます。――折もあらば又」
「伊達の士風を見ていただきたいのじゃ。さもなくば、さんさ時雨を聞くつもりでおざれ。歌も

いやならば、松島の風光を愛でに渡らせられい。お待ち申すぞ」
そういって、一夜の友は、すたすたと和田峠の方へ一足先に行ってしまった。何となく心ひかれる姿だった。そして武蔵は心のうちで、いつか、伊達の藩地を訪ねてみようとその時思った。
その時代、こういう旅人に出会うことは、武蔵ばかりでなかったろう。なぜならば、まだ明日をも知れぬ天下の風雲である。諸国の雄藩は頻りと人物を求めている。路傍からよい人物を見出して行って、主君へ推挙することは、家臣として、大きな奉公の一つだからであった。
「旦那、旦那」
後ろで誰か呼びかける。
一度和田の方へかかりながら武蔵が又、足を回らして、下諏訪の入口へもどり、甲州街道と中山道のわかれに立って、思案にくれていると、その姿を見かけて来た宿場人足たちの声なのである。
宿場人足といっても、荷持もあれば馬曳きもあるし、これから和田へかけては登りなので、極めて原始的な山駕の駕かきもいる。
「――何か？」
と、武蔵はふり返った。
その姿を、無作法に眼で撫で廻しながら、人足たちは木像蟹のような腕を拱んで近づいて来た。
「旦那あ。さっきからお連れを探している様子だが、お連れは別嬪ですかえ。それともお供でもおあんなさるかね」

二

持たせる荷物もないし、山駕(かご)を雇う気もない。
武蔵はうるさく思って、
「いや……」
と、首を振ったのみで、黙々と、人足たちの群を離れて、歩みかけたが、彼自身まだ、
(西せんか？　東せんか？)
心に迷っている姿だった。
一度は、何事も天意にまかせて、自分は江戸表へと、心に極めたが、やはり城太郎をふと考え、お通の身を思うと、そうも行かない。
(そうだ、きょう一日だけでも、この附近を尋ねてみよう。……もしそれでも知れなければ、一先ず諦めて先へ立つとして)
彼の考えが極まった時、
「旦那、もしや何か、お探しになる事でもあるなら、どうせあっしらは、こうして陽なたぼッこして遊んでいるので御座いますから、お指図なすっておくんなさいまし」
又、寄って来た人足の一人がいうと、他の者も、
「駄賃なんざあ、いくらくれとは申しません」
「一体お探しになっているのは、お女中でござんすか、御老人ですかえ」
余りいうので、武蔵も、

「実は――」
と仔細を話して、誰か、そんな少年と若い女を、この街道筋で見かけた者はないかと訊くと、
「さあ？」
と、彼等は顔を見合わせ、
「誰もまだ、そんなお人は、見かけねえようですが、なあに旦那、こちとらが手分けをして、諏訪塩尻の三道にかけて、探すとなれやあ造作アありませんぜ。誘拐（かどわか）された女子だって、道のねえ所を越えてゆく筈はなし、そこは蛇（じゃ）の道はヘビってもんで、訊き廻るにも、土地に明るいこちとらでなけれやあ分らねえ穴がございますからね」
「なるほど」
武蔵はうなずいた。大きにそれは理窟がある。土地にも不案内な自分が、徒らに歩いてみたり焦躁するよりは、こういう輩（やから）を使えば忽ち、二人の消息は分るかも知れない。
「――では頼む、ひとつ其方たちの手で、探してくれまいか」
率直にいうと、人足たちは、
「ようがす」
と、一斉にひき受けてから、しばらくがやがや手分けの評議をしていたが、やがて一名の代表者が前へ出て、揉手（もみで）をしながら、
「ええ、旦那え。エヘヘヘ、寔（まこと）に申しかねますが、なにしろ裸商売、こちとらあまだ、朝飯も喰べておりません。夕方までにゃあ、きっと、お尋ねのお人を突き止めますから、半日の日雇い賃と、わらじ銭とを、ちっとばかりやっておくんなさいませんか」

「おう、元よりの事」
武蔵は当然に思って、貧しい路銀をかぞえてみたが、彼の要求する額には、その全部をはたいても足りなかった。
武蔵は金の貴重なことを人よりも身に沁みて知っている。なぜならば、孤独である。又旅にばかり暮しているから。――しかし武蔵は又、金に執着を持ったことがない。それは、孤独の彼には、誰を扶養する責任もない。その身一つは、寺に宿り、野に臥し、時には知己の清浄を恵まれ、なければ喰べずにいても、そう痛痒には感じない。――そのうちに何とかなって来たのが今日までの流浪生活の常であった。
考えてみると、ここまで来た道中の費えも、一切お通が見ていてくれたのだった。お通は、烏丸家から莫大な路銀を恵まれ、それをもって、道中の経済をしていた上、武蔵へもなにがしかの金を預けて、
（お持ちになっていらっしゃいまし）
と、渡してくれたものだった。
そのお通からもらった全部を、武蔵は人足たちに皆渡して、
「これでよいか」
といった。人足たちは、掌へ銭を預け合って、
「ようがす。負けておきましょう。――じゃあ旦那は、諏訪明神の楼門でお待ちなすっていておくんなさい。晩までにゃ、きっと、吉いお報らせをいたしますから」
と、蜘蛛の子みたいに散らかって行った。

八方、人手を分けて、探しているとはいえ、この一日を、空しく待っているのも智慧がないので、武蔵は武蔵で、高島の城下から、諏訪一円を歩き暮した。

三

お通と城太郎の消息を尋ね歩いていると、武蔵は、こうして暮れてゆく一日が惜しかった。彼の頭には、絶えず、この辺の地勢とか、水理とか、又、誰か聞えた武術家などはいないかなどと——そのほうへ頻りと心が動く。

だが、その両方ともに、大した収穫もなく、やがて黄昏頃、人足たちと約束した諏訪明神の境内へ来てみると、楼門の辺にも、まだ誰も来ている様子がない。

「ああ、疲れた」

呟きながら、彼は楼門の石段へどっかり腰をおろした。

気づかれというのか、こんな呟きが、嘆息のように出ることは滅多にない。

誰も来ない。

やや退屈を感じて広い境内を、一巡りして又戻って来た。

まだ約束した人足は一人も見えていなかった。

闇の中で、時々、戞つ、戞つ、と何か蹴るような響きがするので、武蔵は、時々、はっとわれに返るような眼をみはった。——それが気にかかるらしく、楼門の石段を降りて、ふかい木蔭の中にある一棟の小屋を窺ってみると、その中には、白い神馬が繋がれているのだった。耳についた物音は、神馬が床を蹴って暴れる音だった。

「何ぞ、社家に御用事でもあるのか」
馬に飼糧をやっていた男が、武蔵の影を振向いて訊ねた。
咎めるような眼つきでいう。
そこで武蔵が、わけを話して、一応怪しい者でないことを弁明すると、白丁を着ているその男は、
「あははは。あははは」
腹を抱えて笑い止まないのである。
憤っとして武蔵が、何を笑うかというと、その男はなお笑って、
「あんたは、そんな事で、よう旅が出来なさるの。なんであの道中の蠅みたいな悪人足が、先に銭を取って、正直に一日中、そんなお人を探して歩いているものか」
と、いうのであった。
「では、手分けをして、探すといったのは嘘であろうか」
武蔵が糺すと、こんどはむしろ気の毒になったように、その男も真顔になっていった。
「お前さんは、騙されたのじゃ。――道理で、きょう十人ばかりの人足が、裏山の雑木林で、昼間から車座になって、酒をのみながら博奕などしておった。おおかた、その連中であったかもしれぬ」
それから、その男は、この諏訪塩尻あたりの往還で、旅客が人足の悪手段にのって路銀をせしめられる屢〻の実例を幾つも挙げて、

「わたる世間も同じ事ですよ、これからはよく御用心なさるがよい」
と、空になった飼糧桶をかかえて、彼方へ行ってしまった。
武蔵は、茫然としていた。
「…………」
何か、大きな未熟を自己に発見したような気持で。
剣を持っては、隙がないと自負している自身も、世わたりの俗世間に立ち交じる、無智の宿場人足にも翻弄される自分でしかなかった——と明らかに世俗的な不鍛錬が分ってくる。
「……仕方がない」
武蔵はつぶやいた。
口惜しいとも思わないが、この未熟は、やがて三軍を動かす兵法のうえにも現れる未熟である。
これからは謙虚になって、もっと俗世間にも習おうと思う。
——そして彼は又、楼門の方へ足を返して来たが、ふと見ると、自分の去った跡へ来て、誰か一人立っている。

四

「オ。旦那」
楼門の前で辺りを見廻していたその人影は、武蔵の姿を見つけると、石段を降りてきて、
「お探しになっているお人の、一方だけ分りましたから、お報らせに参りましたんで」
と、いった。

「え？」
武蔵はむしろ意外な顔して——よく見るとそれは、今朝、半日の駄賃をやって、八方へ手分けして走らせた宿場人足の中の一人であった。
たった今、
（騙されたのだ）
と、神馬小舎の前で嘲われて来ただけに、武蔵は、意外だったのである。
同時に彼は、自分から半日の駄賃と酒代を詐取した十幾人もの人間が世間に満ちてはいるが、
（世間の全部が、詐欺師ではない）
と分って、それが先ず、欣しかった。
「一方が分ったとは、城太郎という少年の方か、お通の方が知れたのか」
「その城太郎っていう子を連れている、奈良井の大蔵さんの足どりが分ったのでございます」
「そうか」
武蔵は、それだけでも、ほっと心の一面が明るくなった。
正直者の人足は、こう話した。
——今朝、駄賃をせしめた仲間の手輩は、元よりそんな者を探すつもりは毛頭ないので、皆、仕事を怠けて、博奕に耽っているが、自分だけは、御事情を聞いてお気の毒だと思い、一人で塩尻から洗場まで行って、立場立場の仲間に、尋ねあるいてみると、お女中衆の消息はさっぱり知れないが、奈良井の大蔵さんなら、ついきょうの午頃、諏訪を通って、和田の山越えにかかって行ったという事を、中食をした旅籠屋の女中から聞きました——というのである。

「よく知らせてくれた」

武蔵は、この人足の正直と功労に対して、酒代を酬いたいと思ったが、ふところに手を当ててみると、路銀はみなほかの狡い連中に取られてしまったので、考えてみると、今夜の飯代しか残っていない。

（――でも、何かやりたい）

と、彼はなお、考えた。

しかし、身につけている物で、値のある物などは何一つもない。彼は遂に、今夜は食べずにしのぐと極めて、一度の飯代にと残しておいたわずかな銭を、革巾着の底を払って、皆、その男に与えてしまった。

「ありがとう御座います」

正直者は、当然な事をして、過分な礼に会ったので、銭を額に押しいただくと、ほくほくして立ち去った。

――もう一箇の銭もない。

武蔵は、無意識の中に、銭の後ろ姿を見送っていた。与えながら、与えた後は、ちょっと途方に暮れた気持になった。空腹はもう夕刻から頻りに迫っていたのでもあるし――。

けれど、あの銭が、あの正直者に持ち帰られれば、自分の空腹をみたす以上、何かよい事に費われるにちがいない。それからあの男は、正直に酬われる事を知って、明日も亦、街道へ出て、ほかの旅人へも正直に働くだろう。

「そうだ……この辺で一宿の軒端を借りて朝を待つより、これから和田峠を越えて、先へ行った

という奈良井の大蔵と城太郎に追いつこう」
今夜のうち和田を越えておけば、明日は何処かでその人と城太郎に出会うかも知れない。——武蔵は忽ち思い立って、やがて諏訪の宿場を出外れ、久しぶりに暗い道を、独りすたすたと夜旅の味を踏みしめて行った。

五

——独り夜を歩む。
武蔵は好きだった。
これは彼の孤独な生来から来るものかも知れない。自分の踏む跫音をかぞえ、耳に天空の声を聞いて真っ暗な夜道を、黙々と歩いていると、すべてをわすれて、楽しいのであった。
人中の賑やかな中にいると、彼のたましいはなぜか独り淋しくなる。淋しい暗夜を独り行く時は、その反対に、彼の心は、いつも賑わしい。
なぜならば、そこでは、人中では心の表に現れないさまざまな実相が泛んでくるからであった。世俗のあらゆるものが冷静に考えられると共に、自分の姿までが、自分から離れて、あかの他人を見るように、冷静に観ることができた。
「……オ。燈が見える」
しかし——
行けども行けども闇の夜道に、ふと一つの燈を見出すと、やはり武蔵もほっと思う。
人の住む燈！

われに返った彼の心は、人恋しさや、なつかしさに、顫えるほどだった。もうその矛盾を自分に問うている遑もなく、

「――焚火をたいているらしい。夜露にぬれた袂をすこし乾かしてもらおう。ああ、腹もすいた。稗粥なとあらば無心して」

と、足は自ずとその燈へ向って急いでいる。

もう夜半であろう。

諏訪を出たのは宵だったが、落合川の渓橋を越えてからはほとんど山道ばかりだった。一の峠は越えたが、まだ先に和田の大峠と大門峠が、星空に重なっている。

その二つの山の尾根と流れ合っている広い沢の辺りに、ポチと、燈が見えたのである。

近づいてみると、たった一軒の立場茶屋だった。廂の先には「馬繋ぎ」と呼ぶ棒杭が四、五本打ち込んであり、この山中のしかも深夜に、まだ客があるのか、土間のうちからパチパチと火のはぜる音に混じって、粗野な人声が洩れてくる。

「――さて？」

と、当惑した顔つきで、武蔵はその軒端に立ち迷った。

ただの百姓家か木樵の小屋でもあれば、暫時の休息も頼めるし、稗粥の無心ぐらいはきいてもくれるであろうが、旅人を相手に商売している茶店では、一ぱいの茶も、茶代をおかずに立つわけにはゆかない。

どう考えても、金はもう一枚の鐚も持っていないのだ。しかし、温かそうな煙に混じって洩れる煮物のにおいは、彼の飢えをつよく思い出させて、もう到底、去り得ないほどだった。

「そうだ、仔細をいって、彼品でも、一飯の値の代りに取ってもらおう」
そう思いついた抵当の品というのは、背に負っている武者修行包みの中の一品だった。
「……ごめん」
彼がそこへ入るまでには以上のような当惑やら苦心のあげくであったが、中でがやがやいっていた連中には、まったく唐突な姿だったに違いない。
「……？」
びっくりしたように皆、黙ってしまった。そして彼の姿を、いぶかしげに見まもった。
土間の真ン中に大きな自在鉤が懸っている。土足のまま囲めるように炉は土へ掘ってあり、鍋には、猪の肉と大根がふつふつ煮えていた。
それを肴に、樽や床几へ腰かけて、酒壺を灰へ突っこみながら、茶碗を廻していた野武士ていの客が三人。――老爺は後ろ向きのまま今、漬物か何か刻みながら、その客たちと、馬鹿ばなしでもしていたらしい。
「なんだ？」
老爺に代って、そういったのは、中でも眼のするどい、五分月代の男だった。

六

猪汁のにおいや、この家の暖かい火の気につつまれると、武蔵の飢渇は、もう一刻もしのべなくなった。
居合せた野武士ていの男が、何かいったが、それに答えもせず、ずっと通って、空いている床

几の隅を占め、

「おやじ、湯漬でもよい、はやく飯を支度してくれい」

亭主は冷飯と猪汁を運んで来て、

「夜どおしで、峠をお越えなされますか」

「ウム、夜旅じゃ」

武蔵はもう箸を取っている。

猪汁の二杯目を取って、

「きょうの昼間、奈良井の大蔵という者が、一名の童を連れて、峠を越えて行かなかったであろうか」

「さあ、存じませんなあ。——藤次どのや、他の衆のうちで、そんな旅の者を見かけた者はございませんか」

おやじが、土間炉の鍋越しに訊ねると、首を寄せて、酌ぎ合ったり囁いたりしていた三名は、

「知らねえ」

膠もなく皆、顔を振った。

武蔵は満腹して、一碗の湯をのみほし、体も温まると共に、さて食事の価が気がかりになった。

最初に、事情を告げて、それからにすればよかったが、他に三名の客が飲んでいるし、慈悲を乞うつもりでもないので、先に腹を拵えてしまったが、もし亭主がきき入れてくれなかったらどうしよう。

その時には、刀の笄でも――と思い極めて、
「おやじ、寔に相済まぬ頼みだが、実は、鳥目を一銭も持ち合せておらぬ。――と申しても、無心を頼むわけではない、此方が持ち合せておる品物を、その値として取っておいてくれまいか」
いうと、案外気やすく、
「ええ、よろしゅうござりますとも。――したが、そのお品とは、なんでございますな」
「観音像じゃ」
「え、そんな物を」
「いや、某の作というような品ではない。拙者が旅のつれづれに、梅の古木へ小刀彫りで彫った小さい坐像の観世音。一飯の値には足らぬかもしれぬが……。まあ、見てくれい」
背に負っている武者修行包みの結び目を解きかけると、炉の向う側にいる三名の野武士たちは、杯を忘れて皆、武蔵の手を凝視していた。
武蔵は、包みを膝にのせた。それは雁皮の紙縒に渋汁を引いた一種の糸で、袋のように編んだ物である。武者修行して歩く者は皆、その袋へ、大事な物を押し籠めて負っているが、武蔵の包みの中には、今彼のいった木彫の観音と、一枚の肌着と貧しい文房具しか這入っていなかった。
編袋の一方を持って、武蔵はそれを振り動かした。すると、中からずしりと、土間へ転がった物がある。
「……やっ？」
これは、茶屋のおやじと又、炉の向う側にいた三名の口から出た声だった。――武蔵は自分の足元へ眼を落したまま、ただ唖然たる顔でしかない。

金の包みである。
慶長小判や銀や金色のかねが、そこらまで散らばった。
（――誰の金？）
と、武蔵は思った。
四人も、そう疑っているらしく、息をのんで、土間の金へ、眼を奪われていた。
武蔵は、もう一度武者修行袋を振ってみた。すると、金の上へ、さらに又、一通の書面がこぼれた。

七

怪しみながら披いてみると、それは石母田外記の置手紙であった。
それもたった一行、
当座の御費用に被成べく候　　外記
としか書いてない。
けれど少なからぬ金である。この一行が何をいっているか。武蔵にはわかる気もする。要するにこれは、伊達政宗ばかりでなく、諸国の大名がやっている一つの政策である。
有為の人材を常に召し抱えておくことはむずかしい。しかし時代の風雲は、愈々、有為な人材を要望している。関ケ原くずれの浮浪人は、路傍に満ちて、禄を漁りあるいているが、さて、これはという人材は極めてない。あれば忽ち、家の子郎党の厄介者付きでも、何百石、何千石の高禄で、すぐ売れ口がついてしまう。

いざ戦――という日でも、集まる雑兵はいくらでも集まるが、求めても容易く来ないような人物を、今は各藩で血眼に探しているのだ。そして、これはと思う人物には、何らかの方法で、必ず恩恵を売っておく。或は黙契をむすんでおく。

その、大物どころでは、大坂城の秀頼が、後藤又兵衛に捨て扶持をやっていることは天下の周知である。九度山に引籠っている真田幸村へ、年ごとに、大坂城からどれほどな金銀が仕送りされているかぐらいなことは――関東の家康でも調べ上げている所であろう。

閑居している佗び牢人に、そんな生活費のいるはずはない。しかし、幸村の手から、その金銀は又、零細な幾千人の生活費になってゆくのである。そこには、戦のある日まで、遊んで暮している沢山な人間が町に隠れていることはいうまでもない。

一乗寺下り松のうわさから、後を追いかけて来た伊達家の臣下が、すぐ武蔵の人物に、食指をうごかした事は当然すぎる。――既にこの金が、明らかに、外記の底意を証拠だてていると見て間違いはない。

――困った金である。

費えば恩を買う。

なければ？

（そうだ、金を見たから、惑うのではないか。なければ、ないでもすむものを）

武蔵はそう思って、足もとに落ちている金を拾い集め、元通りに武者修行袋へつつみこんで、

「――では亭主。これを飯の代に、取っておいてくれい」

自分の手すさびに彫った木彫の観世音をそこへ出すと、茶店の老爺は、今度は甚だしく不平顔

で、
「いけませんよ旦那、これやあ、お断りしますべ」
と、手を出さない。
武蔵がなぜ？　というと、
「なぜって、旦那は今、持合せが一文もねえと仰っしゃるから、観音様でもいいといったのじゃが……見ればないどころか、持て余している程、お金を持って御座らっしゃるではねえか。どうか、そんなに見せびらかさねえで、お金で払っておくんなさいまし」
最前から、酒の酔をさまして、固唾をのんでいた三名の野武士は、おやじの抗議を、尤もだというように、後ろでうなずいていた。

八

自分の金ではない――というような弁解をしてみるのも、この場合は、愚の至りである。
「そうか……では仕方がない」
武蔵は、やむなく一箇の銀片を出して、おやじの手に渡した。
「はて、剰銭がないが。……旦那様、もっと細かいお鳥目で下さいませ」
武蔵は又、金を調べてみた。しかし包みは慶長小判と、それがいちばん小さくて安い銀片であった。
「剰銭はいらぬ、茶代に取っておくがいい」
「それは、どうも」

と、おやじは急に打って変る。

もう手をつけた金なので、武蔵はそれを腹巻へ巻いた。そして、茶店のおやじから嫌われた木彫の観音像を、元のように、武者修行袋に入れて背中へ背負う。

「まあ、あたって行かっしゃれ」

と、おやじは薪(まき)をくべ足したが、武蔵はそれを機(しお)に、戸外(そと)へ出た。

夜はまだ深い。けれど腹ごしらえもまずできた。

夜明けまでに、この和田峠から大門峠まで踏破してしまおうと思う。昼ならば、この辺りの高原は、石楠花(しゃくなげ)やりんどうや薄雪草も数あるらしいが、夜はただ渺(びょう)として、真綿のような露が地を這っているばかり。

花といえば、空こそ、星のお花畑とも見える。

「おおオいっ」

立場茶屋を離れておよそ二十町も来た頃である。

「——今の旦那あ、お忘れ物をなされたぞよ」

さっき茶店に居合せた野武士ていの中の一人であった。

側へ駈けて来て、

「早いお脚だの、あんたが出て行ってから、しばらくしてから気づいたのじゃ。——このお金は、あんたの物じゃろうが」

掌に、一粒の銀片(ぎんぺん)をのせて、武蔵に見せ、それを返そうと追いかけて来たのだという。

いやそれは自分の物ではあるまいと武蔵はいったが、野武士ていの男は、かぶりを振って、確

かにあなたが金包みを落した時、この一片が土間の隅へ転がったものに違いない、と押し戻して来る。

数えて持っている金ではないので、そういわれてみると、そうかも知れないと武蔵は思うほかなかった。

で、礼をいって、それを袂に納めたが、武蔵は、この男の正直な行為が、なぜか少しも自分の感激に触れないことに気づいた。

「失礼じゃが、あんたは、武道を誰に習びなされた」

用がすんでからも、男は要らぬ話をしかけて、側へついて歩く。それもおかしい。

「我流ですよ」

と、武蔵は、投げっ放しな語調でいう。

「わしも、今は山に籠ってこんな業をしておるが、以前は侍でな」

「ははあ」

「さっき居合せた者も皆そうじゃ。蛟龍も時を得ざれば空しく淵に潜むでな、みな木樵をしたり、この山で、薬草採りなどして生計をたてているが、時到れば、鉢の木の佐野源左衛門じゃないが、この山刀一腰に、ぼろ鎧を纏っても、名ある大名の陣場を借りて、日頃の腕を振うつもりじゃが」

「大坂方ですか、関東方でございますか」

「どっちでもいい。まずやはり旗色を見て加わらぬと、一生を棒にふるからなあ」

「はははは、大きに」

武蔵は、まるで相手にしない。なるべく足も大股に努めてみたが、男もそれにつれて大股になるので何の効いもない。

そしてなお、気になる事には、自分の左側へ左側へと、男は好んで寄り添ってくるのだった。これは、心ある者は最も忌むところの、抜討ちを仕かける時の姿勢である。

九

――だが武蔵は兇暴な道連れの狙っているその左側を、わざと空けて、甘んじて相手に窺わせておいた。

「どうじゃな修行者。もし嫌でなかったら、おれたちの住居へ来て、今夜は泊ってゆかないか。……この和田峠の先には、大門峠がある。夜明けまでに越えるというても、道馴れない者にはどうして大変だ。これから先は、道も嶮しくなるばかりだし」

「ありがとう存じます。おことばに甘えて、泊めて戴きましょうかな」

「そうするがいい、そうするがいい。――だが何も、もてなしはないぜ」

「元より、体さえ横たえれば、それでいいのでございます。して、お住居は」

「この谷道から、左の方へ五、六町ほど登った所さ」

「えらい山中にお住いですな」

「さっきもいった通り、時節の来るまで、世から隠れて、薬草採りをしたり、猟師の業をまねたりして、あの者たちと三人して暮しているのじゃ」

「そういえば、後のお二人は、どうなされましたか」

「まだ立場で飲んでいるじゃろう。いつも彼家で飲むと酔いつぶれて、小屋まで担いで行く役がおれと極まっているが、今夜は、面倒なので置いて来た。……おッと、修行者、そこの崖を降りるとすぐ谿川の河原だ、あぶないから気をつけろよ」
「彼方へ、渡るのですか」
「ム……その流れの狭い所の丸木橋を渡って、谿川づたいに、左へ登ってゆく……」
と、男は低い崖の途中に立ち止まっている様子だった。
武蔵は、振向きもしない。
そして丸木橋を渡りかけていた。
崖の中途からぽんと跳んだ男は――いきなり武蔵の乗っている丸木橋の端に手をかけて、彼の姿を、激流の中へ振り落そうとして、持ち上げたが、
「何をする？」
と、河の中の声にぎょっとして首を上げた。
武蔵の足は、橋を離れて、飛沫の中の岩の上に、鶺鴒が止まったように立っていた。
「――あッ」
抛り出した丸木橋の端が、白い飛沫を途端に散らした。その水玉の傘が地まで落ちないうちに、河中の鶺鴒はぱっと跳んで返って、いわゆる抜く手も見せない間髪に、狡智に長けたその卑怯者を斬り撲った。
――こんな場合、武蔵は、斬った死骸には眼もくれなかった。死骸がまだ蹌めいているうちに、彼の剣は、もう次の何ものかを待っている。彼の髪は、鷲の逆毛のように立って、満山皆敵

と観(み)るもののようであった。

「………」

果たして、ぐわあん！　と谷間の擘(さ)けるような音が渓流の向う側からとどろいた。

いうまでもなく、猟銃の弾(たま)である。弾は正(まさ)しく、武蔵の在った位置を、ぴゅんと通りぬけ、後ろの崖土の中へ潜った。

弾が土の中へ入った後から武蔵も同じところへ仆れた。そして対岸の沢を見ていると、螢の火みたいな赤いものがチラチラする。

——二つの人影が、そろそろと河べりまで這い出して来る。

一足先に冥土へ立った卑怯者は、後の二人の仲間は、立場の居酒屋でのみつぶれていると嘘をいったが、先へ廻って、待ち伏せの手ぐすね引いていたのである。

それも、武蔵の考えていた通りであった。

猟師だとか、薬草採(くすりと)りだとかいっていたのは勿論うそで、この山に巣喰う賊であることは疑ぐってみるまでもない。

けれど、さっき、

(時節が来るまで)

と、途々いった言葉は、ほんとであろう。

どんな盗賊でも、子孫まで盗賊でやって行こうと考えている者は一人もあるまい。乱世の方便としての世渡りに、諸国には今、山賊と野盗と市盗が急激にふえつつある。そして、いざ天下の合戦となると、これが皆、一かどの錆槍(さびやり)とボロ鎧(よろい)をかついで、陣借りして、真人間に生き甦(かえ)るの

だ。――ただ惜しいかなこの手輩は、雪の日、客に梅を焚いて、時節を待ちながらも時節を度外している雅懐はないのである。

虫焚き

火縄を口に咥え、一人は二度目の弾込めをしているらしい。
もう一人は、身を屈めて、こっちを見ている。対岸の崖の下へ、武蔵の影が仆れはしたが、なお疑って、
「……大丈夫か」
と囁いているのだった。
鉄砲を持ち直したのが、
「確かだ」
と、うなずいて、
「手応えがあった」
という。
それで安心して、二人は丸木橋を頼って、武蔵の方へ渡って来ようとした。

鉄砲を持った方の影が、丸木橋の中ほどまでかかって来ると、武蔵は起き上がった。

「――あッ」

引金に懸けた指は、もちろん、正確を失っていた。どうんと、弾は空へ走って、ただ大きな谺(こだま)を呼んだ。

ばらばらっと、二人は引っ返して、谿川(たにがわ)添いに逃げ出した。武蔵が追いかけてゆくと、業腹(ごうはら)になったものか、

「やいやい、逃げる奴があるものか、相手はひとり、この藤次だけでも片づくが、引っ返して助太刀しろ」

鉄砲を持たない方がけなげにもこういって立ち止まった。

自分で藤次と名乗っているし、物腰から見ても、これが山寨(さんさい)に住む賊の頭目であろう。

呼び返されて子分か分らぬが、もう一名の賊は、それに励まされて、

「おうっ」

と答え、火縄を抛(ほう)りすてたと思うと、鉄砲を逆手にして、これも武蔵へかかって来た。

武蔵はすぐ感じた。これはそう根からの野武士ではない。わけても、山刀を揮って来た男の腕に多少筋がある。

――だが、彼のそばへ近づくと、賊の二人とも、一撃に刎(は)ね飛ばされたように見えた。鉄砲を持った方の男は、完全に肩から袈裟(けさ)にふかく割りこまれて、渓流の縁(ふち)から、だらんと半身落ちかけている。

口程もなく、藤次と名乗った賊の頭目は、小手の傷を抑えながら、逃足早く、沢から上へ駆け

上ってゆく。
ざざざ、と土の落ちてくる後を辿って、武蔵も何処までも、追って行った。
ここは和田と大門峠の境で、山毛欅が多いままぶな谷と呼ばれている。沢を登りつめた所に、一叢の山毛欅につつまれた家があった。その家も亦、山毛欅の丸太で組み建てたような巨きな山小屋に過ぎない。
ボッと、そこに燈が見えた――
家の内にも明りが映しているが武蔵の眼に見えたのは、その家の軒先に、誰か、紙燭を持って立ってでもいるらしい燈であった。
賊の頭目はばたばたっと、それへ向って逃げて行きながら、
「燈を消せっ」
と呶鳴った。
すると、袂で燈をかばいながら、戸外に立っていた影が、
「どうしたのさ」
と、いった。
女の声であった。
「まあ、ひどい血になって――。斬られたのかえ。今、谷の方で鉄砲の音がしたから、もしやと思っていたら？　……」
賊の頭目は、うしろから迫る跫音に、振向きながら、
「ば、ばかっ。はやくその燈を消してしまえ。家の中の燈も」

と、息を喘って、又欷嗚った。
彼が、土間の中へ転げ込むと、女の影も、燈をふき消して、あわてて姿を隠してしまった。
——やがて武蔵が、その前へ来て立った時は、家の中の明りも洩れず、手をかけてみても、戸はかたく閉まっていた。

二

武蔵は怒っていた。
だが、この怒りは、卑劣だとか偽かれたとか、対人的に怒っているのではない。元より虫けらのような鼠賊と思いながら、社会的に免しておけない気持がする。いわゆる公憤なのである。
「開けろっ」
いってみた。
当然、開ける筈はない。
足で蹴っても破れそうな雨戸だが、万一を惧れて、武蔵は戸から四尺ほど離れている。それへ手をかけて叩いたり、がたがた試みたりするような不用意は、武蔵でなくとも、多少心得のある人間のすべき業ではない。
「開けないか」
戸の中は、なお、しんとしている。
武蔵は抱え易い程度の岩を両手に持った。いきなりそれを戸に向って抛りつけたのである。
戸の継ぎ目を狙ったので、二枚の戸が内側へ仆れた。その下から山刀が素っ飛び、続いて、

一人の男が、這い起きて、家の奥へ逃げ転んでゆく。
武蔵が跳びかかって、その襟がみを掴むと、
「あっ、免せっ」
と、悪人が悪事に失策ると、決まって吐ざく脆い声をあげた。
そのくせ、平蜘蛛になって、謝るのではなく、間断なく隙を狙って、武蔵へ肉闘してくるのである。最初から武蔵も感じていたとおり、賊の頭目だけに、この男の小手技には、かなり鋭いところがある。
その小手技を、ぴしぴし封じて、武蔵が許す気色もなく、捻じ伏せかけると、
「く、くそっ」
猛然、この男は、生来の暴勇をふるい起し、短刀を抜いて、突っかけて来た。
引っぱずして、
「この鼠賊」
と体を抄い込み、どんと、次の部屋まで投げつけると、その脚か手が、炉の上の自在鉤へぶつかったのであろう。朽ち竹の折れる響きと共に、炉の口から、火山のような白い灰が噴き騰った。
武蔵を近づけまいとして、その濛々と煙る中から、釜のふただの、薪だの、火箸だの、土器などを、所きらわず投げつけてくる。
――やや灰が落着いたところで、よく見ると、それは賊の頭目ではない。彼はすでに、どこか強く打ちつけたとみえて、柱の下に長く伸びているのである。

――それなのになお、
「畜生、畜生」
と、必死になって、手当り次第に、物を取っては、武蔵へ向って投げつけて来るのは、賊の妻らしい女であった。
武蔵は、すぐその女を組み敷いた。――女は組み敷かれながらもまだ、髪の笄(こうがい)を逆手に抜いて、
「畜生」
と、突きかけていたが、その手を、武蔵の足に踏まれてしまうと、
「――お前さん、どうしたのさ！　意気地のない、こんな若僧に」
と、歯がみをしながら、もう気を失っている賊の良人(おっと)を、無念そうに、叱咤していた。
「……あっ？」
武蔵は、その時、思わず身を離した。女は男以上に勇敢だった。刎ね起きざま、良人の捨てた短刀を拾って、再び、武蔵へ斬りつけて来たが、
「……おっ、おばさん？」
武蔵が意外な言葉を与えたので、賊の妻も、
「――えっ？」
息をひいて、喘(あえ)ぎながら相手の顔をしげしげと――
「あっ、おまえは？　……。オオ武蔵(たけぞう)さんじゃないか」

三

今もまだ、幼名の武蔵を、そのまま自分へ呼ぶ者は、本位田又八の母のお杉ばばを措いて、誰があろう？

怪しみながら、武蔵は、そう馴々しく自分を呼んだ賊の妻を見まもった。

「まあ、武さん、いいお武家におなりだねえ」

さもさも懐かしそうな女のことばだった。それは、伊吹山のよもぎ造り――後には娘の朱実を囮に、京都で遊び茶屋をしていた、あの後家のお甲であった。

「どうして、こんな所にいるのですか」

「……それを訊かれると恥ずかしいが」

「では、そこに仆れているのは……あなたの良人か」

「おまえも知っておいでだろう。元、吉岡の道場にいた、祇園藤次の成れの果てですよ」

「あっ、では吉岡門の祇園藤次が……」

啞然としたまま、武蔵は、後のことばも出なかった。

師家の傾く前に、藤次は、道場の普請にと集めた金を持って、お甲と駈落ちしてしまい、侍にあるまじき卑劣者と――当時京都で悪い噂を立てられたものだった。

武蔵も、小耳にはさんでいる。その成れの果てがこの姿か――と、他人の身の末とはいえ、淋しくならずにいられなかった。

「おばさん、早く介抱してやるがよい。あなたの亭主と知ったなら、そんな目に遭わせるのでは

なかったが」
「穴でもあったら這入りたい気がする」
お甲は藤次のそばへ寄って、水を与え、傷口を縛り、そしてまだ半ばうつつな顔つきへ、武蔵との縁故を話した。
「えっ？」
と、藤次は、活を入れられたように白眼を上げて、
「じゃあ其許が……あの宮本武蔵どのか。——ああ、面目ない」
さすがに恥は知っている。藤次は頭を抱え、それへ詫び入ったまま、しばらくは上げる面もない様子。
武門を落ちて、山沢の賊となって生きてゆくのも、大所から観てやれば、流々転相の世の中の泡つぶ、こうしてまで、生きてゆかねばならぬ程に落ちたのかと思えば、あわれともいえる、不愍ともいえる。
武蔵はもう憎む気もちを忘れていた。夫婦の者は、時ならぬ賓客を迎えたように、塵を掃き、炉ぶちを拭いて、薪を新たにくべ足した。
「何もございませぬが」
と、酒など燗ける様子に、
「もう、山の立場で、腹はできておる。かもうてくれるな」
「——でも、久しぶりに、山の夜語り、わたしの心づくしを喰べてくださいませ」
と、お甲は、炉の上に鍋などかけ、酒壺を取ってしきりにすすめる。

「伊吹山のふもとを思い出しますなあ」
外は、ごうごうと、峰の夜あらしであった。閉めきっても、炉の焔は、黒い天井へめらめらと背を伸ばす。
「もう、いうて下さいますな。……それよりも、朱実はその後、どうしたでしょうか。何か噂を聞きませんか」
「叡山から大津へ出る途中の山茶屋で、数日、わずらっていたそうですが、連れの又八の持物を奪って、逃げてしまったとその折ちょっと耳にしたが……」
「では、あの子も」
と、お甲は自分の身にひき較べて、さすがに、暗い面を伏せた。

四

お甲だけではない。祇園藤次もふかく恥じ入った様子で、今夜の事は、まったく出来心に他ならないといい、他日、世に出た時は、必ず元の祇園藤次になってお詫びするから、どうか今夜の所は、水に流して見のがしてくれという。
山賊まがいの藤次が、以前の祇園藤次に返ったところで、大した変りばえもないが、それだけ道中の旅人は明るくなれよう。
「おばさん、あなたも、もう危ない世渡りは、よした方がいいでしょう」
強いられた酒に少し酔って、武蔵がこう意見すると、お甲も、
「なあに、あたしだって好きこのんで、こんな事をしているわけじゃないけれど、京都落ちを極

め込んで、御新開の江戸で一稼ぎと来る途中、この人が、諏訪で博奕に手を出して、持物から路銀までみんなはたいてしまい、やむなく、元のもぐさ採りから思いついて、ここで薬草を採って町へ売っては喰べるような始末になってしまったのさ。……もう今夜に懲りたから悪い出来心は起さないようにしますよ」

相変らず、この女は、酔うと以前の婀娜な調子が出る。

もう幾歳だろうか。この女に年齢はないようである。猫は家に飼うと人間の膝に媚態を作るが、これを山に放つと、暗夜にも爛々と光る眼の持主となって、行路病者の生きた肉へも、野辺の送りの柩を目がけても跳びついてくる。

お甲はそれに近い。

「……ねえ、お前さん」

と、藤次を顧みて、

「今、武蔵さんから聞けば、朱実も江戸へ行ったらしい。わたし達も、何とか、人中へ出る算段をして、もう少し人間らしい暮しをしようじゃありませんか。あの娘でも捕まえれば、又何とか商売の思案もあろうというものだし……」

「うむ、うむ」

と藤次は、膝を抱えて、生返辞を与えていた。

この男も亦、この女と同棲してみて、先にこの女から捨てられた本位田又八と、同じような後悔を、もう抱いているのではあるまいか。

武蔵は、藤次の顔が気の毒に見えた。そして又八の身を憐れみ――やがては自分も一度この女

の招く魔の淵に誘われたことなども思い出されて、ふと肌がそそけ立つ思いがした。
「——雨ですか、あの音は」
武蔵が、黒い屋根を仰ぐと、お甲はほんのり酔ったながし眼で、
「いいえ、風がつよいから、木の葉や、木の小枝が、折れては降って来るんですよ、山の中というものは、夜になると、何か降らない晩はない。——月は出ても、星は見えても、木の葉が降ったり、山土がぶつけて来たり、霧が降ったり、滝の水がしぶいて来たり」
「おい」
藤次は、顔を上げて、
「——もうじきに夜が白んで来る頃だ。おつかれだろうから、あちらへ寝道具をのべて、おやすみになるようにしたらどうだ」
「そうしましょうかね。武蔵さん、暗いから気をつけて来てください」
「では、朝までお借りしようか」
武蔵は起って、お甲の後から暗い縁を尾いて行った。

五

彼の寝た板小屋は、谷間の崖に建てた丸太の上に支えられていた。夜なのでよくわからないが、おそらく床下は、すぐ千仭の谷底へ通じているのではあるまいか。
霧が降ってくる。
滝水が吹きつけてくる。

ぐわうという度に、寝小屋は、船のようにうごいた。
――お甲は、白い足を、簀の子にしのばせて、そっと、前の炉部屋へもどって来た。
炉の火を見つめて、考えこんでいた藤次が、するどい眼を振向けて、
「……寝たか」
と、問う。
「寝たらしいよ」
お甲は、側へ膝を立てて、
「どうする、え？」
と藤次の耳へいう。
「呼んで来い」
「やるかえ」
「あたりめえだ。慾ばかりじゃねえ、彼奴を殺ってしまえば、吉岡一門の仇を取ったという事にもなる」
「じゃあ、行って来るよ」
どこへ行くのか。
お甲は、裾を端折って、戸外へ出て行った。
深夜である。深山である。真っ暗な風の中を、蓊しぐらに駈けてゆく白い足と、うしろに流れる髪の毛とは、魔性の猫族でなくて何であろう。
大山の皺に棲むものは、鳥獣ばかりとは限らない。彼女が駈け歩いた峰や沢や山畑の遠方此方

から、忽ちにして、簇り集まって来た人間は、二十名以上もある。
しかもその行動には、訓練があった。地を掃いて来る木の葉よりも静かに、藤次の小屋の前に集まると、
「ひとりか？」
「武士か」
「金は持ってるのか」
などと密々囁き交わし、指真似や、眼くばせで、各〻、いつも通りの部署につくべく分れて行く。
猪突き槍や、鉄砲や、大刀を持って、その一部は、寝小屋の外を窺い、又、半分は小屋のわきから絶壁を下りて、確か、谷底へ廻ったらしい。
なお、その中から、べつに二、三人の賊は、崖の中途を這って、ちょうど武蔵の眠っている小屋の下へ辿りついた。
準備は出来たのである。
谷間へ懸出してあるこの小屋は、つまり彼等の罠なのである。その小屋は、莚を敷き、たくさんな薬草の乾草を積み、薬研や製薬の道具などわざと置いてあるが、それはここへ入れる人間の安眠剤であって、元より彼等の職業は、薬刻みや、薬草を乾すことではない。
武蔵も、そこへ横になると、快い薬草のにおいに、眠りを誘われて、手足の先にまで、腫ればったい疲れが出て来たが、山で生れ、山で育った武蔵には、この谷間の懸出し小屋に、一応、頷けないものがあった。

自分の生れた美作(みまさか)の山々にも、薬草採りの小屋はあるが、薬草はすべて湿気を忌(きら)う。こんな、鬱蒼(うっそう)と雑木の枝をかぶって、しかも滝しぶきの来るような所に、乾小屋は持っていない。

枕元には、薬研台(やげんだい)の上に、錆びた鉄(かね)の灯皿(ひざら)がおいてある。その微かな燈心の揺らぎで見返しても――又合点のゆかないふしがある。

それは、四隅(よすみ)の材木と材木との継ぎ目である。鎹(かすがい)付けになっているが、その鎹の穴がやたらに見える。そして継ぎ目と、木の肌の新しい所とが一、二寸ずつ喰い違っている。

「ははあ」

彼の寝顔は、苦笑をうかべた。しかしまだ彼は木枕に顔をつけていた。――

しとしとと霧の音につつまれるように、ふしぎな気配をうつつに感じながら。

六

「……武蔵(たけぞう)さん。……寝たんですか。もうお寝(やす)みかえ」

障子の外へ、そっと摺り寄っていうお甲の小声であった。

寝息を聞きすますと、すうと其処(そこ)をあけて、お甲は、武蔵の枕元まで忍び寄り、

「ここへ、お水を置きますからね」

わざと、寝顔へ断りながら、盆をおいて、又静かに、障子の外へもどって行った。

母屋を闇にして、待っていた祇園藤次が、

「いいか」

囁くと、お甲は眼に手助(てつだ)わせて、

る火縄をチラチラ振って見せた。
「ぐっすりだよ……」
藤次は、しめたというように、縁先から裏へ飛び出して、谷間の闇を覗きこみ、手に持ってい
それが合図であった。
武蔵の眠っている一棟の板小屋は、それと共に、崖の中途で、支えている床柱を外され、ぐわうーんと凄い音をたてながら、棟も板も、乱離となって、千仭の底へ呑まれてしまった。
「それっ」
鳴りをひそめていた賊は、もう仕止めた猟人が姿を見せるように、公然と、声をあげて、猿の如く思い思いに、谷底へ辷り降りて行った。
手に余る人間と見れば、彼等はいつも、こうして寝小屋もろとも、旅人を谷へ落して、その死骸から安々と、目的の物を奪り上げていた。
そして簡単な寝小屋は又、次の日のうちに、絶壁へ懸出して組むのであった。
谷底にも一群の賊が、先へ廻って待っていた。寝小屋の板や柱がばらばらに墜ちて来ると、彼等は、骨に跳びつく犬のように、それへ集って、武蔵の死骸を求め始めた。
「どうした?」
上の人数も降りて来て、
「あったか」
と、共に探しまわる。
「見えねえぞ」

誰かいう。
「何が」
「死骸がよ」
「ばかあいえ」
しかし又、やがて同じあぐねた声が放たれた。
「いねえや、はてな？」
誰よりも血眼に藤次が呶鳴りつけた。
「そんな筈はねえ。途中の岩にぶつかって、刎ね飛ばされているのかも知れねえ。もっと、そっちも探してみろ」
その言葉の終らないうちに、彼の見廻している谷間の岩も水も雪崩の草も、いちめんに夕焼け色にぱっと明るく染まった。
「――あっ？」
「――おやっ？」
賊は皆、顎を空へ振り上げた。およそ七十尺もある絶壁である。その上に乗っていた藤次の住居は、棟、障子、窓、四方から真っ赤な焔を噴き出しているではないか。
「あれえっ。あれえっ。来ておくれよっ」
ただ独りで、気も狂わんばかりな悲鳴をあげているのは、お甲にちがいない。
「大変だ、行ってみろ」
道を攀じ、藤づるを攀じ、賊は又、上へ這い上った。断崖の上の一軒屋、焔と山風にはよい弄

り物だった。お甲はと見れば、火の粉をかぶりながら、近くの樹の根に後ろ手を縛りつけられている。

いつの間に、どうして抜けたろうか。逃げたという武蔵が、賊には何だか信じられなかった。

「追っかけろ、これだけいれば——」

藤次はいう勇気もなかったが、武蔵を知らぬ他の賊はそのままではいる筈もない。旋風になってすぐ後を追った。

けれども武蔵の影はもう見当らなかった。道のない横道へ外れたのか、樹の上で今度はほんとに熟睡でもしているのか、そうこうする間に、美しい山の火事の中に、和田峠も大門峠も、白々と朝の姿を見せていた。

下り女郎衆

一

甲州街道には、まだ街道らしい並木も整っていないし、駅伝の制度も、頗る不完備であった。その昔——というほど遠くもない、永禄、元亀、天正へかけての武田、上杉、北条、その他の交戦地であった軍用路を、そのまま後の旅人が往還しているだけで、従って、裏街道も表街道もありはしない。

上方から来た者が、もっとも弱るのは、旅舎の不便で、一例をいえば、朝立ちの際に、弁当ひとつ拵えさせても、餅を笹の葉で巻いた物とか、飯をいきなり柏の乾葉でくるんで出すとか——藤原朝時代の原始的な慣わしを、今でもやっているという風。

ところが、笹子、初狩、岩殿あたりの草深いそんな旅籠屋でも、この頃の客の混みあう様は、凡事とも思えない。そしてその多くが上りよりも、下りの客だった。

「やあ、きょうも通る——」

と、小仏の上で休んでいた旅人たちは、今、自分たちの後ろから登って来る一団の旅の群を、これは観物と、道傍で迎えていた。

やがて、がやがやとそれへ来た人数を見ると、成程、これは大変。

若い女郎衆だけでも、およそ三十名ぐらいはいよう。子守ッ子みたいな禿ばかりでも五人、中年増や婆さんや、男衆など合せると、総勢四十人からの大家族である。

その他、荷駄には、つづらや、長持や、一方ならぬ荷物を積み、この大家族の主人と見える四十がらみの男は、

「草鞋まめができたら、草履に代えて、緒を縛ってあるけ。なに、もう歩けないと、何をいう。子どもを見なさい、子どもを」

と、坐りぐせのついている女郎衆を歩かせるのに、口を酢っぱくしている。

(今日も通る)

と路傍で声のするように、こうした上方女郎衆の輸送は、三日にあげず通った。もちろん流れてゆく先は、新開発の江戸表である。

新将軍の秀忠が江戸城に坐ってから、いわゆる御新開の膝下へは、急激に上方の文化が移動して行った。東海道や船路のほうは、為にほとんど、官用の輸送や、建築用材の運搬や大小名の往来でいっぱいで、こういう女郎衆の行列などは不便をしのんで、中山道や甲州筋を選ぶほかなかった。

きょうこれまで来た女郎衆の親方は伏見の人で、どういう了見か侍のくせに、遊女屋の主人となって、目端や才覚も利くところから、伏見城の徳川家へ手づるを求め、江戸移住の官許を取って、自分ばかりでなく、他の同業者にもすすめて、続々と、女を西から東へ移動させている庄司甚内という者だった。

「さあ、休め休め」

小仏の上まで来ると、甚内は程よい所を見つけ、

「すこし早目だが、ついでに、弁当をつかってしまおう。お直婆さん、女郎衆や禿たちに、弁当をくばっておくれ」

荷駄の上から、一行李もある弁当が下ろされて、乾葉巻の飯が、一つ一つ渡されると、女郎たちは、思い思いにわかれてそれへ貪りつく。

どの女の皮膚も黄いろく、髪は、笠や手拭をかぶっても、みな白っぽく埃になっている。湯茶もなく、ぼそぼそと、舌つづみ打っている姿には、行末は誰が肌ふれん紅の花——などという色も香もない。

「アア、お美味かった」

親が聞いたら、涙をこぼすであろうような声を出して、しんから叫ぶ。

すると中の妓の二、三が、折ふし通りかけた旅すがたの若衆を見つけて、
「あら、いい恰好だ」
「ちょっとしてる」
などと囁き合っていると、べつな妓は又、
「あの人なら、わたしゃあよく知っているよ。吉岡道場の門人衆と、たびたび来たことがあるお客だもの」
といった。

二

上方から関東といえば、関東の者が、みちのくを思うより遠かった。
（これからどんな土地で店を張るのやら）
と、心細い気持に囚われている彼女たちは、稀々、伏見で馴染の客が通ると聞いて、
「どの人さ」
「どの人さ?」
と、忽ち姦しい眼をそばだてた。
「大きな刀を背中へ懸けて、威張って歩いて来る若衆だよ」
「アアあの前髪の武者修行」
「そうそう」
「呼んでごらん、名前はなんていうの」

思いがけぬ小仏峠の上などで、自分がこんなに大勢の女郎衆に注目されているとは知らず、佐々木小次郎は、手を振って、荷駄や人足の間を通り抜けた。

　すると、黄いろい声で、

「佐々木さん、佐々木さん――」

　それでもまだ、まさか自分とは思わず、振向きもしないで行くと、

「前髪さん――」

　と、来たので、これは怪しからぬ事だと、眉をしかめて振り向いた。

　荷駄の脚元に坐りこんで、弁当をつかっていた庄司甚内は、妓（おんな）たちを叱りつけて、

「何じゃ、御無礼な」

　といって、小次郎の姿を仰ぐと、これはいつか、吉岡の門人達が大勢して、伏見の店へあがった時、挨拶に出た覚えがあるので、

「これはこれは」

　と、草をはたいて立上がり、

「佐々木様ではございませんか。どちらへお越しなさいますか」

「やあ、角屋（すみや）の親方どのか。わしは江戸へ下向するが、問いたいのは、おぬしたちの行く先、大層な引っ越しじゃないか」

「てまえどもは、伏見を引払って、江戸の方へ移りますので」

「なぜあんな古い廓（くるわ）を捨て、まだどうなるかも知れない江戸表へなど移るのだ」

「あまり澱（よど）んでいる水には、腐（す）えた物ばかり湧いて、水草は咲きません」

「御新開の江戸へ行ったところで、城普請だの弓鉄砲の仕事はあろうが、まだ遊女屋などの、悠長な商売は成り立つまい」
「ところが、そうじゃございません。灘波の葦を拓り開いたのも、太閤様より妓の方が先でございますからね」
「何よりも、住む家があるまいが」
「今、どしどし家を建てている町中の、葭原という沼地を、何十町歩と、私たちのために、お上から下さいました。――でもう他の同業者が、先へ行って地埋めをしたり、普請をいたしておりますから、路頭に迷うような心配はございません」
「なに、徳川家では、おぬしのような者にまで、何十町歩という土地をくれているのか。――それは無料か」
「たれが、葭の生えている沼地など、金を出して買うものがございましょう。それればかりでなく、普請の石材木なども、多分にお下げくださるので」
「ははあ……なる程、それでは上方から、世帯を担いで、皆下るはずだ」
「あなた様も、何か、御仕官の口でもあって」
「いいや、わしは何も仕官は望んでいないが、新将軍の膝下となり、新しく天下へ政道を布く中心地ともなることだから、見学をしておかねばならない。もっとも、将軍家の指南役にならなってもよいと思っているが……」
　甚内は、黙ってしまった。
　世間の裏、景気のうごき、人情の種々相にくわしい彼の眼から見て、剣術は上手かどうか知ら

ないが――今の口吻では、語るに足らないと思ったのである。
「さあ、ぼつぼつ出かけようかな」
小次郎を他にして、一同へこう促すと、女郎衆の人数を読んでいたお直という奉公人が、
「おや、女郎衆の頭数が一人足らないじゃないか。いないのは一体誰だえ。――几帳さんか、墨染さんか。ああそこに、二人ともいるね。おかしいねえ、誰だろう？」

三

まさか、江戸へ移住して行く女郎衆の同勢と、道連れになる気もないので、小次郎は先へ一人で歩き出したが、後に残った角屋の大家内は、一人の落伍者のために皆其処を立ちかねて、
「つい、その辺まで、私たちの中に、姿が見えていたのに」
「どうしたのであろ？」
「ひょっと、逃げたのではあるまいか」
などと頻りにうわさしては、二、三の者は、わざわざ探しに道を戻って行った。
その噪ぎに、小次郎へわかれを述べて、此方へ顔を向けた親方の甚内は、
「おいおいお直、逃げたとは、誰がいったい逃げたのだ」
自分の責任でも問われたように、お直と呼ばれた年よりは、
「朱実という女でございますよ。……ほれ、親方様が、木曾路で見かけて、女郎にならぬかといって、お抱えになった、旅の娘っ子で」
「見えないのか――その朱実が」

「逃げたのじゃないかと、今、若い者が麓まで見つけに行きましたが」
「あの娘なら、何も証文を取って、身代金を貸したわけじゃなし、女郎になってもよいから、江戸まで連れて行ってくれろというし、容貌も踏める玉だから抱えようと約束したまでの事。ここまでの旅籠代が少しばかり損は損だが、まあ仕方がない。そんな者は抛っておいて、出かけようぜ」
今夜八王子泊りとなれば、あしたは江戸に入ることができる。
少しは、夜にかかっても、其処まではと、親方の甚内は、急き立てて先に立つ。
すると、道の傍らから、
「皆さん、どうもすみません」
と、探しぬいていた朱実が姿をあらわして、もう歩き出している一行の中へ交じって、自分も共に尾いて歩きだした。
「どこへ行っていたのさ」
と、お谷は叱るし、
「おまえさん、黙って横道へ行っちゃいけないよ。逃げるつもりならいいけれど」
と、朋輩の女郎たちはいかに心配したかという事を、さも大仰にいって、たしなめる。
「でもネ……」
と、朱実は、叱られても、怒られても、笑ってばかりいた。
「わたしの知った人が通ったから、会うのは嫌でしょう、だから、後ろの藪の中へ、あわてて隠れてしまったの。そしたら、下が崖で、この通り辷っちまって……」

着物を破いた事だの、肱をすりむいた事ばかりいって、済みませんとはいっているが、少しも済まないような顔つきはしていない。

先に歩いていた甚内は、ふと小耳にはさんで、

「おい、娘っ子」

「わたしですか」

「ああ、朱実といったっけな。覚えにくい名前だな。ほんとに女郎衆になる気なら、もっと、呼びいい名にしなくちゃ困るが、おめえほんとに遊女になる覚悟か」

「遊女になるのに、覚悟なんているでしょうか」

「ひと月勤めてみて、いやになったら、やめるというような理にはゆかないからなあ。何しろ遊女になったら、客の求める事は嫌応はいえないのだ。それだけの決心がなくちゃあ困る」

「どうせ、わたしなんか、女の大事な生命ともいうものを、男の奴に、滅茶苦茶にされたんですから――」

「だからといって、もっと滅茶苦茶にしていいという法はない。江戸へ着くまでのあいだに、よく考えておくがいいよ。……なあに、途中の小遣いや旅籠銭ぐらいは、何も返してくれとは、いいはしないから」

火悪戯

一

ゆうべ高雄の薬王院に草鞋を解いた何処かの御隠居がある。
下男に挟み筥を担わせ、もう一人、十五ぐらいな少年を供に連れ、
「参詣は明日とし、お宿にあずかり申したい」
と、黄昏れ頃、薬王院の玄関へ立った者である。
今朝は夙く起きて、供の少年を連れ、一山を巡って午近くに帰って来たが、ここも上杉、武田、北条以後、戦乱に荒れ果てているのを見て、
「御修理の屋根葺き料にも」
と、黄金三枚を寄進して、すぐ草鞋をはきかけた。
薬王院の別当は、この奇特な人の少なからぬ寄進に驚いて、倉皇と見送りに出、
「お名前をどうぞ」
と、訊ねたところ、他の俏が、
「いえ、宿帳にいただいてございます」
と、それを示した。

見ると、
　木曾御岳山下百草房　　奈良井屋大蔵
とあるので、
「――あああなた様が」
と別当は見上げて、ゆうべからの粗略を、かえすがえす口惜しげに詫び入った。
奈良井の大蔵という名は、全国到る所の神社仏閣の寄進札に見かける名であった。必ず黄金何枚ずつか――或る霊場には、黄金何十枚という寄進をしている所もあった――それは道楽か、売名か、まったくの奉公心か、本人以外に分らないが、とにかく、今の世の中に変った奇特家とし て、別当も夙にその名を聞いているものとみえる。
――で、遽に、ひき止めてみたり、宝物を御覧にと、すすめたりしたが、大蔵はもう供の者と門を出て、
「しばらく江戸におるつもりですから、又そのうち拝観に出ましょう」
と、辞儀して去る。
「では、山門まで、お送り申しあげましょう」
と、別当は従いて来て、
「今夜は、府中でお泊りなされますか」
「いや、八王子でと思うているが」
「それならお楽に参れまするよ」
「八王子は今、誰方の所領でござりますな？」

「ついこの頃から大久保長安様の御支配になりました」
「ああ、奈良奉行から移った——」
「佐渡の御金山奉行も、御支配だそうで」
「えらい才人だからの」
山を下りると、陽の高いうちに、大蔵以下三人は、もう繁華な八王子二十五宿の往来に姿を見せて、
「城太郎、どこへ泊ろうかな？」
と、巾着のように、腰へ尾いて歩いている彼を振向く。
城太郎は、直ちに答えた。
「おじさん、お寺は止そうよ」
そこで、町の中でも一番大きな旅籠と見える家構えを選んで、
「ごやっかいになるよ」
大蔵の人品もよし、挟み筥まで担がせて歩いている旅客なので、
「おはやいお着きで」
中庭を隔てた奥の間へ通して、下へも措かない扱いである。
だが、やがて陽も暮れて、どやどやと客の混む頃おいになると、主人と番頭が顔を揃えて来ていうには——
「まことにご無理なお願いでございますが、よんどころのない大勢の相客で、下座敷はかえってお騒がしゅうございましょうから、ひとつ二階へお部屋更えを……」

と、恐縮して、頼むのだった。

「ああ、いいとも。ご繁昌で結構だ」

大蔵は、気軽に承知して、手廻りの荷物を持たせ、急に二階へ引っ越しとなったが、それと入れ交いに、ここへ入って来たのは角屋の女郎衆の同勢であった。

二

「さてさて。とんだ旅籠へ泊りあわせたものだて」

大蔵は、二階へ来てから、こう愚痴めいて、自分の落着きを見まわした。

時ならぬ混雑に、いくら呼んでも、召使は来ない。お膳も来ない。

やっと、食事が来たと思うと、こんどはそれを退げに来ない。

それに、どたばたと、階下も二階も忙しげな跫音が絶えなかった。腹も立つが、ああして目をまわしている雇人も気の毒と思うと、怒りもされないのである。

片づかない部屋の中に、奈良井の大蔵は手枕で横になっていたが、ふと、何か思い立ったように首を擡げ、

「助市」

と、下男を呼んだが、見あたらないので、

「城太郎、城太郎」

と、呼び直して坐る。

その城太郎も亦、何処へ行ったか、影が見えないので、部屋を出てみると、中庭を下へ臨ん

で、ここの縁の欄干には、まるで花見でもしているように、二階の客が揃いも揃って、階下の奥座敷を見おろしながら、何やらわいわい騒いでいるのであった。
その中に交じって、城太郎も一緒になって階下をのぞいていたのを見出し、
「これ」
と、抓んで来て、
「何を見ているのだ」
と、大蔵が眼で叱ると、城太郎は、家の中でも離さずにいる長やかな木剣を、畳につかえて坐りながら、
「だって、みんな見てるんだもの――」
と、尤もな事をいう。
「みんなは、何を見ているのだい」
大蔵も多少、興をひかれていないわけでもない。
「何って……あの、階下の奥へ泊った、沢山な女の人を見ているんだろ」
「それだけか」
「それだけだよ」
「何がそんなものおもしろい」
「わからない」
城太郎は、有体に首を振る。
大蔵を落着かせぬ原因は、雇人の跫音よりも、階下へ泊り合せた角屋の女郎衆よりも、むしろ

それを上から覗いている、二階の客どもの騒ぎにあった。
「わしは少し、町を歩いて来るからな、なるべく、部屋にいなくてはいけないよ」
「町へ行くなら、おいらも連れて行っておくれよ」
「いや、晩はいけない」
「なぜ」
「いつもいっている通り、わしの夜歩きは、遊びではない」
「じゃあ、何さ？」
「信心だ」
「信心は昼間しているからたくさんじゃないか。神様だって、お寺だって、晩は寝てるだろ」
「社寺をお参りする事ばかりが信心ではない。ほかに祈願もあることでな」
と、相手にしないで、
「その挾み筥から、わしの頭陀袋を出したいが、開くか」
「開かない」
「助市が鍵を持っているはずじゃ、助市はどこへ行ったな」
「階下へ行ったぜ、さっき」
「まだ風呂場か」
「階下で、女郎衆の部屋をのぞいてたよ」
「あいつもか」
と、舌打ちして、

「――呼んで来い、早く」
大蔵は、そういって、帯を締め直しにかかった。

三

四十人からの同勢である。旅籠の下座敷は、ほとんど、角屋の連中で占めている。男たちは、帳場寄りの部屋に、女郎たちは、中庭の向うの部屋に。
何しろ、賑やかを通り越して、姦しいこと一方でない。
「あしたはもう、歩けんがなあ」
と、大根のような白い足に、大根おろしを摺って、足の裏の火照りに塗ってもらっている傾城もある。
元気なのは、破れ三味線を借りて来て爪弾きをしているし、皮膚の青白いのは、もう夜の具を被いで、壁に向って寝こんでいる。
「おいしそうだね、あたいにも、よこしなよ」
と、喰べ物を引ッ張りっこ。――又、行燈とさし向いで、上方の空に残して来た契りある男へ、筆を走らせている苦界の後ろ姿もある。
「あしたはもう江戸とやらへ、着くのかえ」
「どうだかね。ここで訊けば、まだ十三里もあるってえもの」
「勿体ないね、夜の灯りを見ると、こうしているのは」
「おや、たいそう、親方思いだね」

「だって……。ああじれったい、髪の根がかゆくなった。釵をおかし」
　こんな風景でも、京女郎衆と聞くからに、男の眼はそばだったのであろう。風呂場から上がった下男の助市は、湯ざめをするのも忘れて中庭の植込み越しに、いつまでも、見惚れていた。
　すると、後ろから耳を引張って、
「いい加減におしよ」
「ア痛」
　と振向いて、
「なんだ、この城太郎め」
「助さん、呼んでるぞ」
「誰が」
「おまえの主人がさ」
「うそいえ」
「うそじゃないよ。又、歩きに出かけるんだとさ。あの小父さん、年がら年中、歩いてばかりいるんだな」
「あ、そうか」
　助市の後から、城太郎も駈出して行こうとすると、庭木の陰から思いがけなくも、
「城太さん――。城太さんじゃないの？」
　と、呼ぶ者があった。
　はっと、城太郎の眼が、真剣になって振顧った。何もかも忘れ切って運命に尾いて歩いている

かのようでも、彼の心のどこかには絶えず、見失った武蔵とお通の身を気にとめているらしかった。
今、呼んだのは、若い女の声であった。もしや？　――とすぐ胸がどきっとしたものとみえる。じっと、大きな八ツ手の陰をすかして、
「……誰？」
おずおず寄ると、
「わたし」
と、木陰の白い顔は、葉の下を潜って、城太郎の前に立った。
「なアんだ」
がっかりしたように、城太郎がいい放ったので、朱実は舌うちして、
「なあに、この子はまあ」
と、自分の寄せかけた感傷のやり場を失って、憎そうに、城太郎の背を打った。
「ずいぶん久し振りじゃないの。どうして、お前、こんな所へ来ているの」
「自分こそ、どうしたのさ」
「あたしはネ……知ってるだろ。よもぎの寮の養母さんとも別れちまって、それからいろんな目に会ってね」
「あの……大勢の女郎衆と、一緒なのかい」
「でも、まだ、考えてるの」
「何をさ」

「傾城になろうか、やめようかと思って」
こんな子供にと思っても、朱実には、こんな嘆息を、ほかに聞いてもらう人はなかった。
「……城太さん、武蔵様は今、どうしていらっしゃるの？」
やがて、そっといったが、彼女が初めから訊きたい事は、むしろそれだけらしかった。

四

武蔵の消息を訊かれると、城太郎は、そのことなら、此方から訊きたいところだと、いわぬばかりに、
「知らないよ、おいらは」
「なぜ、あんたが知らないのさ」
「お通さんとも、お師匠様とも、途中でみんな、迷れてしまったんだもの」
「お通さんて――誰？」
朱実は、急に、彼のことばに、注意をかたむけ、そして、何か憶い出したように、
「……ああそうか。……あのひとは、いまだに武蔵様の後を追いまわしているのね」
と、呟いた。
朱実が常に想像している武蔵は、行雲流水の修行者であった。樹下石上の人だった。それゆえに、いくら想いを懸けたところで、届き難い心地がして、同時に、自分の荒びかけた境涯も顧みられ、
(所詮、かなわぬ恋)

という弱気な諦めにつつまれてしまうのだった。
けれど、その武蔵の生活の影に、もうひとり、べつな女性の影が重なっていると想像すると
――朱実の諦めは、到底、灰をかぶせられた埋め火のままではない。
「城太さん、ここじゃ、他の人の目がうるさいから、戸外へ行かない？」
「町へかい」
出たくて耐らなかった折なので、そう誘われると、一も二もない。
旅籠の庭木戸をあけて、ふたりは宵の往来へ出る。
二十五宿といわれる八王子の燈は、今までの何処よりも繁華に見えた。秩父や甲州境の山の影が、どっぷり町の西北を囲ってはいるが、ここに纏まっている宵の燈には、酒のにおいだの――博労の声だの、機屋のおさの響きだの、問屋場役人の呶鳴る声だの、町芸人の佗しい音楽だのがつつまれて、人間の聚楽を賑わしていた。
「あたし、お通さんていうひとのことは、又八さんからよく聞いてたけれど、いったい、どんな女――」
朱実は、ひどくそれが、気になり出したらしい。
武蔵の事は、ひとまず胸の隅へあずけておいて、彼女の胸には、お通という者に対して、何か、燃えるようなものが、焦々、立ちはじめていた。
「いいひとだぜ」
と、城太郎がことさらに――
「やさしくって、思いやりがあって、綺麗でサ――。おいら、大好きだ、お通さんは！」

と、いったので、朱実の胸はよけいに、或る脅威を感じてきた。
けれど、そういう脅威は、どんな女性でも決してあらわには顔色に出さない。反対に、彼女も、ほほ笑むのであった。
「そう、そんないいひと」
「ああ、そして、何でもよくできるよ、歌もよむし、字もうまいし、笛も上手だしね」
「女が、笛なんか上手だって、なんにもなりやしないじゃないの」
「けれど、大和(やまと)の柳生の大殿様でも、誰でも、お通さんのことは賞(ほ)めるぜ。……ただおいらにいわせれば、いけない事がひとつあるけれど」
「女には、誰にだって、いけない性分が沢山あるものよ。ただそれを、あたしみたいに、正直にうわべに出しているか、おしとやか振って、うまく包んでいるかの違いしかありやしないものよ」
「そんな事ないよ。お通さんのいけないのはたった一つしかないよ」
「どんな性分があるの」
「すぐ泣くんだよ。泣虫なのさ」
「泣くの。……まあ、どうしてそう泣くんでしょう」
「武蔵様のことを思い出しちゃあ泣くんだろ。一緒にいると、それだけが、陰気になって、おいら嫌いさ」
——もう大概に、相手の顔いろを見て喋ればいいのに、城太郎はおかまいなしに、まだこの上にも、朱実の胸はおろか、全身を嫉妬の火で焼きかねないほど——無邪気を通り越していた。

五

眸の底にも、皮膚にも、蔽いきれない嫉妬のいろをたたえながら――なおなお、朱実は求めて訊きたがった。
「いったい、お通さんて、幾歳なの？」
城太郎は、見較べるように、彼女の顔をながめて、
「同じぐらいだろ」
「わたしと？」
「だけど、お通さんの方が、もっと、綺麗で若いよ」
そのくらいでこの話題が打切れればよかったのに、朱実の方から又、
「武蔵様は、人なみ以上、武骨だから、そんな泣虫のひとは嫌いだろう。そうだよきっと、そのお通ってひとは、泣いて男の気持をひきつけようとする――角屋の女郎衆みたいなひとに違いない」
どうかして、お通を、城太郎にだけでも、好く思わせまいと努めるのであったが、結果はかえって反対に、
「そうでもないぜ。お師匠様も、うわべは優しくしないけれど、ほんとは、お通さんが好きらしいんだよ」
とまで、いわせてしまった。
凡ならぬ顔いろはもうとうに通り過ぎている朱実であった。歩いている側に河でもあれば、す

ぐ飛びこんで見せてもやりたいような火の塊りが胸へこみあげてくる。
これが、子供相手でもなければ、もっといってやりたい事はあるけれど、城太郎の顔いろを見ては、その張合いもない。
「城太さん、おいで」
ふいに、彼女は、町の辻から横町の赤い燈を見て、引っ張った。
「ア、居酒屋じゃないか、そこは」
「そうさ」
「女のくせにおよしよ」
「何だか、急に飲みたくなったのよ。ひとりじゃ間がわるいから――」
「おいらだって、間がわるいや――」
「城太さんは、何でも喰べたいものを喰べればいいじゃないか」
覗いて見ると、幸いにも、ほかの客はいないらしい、朱実は、河へ飛び込むよりもっと強い盲目になって、中へ這入るなり、
「……お酒を」
と、壁へ向っていった。
それから彼女は矢つぎばやに酒を体に容れた。城太郎が恐れて止めた頃には、もう城太郎の手におえなかった。
「うるさいね、何サ、この子は――」
と、肱で振払って、

「もっと、お酒を……お酒をくださいな」
そのくせ、もう焔のような顔して、俯っ伏しながら、息もくるしげなのである。
「いけないよ、やっちゃあ」
城太郎が、間に立って、心配そうに断ると、
「いいよ、お前はどうせ、お通さんが好きなんでしょ。……あたしはね、泣いて男の同情を買うような、そんな女、大っ嫌いさ」
「おいら、女のくせに、酒なんか飲むやつ、大っ嫌いだ」
「わるかったね。……お酒でも飲まなけれやいられないあたしの胸は……おまえみたいなチンチクリンには分りません――だよ」
「はやく勘定をお払いよ」
「おかねなんて、あるかとさ」
「ないのかえ」
「そこの旅籠に泊っている、京の角屋の親方さんから貰っておくれ。どうせもう売った体……」
「アラ、泣いてら」
「わるいかえ」
「だって、お通さんの泣虫を、さんざん悪くいった癖に、自分で泣くやつがあるもんか」
「あたしの涙は、あのひとの涙とは、涙がちがいますよ。――アア面倒くさい、死んでやろうか」
ふいに身を起すと、戸外の闇を目がけて駈け出したので、城太郎は、びっくりして抱き止め

た。

こういう女客も、稀にはあるとみえて、居酒屋の者は笑っていたが、ふと、隅に寝ていた牢人者が、むっくり酔眼をさまして見送っていた。

六

「朱実さあん。朱実さあん。――死んじゃいけないよ」

城太郎は追いかけてゆく。

朱実は先へ走ってゆく。

暗い方へ、暗い方へと。

先が闇であろうと、沼であろうと無鉄砲に駈けているもののように見えるが、朱実は、城太郎が泣き声だして、後ろで呼んでいることを知っている。

ひそかな芽生えを乙女の胸にもちながら、その芽を、あらぬ男に――あの吉岡清十郎にふみにじられて――住吉の海へまっしぐらに駈けこんだ時には、ほんとに、死の彼方まで行く気であったが――今の朱実には、その口惜しさだけがあっても、それまでの純真さはすでにない。

(誰が、死ぬものか)

と、自分へいいながら、ただわけもなく、城太郎が後ろから駈けて来るのが面白くて、世話をやかせてやりたいのだった。

「あっ、あぶないっ」

城太郎は、呶鳴った。

彼女の先に、濠の水らしいものが、闇に見えたからであった。
たじろぐ彼女を後ろからひしと抱き止めて、
「朱実さん、およしよ、およしよ。死んだってつまらないじゃないか」
引きもどすと、よけいに、
「だって、おまえだって、武蔵様だって、みんなあたしを、悪者のように思ってるじゃないか。あたしは、死んでこの胸に、武蔵様を抱いてゆく。……そして添わせるものか、あんな女に」
「どうしたのさ。何が、どうしたのさ」
「さあ、その濠の中へ、あたしを突きとばしておくれ。……よ、よ、城太さん」
そして両手を顔に当て、さめざめと、泣きぬくのであった。
城太郎は、その姿を見て、ふしぎな恐さに取り憑かれていた。自分も泣きたくなったらしく、
「……ネ。帰ろう」
と、宥めると、
「ああ、会いたい。城太さん――探して来ておくれ。武蔵様を」
「だめだよ、そんな方へ歩いてゆくと」
「――武蔵様」
「あぶないッたら」
この二人が居酒屋の横町を駆け出した時から、すぐ後を尾けて来た牢人者は、その時、狭い濠を繞らした屋敷の角から、嗅ぎ寄るように歩いて来て、
「こら、子ども。……この女は、おれが後から送り届けてやる。お前は帰ってもいい」

と、朱実の体を、いきなり小脇に抱きしめて、城太郎を突き退けた。
身丈のすぐれた三十四、五の男である。かなつぼ眼に青髯のあとが濃い。関東風というのか、江戸へ近づくに従って、ひどく眼につくのが、着物や裾の短いことと、刀の大きい事だった。
「おや？」
見上げると、下顎から右の耳へかけて、刀の切先で撫であげられた古傷が、桃の割れ目のように歪んでいる。
(強そうなやつだぞ)
と思ったのであろう。城太郎は生唾をのんで――
「いいよ、いいよ」
朱実を連れ戻そうとすると、
「みろ、この女は、やっと虫が納まって、いい気持そうに、おれの腕の中に締められて寝てしまった。おれが連れて帰ってやる」
「だめだよ、おじさん」
「帰れっ」
「……？」
「帰らないな」
悠っくり、手をのばして、城太郎の襟がみをつかむと、城太郎は、羅生門の綱が鬼の腕に耐えるように踏んばって、
「な、なにをするのさ」

「この餓鬼め、溝の水を喰らって帰りたいか」
「なにをっ」
この頃は、体以上の木剣も、やや手について、ひねり腰に抜くがはやいか、牢人の横腰をなぐりつけた。
——しかし、自分の体も途端に、あざやかなもんどりを宙に打って、溝へは落ちなかったが、どこか、そこらの石にでもぶつけたらしく、ううむと唸って、それなり動きもしなかった。

七

ひとり城太郎に限らず子供というものはよく気絶する。大人のような遅疑がないので、事にぶつかると、素純なたましいは、この世とあの世の境を、つい弾みでも、超えてしまうのであろう。
「おーい、子どもう」
「お客さん」
「子ども……ウ」
耳元で、かわるがわるに呼ばれて、城太郎は、大勢の中に介抱されている自分を、ぱちぱち見まわした。
「気がついたかい」
皆に問われて、城太郎は、間がわるそうに、自分の木剣を拾うが早いか、歩き出した。
「これこれ、お前と一緒に出た女子はどうした」

宿屋の手代は、あわてて彼の腕をつかまえた。

そう訊かれて、彼は初めて、この人々が、奥に泊っている角屋の者と、旅籠の雇人たちで、朱実を探しに来たものと知った。

誰が発明したのか、重宝がられて上方でも流行っている「ちょうちん」と呼ぶ物が、もう関東にも来ているとみえ、それを持った男だの、棒切れを持った若者などが、

「おまえと、角屋の女子が、侍につかまって、難儀をしていると、知らせてくれた者があるのだ。……何処へ行ったかおまえは知っているだろうが」

城太郎は、首を振って、

「知らない。おいらは、何も知らない」

「何も？　……ばかをいえ、何も知らぬことがあるものか」

「何処か、彼方のほうへ、抱えて行ったよ。それきりしか、知らない」

城太郎は、とかく返辞をいいしぶった。関り合いになって、後で奈良井の大蔵に叱られる事が恐かったのと、もう一つの理由は、相手に抛りつけられて、気絶してしまった不覚を、大勢の前でいうのが、間がわるいのであった。

「どっちだ。その侍の逃げた方は」

「あっちだ」

指さしたのも、いい加減であったが、それっと、大勢が駈け出すとすぐ、ここにいた、ここにいたと、先で叫ぶ者がある。

提燈や棒が駈け集まってみると――朱実はしどけない姿を農家の藁小屋らしい陰に曝してい

た。その辺に積んである乾草の上に押し仆されていたものとみえ、人の跫音に驚いて、髪も着物も、わらや乾草だらけになって、起き上がっていたが、襟はひらいているし、帯はだらりと解けている——
「まあ、どうしたのじゃ」
提燈の明りに、それを見た人々は、すぐ或る犯行を直感したが、さすがに、口へいい出す者もなく、犯行者の牢人者を追うことも忘れていた。
「……さ、お帰り」
手をひくと、その手を払って、彼女は小屋の羽目へ顔を当てたまま、よよと、声をあげて、泣きじゃくった。
「酔っているらしいね」
「何で又、戸外で酒など？」
人々は、しばらく、彼女の泣くにまかせて、見まもっていた。
城太郎も、遠くからその様子を覗いていた。彼女がどんな目に遭ったのか、彼には判っきり頭に描く事はできなかったが、彼はふと、朱実とはまるで縁のない過去の或る体験を思いだしていた。
それは、大和の柳生の庄のはたご屋に泊った時、はたごの小茶ちゃんという少女と、馬糧小屋のわらの中で、抓ったり、かじりついたりして、ただ狆ころのように、人の跫音を恐れるおもしろさを味わった——あの経験であった。
「行こうッ——と」

すぐ、つまらなくなって、城太郎は駈けだした。駈けながら、たった今、あの世のてまえまで行った魂を、この世に遊ばせて歌いだした。

野なかの、野中の
金ぼとけ
十六娘をしらないか
迷った娘を知らないか
打っても、カーン
訊いても、カーン

草雲雀

一

帰る旅籠は、分りきったつもりでいたらしいが、向う見ずに飛んで来るうちに、
「おや、違ったかな？」
城太郎は初めて、自分の駈けている道に、疑いを抱き、前や後ろを見まわして、
「来る時には、こんな所は歩かなかったぞ」
と、やっと気がついたような顔つきである。

この辺には、古い砦の蹟を中心に、一廓の武家町がある。砦の石垣は、かつて他国の軍に占領されて、ひどく壊されたまま荒れているが、一部を修復して、今ではこの地方を支配する大久保長安の役宅か住居になっている模様である。

戦国以後に発達した平城とちがい、極めて旧式な——土豪時代の砦なので、濠も繞らしてないし、従って城壁も見えない。唐橋もない。ただ、漠とした一面の藪山であった。

「あっ？　……誰だろう……あんな所から人間が？」

城太郎が佇んでいた道の片側は、砦の下を繞っている侍屋敷の塀であった。

そして一方は、田圃と沼であった。——

その沼と田圃の端れからすぐ、嶮しい藪山の裏が、生えたように急に聳え立っている。

道もないし、石段も見えないから、恐らく、この辺は砦の搦手であろう。——だのに今、城太郎が見ていると、その藪山の絶壁から、綱を垂らして、降りて来る人間がある。

綱の先には、カギがついているとみえて、その綱の端まで降りてくると、足の先で、岩や木の根を探り、下から振ってカギを外し、またさらに下へ綱をのばして、スルスルと降りて来る。

——そして遂に、田圃と山の境まで下がって来ると、その人影はいったん其処らの雑木藪の中に見えなくなってしまった。

「なんだろ？」

城太郎の好奇心は、自分の身が宿場の灯から遠い所へ迷って来ていることをも忘れさせてしまった。

「……？」

だがもう、彼がいくら眼をまるくしていても、何も見えて来なかった。
それだけに又、彼の好奇心は、そこを去りかねた様子で、往来の樹陰にひたと身をつけて、やがて田圃の畦を渡って、自分の前へ来そうな気のする——先刻の人影を待ちぬいていた。
彼の期待は外れなかった。ずいぶん時経ってからであったが、やがて、畦道からのそのそと此方へ来る人間が見える。
「……なんだ薪拾いか」
他人の山の薪を盗む土民は、一背負いの薪のために、夜を選んで、随分あぶない崖も越えるが、もしそんな者だったら——と城太郎はふとつまらない待ちくたびれを感じた。しかし再び、驚くべき事実を眼のあたりに見せられて、彼の好奇心は、満足を通り越え、恐怖の顫えに襲われた。
——田圃の畦から往来端へ上がった人影は、彼の小さい影が、樹の陰にへばりついているとも知らず、悠々、彼の側を通って行ったが、そのせつな、城太郎はよくも、
「あっ！」
という声を出さなかったものである。
なぜなら、それは慥かに城太郎が先頃から身を託している奈良井の大蔵に違いないからである。
けれど彼は又すぐ、
「いや、人間違いだろ？」
と、自分の眼で見た瞬間のものを、打ち消そうとした。

そう打ち消してみると、間違いかとも信じられた。——彼方へすたすたと行く後ろ姿を見れば、黒い布で顔をつつみ、黒い膝行袴や脚絆もはいて、足も身軽なわらじ穿きではないか。

そして背中には、なにやら重たげな包みを確乎と背負っている。その頑健な肩といい、腰ぼねといい、どうして、五十を越えた奈良井の大蔵であるものか——と、思われぬでもなかった。

二

見ていると、先へ行く人影は、又、往来から左の丘の方へ向って、曲がって行く。

べつに深い考えもなく、城太郎も後に尾いて歩いていた。

どっちにしても、彼も、帰る方角をきめて、歩き出さなければならない場合にあったので、ほかに道を問う人影はなし、漫然、その男の後に尾いて行ったら、宿場の燈火が見えて来るだろう——ぐらいな思案にすぎなかったのである。

ところが。

先の男は、横道へ這入ると、担いでいた嚢のような物を、重そうに、道標の下におろして、石の文字を読んでいた。

「あら？　……変だな……やっぱり大蔵様に似ている人だ」

それから城太郎は、いよいよ不審を増して、今度はほんとに、見え隠れに、その男を尾行てみる気になった。

男が、もう丘の道を登っているので、後から、道標の碑の文字を読んでみると、

首塚の松

このうえ

と、彫ってある。

「ああ、あの松か」

その梢は、丘の下からも仰がれた。後からそっと行ってみると、先に着いた男はすでに、松の根方に腰をおろし、煙草をつけて喫っている。

「いよいよ、大蔵様にちがいないぞ」

と、城太郎は呟いた。

なぜならば、その頃、ここらの田舎の人や町人が、滅多に煙草など持っているはずがない。煙草の味を教えたのは、南蛮人だそうであるが、日本で栽培するようになってからでも、高価なので、上方あたりでも、よほど贅沢な者でなければ喫わない。値だんばかりでなく、日本人の体はまだ喫煙の害に馴れないので、眩いを起したり、泡をふいたりする者が多いので、美味いけれど、魔薬であると考えられている。

だから、奥州の伊達侯などは、六十余万石の領主であり、大の煙草の好者といわれているが、祐筆の御日常書によると、

朝、お三ぷく
夕、御四ふく
御寝、ご一ぷく

などと誌されてある。

そんなことは、城太郎の知ったわけのものでないが、城太郎にも、滅多な者が喫うべきもので

ないことは分っている。――又、それを奈良井の大蔵が、日常時をきらわず、陶器製の煙管で喫っていたことも見ていた。もっとも大蔵が喫っているのは、木曾一の大家の主人であるから、不審には思わなかったが、今、首塚の松の下で、スパリスパリと喫っている螢火ほどな煙草の火には、恐ろしい疑念がわいた。

「何をしてるんだろ？」

彼は、冒険に狎れて来て、いつのまにか、かなり近くの物陰まで、這い寄ってながめていた。

やがての事。

悠々と、煙草入れを仕舞うと、男はぬっくと起ち上がった。そして被っている黒い布を脱ったので、顔もよく見えた。やはり奈良井の大蔵なのである。

覆面に使っていた黒布を、手拭のように腰に挟むと、彼は、大地にはびこっている巨松の根を、一周りぐるりと巡ってあるいた。そしてどこから拾い出したのか、手には、いつのまにか、一挺の鍬を持っている。

「……？」

鍬を杖に立てて、大蔵はしばらく夜の景色でも眺めるように突っ立っている。城太郎もそれで気づいた。この丘は、町場のある本宿と、砦や屋敷ばかりの住宅地との境になっている丘であった。

「うむ」

大蔵は、独りでうなずいた。そしてやにわに、松の根の北側にある一個の石を転がし、その石のあった下を目がけて、ざくと、一鍬入れはじめた。

三

鍬を振りだした大蔵は、わき目もふらずに、土を掘りのけた。

みているうちに、人間の体が立ったままであらかた這入るぐらいな穴になった。――そこで彼は、腰の黒い手拭で、ひと汗拭いた。

「……？」

草むらの石の陰に、石みたいになって、眼をまろくしていた城太郎は、その人間が、大蔵にちがいないと見てはいるが、それでもまだ、自分の知っている奈良井の大蔵とは、人がちがう気がしてならなかった。世の中に、奈良井の大蔵という者が、二人いるような気がして来るのだった。

「……よし」

大蔵は、穴の中に這入って、地面から首だけ出して、そういった。

穴の底を、足で踏み固めているのだった。

自分を埋めて、土を被るつもりなら、止めなければならない――と城太郎は考えていたが、そんな心配はいらなかった。

穴から跳び出すと、彼は松の木の下に置いてあった嚢のような重い物を、穴のそばまで、ずるずる引き摺って来て、嚢の首を括ってある麻の紐を解いている。

風呂敷かと思ったら、それは革の陣羽織であった。陣羽織の下に、もう一重、幕みたいな布で包んである物を開けると、驚くべき黄金の海鼠があらわれた。二つ割りの竹の節のあいだに、熔

かした黄金を流したもので、竹流しの竿金ともよぶ地金で、それが何本もあった。

それだけかと思っていると、彼はこんどは帯を解いて、腹巻だの、背中だの、体じゅうから、慶長判に鋳き上げてある金を、何十枚となく振りこぼした。それを手早く掻き集めて黄金の地金といっしょに、陣羽織にくるむと、穴の中へ犬の死骸でも蹴込むように、ずしーんと落した。

土を被せる。

足で踏みつける。

そして石を、元のとおりな位置へすえ、新しい土塊れが、そこらに目立たぬように、枯草や木の枝などを撒きちらし、こんどは、自分の身装を、平常の奈良井の大蔵に変えているのだった。

草鞋や脚絆や、不用になった物は、鍬にくくし付けて、人の這入らない藪の中へ投げこんだ。

そして十徳を着、十徳の胸へ、雲水の掛けているような頭陀袋をさげ、草履まで穿きかえると、

「アア、一骨だった」

呟いて、丘の彼方へ、さっさと降りて行ってしまった。

その後で、城太郎はすぐ、生き埋めになった黄金のあとに立ってみた。どう見ても、掘りかえしたらしい痕は残っていない。彼は魔術師の掌を見つめるように、大地を見ていた。

「……そうだ。先へ帰っていないと、変に思われるぞ」

町場の燈火が見えているので、もう帰り途の見当はついている。彼は、大蔵とちがう道をえらんで風の子みたいに丘から駈けだした。

何喰わぬ顔をして、旅籠の二階へあがり、自分たちの部屋へ入ってゆくと、いいあんばいにまだ大蔵は戻っていない。

ただ、行燈の下に、下男の助市が、挾み筥へ倚りかかって、孤影悄然と、よだれをたらして眠っていた。

「おい、助さん、風邪ひくよ」

わざと、揺り起すと、

「あ。城太か……」

助市は、眼をこすって、

「こんな遅くまで、御主人様へも無断で、わりゃあ何処へ行っていたのだ」

「何いってんだい」

城太郎はやり返して、

「おいらはもう、とっくの昔に帰っていたじゃないか。寝ぼけて、知りもしないくせに」

「嘘をつけ。わりゃあ、角屋の妓を引っぱり出して、外へ行ったというじゃねえか。——今から、そんなまねしやがって、末恐ろしいやつだ」

間もなかった。

そこへ奈良井の大蔵が、

「今もどったよ」

障子を開けて入って来た。

四

どう歩いても、十二、三里はある。陽のあるうちに江戸へ着こうとすれば、よほど早立ちをし

なければならない。
角屋の一行は、まだ暗いうちに八王子を立った。奈良井の大蔵の組は、悠々、朝飯をしたため、
「さて」
と宿を立ち出でたのが、もう陽のたかい時分。
挟み筥の下男と、城太郎とは、例によって、お供に従いていたが、きょうの城太郎は、ゆうべの事実があるので、何となく、大蔵に対する気ぶりが違っていた。
「城太」
大蔵はふり向いて、浮かない彼の顔つきへ、
「どうした、きょうは」
「へ？　……」
「どうかしたのか」
「どうもしません」
「ひどく、きょうに限って、むっつりしているじゃないか」
「はい……、大蔵様。実は、こうしていてはお師匠様にいつ行き会えるか分らないから、おいら、おじさんと別れて捜そうと思うんだけれど……いけないかな」
大蔵は膠なくいった。
「いけないな」
すると城太郎は、いつものように、馴々しく縋りかけたが、急に手を引っ込めて、

「どうして」
と悄々いう。
「一ぷくしよう」
大蔵はそういって、武蔵野の草に腰をおろした。そして挾み筥を担いでいる助市へ、先へ行けと手を振って見せる。
「おじさん、おいら、どうしても、お師匠様をはやく捜したいもの。だから自分一人で、歩いたほうがいいと思って――」
「いけないというのに」
難かしい顔を示しながら、大蔵は陶器の煙管で、すぱりとくゆらしながら、
「お前は、きょうから、おれの子になるのだ」
と、いった。
問題が重大なので、城太郎は唾をのんだ。だが、大蔵はもうにやにや笑っているので、冗談をいわれたのだと解して、
「いやなこった。おじさんの子になんかなるのは嫌だ」
「どうして」
「おじさんは、町人だろ。おいらは武士になりたいんだもの」
「奈良井の大蔵も、根を洗えば、町人ではない。きっと、偉い武士にさせてやるから、わしの養子になれ」
どうやら本気らしいので、城太郎は身ぶるいを覚えながら、

「なぜおじさんは、急にそんなことをいい出すのだい？」

——すると大蔵は、いきなり城太郎の手を引き寄せて、ぎゅっと、羽交締めに抱き込みながら、彼の耳へ、唇をつけて、小声にいった。

「見たな！　小僧」

「……え？」

「見たろう！」

「……な、なにをさ」

「ゆうべ、おれがしたことを」

「…………」

「なぜ見た！」

「…………」

「なぜひとの秘密を見る！」

「……ごめんよ、おじさん、ごめんよ。誰にもいわないから」

「大きな声を出すな。もう見てしまった事だから、叱言はいわぬ。その代りに、わしの子になれ。それが嫌なら、可愛い奴だが、殺してしまわなければならぬのだ。——どうだ、どっちがいい？」

五

ほんとに殺されるかも知れないと思った。生れて初めて恐いというものに出会った気持であっ

た。
「ごめんよ、ごめんよ。殺しちゃ厭だい。死ぬのは厭だい」
抑えられた雲雀のように、城太郎は、大蔵の腕の中で軽くもがいた。大きく暴れると、すぐに死の手が圧し被さってくるように惧れもするのであった。
そのくせ大蔵の手は、決して、彼の心臓がつぶれる程、強い力で締めつけているのではない。やんわりと、膝のなかへ抱えこんで、
「じゃあ、おれの子になるか」
と、まばらな髯を城太郎の頬へ摺りつけていう。
その髯が痛い。
そのやんわりとした力がとても怖ろしい。大人臭いにおいが体を縛ってしまう。
どうしてだろう。城太郎にも分らなかった。危険というだけなら、これ以上あぶない目には何度も出会っているし、それに対しては、むしろ向う見ずな性質なのに、声も手も出ないで、嬰児のように、大蔵の膝から逃げることができなかった。
「どっちだ。どっちがいい？」
「…………」
「おれの子になるか、殺されたほうがいいか」
「…………」
「これ、はやくいえ」
「…………」

城太郎はとうとうベソを掻き始めた。汚い手で顔をこするものだから、涙が黒いしずくになって小鼻のそばに溜っている。
「なにを泣くか。おれの子になれば、倖せじゃあないか。武士になりたければ、なおさらのことだ。きっといい武士に仕立ててやる」
「だって……」
「だってなんだ」
「………」
「はっきりいえ」
「おじさんは……」
「うむ」
「でも」
「焦れったい奴。男というものは、もっと何でもはっきり物をいうものだ」
「……だってね……おじさんの商売は、泥棒だろ」
もし大蔵の手が、軽くでもかかっていなければ、途端に彼は、雲をかすみと駈け出していたに違いないが、その膝が深い淵のように、起つこともできなかった。
「あははは」
大蔵は、泣きじゃくる背を、ぽんとたたいて、
「だから、おれの子になるのは、嫌だっていうのか」
「……う、うん」

城太郎がうなずくと、彼は又、肩をゆすって笑いながら、
「おれは、天下を盗む者かもしれないが、けちな追剝や空巣ねらいたあ違う。家康も秀吉も信長も、みな天下を奪った人間じゃないか。——おれに従いて長い目で見ていると、今にわかって来る」
「じゃあおじさんは、泥棒でもないの」
「そんな割の合わない商売はしない。——おれはもっと太い人間さ」
もう城太郎の思案では、どう答えていいか、背が足りなかった。
大蔵は、膝の上から、ぽんと彼を離して、
「さあ、泣かずに歩け。きょうからはわしの子だ。可愛がってやる代りに、噯にも、ゆうべの事をひとに喋舌るな。——喋舌るとすぐ、その首を捻じ切ってしまうぞよ」

草分の人々

一

本位田又八の母が、江戸表へ来たのは、その年の五月末頃であった。
気候は、めっきり暑くなっていた。ことしは空梅雨か、ひと粒の雨も見えない。
「こんな草原や葭の多い沼地へ——なんで又こんなに家が建つのじゃろ?」

江戸へ来て、彼女の第一印象は、そんな呟きであった。
京の大津を出てから約二ヵ月近くもかかって、彼女はやっと今、着いたのである。道は東海道をとって来たものらしく、途中では、持病やら信心詣りやら、道草も多いので、都をば霞とともに出でしかど——という歌どおり遙けくふり返られる。
高輪街道には、近頃植えた並木や、一里塚もできていた。汐入から日本橋へゆく道は、新しい市街の幹線道路なので、わりあいに歩きよいが、それでも、石や材木をつんだ牛車がひっきりなしに通るのと、人家の普請や、埋地の土運びなどで、足もとも悪く、雨もふらないので、濛々と、白い埃が立っている。
「——ア、なんじゃ？」
彼女は、目角を立てて、普請中の新しい民家の中を睨めつけた。
中で笑う声がした。
左官屋が壁を塗っているのである。こての先から飛んできた壁土が、彼女の着物をよごしたのであった。
年は老っても、こういう事には我慢のならない婆であった。ついこの年頃まで、郷里では、本位田家の隠居で通った権式ぐせが、とたんに憤っと出るのである。
「往来の者へ、壁土をはね返しながら、詫びもせず、笑うているという法があろうか」
郷里の畑でこういえば、小作や村の者は、慴伏したものであった。しかし、御新開の江戸へ遽に流れて来て、荒い土をこねている左官屋職人は、こてをうごかしながら鼻で笑った。
「なんだって。——変なばばあが、なにか、ぶつぶついってるぜ」

お杉婆は、いよいよ怒って、
「今、笑うたのは、いったい誰じゃ」
「みんなだよ」
「なんじゃと」
ばばが肩をいからせる程、職人たちは笑っていた。
年がいもない――よせばいいのにと、足を止めた往来の者は、はらはらしていたが、ばばの性格がそれではすまなかった。
黙って、彼女は土間の中へ入って行った。そして左官たちが、足場にして乗っている板へ手をかけながら、
「おのれであろうが」
と、板を外した。
左官たちは、漆喰板の泥を浴びて、板の上からころげ落ちた。
「こん畜生」
刎ね起きると、左官たちは、ひと摑みにしてしまいそうな権まくで、お杉ばばの前に立ったが、
「さあ、外へ出い」
婆は、脇差に手をかけて、少しも年よりらしい怯みは見せない。
その勢いに、職人たちは、気をのまれてしまった。こんな婆さんがあろうかと意外であった。
すがたや言葉づかいから考えて、侍のおふくろである事は知れているし、へたな真似をしては

――と、急に惧れをなした顔いろである。
「この後、今のような無礼をしやると、承知せぬぞよ」
これでいいのだ、ばばは気がすんだとみえて、往来へ出て行った。往来の者は彼女のきかない気らしい後ろつきを見送ってちらかった。
するとかんな屑を泥足にひきずった左官屋の小僧が、ふいに普請場の横から駈け出して行って、
「この、ばばめ」
いきなり、手桶のへどろを、彼女の体へぶちまけて、隠れてしまった。

二

「何するかっ」
振り向いた時は、もう悪戯の下手人はいなかった。
自分の背に浴びた壁土に気づくと、彼女の顔は、無念そうな中に、泣き出しそうな顔を顰めて、
「何を笑う？」
と、こんどは、笑っている往来の者へ向って、いいちらした。
「げらげらと、何がおかしゅうて、笑い召さるのじゃ。老いぼれは、わしのみではないぞえ。おぬしらも、やがては年を老るのじゃぞ。はるばると遠国から越えて来たこのとしよりを、親切に宥ろうとはせず、捏ね土を浴びせたり、歯をむいて嘲笑うたりするのが江戸の衆の人情か」

罵るために、往来はよけい足を止め、又愈々、笑い声を増すことが、お杉婆には分らぬらしい。

「お江戸お江戸と、日本じゅうでは今、この上もない土地のように、偉いうわさじゃが、何のことじゃ、来てみれば、山を崩し、葭沼を埋め、堀を掘っては海の洲を盛っている慌だしい埃ばかり。おまけに人情はすすどうて、人がらの下品ていることは、京から西には見られぬことじゃ」

これで、婆は少し胸がすいたとみえる。なお笑う群衆を捨てて、忌々しげに、脚をはやめて行った。

町はどこを見ても、木口も壁も新しくて、ぎらぎらと眼を射るし、空地へ出ると、まだ埋めきれない土の下から、葭や蘆の根が枯れて喰み出している。乾いた牛の糞は、眼や鼻に這入る気がするのであった。

「これが江戸か」

彼女は、事々に、江戸が気に入らなかった。新開発の江戸の中でいちばん古い物が、自分の姿のように思われた。

実際、ここの土に活動しているものは、悉くが若い者に限られていた。店舗を持っている主人も若いし、騎馬で歩いている役人も、編笠を抑えて大股に過ぐる侍も、労働者も、工匠も、物売りも、歩卒も部将も、すべてが若かった。若い者の天地だった。

「尋ねる者でもない旅なら、こんな所に、一日とて、居てくれるのではないが……」

ぶつぶついっているまに、婆は又、足を止めた。ここも亦、堀を掘っているので、道を曲がら

なければならなかった。
掘り出した土の山は、どんどんと、土車で運ばれてゆく。そうして、葭や蘆が埋ってゆくそばから、大工は家を組み、大工の這入っているうちに、もう白粉の女が、暖簾の陰で眉を刷いていたり、酒を売ったり、生薬の看板をかけたり、呉服反物を積みあげていたりしていた。
ここらは以前の千代田村と日比谷村のあいだを通っている奥州街道の田圃道が開けているので、もっと、江戸城の周囲に寄れば、太田道灌以後、天正の御入国以来のまとまった大名小路や屋敷町もあって、多少、城下としての落着きもあるのであったが、婆はまだ、そこへは足を踏んでいない。
そして、昨日今日、急拵えにできかかっている新開地を見て、江戸の全体を考えているので、ひどく落着かないのであった。
掘りかけている空堀の橋のたもとに、ふとみると、一軒のほったて小屋がある。四方は蓆張りで、削ぎ竹を抑えに打ち、入口にのれんを掛けて、そこから一本の小旗が出ている。
見ると、一字、
「ゆ」
と書いてある。
永楽のびた銭一枚を、湯番にわたして、ばばは、湯にはいった。汗をながすのが目的ではなかった。竿を借りて、抓み洗いをした着物を小屋の横に干し、それの乾くあいだ、襦袢一枚で、洗濯物の下にほそい脛をかかえて、往来をながめていた。

三

時々、干竿の着物を手で触ってみる。陽が強いのですぐ乾きそうに思われたが、なかなか乾かないのである。
襦袢一枚に、湯巻の上へ帯を巻いたきりで、これを待っているので、見得を知らないばばも、往来から見えないように、銭湯小屋の陰に、いつまでも縮まっていた。
すると、往来の向う側で、
「幾坪あるのだい、この地所は――安けれやあ相談に乗ろうじゃないか」
「総坪で、八百坪からござんすよ。値だんは、申し上げたより負かりません」
「高いなあ。すこし、べら棒じゃないか」
「どういたしまして、土盛りの人足賃だって、安かあございません。――それにサ、もうこの界隈には地所はありませんぜ」
「なあに、まだ、あの通り埋立てているじゃないか」
「ところが、葭の生えているうちから、みんなあばき合いで、買手を待っている地所なんざ、十坪だってありませんや。――もっとも、ずっと隅田川の河原寄りなら幾らかありやすがね」
「ほんとに、八百坪あるのかい、この地面は」
「だから念のために、縄を引いてごらんなすって」
四、五名の町人どうしで、頻りと、土地売買の取引をしているのだった。
その値だんを、往来ごしに聞いて、お杉ばばは、眼をまろくした。田舎なら米のできる田が何

十枚という値が、ここの一坪か二坪の値だった。
江戸の町人のあいだには今、熱病のように、土地売買の思惑が行われているので、こんな風景は、随所に見られるのであったが、
「米も実らなければ、町中でもない地面を、どうしてここらの衆はあんなに買うのか」
と、彼女には、不思議でならなかった。
そのうちに取引の相談がまとまったのであろう。埋地に立っていた人影は、手打ちをして散らかって行った。
「――おやっ？」
ぼんやりと、そんな物を見ているうちに、誰か背後へ来て、自分の帯へ手を入れた者があるので、ばばはその手を摑んで、
「泥棒っ」
と、さけんだ。
小出しの財布はもう帯の間を抜けて、土工か駕かきらしい男の手に摑まれたまま、往来の方へ飛んでいた。
「――泥棒じゃっ」
自分の首を持って行かれたように、ばばは追い縋って、男の腰へしがみついた。
「――来てくだされッ。往来の衆ッ。盗人じゃっ」
一つや二つ、顔を撲っても、容易にばばの手が離れないので、持て余した掻っ攫いは、
「うるせえっ」

と、いいながら、足をあげて、ばばの脾腹を蹴とばした。

並たいていの老婆と心得たのがその小泥棒には不覚であった。うむうっ——と呻いてばばは仆れたものの、それと共に、襦袢一重になっても差していた小脇差を、抜きざまに酬いて、相手の足くびを斬っていた。

「ア痛ててて」

財布を持った小泥棒は、ちんばを曳いたままそれでも十間ばかり逃げたが、夥しい血がこぼれるのを見て、貧血して、往来へ坐ってしまった。

今、埋地で土地の手打をして、一人の乾児と共に歩いていた半瓦の弥次兵衛は、

「——やっ？　そいつあこの間まで、部屋にごろついていた甲州者じゃねえか」

「そうのようです。財布を握っていますぜ」

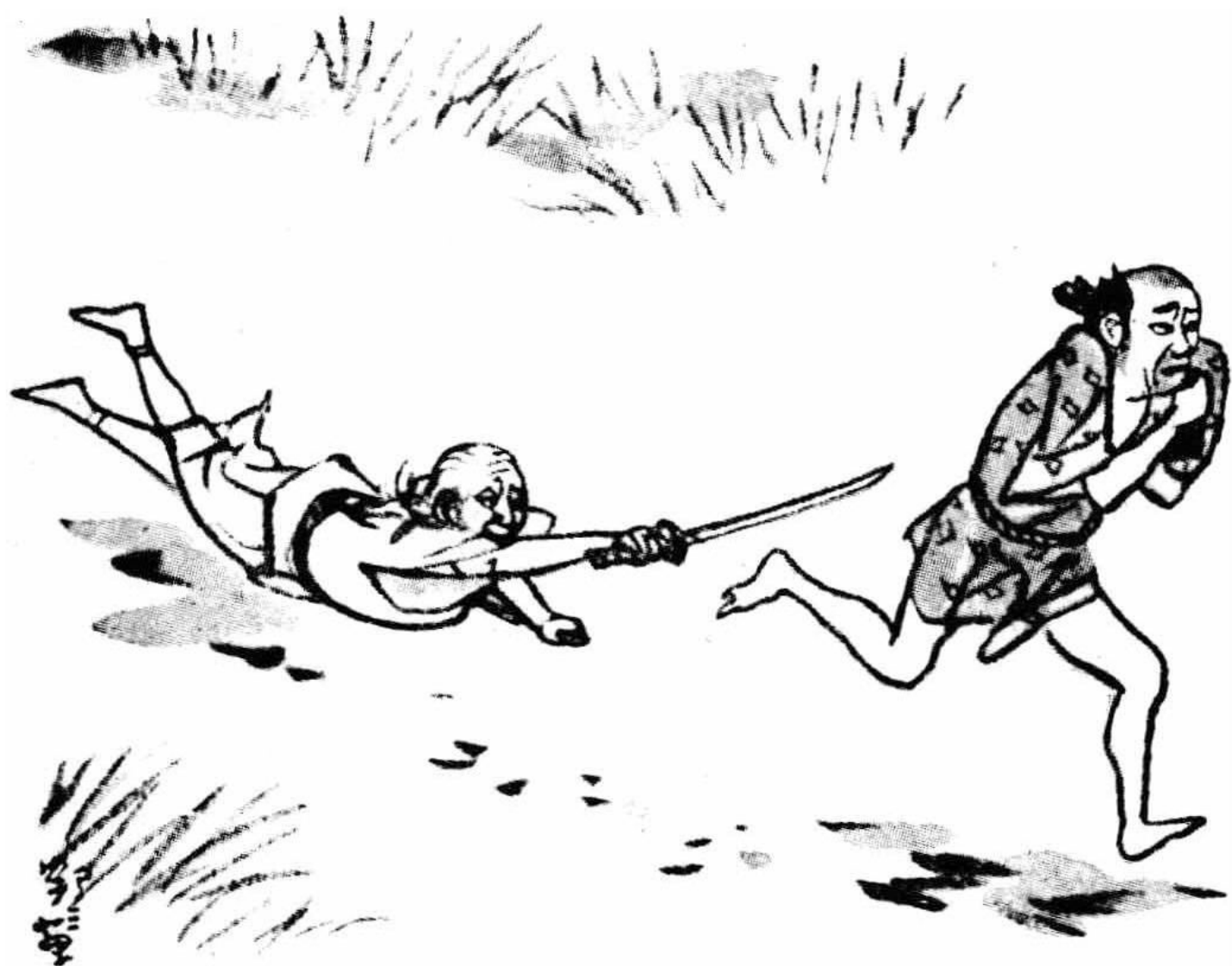
「泥棒という声が聞えたが、部屋を出ても、まだ手癖がやまねえな。……おお彼方に老婆が仆れている。甲州者はおれが捕まえているから、あの老婆を労って来い」

半瓦は、そういうと、逃げかけるちんばの襟がみを抓んで、蝗でも叩きつけるように、空地の方へ抛り出した。

四

「親分、そいつが、婆さんの財布を持っている筈ですが」

「財布はおれが奪り返して預かっている。としよりはどうした」

「たいして怪我もございません。気を失っていましたが、気がつくとすぐあの通り財布財布と喚

いております」
「坐っているじゃねえか。起てねえのか」
「そいつに、脾腹を蹴とばされたんで」
「よくねえ奴だ」
半瓦は、小泥棒を睨めつけて、乾児の男へいいつけた。
「丑。杭を打て」
杭を打て——と聞くと甲州者の小泥棒は、刃物を当てられたより顫えあがって、
「親分、それだけは、どうぞご勘弁を。以後は改心して、よく働きますから」
ひれ伏して、拝んだが、半瓦は首を振って、
「ならねえ、ならねえ」
その間に、走って行った乾児は仮橋普請をしている大工を二人連れて来て、
「この辺へ打ってくれ」
と、空地の中ほどを足で示して大工へいう。
ふたりの大工は、そこへ一本の杭を打ちこんで、
「半瓦の親分、これでようがすか」
「よしよし。野郎をそこへふん縛って、頭の上のあたりへ、板を一枚打ってくれ」
「なにか、お書きになるので」
「そうだ」
大工の墨つぼを借りて、それへ差尺筆で、

一ツ　泥棒一ぴき
せんだって迄、半瓦の部屋の飯食い者、再度悪事のかど之有り候につき、雨ざらし陽ざらし、七日七晩きゅうめいさせ置候ものなり。

大工町
弥次兵衛

「すまねえが、死なねえ程に、弁当飯のあまりでも、時々エサをやっといてくれ」
と、橋普請の大工や、近くで働いている土工たちへ頼んだ。
一同は口を揃えて、
「承知いたしました。たんと笑ってやりやしょう」
と、いった。
笑ってやるという事は、町人社会でさえ、この上もない制裁であった。年久しく武家は武家と戦争ばかりしていて、民治や刑法がゆき届かないために、町人社会はそれ自体の秩序のために、こういう私刑の方法を持っていた。
新興の江戸政体には、もう町奉行の組織だの、大庄屋制度をそのまま厳めしく延長したような職制や民治が体をなしかかっていたが、民間の旧習というものは、上ができたからといって、遽に余風が革まるものではない。
けれど、私刑の風などは、新開発の半途にある混雑な社会には、まだ当分あってもよいものと

して、町奉行でも、べつにこれを取締ることはしなかった。
「丑、そのとしよりへ、財布を返してやれ」
半瓦は、それをお杉ばばの手へ戻してから、又、
「かあいそうに、この年して、ひとり旅の様子じゃねえか。……着物はどうしたんだ」
「風呂小屋の横に、洗濯して、乾してありますが」
「じゃあ着物を持って、としよりを負ぶって来い」
「家へ連れて帰るんで？」
「そうよ、盗っ人だけ懲らしたってこのとしよりを捨てておいたら、又どいつかが悪い量見を起さねえとも限るまい」
生乾きの着物を抱え、彼女を背なかに負ぶって、乾児の男が、半瓦のあとに尾いてそこを立ち去ると、往来につかえていた人垣も、ぞろぞろと東西へ崩れだした。

五

日本橋は、竣工てからまだ一年も踏まれていなかった。
後の錦絵などで見るよりも、そこの河幅はずっと広くて、両岸から新しい石垣の築出しが築かれ、そこにまだ新しい白木の欄干が架かっていた。
鎌倉船や、小田原船が、橋の際までいっぱいに這入って行った。その向う河岸に、魚くさい人間がわいわいと市を立てている。
「……痛い。うう痛い」

ばばは、乾児の背なかで、顔をしかめながらも、魚市場の人声に何事かと、眼をみはった。
半瓦は、乾児の背から、時々聞える呻きをふり向いて、
「もう直きだよ、辛抱しねえ、生命に別条があるじゃなし、余り唸りなさんな」
往来の者が、頻りと振向くので、こう注意したのである。
それからは、おとなしくなって、ばばは嬰児みたいに、乾児の背へ顔を寝かせていた。
鍛冶町だの、槍町だの、紺屋町だの、畳町だの、職人色に町がわかれていた。大工町の半瓦の家は、その中でひどく変っていた。屋根の半分が瓦で葺いてあるのが、誰の眼にもついた。
二、三年前の大火以後、町の家は板屋葺になったが、その以前は、草葺屋根がおおかたであった。弥次兵衛は往来に向った方だけ、瓦で葺いたので、
(半瓦、半瓦)と、それが通り名になってしまい、自分も得意だった。
江戸へ移住して来た初めは、弥次兵衛はただの牢人者だったが、才気と俠気が備わっているので、人を御すのが上手、町人になって、屋根請負いを始め、やがて、諸侯の普請人足を請負うようになり、又、土地の売買をやったりして、今では懐手をして「親分」という特殊な敬称をうけている。
「親分」とよばれる特殊な権力家は、新しい江戸には今、彼のほかにも、簇生してきた。しかし彼はその中でも顔のひろい「親分」であった。
町の者は、武家をさむらいと尊敬するように、彼等の一族をも「男伊達」と敬称して、むしろ武家の下風にある自分たちの味方の者としていた。
この男伊達も、江戸へ来てから、風俗だの精神は大いに変化したが、江戸の町から発生した生

え抜きではない。足利の末の乱世には、もう茨組などという徒党があって——勿論それは男伊達などとは敬称されなかったが、「室町殿物語」などによると、

ソノ装束ハ、赤裸ニ茜染ノ下帯、小王打チノ上帯ハ幾重ニモマワシ、三尺八寸ノ朱鞘ノ刀、柄ハ一尺八寸ニ巻カセ、二尺一寸ノ打刀モ同ジニ仕立テ、頭ハ髪ヲツカミ乱シ、荒縄ニテ鉢巻ムズトシメ、黒革ノ脚絆ヲシ、同行常ニ二十人バカリ、熊手、鉞ナド担ウモアリテ……

そして群集はそれを見ると、

（当時聞ゆる茨組ぞ、あたりへ寄るな、物いうな）

と、怯じ怖れて、道をあけて通したほどな威勢であったとある。

その茨組は、口には王義を唱えながら、時には、

（物奪り強盗は武士の慣い）

と出かけ、市街戦の時には、乱破に化けて、敵へも味方へも節操を売りなどしたため、平和になると、武家からも民衆からも追われてしまい、素質の悪いのは、山野に封じこめられて追剝稼ぎに落ち、性骨のある者は、新開発の江戸という天地を見つけて、ここに起りかけてある文化に眼ざめ、

（正義を骨に、民衆を肉に、義と侠の男らしさを皮にして——）

新興男伊達なるものが、いろいろな職業や階級の中から今、名乗りをあげているのだった。

「帰ったぞ、どいつか、出て来ねえか。——お客さまをお連れ申しているのだ」

半瓦は、自分の家に入ると、大まかな町屋造りの奥へ向って、こう呶鳴った。

喧嘩河原

一

よくよく居心地がよいとみえ、お杉ばばが半瓦の家に起き臥しを始めてから、月日はいつか一年半も巡っている。

その一年半の間、ばばは何をしていたかというと、体が、がっしり癒ってからは、

(思わず長いお世話になりましたわいの。もうお暇をせにゃならぬ)

と、今日は明日はと、いい暮して来たに過ぎない。

しかし、暇を乞おうにも、主人の半瓦弥次兵衛とは、めったに顔を合わすこともない。稀々、いたと思えば、

(まあまあ、そう気のみじかい事をいわずに、ゆるりと、敵をさがしなされ。身内の者も、絶えず心がけているのだから、追っつけ、武蔵の居所をつきとめ、ばば殿に、助太刀しようというているのに)

そういわれると、彼女も亦、ここの軒から立つ気も失せる。

初めのうちは、およそ江戸という土地がらや風俗を、忌み嫌っていた彼女も、この半瓦の家に一年半も過ごすうちに、

（江戸の人の親切さ）
を身に沁みて、
（何という、気儘な暮し）
と、目を細めて、この土地の人間を眺めるようになっていた。
わけても、半瓦の家はそうだった。ここには百姓出の怠け者もいるし、関ケ原くずれの牢人も、親の金を蕩尽して逃げて来た極道者も、おととい牢屋から出て来た入墨者もいるが――それが弥次兵衛という戸長の下に、大家族式な生活を営み、ざッかけない、粗っぽい、極めて不しだらな――中にも整然たる階級を持って、
（男を磨きあう）
という事を御神灯に立てて、一種の六方者道場を世帯としているのだった。
この六方者道場には、親分の下に兄哥があり、兄哥の下に乾児があり、その乾児のうちにも古参新参の区別がやかましく、他の客分格だの、仲間の礼儀作法も、誰が立てたともなく、非常に厳密であった。
（ただ遊んでござるのが退屈だったら、若い者の世話などみてくれると有難い）
と、弥次兵衛にいわれたところから、お杉ばばは、一間にあって、沢山ながさつ者の洗濯とか、縫物などを、お針子を集めて来ては、整理してやっている。
（さすがに、士の御隠居だ。本位田家とやらも、相当な家風を持った家筋とみえる）
がさつ者は、噂し合った。お杉ばばの厳格な起居と家政ぶりは、ひどく彼等を感嘆せしめた。
又、それが六方者道場の風紀を正すうえに役立った。

六方者ということばは、無法者にも通じる。柄の長い大小を突出し、二本のから脛と、二本のこじりを突っ張って歩く男だての姿から来た町の綽名なのである。

「宮本武蔵という侍が立ち廻ったら、すぐあのばば殿へ知らせてやれ」

半瓦の身内は、等しくこう心がけていたが、すでに一年半からになるが、その武蔵の名は杳としてこの江戸には聞かなかった。

半瓦弥次兵衛は、お杉ばばの口から、その意志や境遇を聞いて、甚だしく同情を抱いたのである。で、彼の持った武蔵観は、当然、お杉ばばの武蔵観であった。

「えらい婆殿だ。憎むべき野郎は武蔵とやらだ」

そうして彼は、お杉ばばのために、裏の空地へ一室を建ててやったり、家にいる日は、朝夕、挨拶に出たりして、賓客に仕えるように、このばばを大事にした。

乾児が、彼に訊ねた。

「お客を大事になさるのはいいが、親分ともあろう者が、どうして、そんなに鄭重になさるんですかえ」

すると、半瓦はこう答えた。

「この頃おれは、他人の親でも年よりを見ると、親孝行がしたくなるんだ。……だから俺が、どんなに、自分の死んだ親には、親不孝だったか分るだろう」

二

町中の野梅は散った。江戸にはまだ桜はほとんどなかった。

わずかに、山の手の崖に、山桜が白く見られる。近年、浅草寺の前に、桜の並木を移植した奇特家があって、まだ若木ではあるが、ことしはだいぶ蕾を持ったという。
「ばば殿、きょうは一つ、浅草寺へお供しようと思うが、行く気はないか」
半瓦の誘いに、
「おう、観世音は、わしも信仰じゃ。ぜひ伴れて行ってたも」
「では――」
と、いうので、お杉ばばも加えて、乾児の菰の十郎に、お稚児の小六の二人に弁当など持たせて、京橋堀から舟に乗った。
お稚児といえば優しげに聞えるが、これが向う傷のある肉のかたじまりな、いかにも喧嘩早い生れつきに出来ているような小男で、櫓はうまい。
堀から隅田のながれへ漕ぎ出すと、半瓦は、重筥を開けさせて、
「おばあさん、実は今日は、わしのおふくろの命日なのです。墓詣りといっても、故郷は遠国なので、浅草寺へでもお詣りして、何か一つ、今日は善い事をして帰ろうと思うのだ。……だから遊山のつもりで、一献飲りましょう」
と、杯を持って、舷から手をのばし、大川の水を杯洗にしてさっと雫を振って婆へ酌した。
「そうか。……それはそれは優しいお心がけじゃな」
お杉はふと、自分にもやがて来る命日を考えた。それはすぐ、又八を考える事でもあった。
「さ、少しは飲けるでしょう。水の上だが、わしらがついているから、安心して酔うておくんなさい」

「御命日なのに、酒をのんでも、悪いことはござりませぬか」
「六方者は、嘘や飾りの儀式が大嫌い。それに此方人は、門徒だから、物知らずでいいのです」
「久しゅう、酒も飲まなんだ。——酒はたべても、このように、暢々とはのう」
お杉は、杯を重ねた。
隅田宿の方から流れてくるこの大河は満々として広かった。下総寄りの岸の方には、鬱蒼とした森が折り重なり、河水に樹の根の洗われている辺りは、水もまっ蒼な日陰の瀞になっている。
「オオ、鶯が啼きぬいて」
「梅雨頃には、昼間も、昼ほととぎすが啼きぬくが……まだ時鳥は」
「ご返杯じゃ。……親分様、きょうは婆もよい供養のおこぼれにあずかりましたわえ」
「そう、欣んでくれると、わしも有難い。さあ、もっと重ねぬか」
すると、櫓を漕いでいるお稚児が、羨ましそうに、
「親分、こっちへも、少し廻してもらいてえもので」
「てめえは、櫓がうまいから連れて来たのだ。行きに飲ますとあぶねえから、帰りにはふんだんに飲め」
「我慢は辛いものだ、大川の水がみんな酒に見える」
「お稚児、あそこで網を打っている船へ寄せて、肴を少し買い込め」
心得て、お稚児が漕ぎよせて、漁師にかけ合うと、なんでも持って行きなされと、漁師は船板を開けてみせる。
山国で老いたお杉ばばには、目をみはるほど珍しかった。

船底にバチャバチャ生きている魚を見ると、鯉、鱒がある。すずき、鯊にくろ鯛がある。手長えびや鯰もある。

半瓦は、白魚をすぐ醤油につけて喰べ、彼女にもすすめたが、

「生ぐさは、よう喰べぬ」

と、ばばは首を振って、おぞけをふるった。

舟は間もなく、隅田河原の西へついた。河原を上がると、波打ち際の森の中に、すぐ浅草観音堂の茅葺屋根が見えた。

三

人々は河原へ降りた。ばばは少し酔っている。年のせいか舟から足を移すのに、よろめく気味であった。

「あぶない、手をとろう」

半瓦が手をひくと、

「なんの、止めてくだされ」

婆は手を振る。

年より扱いが元から嫌いな性なのである。乾児の菰の十郎とお稚児の小六は、舟をつないで後から従いた。河原は渺々として眼の限り石ころと水であった。

するとその河原の石ころを起して、蟹でも捕まえているらしい子供が、稀ゝ、河から上がった珍しい人影を見て、

「おじさん、買っとくれ」
「ばばさん、買っとくれよ」
と、半瓦とお杉のまわりに集まって来て、うるさく強請む。
子供が好きとみえて、半瓦の弥次兵衛はうるさがりもせず、
「なんだ蟹か。蟹なんざいらねえよ」
子供等は、一斉に、
「蟹じゃないよ」
と、着物の裾をふくろにしたり、ふところに入れたり、手に持っている物を示して、
「矢だよ、矢だよ」
と争っていう。
「なんだ、鏃か」
「ああ、鏃だよ」
「浅草寺のそばの藪に、人間や馬を埋めた塚があるよ。お詣りする人は、そこへこの鏃を上げて拝むよ。おじさんも上げてくれよ」
「鏃は要らない。だが、銭をやるからいいだろう」
半瓦が、銭を与えると、子供たちは又、散らかって、鏃を掘っていたが、すぐ附近の藁屋根の家から、子供たちの親が出て来て、銭だけを取り上げて行った。
「ちぇっ」
半瓦は、嫌な気がしたとみえ、舌打ちして、眼をそらしたが、ばばは恍惚と、広い河原の眺め

に見惚れていた。
「この辺から、あのように鏃がたんと出るところを見ると、この河原にも、合戦があったのじゃろうのう」
「よくは知らぬが、荏土(えど)の庄といわれていた頃、戦(いくさ)がたびたびあったらしいな。遠くは、治承の昔、源頼朝が、伊豆から渡って、関東の兵をあつめたのもこの河原。——又、南朝の御世(みよ)の頃、新田武蔵守が小手指ケ原の合戦から駈け渡って、足利方の矢かぜを浴びたのもこの辺だし——近くは、天正の頃、太田道灌(どうかん)の一族だの、千葉氏の一党が、幾たびも興り、幾度も亡んだ跡が——この先の石浜の河原だそうな」
話しながら、歩き出すと、菰(こも)の十郎とお稚児のふたりは、もう浅草寺(せんそうじ)の御堂の縁へ行って、先に腰かけている。
見れば、寺とは名のみの、ひどい茅葺堂(かやぶきどう)が一宇と、僧の住むあばら屋が、堂の裏にあるだけに過ぎない。
「……なんじゃ、これが江戸の衆がよくいう金龍山浅草寺かいな」
ばばは、一応失望した。
奈良京都あたりの古い文化の遺跡を見た眼には、余りにも原始的であった。
大川の水は、洪水の時、森の根を洗って浸(ひた)るとみえ、御堂のすぐ側まで、平常でも、支(わか)れ水がひたひたと寄せていた。御堂を囲む木は皆、千年も年経ったような喬木であった。——何処かでその喬木を仆す斧(おの)の音が、怪鳥でも啼くように、時々、コーン、コーンとひびく。
「やあ、おいでなされ」

不意に、頭の上で、挨拶する声が聞えた。

（――誰？）

と驚いて、ばばが眼をあげてみると、御堂の屋根の上に坐って、茅で屋根の修繕をしている観音堂の坊主たちであった。

半瓦の弥次兵衛の顔は、こんな町の端れにも知られていると見える。下から挨拶を返しながら、

「ご苦労様。きょうは、屋根でござりますかな」

「はあ、この辺の木には、巨きな鳥が棲んでおりますでな、繕っても繕っても、茅をついばんでは、巣へ持って行ってしまうので、雨漏りがして弱りますわい。……今降りますゆえ、しばらく、おやすみ下さいませ」

四

神燈をあげて、堂の中へ坐ってみると、成程、これでは雨も漏ろう、壁からも屋根裏からも星のように、昼の明りが洩れてみえる。

如日虚空住　或被悪人逐
堕落金剛山　念彼観音力
不能損一毛

或値怨賊遶
各執刀加害
念彼観音力
咸即起慈心
或遭王難苦
臨刑欲寿終
念彼観音力
刀尋段々壊

半瓦と並んだお杉は、袂から、数珠をとり出し、もう無想になって、普門品を称えていた。
初めは低声であったが、そのうちに半瓦や乾児がいることも忘れ果てた有様で、朗々と声の高まるにつれて、顔の形相も、物に憑かれたように変ってしまう。
一巻を誦み終ると、打ちふるえる指に数珠を押し揉み、
「――衆中八万四千衆生、皆発無等々、阿耨多羅三藐三菩提心。――南無大慈大悲観世音菩薩――なにとぞ、ばばが一念をあわれみたまい、一日もはやく、武蔵を討たせたまえ。武蔵を討たせたまえ。武蔵を討たせたまえ」
それから又、遽に、声も体も沈めて、ひれ伏しながら、
「又八めが、よい子になり、本位田家の栄えまするよう」
彼女の祈りが終った様子をさし覗いて、堂守の僧が、
「あちらへ、湯を沸かしておきました。渋茶などお上がり下さいまし」

半瓦も乾児も、ばばのために、しびれをさすりながら起ち上がった。
乾児の十郎は、
「もう、ここなら、飲んでもようございましょう」
許しをうけると早速、堂裏にある僧の住居の縁側に、弁当をひろげ、舟で買い求めた魚などを焼いてもらって、
「この辺に、桜はねえが、花見に来たような気がするぜ」
と、お稚児(ちご)の小六を相手に、すっかり落着きこむ。
半瓦は、布施(ふせ)をつつんで、
「お屋根料の足(た)しに」
と、若干(なにがし)かを寄進したが、ふと壁に見える参詣者の寄進札のうちに、眼をみはった。
寄進の多くは、今彼がつつんだ程度の金か、それ以下の額であったが、中にたったひとり、ずば抜けた篤志家がある。

黄金十まい　　しなの奈良井宿　大　蔵

「お坊さん」
「はい」
「さもしい事をいうようだが、黄金十枚といっちゃ当節大金だ。いったい奈良井の大蔵というのは、そんな金持かな」
「よう存じませんが、昨年、年の暮に、ぶらりと御参詣なさいまして、関東一の名刹(めいさつ)が、このお

相いたましい、御普請の折には、お材木代の端に加えてくれといって、置いて行かれましたので」

「気持のいい人間もあるものだな」

「ところが、だんだん聞きますと、その大蔵様は、湯島の天神へも、金三枚御寄進なさいました。神田の明神へは、あれは平の将門公を祠ったもので、将門公が謀叛人などと伝えられているのは、甚だしいまちがいだ。関東が開けたのは、将門公のお力もあるのに――といって黄金二十枚も献納したということでございますが、世には、ふしぎな奇特人もあるもので……」

と――その時、河原と寺内との境の森を、向う見ずに、ばらばらと駈け込んで来る狼藉な跫音があった。

五

「童どもっ。遊ぶなら河原で遊べ、寺内へ入って来て乱暴するじゃないっ」

番僧は、縁側に立って、こう呶鳴った。

駈け込んで来た子供らは、目高の群れのように、その縁側へと集まって来て口々に、

「たいへんだよ、お坊さん」

「何処かのお侍さんと、何処かのお侍さん達が、河原で喧嘩してるよ」

「一人と四人で」

「刀を抜いて」

「はやく行ってごらんよ」

番僧たちは、聞くとすぐ草履へ足を下ろして、
「又か」
と、呟いた。
すぐ駈け出そうとしたが、半瓦やお杉たちを顧みて、
「お客様方、ちょっと失礼いたします。なにせい、この辺の河原は、喧嘩には足場がよいので、なんぞというと、果し合いの場所になったり、誘き出しだの、撲り合いだの、絶えず血の雨のふる所でしてな。――その度に、お奉行所から始末書を求められますので、見届けておかぬと」
子供たちはもう、河原の森の際へ行って、なにか声をあげて昂奮している。
「斬合か」
嫌いでない半瓦の乾児二人も、その半瓦も、駈けて行った。
お杉ばばは、一番後から森を抜けて、河原境の樹の根に立って見渡した。――だが、彼女の足がおそかったので、彼女がそこへ出てみた時は、なにも、それらしい者は見えなかった。
又、あれほど躁いでいた子供も、駈け出した大人も、その他この界隈の漁村の男女も、皆、森の際や木の間がくれに、しいんと、生唾をのんでしまって、声一つ立てる者がない。
「……？」
婆はいぶかしく思ったが、すぐ彼女も、同じように息をひそめ、ただ凝視の眼を、じっとすえていた。
見わたす限り、石ころと水ばかりな広い河原であった。水は澄んだ空と同じ色をしていた。燕の影が、その天地を独り自由に翔けている。

──見ると今、そのきれいな流れと、石ころの道を踏んで、彼方から澄ました顔をして歩いて来る一名の侍がある。人影といっては、それしか見当らない。

侍はまだうら若い男で、背に大太刀を負っているのと、牡丹色の船載地の武者羽織を着ている体がひどく派手やかであった。そして、かくも大勢の眼に、木陰から見られているのを、知ってか知らずにいるのか、いっこう無関心らしく、ふと、立止まった。

「……ア。ア」

と、その時、ばばの近くにいた傍観者が、低い声をもらした。

ばばも、はっと、眼をひからした。

牡丹色の武者羽織が立ちどまった所から、約十間ほど後に、四つの死骸が、算をみだして、斬りふせられていた事がわかった。喧嘩の勝敗はもうそれでついていたのである。四人に対して、一人の若い武者羽織の方が、決定的に、勝ちを占めたものらしい。

ところが、まだその四人のうちには、薄傷の程度で、多少呼息のある者があったとみえ、牡丹色の武者羽織が、ハッと振向くと、そこの死骸から、人魂のように、血まみれな一箇が、

「まだッ、まだッ。勝負はまだだっ。逃げるなっ」

と、追いかけて来た。

武者羽織は、向き直って、尋常に待ちかまえていたが、火の玉のような負傷が、

「まだ、お、お、おれはまだ、生きてるぞっ」

喚いて、斬りかかると、此方は、一歩退いて、相手を泳がせ、

「これでも、まだかっ」

西瓜を割ったように、人間の顔が斬れてしまった。斬った刀は、武者羽織の背中に負っていた「物干竿」とよぶ長剣であったが、肩越しに、柄を持った手も、斬り下げた手元も、眼には見えないほどな技であった。

六

刀を拭っている。
それから、流れで、手を洗っている。
度々、この辺で、斬合を見つけている者でも、その落着きぶりに、嘆息をもらしたが、又余りにも、凄愴なものに打たれて、中には観ているだけで、蒼ざめてしまった者もある。
「…………」
とにかく誰も、その間、一語を発する者もなかった。
手を拭いた牡丹色の武者羽織は身を伸ばして、
「岩国川の水のようだ。……故郷を思い出すなあ」
と、つぶやいて、しばらく、隅田河原のひろさや、水をかすめて飛び翻る燕の白い腹を見送っていた。
——やがて彼は、急に足を早めた。もう死骸が追いかけて来る憂いはなかったが、後の面倒を考えたらしい。
河原の水瀬に、彼は、一艘の小舟を見つけた。櫓も付いているし、恰好な乗物と思ったのであろう。それへ乗って、繋いでいる綱を解きかけるのであった。

「やいっ、侍」
半瓦の乾児の、菰の十郎とお稚児の小六の二人だった。
こう木の間からいきなり呶鳴って、河原の水際へ駈け出して行き、
「その舟を、どうする気だ」
と、咎めた。
武者羽織の体には、近づくとまだ血腥いにおいが感じられた。袴にもわらじの緒にも、返り血がこびりついていた。
「……いけないのか」
解きかけた繋綱を放して、その顔がにっと笑うと、
「あたりめえだ。これは、俺たちの持舟だ」
「そうか。……駄賃をやったらよろしかろう」
「ふざけるな、俺たちは、船頭じゃあねえ」
たった今、そこで四人を一人で斬り捨てた侍に対して、こういう口がきける気の暴さは、お稚児や菰の口を借りて、関東の勃興文化がいうのである。新将軍の威勢や江戸の土がいうのである。
「…………」
悪かったとはいわない。
しかし、牡丹色の武者羽織も、それに横車は押せなかったと見え、小舟から出ると、黙って又河原を下流の方へ歩き出した。

お杉はその前に迫って立っていた。顔を見あわすと、小次郎は、やあといって、初めて凄愴な青白さを、顔から捨てて笑った。
「いたのか。こんな所に。――いや、その後は、どうしたかと思うていたが」
「身を寄せている半瓦の主や若い者と、観世音へ参詣にの」
「いつであったか、そうそう、叡山でお目にかかった折、江戸へと聞いていたので、会いそうなものと思うていたが、こんな所でとは」
と、振りかえって、呆気にとられている菰やお稚児を眼でさしながら、
「では、あれが婆殿の連れの者か」
「そうじゃ、親分というお人は出来ている人間じゃが、若い者たちは、ひどくがさつ揃いでの」
ばばが小次郎と馴々しく立話しを始めたことは、衆目をそばだたせたばかりでなく、半瓦の弥次兵衛も、意外であった。
で、半瓦はそれへ来て、
「なにか唯今、乾児の者が、不作法を申しあげたらしゅうございますが」
と、丁寧に詫び、
「てまえどもも、もう帰ろうとしている所、何ならば、お急ぎの先まで、舟でお送り申しましょう」
と、すすめた。

かんな屑

一

帰りの小舟の中。
同舟という言葉があるが、ひとつ舟に身を託すとなれば、いやでもお互いに心の溶けあうものである。
まして、酒もある。
新鮮な魚鱗もある。
それに、婆と小次郎とは、以前からふしぎに、気心も合い、その後の話も積もるほどあって、
「相変らず、御修行かの」
と、ばばがいえば、
「そちらの大望はまだか」
と、小次郎が訊く。
ばばの大望とは、いうまでもなく「武蔵を討つ」事にあるが、その武蔵の消息が、この頃はとんと知れないので——といえば、小次郎が、
「いや、昨年の秋から冬頃までの間に二、三の武芸者を訪れたうわさがある。まだ多分、江戸表

にいるにちがいない」
と、小次郎が力づける。
半瓦も口を出して、
「実は、手前も及ばずながら、ばば殿の身の上を聞いてお力添えをしておりますが、武蔵とやらの足どりが今のところ皆目、分らねえので」
と、話は婆の境遇を中心としてそれからそれへ結びつき、
「どうぞ、これからご懇意に」
と、半瓦がいえば、
「わしからも」
と、小次郎は、杯を洗って、彼のみでなく、乾児(こぶん)たちへも、順々に廻して酌(つ)ぐ。
小次郎の実力は、たった今、河原で見ているので、打ち解けると、お稚児も孤も、無条件に尊敬をはらった。又、半瓦の弥次兵衛は、自分の世話している婆の味方というので、肝胆を照らし合うところがあり、婆は婆で又、多くの後ろ楯に囲まれて、
「渡る世間に鬼はないというが——ほんに小次郎殿といい、半瓦の身内の衆といい、わしのような老いさらぼうた者を、ようして賜(た)もる志……何というてよいやら。これも観世音の御庇護(ごひご)でがなあろう」
と、洟(はな)をかまないばかり、涙ぐんでいうのだった。
話がしめっぽくなりかけたので半瓦が、
「——時に小次郎様。最前、あなた様が河原で討ち果しなすった四人は、あれはどういう人間ど

もでござりますな」
と、訊ねると、待っていたように、小次郎が、それからの得意な雄弁であった。
「アア、あれか――」
と、先ず最初は事もなげに一笑して、
「あれは、小幡の門に出入りする牢人で、先頃から五、六回ほど、わしが小幡を訪れて議論しておると、いつも横合から口をさし挿み、軍学上の事ばかりか、剣に就いても小賢しくいうので、さらば隅田河原に来い、幾名とでも立対って、巌流が秘術と、物干竿の斬れ味を見せて進ぜるといったところ、今日五名して待つというので出向いたまでです。……一人は立合うとたんに逃げおったが、いやはや、江戸には、口程もないのが多くて」
と又、肩で笑う。
「小幡というのは？」
と、訊ね返すと、
「知らんのか。甲州武田家の御人小幡入道日浄の末で――勘兵衛景憲。――大御所に拾い出され、今では秀忠公の軍学の師として、門戸を張っておる」
「アアあの小幡様で」
と、半瓦は、そういう名だたる大家を、まるで友達のようにいう小次郎の顔を、見まもった。
そして心の裡で、
（いったいこの若い侍は、まだ前髪でいるが、どんなに偉いのか？）
と、思った。

でである。
六方者は、単純である。市井の事々は複雑だが、その中を、単純に生きようというのが、男だてである。
半瓦はすっかり、小次郎に傾倒してしまった。
（この人は偉い）
と思うと、こういう持前の男だては、一本槍に惚れこんでゆく。
「いかがでしょう一つ」
と、早速にも、相談であった。
「てまえどもには、しょッ中、ごろついている若い奴らが四、五十人はおります。裏には空地もあるし――そこへ道場を建ててもよろしゅうございますが」
と、小次郎の身を自宅で世話をしたいらしい意嚮を漏らすと、
「それは、教えてやってもいいが、わしの体は、三百石での、五百石でのと、諸侯から袖を引かれて、弱っているのだ。自分は、千石以下では奉公せぬ所存で、まだ当分は――今の邸に遊んでおるが、その方の義理もあるから、急に身を移すわけにもゆかぬ。――そうだな、月に三、四度ぐらいならば、教授に出向いて遣わそう」
と、いう。
それを聞くと、半瓦の乾児は、いよいよ小次郎を大きく買った。小次郎のことばには、常に、単純でない伏線で自己宣伝が潜んでいるが、それを嚙みわけないのである。

「それでも結構です。ぜひ一つお願い申したいもので」
辞を低くして、
「又、お遊びに」
と半瓦がいえば、お杉ばばも、
「待っていますぞよ」
と、小次郎のことばをつがえた。
小次郎は京橋堀へ舟が曲る角で、
「ここで降ろしてくれ」
と、陸へ上がった。
小舟から見ていると、牡丹色の武者羽織は、すぐ町中の埃にかくれてしまった。
「たのもしい人だ」
と半瓦はまだ感心していたし、ばばも、口を極めて、
「あれが、真の武士じゃろう。あのくらいな人物なら、五百石でも、大名の口がかかりましょうわえ」
と、いった。
そして、ふと、
「せめて又八も、あの位に、人間が出来てくれれば……」
と呟いた。
それから五日程後、小次郎はぶらりと、半瓦の家へ遊びに来た。

四、五十名もいる乾児が、代る代る彼のいる客間へ、挨拶に出て来た。
「おもしろい生活をしておるものだな」
小次郎は、そういって、心から愉快になったらしい。
「ここへ、道場を、建てたいと思いますが、ひとつ地所を見てくださいませんか」
と、半瓦は、彼を誘って、家の裏へ連れ出した。
二千坪ぐらいの空地だった。
そこには、紺屋があって、染め上げた布を、たくさんに干していた。その地所は、半瓦が貸しているので、いくらでも広く取れるというのである。
「ここなら、往来の者が、立ちもすまいし、道場などは要るまい。野天でいい」
「でも、雨降りの日が」
「そう、毎日は、わしが来られないから、当分、野天稽古としよう。……ただし、わしの稽古は、柳生や町の師匠などより、うんと手荒いぞ。――下手をすれば、片輪もできる。死人もできる。それをよく承知しておいてもらわんと困るが……」
「元より、合点でございます」
半瓦は、乾児を集めて、承知の旨を誓わせた。

三

稽古日は、月三回、三の日と極めて、その日になると、半瓦の家へ小次郎の姿が見えた。
「伊達者の中にまた一倍の伊達者が加わった」

と、近所では噂した。小次郎の派手姿は、何処にいても、人目立った。
その小次郎が、枇杷の長い木太刀を持って、
「次。──次！」
と、呼ばわりながら、紺屋の干場で、大勢に稽古をつけている姿は、なおさら、目ざましかった。
いつになったら元服するのか、もう二十三、四歳にもなろうというのに、相変らず前髪を捨てず、片肌ぬぐと、眼を奪うような桃山刺繡の襦袢を着、掛け襷にも、紫革を用いて、
「枇杷の木で打たれると、骨まで腐ると申すから、それを覚悟でかかって来い。──さっ、次の者、来ないか」
身装の艶やかなだけに、言葉の殺伐なのが、よけい凄くひびく。
それに稽古とはいえ、この指南者は、少しも仮借しないのだ。きょうまでにこの空地の道場は、稽古初めをしてから三回目だが、半瓦の家には一人の片輪と、四、五人の怪我人ができて、奥で唸って寝ている。
「──もう止めか、誰も出ないのか。止めるならわしは帰るぞ」
例の毒舌が出始めると、
「よしっ、一番おれが」
と、溜りの中から、ひとりの乾児が、口惜しがって立ちかけた。
小次郎の前へ出て来て、木剣を拾おうとすると、──ぎゃっと、その男は、木剣も持たずにへたばってしまった。

「剣法では、油断というものを最も忌む。——これはその稽古をつけたのだ」
小次郎は、そういって、周りにいる三、四十人の顔を見まわしている。皆、生唾をのんで、彼の厳しい稽古ぶりに顫いた。
へたばった男を、井戸端へ担いで行って、水をかけていた乾児たちは、
「だめだ！」
「死んだのか」
「もう呼吸はねえ」
後から駈け寄る者もあって、がやがや騒いでいたが、小次郎は、見向きもしなかった。
「これ位な事に恐れるようでは、剣術の稽古などはしないがいい。お前らは、六方者だの伊達者だのといわれて、ややもすると、喧嘩するではないか」
革足袋で、空地の土を踏んで歩きながら、彼は講義口調でいう。
「——考えてみろ、六方者。おまえらは、足を踏まれたからといっては喧嘩をし、刀のこじりに触ったといってはすぐに抜き合うがだ——いざ、改めて、真剣勝負となると、体が固くなってしまうのだろう。女出入りや意地張りの、ツマらぬ事には生命も捨てるが、大義に捨てる勇を持たない。——なんでも、感情と鼻っぱりで起つ。——それじゃあいかん」
小次郎は、胸を伸ばして、
「やはり修行を経た自信でなければ、ほんものの勇気でない。さあ、起ってみろ」
その広言を凹ましてやろうと、一人が後ろから撲りかかった。しかし、小次郎の体は地へ低く沈み込み、不意を襲った男は前へもんどり打った。

「――痛(いて)えっ」

と、叫んだままその男は坐ってしまった。枇杷(びわ)の木剣が、腰の骨に当った時、がつんといった。

「――もう今日は止め」

小次郎は、木剣を拋り出して、井戸端へ手を洗いに行った。たった今、自分が木剣で撲り殺した乾児(こぶん)が、井戸の流しに、こんにゃくみたいに白っぽくなって死んでいたが、その顔の側で、ざぶざぶと手を洗っても、死人には、気の毒という一言もいわなかった。――そして、肌を入れると、

「近頃、たいへんな人出だそうだな、葭原(よしわら)とやらは。……お前たちは皆、明るいのだろう。誰か今夜案内せぬか」

と、笑っていった。

四

遊びたい時は、遊びたいというし、飲みたい時は、飲ませろという。衒(てら)いとも見えるが、率直だともいえる。小次郎のそういう気性を、半瓦はいい方に買っている。

「葭原をまだ見ねえんですか。そいつあ一度は行って見なくちゃいけねえ。手前がお供をしてもいいが何しろ死人が一人出来ちまって、そいつの始末をしてやらなけれやなりませんから――」

と、弥次兵衛は乾児のお稚児(ちご)と菰(こも)の両名に金を預けて、

「ご案内してあげろ」
と、小次郎に付けて出した。
出かける際、彼等は親分の弥次兵衛からくれぐれも、
「今夜は、汝たちが遊ぶんじゃねえ。先生のご案内をして、よく観せてお上げ申すのだぞ」
といわれて来たが、門を出るとすぐ忘れて、
「なあ兄弟、こういう御用なら、毎日仰せつかってもいいなあ」
「先生、これから時々、葭原が見てえと、仰っしゃっておくんなさい」
と、はしゃいでいる。
「はははは。よかろう、時々いってやる」
小次郎は先に歩む。
陽が暮れる途端に、江戸は真っ暗だった。京都の端にもこんな暗さはない。奈良も大坂も、もっと夜は明るいが――と江戸へ来て一年の余になる小次郎でも、まだ足元が不馴れだった。
「ひどい道だ。提燈を持って来ればよかったな」
「廓へ提燈なんぞ持ってゆくと笑われますぜ。先生、そっちは堀の土を盛りあげてある土手だ。下をお歩きなさい」
「でも、水溜りが多いではないか。――今も葭の中へ辷って、草履を濡らした」
堀の水が、忽然と、赤く見え出した。仰ぐと、川向うの空も赤い。一廓の町屋の上には、柏餅のような晩春の月があった。
「先生、あそこです」

「ほう……」
眼をみはった時、三人は橋を渡っていた。小次郎は渡りかけた橋をもどって、
「この橋の名は、どういうわけだな」
と、杭の文字を見ていた。
「おやじ橋っていうんでさ」
「それはここに書いてあるが、どういうわけで」
「庄司甚内ってえおやじがこの町を開いたからでしょう。廓で流行っている小唄に、こんなのがありますぜ」
菰の十郎は、廓の灯に浮かされて、低い声で唄い出した。

おやじが前の竹れんじ
その一節のなつかしや
おやじが前の竹れんじ
せめて一夜と契らばや
おやじが前の竹れんじ
いく世も千代も契るもの
ちぎるもの……
仇にな引くな
切れぬ袂を

「先生にも、貸しましょうか」

「何を」
「こいつで、こう顔を隠してあるきます」
と、お稚児と菰のふたりは、茜染の手拭を払って、頭から冠った。
「なる程」
と、小次郎も真似て袴腰に巻いていた小豆色の縮緬を、前髪のうえから被って、顎の下にたっぷり結んで下げた。
「伊達だな」
「よう似合う」
橋を渡ると、ここばかりは、往来も燈に染まり、格子格子の人影も、織るようであった。

五

暖簾から暖簾へ、小次郎たちはわたり歩いていた。
茜染の暖簾や、紋を染めぬいた浅黄の暖簾などもある。或る楼の暖簾には、鈴がついていて、客が割って入ると、鈴の音を聞いて、遊女たちが、窓格子まで寄って来た。
「先生、隠したってもうだめですぜ」
「なぜ」
「初めて来たと仰っしゃいましたが、今、這入った楼の遊女の中で、先生の姿を見ると、声を出して屏風の陰へ、顔をかくした女があった。もう泥を吐いておしまいなせえ」
菰もお稚児も、そういうが、小次郎には覚えがなかった。

「はてな。どんな女が……？」
「空恍ぼけたって、もういけません。登楼りましょう、今の楼へ」
「まったく、初めてだが」
「登楼ってみれば分ることってさ」
今出て来たばかりの暖簾の内へ、二人はもう引っ返している。大きな三ッ柏の紋を三つに割って、端に、角屋としてある暖簾であった。
柱も廊下も、寺のように大まかな建築だが、まだ縁の下には枯れない葭が埋まっているのである。なんの煤みもなければ床しさもない。家具も襖も、すべてが目に痛いほど新しかった。
三人が通ったのは、往来に向いた二階の広座敷であったが、前の客の残肴やら鼻紙などが、まだ掃きもせず散らかっている。
下働きの女たちは、まるで女の労働者のように、ぶっきら棒にそれを片づける。お直という年寄が来て、毎晩、寝る間もない忙しさで、こんな事が三年も続いたなら死ぬかも知れませんという。
「これが遊廓か」
と、小次郎は、夥しい天井のふしだらけなのを眺めて、
「いや、殺伐な」
と、苦笑した。するとお直は、
「これはまだ仮普請で、いま裏の方に、伏見にも京にもないような本普請にかかっているのでございますよ」

と、弁解する。そしてじろじろ小次郎を見ながら、
「お武家様には、どこかでお目にかかっておりますよ。そうそう昨年、私たちが伏見から下って来る道中で」
小次郎は忘れていたが、そういわれて、小仏の上で出会った角屋(すみや)の一行を思い出し、その庄司甚内が、ここの主(あるじ)という事も分って、
「そうか。……それは浅からぬ縁だ」
と、やや興に入る。菰の十郎は、
「それやあ、浅くねえわけでしょう。何しろ、此楼(ここ)には、先生の知っている女がいるんだから」
と、揶揄(やゆ)して、その遊女をはやくここへ呼んでくれとお直へいう。
こんな顔の、こんな衣裳の、と菰が説明するのを聞いて、
「ああ、わかりました」
お直は立って行ったが、いつまで待っても、連れて来ないのみか、菰とお稚児が廊下まで出てみると、なんとなく楼内が躁(さわ)がしい。
「やいっ、やいっ」
二人が手をたたいて、お直を呼び、どうしたのだと極めつける。
「いないんでございますよ。あなたが呼べと仰っしゃった遊女が」
「おかしいじゃねえか、どうしていなくなったんだ」
「今も、親方の甚内様と、どうもふしぎだと、話しているのでございます。以前も、小仏の途中で、お連れのお武家様と甚内様が話していると、その間に、あの娘の姿が見えなくなってしまっ

た事があるんでございますからね」

六

棟上げをしたばかりの普請場であった。屋根は葺きかけてあるが、壁もない、羽目板も打ってない。

「――花桐さん、花桐さん」

遠くのほうで呼ぶ声がする。山のように溜まっているかんな屑や、材木の間を、何度も、自分を探しまわる人影が通った。

「…………」

朱実はじっと息をころして隠れていた。花桐というのは、角屋へ来てからの自分の名である。

「……いやなこった。誰が出てやるものか」

初めは、客が小次郎と分っていたので、姿を隠したのであるが、そうしている間に、憎らしいものは、小次郎だけではなくなった。

清十郎も憎い、小次郎も憎い、八王子で、酔っている自分を馬糧小屋へ引きずりこんだ牢人者も憎い。

毎夜のように、自分の肉体をおもちゃにして行く遊客たちもみな憎い。

それはみんな男というものだ。男こそは仇だと思う。同時に彼女は又、男を探して生きている。武蔵のような男を――である。

(似ている人でもいい)

と、彼女は思った。

もし似ている人に出会ったら、愛の真似事をしても、慰められるだろうと朱実は思っていた。

だが、遊客の中に、そんな者は見つからなかった。

求めつつ、恋しつつ、だんだんにその人から遠くなるばかりな自分が朱実にはわかっていた。

酒はつよくなるばかりだった。

「花桐っ……。花桐」

普請場とすぐくっ付いている角屋の裏口で、親方の甚内の声が近く聞え、やがて空地の中へは、小次郎たち三名の姿も見えている。

さんざん詫びをいわせたり、文句をいったあげく、三名の影は空地から往来の方へ出て行った。多分、あきらめて帰ったものと見える。朱実は、ほっとして、顔を出した。

「――あら花桐さん、そんな所にいたのけ？」

台所働きの女が、頓狂な声を出しかけた。

「……叱っ」

朱実は、その口へ手を振って、大きな台所口を覗きながら、

「冷酒でひと口くれないか」

「……え。お酒を」

「ああ」

彼女の顔いろに怖れをなして、かたくちへ満々と注いでやると、朱実は、眼をつむって、器と共に、白い面を仰向けにのみほした。

「……ア、何処へ。花桐さん、何処へ」

「うるさいね、足を洗ってあがるんだよ」

台所の女は、安心して、そこを閉めた。けれど朱実は、土のついた足のまま、有合う草履に足をかけて、

「ああいい気もち」

ふらふらと、往来のほうへ歩み出した。

赤い灯影に染まっている往来を、たくさんな男ばかりの影が、ぞめき合ってながれていた。朱実は呪うように、

「なんだいこの人間たちは」

と、唾をして、そこを走った。

すぐ道は暗くなった。白い足が堀の中に浮いている。――じっと覗きこんでいると、後ろのほうから、ばたばたと駈けて来る跫音がする。

「……あ、角屋の提燈らしい。ばかにしてやがる、あいつらはあいつらで、ひとが路頭に迷っているのをいい気になって、骨まで削らせて稼がせる気なんだろう。――そしてあたい達の血や肉が、普請場の材木になりゃあ世話あないや。……誰がもう帰ってやるものか」

世間のあらゆるものが敵視されるのであった。朱実は、まっしぐらに、的もなく闇の中へ駈け去った。髪についていたかんな屑が一ひら、闇の中にひらひら動いて行った。

梟

一

したたかに小次郎は酔っていたのである。もちろん、その程度に、どこかの揚屋で遊びぬいた挙句に違いない。

「肩……肩だおい……」

「ど、どうするんで？　先生」

「両方から肩を貸せというのだ——もう、あるけない」

孤の十郎とお稚児の小六の肩にすがって、汚れた夜更けの色街を、蹌踉ともどって来るのだった。

「だから、泊ろうと、おすすめしたのに」

「あんな楼に、泊れるか。……おい、もういちど、角屋へ行ってみよう」

「およしなさい」

「な、なぜ」

「だって、逃げ隠れするような女を、むりに、つかまえて、遊んだって……」

「……む。そうか」

「惚れているんですか、先生はその女に」
「ふ、ふ、ふ、ふ」
「何を思い出しているんで」
「おれは、女になど、惚れたことはないな。……そういう性格(たち)らしい。もっと、大きな野望を抱いているから」
「先生の望みってえのは？」
「いわずとも知れている。剣を持って立つ以上、剣の第一人者にならずには措(お)かない。——それには将軍家の指南になるのが上策だが」
「生憎と……もう柳生家があるし……小野治郎右衛門という人も近頃、御推挙されましたぜ」
「治郎右衛門……あんな者が。……柳生とて惧(おそ)るるには足らん。……見ていろ、わしは今に、彼奴(きゃつ)らを蹴落してみせる」
「……あぶねえ。先生、自分の足元の方を、気をつけておくんなさいよ」
もう廓(くるわ)の灯は、後ろだった。
通う人影もとんとない。行きがけにも悩んだ掘りかけの堀端へ出て来たのである。盛り上げた土に柳の木が半分も埋まっているかと思うと、一方は低い蘆(あし)や葭(よし)の水たまりがまだ残っていて、白い星の影が更(ふ)けている。
「辷(すべ)りますぜ」
この堤(どて)から下へ、厄介者を担いで、菰とお稚児が降りかけた時だった。
「——あっ」

叫んだのは、小次郎であったし又、その小次郎に、突然、振り飛ばされた両人でもあった。
「何者だっ」
と、小次郎は、堤の腹へ、仰向けに身を伏せながら、再び呶鳴った。
その声を、びゅっと、虚空へ斬りながら、背後から不意を襲った男の影は、自分の足先を、余勢に踏み外して、これも、あっ——といいながら下の沼地へ飛びこんでしまった。
「わすれたか、佐々木」
と、何処かでいう。
「よくもいつぞやは、隅田河原で同門の四名を斬りすてたな」
べつな者の声である。
「おうっ」
小次郎は、堤の上へ跳ね上がって、そこらの声を見廻した。——見ると、土の陰、木の陰、蘆の中、十人以上の人影が数えられた。彼がそこに立ったと見ると、すべてが、むらむらと刃を向けて、足元へ寄りつめてきた。
「——さては、小幡の門人どもだな。いつぞやは、五人で来て四人を失い、こん夜は何名で来て何名が死にたいのだ。望みの数だけ斬ってやろう。……卑劣者めッ、来いっ」
小次郎の手は肩越しに、背なかの愛剣、物干竿の柄に鳴った。

二

平河天神と背なか合せに、森を負っている屋敷だった。旧家の草葺屋根へ、新しい講堂や玄関

を継ぎ建てて、小幡勘兵衛景憲は、軍学の門人を取っていた。

勘兵衛は元、武田家の家人で、甲州者の中でも武門の聞えの高い小幡入道日浄の流れである。武田の滅亡後久しく野に隠れていたが、勘兵衛の代になって家康に召出され、実戦にも出たが、病体だし、もう老年なので、

(願わくは、年来の軍学を講じて、余生を奉じたい)

と、今の所へ移ったのである。

幕府は、彼のためにも、下町の一区画を宅地として与えたが、勘兵衛は、

(甲州出の武辺者が、華奢な邸宅が軒を並べている間に住むのは、不得手でござれば——)

と、辞退して、平河天神の古い農家を屋敷構えに直し、いつも病室に閉じこもって、近頃は、講義にも滅多に顔を見せない。

森には、梟が多くいて、昼間も梟の声がする程なので、勘兵衛は、

隠士梟翁

と自ら名乗り、

(わしも、あの仲間の一羽か)

と、わが病骨を、さびしく笑ったりしていた。

病気は今でいう神経痛のようなものであった。発作が起ると、坐骨のあたりから半身が猛烈に痛むらしい。

「……先生、少しはおよろしくなりましたか。水でも一口おあがりなされては」

いつも彼の側には、北条新蔵という弟子がつき添っていた。

新蔵は、北条氏勝の子で、父の遺学を継いで、北条流の軍学を完成するために、勘兵衛の内弟子となって、少年の頃から、薪を割り水を担って、苦学して来た青年だった。
「……もうよい。……だいぶ楽になった。……やがて夜明け近くであろうに、さだめし眠たかろう。やすめ、やすめ」
勘兵衛の髪の毛は、まっ白であった。体は、老梅のように痩せて尖っている。
「お案じくださいますな。新蔵は、昼寝しておりますから」
「いや、わしの代講ができる者は、そちの他にはない。昼間も、なかなか眠る間もあるまい……」
「眠らないのも、修行と存じますれば」
新蔵は、師の薄い背中をさすりながら、ふと、消えかける短檠を見て、油壺を取りに起った。
「……はての？」
枕に俯つ伏していた勘兵衛が、ふと肉の削げた顔をあげた。
その顔に、灯が冴えた。
新蔵は、油壺を持ったまま、
「何でござりますか？」
と、師の眼を見た。
「そちには聞えないか……水の音だ……石井戸の辺りに」
「オオ……人の気配が」
「今頃、何者か。……又、弟子部屋の者どもが、夜遊びに出おったのかもしれぬ」
「おおかた、そんな事かと存じますが、一応見て参りまする」

見ると、石井戸の流しで、釣瓶を上げて、二人の弟子が、手や顔の血を、洗っていた。
「よく、窘めておけ」
「いずれにせよ、お疲れでございましょう。先生は、おやすみなされませ」
夜が白みかけると、痛みもやみ、すやすや寝つく病人であった。新蔵は、師の肩へ、そっと寝具をかけて、裏口の戸を開けた。

三

北条新蔵は、それを見ると、はっとしたらしく眉をひそめた。草足袋のまま石井戸の側まで駈け出して、
「出かけたな！　貴様たちは」
と、いった。
その言葉には、あれほど止めたのに——と叱っても今は及ばないものを見た嘆息と驚きがこもっていた。
石井戸の陰には、二人が背負って来た深傷の門人が、もう一名、今にも息をひきとりそうに、呻いていた。
「あっ、新蔵殿」
手足の血を洗っていた同門の二人は、彼の姿を仰ぐと、男泣きに泣き出しそうな皺を顔に刻んで、
「……ざ、残念です！」

弟が兄に訴えるような、甘えた嗚咽と、歯がみをして叫んだ。
「馬鹿っ」
撲らないだけがまだいい新蔵の声だった。
「馬鹿者っ」
と、もう一度つづけて、
「――貴公たちに討てる相手ではないから止せと、再三再四、わしが止めたのになぜ出かけたか」
「でも……でも……。ここへ来ては、病床の師を辱しめ、隅田河原では、同門の者を四名も討った――あの佐々木小次郎ずれを、何でそのままに置けるものでしょうか。……無理ですっ、意地も抑え、手も抑えて、黙って怺えていろと仰っしゃる新蔵殿の方が、ご無理というものです」
「何が無理だ」
年こそ若いが、新蔵は小幡門中の高足であり、師が病床にあるうちは、師に代って弟子達に臨んでいる位置でもあった。
「貴公たちが出向いていい程なら、この新蔵が真っ先に行く。――先頃からたびたび道場へ訪れて来て、病床の師に、無礼な広言を吐きちらしたり、われわれに対しても、傍若無人な小次郎という男を、わしは怖れて捨てて措いたのではないぞ」
「けれど、世間はそうは受けとりません。――それに、小次郎は、師の事や、又兵学上の事までも、悪しざまに、各所でいいふらしているのです」
「いわせておけばいいではないか。老師の真価を知っている者は、まさか、あんな青二才と論議

して、負けたと誰が思うものか」
「いや、あなたはどうか知りませんが、われわれ門人は、黙っていられません」
「では、どうする気だ」
「彼奴を、斬り捨てて、思い知らせるばかりです」
「わしが止めるのもきかずに、隅田河原では、四人も返り討ちにあい、又今夜も、かえって彼のために敗れて帰って来たではないか。――恥の上塗りというものだ。老師の顔に泥をぬるのは、小次郎ではなくて、門下の各〻たちだという結果になるではないか」
「あ、あまりなお言葉。どうして吾々が、老師の名を」
「では、小次郎を討ったか」
「…………」
「今夜も、討たれたのは、恐らく味方ばかりだろう。……各〻にはあの男の力がわからないのだ。成程、小次郎という者は、年も若い、人物も大きくはない、粗野で高慢な風もある。――けれど彼が持っている天性の力――何で鍛え得たか――あの物干竿とよぶ大剣をつかう腕は、否定できない彼の実力だ。見縊ったら大間違いだぞ」
喰ってかかるように、門下の一人は、そういう新蔵の胸いたへ不意に迫って来た。
「――だから、彼奴に、どんな振舞いがあっても仕方がないと仰っしゃるのですか。――それほど、あなたは、小次郎が怖ろしいのでござるかっ」

四

「そうだ。そういわれても仕方がない」
新蔵は、頷いて見せながら、
「わしの態度が、臆病者に見えるなら、臆病者といわれておこう」
——すると、地に呻いていた深傷の男が、彼と二人の友の足元から苦しげに訴えた。
「水を……水をくれい」
「お……もう」
二人が、左右から掻い抱いて、釣瓶の水を掬ってやりかけると、新蔵があわてて止めた。
「待て。水を遣っては、すぐこときれる」
二人がためらっている間に、負傷は首をのばして釣瓶にかぶりついた。そして水を一口吸うと、釣瓶の中に顔を入れたまま、眼を落してしまった。
「…………」
朝の月に、梟が啼いた。
新蔵は、黙然と立ち去った。
家に這入ると、彼はすぐ師の病室をそっと窺った。勘兵衛は昏々とふかい寝息の中にある。ほっと胸をなでて、彼は自分の居間へ退がった。
読みかけの軍書が机のうえに開いてある。書に親しむ間もない程、毎夜の看護である。そこへ坐って、自分の体に回ると、同時に夜ごとのつかれが一時に思い出された。
机の前に、腕を拱んで、新蔵は思わず太い息をついた——自分を措いて今、誰が老いたる師の病床を見る者があろう。

道場には幾人かの内弟子もいるが、皆、武骨な軍学書生である。門に通う者はなおさら、威を張り、武を談じ、孤寂な老師の心情をふかく酌んでいる者は少ない。ややともすれば、ただ外部との意地や争闘にのみ走りやすい。

すでに今度の問題にしてもそうである。

自分の留守のまに、佐々木小次郎が、何か兵書の質疑で、勘兵衛に糺したいことがあるというので、門人が彼を師の勘兵衛に会わせたところ、教えを乞いたいといった小次郎が、かえって、僭越な議論をしかけて、勘兵衛をやりこめるために来たかのような口吻なので、弟子たちが、別室へ彼を拉して、その不遜をなじると、かえって小次郎は大言を放ち、そのうえ、

（いつでも相手になる）

と、いって帰ったとかいうのが原因なのである。

原因は常に小さい、しかし結果は大きなことになった。それというのも小次郎がこの江戸で、小幡の軍学は浅薄なものだとか、甲州流などというが、あれは古くからある楠流や唐書の六韜を焼直して、でッち上げたいかがわしい兵学だとか、世間で悪声を放ったのが、門人の耳に伝わって、よけいに感情が悪化したせいもあるが、

（生かしてはおけぬ）

と、小幡の門人がこぞって、彼に復讐をちかい出したのであった。

北条新蔵は、その議が持ち上がると、最初から反対した。

――問題が小さい事。

――師が病中にある事。

——相手が軍学者でない事。

それからもう一つ、老師の子息の余五郎が旅先にいることも理由として、

(断じてこちらから喧嘩に出向いてはならぬ)

と、戒めて来たのであった。——にもかかわらず、先頃は新蔵に無断で隅田河原で小次郎と出会い、又、それにも懲りず衆を語らって、ゆうべも、小次郎を待ちぶせ、かえって手酷い目に遭って、約十名のうち生きて還ったのは幾人もない様子なのである。

「……困ったことを」

新蔵は、消えかける短檠へ、何度も嘆息をもらしては、又、腕ぐみの中に面を沈めていた。

五

机に肘をのせて俯つ伏したまま、北条新蔵はうとうとと眠ってしまった。

ふと醒めると、何処かで騒がしい人声が幽かに聞える。すぐ門弟たちの寄合だと分った。明け方の事が、それと共に、頭にはっと甦った。

——だが、声のする所は遠かった。講堂を覗いても誰もいない。

新蔵は、草履を穿いた。

裏へ出て、若竹のすくすくと青い竹林を越えると、垣もなく、平河天神の森へつづいてゆく。

見るとそこに、大勢してかたまっているのは、案のじょう、小幡軍学所の門下生たちだった。

明け方、石井戸で傷を洗っていた二人は、白い布で腕を頸に吊っている。そして蒼白な面を並べて、同門たちに、ゆうべの惨敗を告げているのだった。

「……では何か、十名も行って、小次郎一人のために、その半分までも返り討ちになったというのか」
一人が問うと、
「残念だが、何分、彼奴が物干竿と称んでいるあの大業刀には、どうしても、刃が立たんのだ」
「村田、綾部など、ふだん剣法にも、熱心な男なのに」
「かえって、その二人などが、真ッ先に割りつけられ、後もみな深傷薄傷。与惣兵衛など、ここまで気丈に帰って来たが、ひと口、水をのむと、井戸端でこときれてしまった……。かえすがえす無念でならぬ。……御一同、察してくれ」
暗然と、皆、口をつぐんでしまう。平常、軍学に傾倒しているこの派の人々は、いわゆる剣というものを、あれは歩卒の習ぶもので、将たる者の励む事ではないように思っている者が多かった。
それが端なくこんな事態を生じて、一人の佐々木小次郎に出会を仕掛けながら、二度まで、多くの同門が返り討ちになってみると、痛切に、ふだん軽蔑していた剣法に自信のないのが悲しまれてきた。
「……どうしたものか」
と、そのうちに誰か呻く。
「…………」
重い沈黙の上に、きょうも梟が啼いている。――と、突然、名案が泛かんだように一人がいった。

「おれの従弟が、柳生家に奉公している。柳生家へご相談して、お力を借りてはどうだろう」
「ばかな」
　と、幾人もいった。
「そんな外聞にかかわることができるか。それこそ、師の顔に泥を塗るようなものだ」
「じゃあ……じゃあどうするか？」
「ここにいる人数だけで、もう一度佐々木小次郎へ、出会い状をつけようではないか。暗闇で待ち伏せるなどという事はもうしない方がよい。いよいよ、小幡軍学所の名折れを増すばかりだ」
「では、再度の果し状か」
「たとい、何度敗れても、このまま退くわけにはゆくまい」
「元よりだ。……だが、北条新蔵に聞えると又うるさいが」
「勿論、病床の師にも、あの秘蔵弟子にも、聞かしてはならない。――では、社家へ参って、筆墨を借り、すぐ書面を認めて、誰か一名、小次郎の手許へ使いに立つとしよう」
　腰を上げて、大勢がひっそりと、平河天神の社家のほうへ歩みかけると、先に歩いていたのが不意に、あッと口走って、身を退いた。
「……やっ？」
　誰の足も皆、とたんに棒立ちに竦んでしまった。そして眼は――一様に平河天神の拝殿の裏にあたる――古びた廻廊の上へ、うつろに注がれた。
　陽あたりのよい壁に、青梅の実のついた老梅の影が描かれていた。そこの欄に、片足をのせて、佐々木小次郎は、先刻から、森の集まりを見ていたのであった。

六

大勢の顔は、一瞬、胆を奪われて、蒼白い腑抜けになっていた。

そして、自分たちの眼を疑うように、廻廊の上に小次郎を見あげ、声を出すのはおろか、呼息も止まったように、身を硬め合っている。

小次郎は、傲岸な微笑を含んでその人々を見下しながら、

「今、そこで聞いていれば、まだ懲りもせず、この小次郎へ果し状を付けるとか付けぬとか、談合しておられたな。——使いの世話には及ばん事だ。わしは昨夜の血の手も洗わず、いずれ揺返しがある筈と、卑怯者の後を慕って、この平河天神へ来て夜明けを待ちあぐねておった」

例の壮烈な舌を呵して、一気に小次郎はこういったが、それに気を呑まれて、大勢の顔からぐの音も出ないので、又——

「それとも小幡の門人らは、果し合いをするにも、大安とか仏滅とか、暦と相談でなければ出来ないのか。昨夜のように、相手が酩酊して帰る途中を待ち伏せして、暗討ちをしかけなければ刃物はぬけないと申すのか」

「…………」

「なぜ黙っている。生きている人間は一匹もおらぬのか。一人一人来るもよし、束になってかかるもよし、佐々木小次郎は、汝らごときが、たとい鉄甲に身を固め、鼓を鳴らして襲せて来たとて、背後を見せるような武芸者ではないぞ」

「…………」

「どうしたっ」

「…………」

「果し合いは、見合せか」

「…………」

「骨のある奴はいないのか」

「…………」

「聞け。よく耳に留めておけ、刀法は富田五郎左衛門が歿後の弟子、抜刀の技は、片山伯耆守久安の秘奥をきわめて、自ら巌流とよぶ一流を工夫した小次郎であるぞ。――書物の講義ばかり齧って、六韜がどうの孫子が何といったのと、架空な修行しておる者とは、この腕が違う、胆が違う」

「…………」

「貴様たちは、平常、小幡勘兵衛から何を学んでいるか知らぬが、兵学とは何ぞや？　わしは今、その実際を汝らに、身をもって教訓してつかわしたのだ。――なんとなれば、広言ではないが、ゆうべのような暗討ちに出会えば、たとい勝っても、大概な者なら逸早く安全な場所へ引揚げて、今朝あたりは、思い出してホッとしておる所だ。――それを、斬って斬って斬り捲り、なお、生きのびて逃げるを追い、突然、敵の本拠に現れ、足下らが善後策を講じる間もなく不意を衝いて、敵の荒胆を拉ぐという――この行き方が、つまり軍学の極意と申すもの」

「…………」

「佐々木は、剣術家ではあるが軍学家ではない。それなのに軍学の道場へ来てまで、小癪をいう

などと、誰やら何日か此方を罵倒した者もいたが、これで佐々木小次郎が、天下の剣豪であるばかりでなく、軍学にも達している事が、よく分ったろう。……あははは。これはとんだ軍学の代講をしてしまった。この上、商売ちがいの蘊蓄を傾けては病人の小幡勘兵衛が扶持ばなれになろうも知れん。……ああ喉が渇いた。おい小六、十郎、気のきかぬ奴だ。水でも一杯持って来い」

振向いていうと、拝殿の横で、へいと威勢のよい答えがする。菰の十郎とお稚児の小六の二人だった。

土器へ水を酌んで来て、

「先生。やるんですか、やらねえんですか？」

小次郎は、飲みほした土器を、茫然としている小幡の門人達の前へ投げつけて、

「訊いてみろ。あのぼやっとした顔に」

「あははは。なんてえ面だ」

小六が罵ると、十郎も、

「ざまあ見やがれ。意気地なしめ。……さ先生、行きましょう。どう見たって、一匹でも、蒐って来られる面はないじゃァ御座いませんか」

七

ふたりの六方者を連れた小次郎の姿が、肩で風を切って、平河天神の鳥居の外へ消えてゆくまで——物陰から北条新蔵は見送っていた。

「……おのれ」
新蔵はつぶやいた。
それと共に、苦汁をのむような堪忍の顫えが体のなかを廻った。しかし今は——
「今に見ろ」
と、念じて措くよりほか彼にはなかった。
出鼻を逆に衝かれて、拝殿の裏に立ち竦んでしまった大勢の者は、まだ一語を洩らす者もなくしんと白けたまま、かたまっていた。
小次郎が弁じ立てて行ったように、まったく、彼等は小次郎の戦法に乗ぜられてしまったのだ。
一度、臆病風に吹かれた顔に、最初の活気はもう甦って来なかった。
同時に、心頭に燃えるほどだった彼等の怒りも、女々しい灰になってしまったらしい。誰あって、小次郎の後ろ姿へ向って、
(おれが)
と、進んで追って行く者もなかったのである。
そこへ、講堂の方から、仲間が駈けて来て、今、町の棺桶屋から棺桶が五つも届いて来ましたが、そんなに棺桶を注文したのでしょうか——と訊ねて来た。
「…………」
口をきくのも嫌になったように皆、それにも答える者がない。
「棺桶屋が、待っておりますが……」

と仲間の催促に、初めて一人が、
「まだ取りにやった死骸が届かぬから、よく分らぬが、多分、もう一つぐらい要るだろうから、後のも頼んで、届いたのは、物置へでも一時仕舞っておけ」
と、重たい口吻でいった。
やがて棺桶は、物置の中にも積まれ、各々の頭の中にも、その幻影が、一個ずつ積まれた。
講堂で、通夜が営まれた。
病室へは知れぬように、極めてそっと送ったが、勘兵衛もうすうすわけを知ったらしく見える。
しかし、何も訊かないのだ。
そこへ侍いている新蔵も亦、何も告げなかった。
激していた人々は、その日から殆ど唖みたいに黙って暗鬱になり、誰よりも消極的で、誰からも臆病者に見えていた北条新蔵のひとみには、もう我慢ならないといったようなものが常に底に燃えていた。
そうして彼は独り、
(今に、今に)
と、来る日を待っていた。
その待つ日の間に、彼はふと、或る日、病師の枕元から見える巨きな欅の木の梢に、一羽の梟が止まっているのを見つけた。
その梟は、いつ眺めても、同じ所の梢にとまっていた。

昼間の月を見ても、どうかすると、その梟は、ほうほうと啼くのであった。
夏を越えると、秋ぐちから、師の勘兵衛の病は篤くなった。余病が出たのである。
(近い、近い)
と、梟の声が、師の死期を知らせるように、新蔵には、聞えてならない。
勘兵衛の一子余五郎は旅先にあったが、変を聞いて、すぐ帰ると書面でいって来た。――その人の着くのが早いか、死の迎えが早いか――と憂えられていたこの四、五日であった。
どっちにせよ、北条新蔵には、自分の決意を果す日が近づいたのであった。彼は、もう明日は師の子息余五郎がここへ着くという前夜、遺書を残して小幡軍学所の門にわかれを告げた。
「無断で立ち去ります罪は、どうぞお宥し下さいまし」
樹陰から、老師の病間へ向って、彼はいんぎんな挨拶を残して行った。
「もはや明日は、御子息余五郎様が御帰宅ゆえ、ご病間の事も、安心して去りまする。――したが、果たして、小次郎の首級をさげて、御生前に、再びお目にかかれるや否や。……万一にも、私も亦、小次郎の手にかかり、返り討ちになった時は、一足先に死出の山路でお待ちしておりまする」